

中学生の対人関係に関する追跡的研究

——センチメント関係と学級集団構造*——

大 橋 正 夫 鹿 内 啓 子 吉 田 俊 和¹⁾
 林 文 俊²⁾ 津 村 俊 充³⁾ 平 林 進⁴⁾
 坂 西 友 秀⁵⁾ 廣 岡 秀 一⁶⁾ 中 村 雅 彦⁵⁾

目 次

I 問 題	4 討 論	37
1 理論的枠組	D 集団の構造	38
2 従来の対人関係研究の流れ	1 クラスA M	41
3 本研究の目的	2 クラスA F	46
II 方 法	3 クラスB M	51
1 被 験 者	4 クラスB F	55
2 繰り返し実施した調査の内容	5 討 論	60
3 1回限り実施した調査の内容	E 特徴的な諸事例	62
4 主要な調査の実施の期日と状況	1 クラスA M	62
III 結 果	2 クラスA F	70
A 個人のセンチメント関係	3 クラスB M	78
1 SMT-1の結果	4 クラスB F	86
2 SMT-1とSMT-2との関係	5 まとめ	92
3 討 論	IV 総 括	
B パーソナリティ認知	1 研究の目的と方法	93
1 パーソナリティ認知の構造とその推移	2 個人のセンチメント関係	94
2 パーソナリティ認知とセンチメント関係	3 パーソナリティ認知	95
3 討 論	4 個人間の相互作用の量	95
C 個人間の相互作用の量	5 集団の構造	95
1 IAS得点の全体的傾向	6 特徴的な諸事例	96
2 ISA得点とSMT-1との関連	7 結 論	96
3 座席間距離とISA得点との関連	文 献	

* 本論文は日本心理学会第44, 45および46回大会で発表したものに加筆したものである。研究の前半の段階では小川浩氏（愛知県がんセンター）の一方ならぬ御助力を得た。なおデータの処理にあたっては、名古屋大学大型計算機センターのFACOM M-200によった。

- 1) 名城大学教職課程部講師
- 2) 愛知工業大学工学部講師
- 3) 南山短期大学講師
- 4) 名古屋女子大学家政学部助教授
- 5) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期）
- 6) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期）

I 問 題*

1 理論的枠組

2人の個人の間で進行する社会的相互作用は、状況的要因や2人のその時どきの心身の状態などの一時的要因の影響を受けて様々に変動するが、繰り返し観察するならば、そのパターンには時間を越えたある程度の一貫性がみられるのが普通である。対人関係 (interpersonal relations) とは、あるペアの間の相互作用にみられるそのような安定的な特徴がなぜ生ずるかを説明するために要請される構成概念である。それは一定の構造をもっていると仮定されている。しかしながら、構造とはいっても、機械などのそれのように実体的な基礎をもつわけではないので、2人の間の対人関係は様々な角度からこれを記述することができる。これは、個人の行動の安定的な特徴を説明するための構成概念たるパーソナリティについて、その次元を一義的に特定できない事情と似ている。しかしながら、いくつかの対人行動についての因子分析の研究 (例えば、Borgatta, Cottrel, & Mann, 1958; Carter, 1954; Foa, 1961; Schaefer, 1959) において共通して抽出された因子がある。その1は愛憎とも解釈さるべきものであり、他は支配—服従と命名できるようなものである。したがって、対人関係を構成する主要な次元としては、情愛的 (affective) 関係と勢力的 (power) 関係の二つをあげることができよう (大橋, 1973)。前者は2人が相手に対してどの程度の好意をもっているかということに関係し、後者は相互作用に際しての2人の間での影響—非影響の潜在的な傾斜ということに関係する。

情愛的関係については、Moreno (1934) 以来、非常に多くの研究が積み重ねられてきた。これに対して、社会的勢力 (social power) についての本格的な研究は開始されてから比較的日子も浅く (恐らくCartwright, 1958以降のことといえる)、またその研究は主としてリーダーシップ等との関連でなされてきており、対人関係の1次元として位置づけた上での研究はまだほとんどなされていないのが現状のようである。われわれが本研究で問題にするのも専らこの情愛的関係の方である。すなわち、他者に対する「好き—嫌い」という次元上での対人関係が、どのようにして成立し、発展し、変容していくかを明らかにすること、これがわれわれの究極の目的である。そこで以下においては、対人関係という語を情愛的関係という意味に限定して用いることにする。また、この語

を相互的關係を表わす対概念としてではなく、一方向的な關係を表わすものとして用いる。すなわち、2人の個人の間の關係ではなく、一方の人 (P) の他方 (O) に対する關係を分析の単位として用いることにする。

ところで、PのOに対する対人関係 (情愛的關係) とは何であるかについても、現在のところでは研究者の間で一致して受け入れられている定義はまだ提出されていないようである。われわれは当面、これを、Oに対するPの対人的態度、と規定しておく。態度は認知的成分 (cognitive component)、感情的成分 (feeling component)、および行動的成分 (action tendency component) から成る一つのシステムと考えられている (Krech, Crutchfield, & Ballachey, 1962)。対人関係も態度である以上、この3成分を含むことはいうまでもない。以下においては、これらの成分の意味についてわれわれの基本的見解を示すことにする。

PのOに対する対人関係の最も基礎的な層としては、OについてPが抱く認知がある。すなわち、Oの身体的ならびに精神的特性 (trait) についてのPの認知である。身体的特性のうち対人関係にとって重要な内容は、魅力度 (美—醜)、身体的形状 (大きさと太り具合)、運動能力、それに相貌的特徴 (いわゆる人相) などであろう。精神的特性として重要なものには、各種能力、パーソナリティ、諸対象に対する態度などが含まれる。態度の中ではPとOの双方にとって relevant な対象に対する態度がことに問題であるが、中でも重要なものとしては、OのP (および集団内の他の成員) に対する関係である。身体的特性の認知においてはその veridicality はさほど問題とならないが、精神的特性、ことにパーソナリティと態度の認知にさいしては、主体的要因の参画の程度も大きく、それだけに関係の他の成分 (特に感情的成分) との交互作用が著しい点は注意を要する。

対人関係の中で最も中心となるのはその感情的成分である。狭義の対人関係はこれを指すことが多い。これは、認知的成分を一つの基礎として、PがOに対して形成するセンチメント (sentiment)* である。センチメントとは、ある対象に対する人のポジティブまたはネガティブな価値づけのことであり、最も一般的には「好き」あ

* センチメントを「感情」と訳している例が散見されるが、それは明らかに不適當である。センチメントは一過的な感情経験そのものではなく、ポジティブまたはネガティブな感情を引き起こすような傾向のことであり、対象に対して主体の中に形成されるものである。

るいは「嫌い」という日常語によって表現されるような感情傾向である (Heider, 1958)。好きというセンチメントは、その対象と接触すれば快の経験が得られるという期待に基いており、それから引き離された状態であれば欲望 (desire) が生ずることになる。反対に、嫌いというセンチメントは、その対象との接触が不快をもたらすと期待されているときに形成される。すなわち、センチメントは対象への接近—それからの回避という行動的傾向の動機的基礎となるものである。したがって、人間の行動が快楽原理に従うものと仮定することができるとすれば、Oとの連合を求めるかOからの隔離を願うかをPに尋ねることによって、PのOに対するセンチメントを推定することができる。Moreno がソシオメトリック・テストを開発したのはこうした点についての洞察に基いた上のことと考えられる*。ソシオメトリック・テストはその後各種の集団における対人関係を調べるために広く用いられたので、それをを用いて明らかにされる関係はソシオメトリックな関係と呼ばれるようになった。しかし、「好き」あるいは「嫌い」な成員をあげさせるのではなく、ある具体的な活動に共に参加したい、あるいはしたくない成員をあげさせるのでなければ、センチメントは的確に捉えられない、という彼の主張 (Moreno, 1934) にもかかわらず、その後の研究者たちはセンチメントをより直接的に測定するために、いわゆる擬ソシオメトリック・テスト (quasi-sociometric test) をより多く用いるようになった。本研究でもこのような方法によって資料を収集している。このようにして測定された関係はセンチメント関係と呼ぶのが適当であろう。これはソシオメトリック関係の上位概念であるといえる。

対人関係の第3の成分は行動的成分である。前述のように、PがOに対してポジティブなセンチメントをもつ場合には、一般にPはOとの接触を求め、ネガティブなセンチメントをもつならばOを回避しようと努める、と考えられる。この感情と行動の両成分の対応という仮定の上に立って、対人関係を推定するために行動観察の資料を用いる試みが、ことに言語報告能力の未発達な乳幼児などでなされていることは周知のとおりである。しかしながら、この好意—接近、非好意—回避という対応関係は、いくつかの理由から完全なものとはならないのが普通である。たとえば塩田 (1952) は、小学校の学級で擬ソシオメトリック・テストを実施した後、自由場面で児童がだれと遊んでいるかを観察した結果を報告している。それによると、「好き」と指名した級友と遊んでい

た比率は下の学年ほど低く、2年生で35%、6年生で63%であった。塩田はこれは擬ソシオメトリック・テストの信頼性の限界を示すものと考えているようであるが、感情的成分と行動的成分が十分に対応しない一つの証拠ともみることができよう。両成分の対応を低下させるような要因としては、まず物理的位置などの生態学的要因を考えなくてはならない。しかし好意の相互性 (mutuality) ないし返報性 (reciprocity) が完全でないために、PはOに対するセンチメントのままに行動できないこともあろう。

以上述べてきたように、われわれは対人関係は相互に依存し合う三つの成分から成ると考えている。この中心は感情的成分 (センチメント関係) であることは既に述べたとおりであるが、認知的成分と行動的成分に関する情報は関係を十分に理解するために不可欠のものであろう。われわれはこのような考えから本研究の計画をたてた。

2 従来の対人関係研究の流れ

対人関係の研究にはこれまで大きく三つの流れがあったといえる。その第一は、既存の集団の成員を対象にしてソシオメトリック・テストや擬ソシオメトリック・テストを実施し、成員間の結合関係を明らかにするとともに、成員に選択—拒否の理由を尋ねたり、他の資料を援用することによって、対人関係の規定因を探ろうとするものである。この研究の流れはMorenoによって切り開かれた。彼が創始したsociometryでは、あくまで現実の集団の集団過程を改善することがその主目的とされ、たんなる研究のための資料集めという態度は排斥された。それにもかかわらず、副産物的に多くの知見が積み重ねられてきた。次にその主なものを簡単にみてみよう。

Moreno (1947) は、幼稚園から8学年までの学級でソシオメトリック・テストを実施し、それを分析して次のような結果を得た。孤立児の割合は幼児では35%にも達したが、学年とともに減少し、5年生では15%のみであった。それに対して、2人が相互選択し合っているペアは、幼児では8%にすぎなかったが、次第に増加し、5年生では最高の28%となった。また、3人以上が相互に選択し合っている場合や、1人を中心とした数名のグループ的結合は、低学年ではほとんどみられないことがわかった。わが国では、Morenoとは独立に、すでに1930年代の初頭に一つの研究が行なわれている。兼子ら (1931) は、小学校1年生から6年生までの学級で、仲良しの名前とその理由、嫌いな人の名前とその理由などを質問紙を用いて調査した。これによると、仲良しの理由としてはパーソナリティに関するものが最も多くて、

* Moreno はセンチメントという語は用いていない。それに対応する彼の用語はteleであろう。

全体の50～80%を占めていた。また、1・2年生には理由をきかなかったが、パーソナリティに関するものをあげる者は3年生から学年の上昇とともに次第に増加していた。これに対して、遊びに関する理由をあげる者は、3年生では21%あったのが、次第に減少し、6年生では2%のみとなった。このタイプの研究として最も大規模なものは、おそらく田中(1947)によるそれであろう。そこでは、幼稚園児から旧制中等学校5年生(現在の高2)までの学級で、合計1730名の児童・生徒に、仲のよい友だちをあげるとともに、その理由を述べるように求めた。それによると、住所が近い、通学路が同じ、席が近いなどのいわゆる相互接近の要因をあげた者は、小学校1年生では78%も占めていた。しかしこれは学年の進行とともに次第に減少し、中等学校5年生では10%以下になっていた。反対に、同情・愛着を理由としてあげる者は、1年生では14%にすぎなかったのが、最高学年では40%に達していることがわかった。

Moreno の高弟 Jennings (1950) は、女子青年を収容する矯正施設において実施したソシオメトリック・テストの結果を分析し、興味ある事実を見いだした。すなわち、相互選択の率がソシオメトリック・テストの基準によってちがうことがわかったのである。「同室になる」・「レジャーを共に過ごす」など、個人の欲求に根ざし、感情的な結合を基礎にした選択では、その率は約70%であった。それに対して、「一緒に作業をする」など、フォーマルな色彩のこい場面では、相互選択率は約30%にすぎなかった。彼女は、前者の場合のようなタイプの結合により形成される集団を *psychegroup*、後者のそれを *sociogroup* と呼び、その機能的差異について注意を喚起した。

集団内の対人関係のたんなる実態調査ではなく、理論から引き出される仮説を検証するような形で資料をとる研究が後になって現われはじめた。その一つに Festinger ら (1950) の研究がある。彼らは、既婚学生のための17棟の2階建アパートの住人たちに、この集合住宅団地内での友人をあげるように求めた。その結果によると、友人としてあげる率は距離の近い部屋の住人同士でより高いことがわかった。Priest & Sawyer (1972) も、学生寮の居住者たちについて、同様の結果を得ている。次にセンチメント関係が対人関係の認知的成分と密接な相互依存の関係にあることを小・中学校の学級において実施した擬ソシオメトリック・テスト等の資料から明らかにしたものに、われわれの研究がある (Ohashi, 1964)。これは第一の流れの研究と次に述べる第二の流れの研究の橋渡しをするものと位置づけることができよう。

以上レビューした第一の流れに属する研究は、いずれ

も既存の集団において成員間のセンチメント関係を測定し、それがいかなる要因によって規定されているかを明らかにしようとするものであった。公表されたこのタイプの研究の数はおびただしく、得られた知見も豊富であるが、Lindzey & Byrne (1968) は、1960年代の半ばごろまでになされた諸研究によって特定された規定要因を次のようにまとめている。まず個人のソシオメトリックな地位を規定する要因としては、(1) リーダーシップ、(2) 適応のよさ、(3) その他のパーソナリティ変数、(4) 人口統計的諸変数、および(5) 知能・成就というカテゴリーである。また個々の成員間のセンチメント関係を規定する要因としては(1) 近接、(2) 人口統計的諸変数、(3) 少数集団に対する偏見、(4) 知能・能力、(5) パーソナリティ変数、および(6) 態度・信念・価値の6カテゴリーをあげている。

しかし、現実の対人関係においては、これら(および他)の諸要因は非常に複雑な形で絡み合っており、どれがセンチメント関係の先行条件でどれが *correlates* であるかを決定したり、先行諸要因の主効果や交互作用の大きさを明確にすることはほとんど不可能である。そのような目的のためには、統制された条件下での実験的研究が必要であろう。それが第二の流れの研究である。それらは対人魅力 (*interpersonal attraction*) への実験的アプローチという形をとるのが普通である。

近接の要因が対人関係の規定因であることを示唆する研究については既にみたとおりである。それがセンチメント関係に効果をもつのは、接触の頻度という変数(これは対人関係の行動的成分と関係する)によって媒介されるからだと考えられる。この点を最初に実験的に明らかにしたのが Zajonc (1968) である。彼は12枚の顔写真を1回、2回、5回、10回または25回提示したあとで、写真の主に対する被験者の好意度を測定したところ、提示の頻度との間に極めて密接な関係があることがわかった。後に、Sagert, Swap & Zajonc (1973) は、被験者に実際の人物にそれぞれ異なった回数だけ会わせて、同様の結果を得ている。

PがOに対して形成する好意度は、Oのもつ様々な属性によって規定されるばかりでなく、ある属性における2人の類似度によっても影響される。態度の類似度を実験的に操作して、他の人物(実は実在しない架空の人物)に対する対人魅力への効果を確かめたものに Byrne らの一連の研究がある(その主要な結果はByrne, 1971)。彼らは、まず大学生に態度調査を行ない、その数日後に、別の学生が答えたものと称する調査用紙を見せ、その人に対してどのくらい魅力を感じるかを4個の尺度上で答

えさせた。結果は非常に一義的で、自己の態度との類似度と魅力度の関係はほぼ直線的であった。Byrneはこの結果を、類似した態度をもつ他者はそのことによって一致による妥当性附与（consensual validation）を通じて強化を与えているのだ、という観点から説明している。

しかし、他者から得ることのできる強化として態度の類似以上に重要と考えられるのは、相手からの承認である。Byrne らもその効果を確認しているが、実際の相互作用場面で、相手から与えられたと認知される好意が相手に対する好意を規定することを実験的に明らかにしたものに、Backman & Secord（1959）の研究がある。彼らは当初互いに未知な10名の大学生を集めて毎週1回ずつ6週間にわたって討論をさせた。第1回、第3回および第6回の討論に先立ち、前もって実施された性格検査の結果から、あなたを好きになるはずであるとして、3名の成員の名前を知らせておいた。第1回の討論の後で実施されたソシオメトリック・テストの結果、被験者は他の成員よりも当該成員を有意により好くことが確かめられた。第3回と第6回ではそのような効果はみられなかったが、それは現実の相互作用から得られた手がかりが与えられた情報の効果を覆いかくしたためと考えられる。なお、このように他者から与えられる好意—非好意は重要な強化因ではあるが、それが時系列的に与えられるときには、与えられた強化の総量よりも、その時系列的パターンが対人魅力に対してより大きな効果をもつことを示唆した研究もある（Aronson & Linder, 1965）。

このような実験的研究は、第一の流れの研究が実態調査的であったのに対し、明確に仮説検証的性格をもっている。すなわち、操作された独立変数と従属変数たる対人魅力の間の因果関係について明快な結論を出すことができる、という点で他に代えがたいメリットをもっている。しかし反面、大きな欠点も内包せざるをえない。第一に、このような研究が明らかにしうる対人関係は、2人の出会いのごく初期にみられるそれに限られている。次に、実験状況が人為的に設定されるために、多くの要因が統制されていて、いわば日常生活場面から遊離した抽象的な関係しか扱うことができない。このため、そこで得られた知見が具体的な対人関係にどれほどまで一般化されうるか疑問である。このような欠点を克服しながら、実際の対人関係の成立・発展のプロセスを解明するためのおそらく最も有力な方法は、当初相互に未知な者から構成される集団において、継続的に資料を収集していく、というやり方であろう。もちろん、対人関係に影響すると思われる要因、あるいは共変すると考えられる

要因に関しても、できるだけ幅広く資料を収集し、それらとの関係で主要な従属測度の分析結果のもつ意味を明らかにするよう努めなくてはならない。これは対人関係の縦断的ないし追跡的研究であり、第三の流れに属する研究である。このタイプの研究は資料収集のコストが大きいため、実施が容易でなく、これまでに公表された研究の数は多くない。

学級内の交友関係の縦断的研究として、比較的初期のものに、阪本（1949）の研究がある。彼は小学校1年生の学級において、入学後1週間経過した時点をも第1回とし、以後、1週間ないし3週間の間隔で、都合7回の交友関係調査をしている。その結果、交友関係の成立には近接が最も重要な要因であること、1年生の1学期の段階では交友関係はまだはっきり安定していないこと、などがわかった。さらに長期間にわたる交友関係の縦断的研究としては、依田・大橋・島田（1954）によって報告されているものがある。小学校に入学した1学級の児童に担任教師が毎月1回面接し、好きな友人と嫌いな友人を人数を制限しないで聞きだした。それによると、好きとしてあげる友人の数は、最初のうちは平均1人以下であったのが、3年生のころになると3人以上となった。またそのころになると、多くの児童から集中的に選択を受ける者（スター）も出現する。しかし、選択の安定性については、1年生から3年生までの発達に伴う変化はみられなかった。

これらの研究は対人関係の成立過程を発達の視点から捉えようとしたものといえる。その結論は、小学校1年生ごろの段階では、おそらくはその認知能力や社会性の未発達のために、まだ安定した同輩関係を結ぶことが難しい、というものであった。発達心理学的視点からではなくて、社会心理学の領域で、対人関係の成立・発展の過程を追跡し、ある程度有用な知見を得ているおそらく唯一の研究はNewcomb（1961）のものであろう。彼は、一つの寮に当初相互に未知であった17名の男子学生を收容し、毎週1回、16週間にわたって彼らの間の対人関係に関する資料等を収集した。この研究の第一の目的は、彼のいわゆるA-B-Xモデル（Newcomb, 1953）を現実の対人関係の場において検証することにおかれていた。このモデルは次のようにパラフレイズすることができる。人Aと人Bが2人にとって共通してrelevantな態度対象Xに対して類似した態度をもっているならば、2人之间にはポジティブなセンチメント関係が成立する。Xの中で最も重要度の高いものは他の15名の成員であろう。2年度にわたる研究の結果は、このモデルによる予測を支持するものであった。またモデルの適合度は、集団形成の直後と3ヶ月あまり経過した後とで、基本的に

は差のないことも明らかにされた。A-B-Xモデルはバランス理論（Heider, 1946, 1958）の一変種といえるが、対人関係の場におけるバランス・モデルの適合度が集団の発達の程度とは関係しないことは大橋（1958）も見いだしている。

先にわれわれは、某女子大学の新入生の3クラスにおいて、級友のパーソナリティの認知および級友に対するセンチメント関係に関する資料を収集し、その相互関係を分析した結果を報告した（大橋ほか, 1978）。調査は、入学後4週間経過した時点で第1回、以後夏休み前に3回と後に1回の計5回実施した。センチメント関係（これは第1回には査定されなかった）は（1）自己の他の各級友に対するセンチメント、および（2）各級友の自己に対する認知されたセンチメントという2側面から、それぞれ7点尺度を用いて測定された。資料を分析した結果、およそ次のようなことが明らかになった。

まず、各クラスとも、（1）のセンチメント関係でも（2）の認知されたセンチメント関係でも、平均評定値は第2回調査（入学後7週間経過の時点）よりも第3回調査（9週間後）において有意に上昇したが、第4回（12週間後）以降は上昇していなかった。この傾向は同時に実施されたパーソナリティ認知における「親近性」の尺度群の評定値のそれと類似している。次に、（1）において他の成員から受けた平均評定値によって操作的に定義される選択地位の時点間の安定性を相関係数によって求めてみたところ、第2回と第3回の間では平均0.55、第3回と第4回の間では0.72、第4回と第5回（これには夏休みをはさんで約2ヶ月の間隔があった）の間では0.66であった。また、Tagiuriら（1953）のいうところの相互性（mutuality）、正確性（accuracy）、および相応性（congruency）の3測定を求めてみたところ、従来の諸研究の結果と一致して、相応性が際立って高いことがわかった。時点別にみても、相互性と正確性は第2回から第4回までは次第に高くなり、第5回でやや低下した。これに対して相応性は、第2回から第3回にかけて大きく上昇したが、それ以後はあまり変化しなかった。最後に、センチメント関係（1）とパーソナリティ認知の25尺度との間の重相関係数を求めたところ、第2回で0.53、第3回で0.34、第4回で0.28、そして第5回では0.27となった。これはセンチメント関係と対人関係の認知的成分であるパーソナリティ認知の共変関係が、初期に比べて、時間が経過し相互によりよく知り合うようになってからの方がむしろ弱くなる、という注目すべき傾向を示唆しているといえる。

なお、対人関係の問題を成立—発展の過程として捉えることの重要性は最近一部の研究者によって指摘されて

おり、そのモデルも提唱されている（Levinger & Snoek, 1972）。しかし実証的データに基づく理論化はまだほとんどなされていないのが現状である。

3 本研究の目的

われわれは、Newcomb（1961）の大学生の対人関係に関する縦断的研究に範をとり、女子大学生についてのわれわれの先の研究（大橋ほか, 1978）の経験を生かしながら、センチメント関係がどのように成立し、発展し、ないしは変容していくか、またそれに影響し、影響され、あるいはそれと共変する要因としてはいかなるものがあるかを明らかにしたいと思う。このためには、当初相互に完全に未知な者から構成された集団を選び、できるだけ早い段階から、一定の間隔をおいてできるだけ多数回にわたり、諸種のデータを収集することによって追跡的研究を行なう必要がある。幸い、これらの要件をほぼ満たすような研究対象が手近かにあり、関係者の御理解と御協力によって、必要な資料を収集するための継続的調査が実施できる見通しがえられたので、研究に踏み切ることにした。

研究対象は当学部附属中学校^{*}の1年生2学級である。この年齢の子どもはいわゆる形式的操作の段階にあたり、認知、思考、表現などの各能力ともほぼ成人の水準に近いと考えられる。したがって、発達の研究ではなく、社会心理学的研究の参加者としての必要な条件をほぼ十分に備えているものと判断した。もちろん、資料が学級という特殊な環境において収集されるものである以上、そこでの対人関係は他の種類の集団におけるそれと様相を異にしてくることは忘れてはなるまい。すなわち、学級はNewcomb（1961）が対象としたような寮などよりは成員にとってほかにポテンシーの大きな生活の場である。生徒たちは一日のうち数時間は行動を共にし、そこでの相互作用は彼らの人格形成に対して大きなインパクトをもっている。そして、それはJennings（1950）のいうpsychegroupとsociogroupの両方の性格を備えているうえに、教師による教育的働きかけは成員間の対人関係のあり方にも大きな影響を与えずにはおかないであろう。それにもかかわらず、そこで得られた知見は他の種類の集団における対人関係へとある程度まで一般化することができる、とわれわれは信じている。

より具体的に述べるならば、本研究の目標は次のとおりである。

* 調査の実施に当っては附属高等学校教頭（当時教諭）鈴木洋一郎氏はじめ関係者に多大の御支援をいただいた。ここに記して謝意を表わしたい。

まず、個人と個人のレベルで、センチメント関係が出会いの極めて初期においてどのような形をとり、それが時間の経過とともにどのように変化していくかを探りたい。この点について、われわれはこれまでの諸研究やわれわれ自身の経験からして、最初の出会いの時点においても、級友に対するセンチメント関係はある程度分化している、と予想している。ただそれはかなり不安定なものであって、安定した関係が成立するまでにはある程度の時間が必要であろう。

次に、同じく個人のレベルにおいて、PのOに対するセンチメント関係（対人関係の感情的成分）は、Oについてのパーソナリティ認知（認知的成分）やOとの接触の頻度（行動的成分）と一定の相互依存関係にあると考えられる。それを確かめるとともに、それが時系列的にどのように変化するかを明らかにすること、これが第2の目的である。

第3の目的は、集団のレベルでのセンチメント関係のパターン、換言すれば学級集団のソシオメトリックな構造の時系列的特徴を明らかにすることである。これまで、学級集団の構造的類型なるものが何組かの研究者によって提唱されている（永田，1969；園原・広田，1953；玉

岡，1948；田中，1947など）。しかしそれらはいずれも、児童の発達段階（学年）ごとに、典型的に現われると考えられる構造を、横断的研究の資料を基にして大まかに記述したにとどまっている。われわれは、一応成熟した段階にあると考えられる生徒の学級の集団構造が、編成直後から数ヶ月後まで、相互作用が累積されていく間にどのように変化していくかをみることに関心がある。この問題に対して有用な知見を提供している研究はまだほとんど報告されていないようである。個体発生は系統発生を繰り返す、という素朴な考え方をこれに適用するならば、中学1年生の学級の構造は、編成直後では幼稚園児ないし小学校低学年児の学級に特徴的なそれに近く、時間の経過とともに、より高い発達段階の児童から成る成熟した学級で典型的に見られるようなものに次第に変化していく、と予想することができる。果たしてそうなのかどうか、確かめてみたい。

なお、中学生の段階では異性に対するセンチメント関係を表明することには大きな抵抗があると考えられるので、本研究においては同性の級友に対する関係のみを扱うことにする。

Ⅱ 方 法*

1 被験者

名古屋大学教育学部附属中学校に昭和54年度に入学した生徒。A組男子23名女子19名、B組男子22名女子20名、合計84名。同校は志願者の中から抽選によって入学許可者を決定しており、名古屋市内の多くの小学校からかなり多数の志願者が集まるため、同じ小学校から複数の者が入学する例はまれである。今回も一対の例外を除き、同じ学級の同性の生徒に同じ小学校から入学したという者はなく、その意味で、入学の時点では成員は相互にはば完全に未知であったといえる。

2 繰り返し実施した調査の内容

本研究での主要な資料は、原則として週1回の割で繰り返し実施した調査により収集された。それは以下のようである。

(1) SMT^{**}-1 : センチメント関係（対人関係の感

情的側面）を測定するためのもの。学級内の同性の成員の名簿を与え、自己以外の各人に対する好意度を0から100までの尺度上で答えさせる。0は友人として考えるかぎりの最低の好意度（嫌い）を表わし、100は同じく最高の好意度（好き）を、そして50は中性的センチメント（好きでも嫌いでもない）を意味することを十分理解させた。また全員に与える点数の分布については一切制限しなかった。これは Newcomb（1961）の第2年度で用いられた方法を踏襲したもので、理論上は絶対的好意度を測定できるはずのものである。

(2) SMT-2 : (1)と同一の用紙を用いるが、自分の他成員に対するセンチメント関係ではなく、他成員の自分に対する知覚されたセンチメント関係を測定するためのものである。「先のテストで各級友が自分のことをどのようにつけたかを推定する」というようにと教示した。

(3) PPI : 8項目から成るパーソナリティの7点評定尺度。われわれのこれまでの研究（大橋ほか，1973；林，1978）において、パーソナリティの認知次元として3～4個の因子が抽出されている。ここではそれぞれに高く負荷すると考えられる尺度を2個、合計8尺度を用意した。その具体的な尺度（両極の名称）と、それが主

* 執筆者：大橋正夫

** Sociometric Test の略。しかし実際は Quasi-sociometric Test である。

として負荷する因子名は次のとおりである。

- ①「冷いーあたたかい」
(＜個人的親しみやすさ＞因子)
- ②「ふまじめなーまじめな」
(＜社会的望ましき＞因子)
- ③「消極的なー積極的な」
(＜力本性＞因子)
- ④「おしゃべりなー無口な」
(＜活動性＞因子)
- ⑤「親しみにくいー親しみやすい」
(＜個人的親しみやすさ＞因子)
- ⑥「頭の悪いー頭のよい」
(＜社会的望ましき＞因子)
- ⑦「意志が弱いー意志が強い」
(＜力本性＞因子)
- ⑧「活発なーおとなしい」
(＜活動性＞因子)

各尺度はそれぞれ一枚の用紙を用い、自己および同性の級友を評定させる。ただし、時間の関係で8尺度すべてを同時に実施することは困難であったので、①～④と⑤～⑧に二分し、一回の調査では原則として4尺度ずつ実施した。

(4) IAS : 前回の調査からこの時点まで(原則として1週間)の間に、いろんな場面で同性の各成員とどの程度接触したかを3件法(「非常によくした」、「割合よくした」、および「あまりしなかった」)で答えさせるもの。場面は下に記す5であるが、3個の段階の基準と、それぞれに入れるべき成員の数は被験者の裁量にまかせた。

- ① 学校の休み時間や昼食時や授業後に話をしたり遊んだりした。
- ② 学校のゆきかえりにいっしょになった。
- ③ クラブ(部)活動にいっしょに参加した。
- ④ 学校から帰ったあとや日曜日に会った。
- ⑤ 家にいて電話で話をした。

3 一回限り実施した調査の内容

各被験者の同性級友に対する対人関係のあり方と関係づけるべき資料はできるだけ広範なものを収集することが望ましい。われわれはこの目的のために、次に述べる10種類の調査(既成のものあるいはわれわれの目的のために特に作成したもの)を実施した。実施は休講となった授業時間を利用したため、両クラス必ずしも同じ日ではなかった。調査の内容の説明の後に、A組およびB組で実施した期日を記しておく。

- (1) Y-G検査 : 矢田部ほかの「矢田部ギルフォード

性格検査」成人用。(5/8, 4/16)

- (2) 教科興味調査 : 9教科の学習興味を一対比較法で答えさせる。(5/28, 5/28)

- (3) 部活動に関する調査 : 本校で行なわれている15の部活動の各に対する興味(7点尺度)、部への所属、入部動機、部活動の満足度(7点尺度)、部活動で親しくしている級友の列举(3名以内)などを調査するもの。(5/28, 5/28)

- (4) Self-Esteem 調査 : 鹿内(1977)が作成した中学生用、60項目(5件法)。(5/28, 5/28)

- (5) 適応性診断検査 : 長島らが作成したもの。(6/23, 6/23)

- (6) 附中進学理由調査 : なぜ、だれの主導により、附属中学進学をきめたか、入学して良かった点と悪かった点など。(6/23, 6/23)

- (7) 達成動機測定 : Atkinson 流のTATによる。JM1, JM8, H2, およびMC1の4枚の図版を用いて集団実施。(7/6, 7/6)

- (8) 親子関係調査 : 診断性P. C. R. (山下俊郎監修)。(7/18, 7/18)

- (9) 親和動機測定 : 絵画の専門家に依頼して作成した4枚の図版を用い、達成動機測定と同様の方法で。(10/26, 10/26)

- (10) 統制の座尺度 : Rotter (1966)のI-E尺度を坂西が訳したもの。(12/12, 12/12)

このほか、1学期の各教科の成績を利用することができた。

4 主要な調査の実施の期日と状況

Newcomb (1961)の研究では、それ以前には相互に完全に未知であった17名の学生(他大学よりの転入生)が、学期の始まる約1週間前のある日、ほとんど時を同じくして寮に到着した、と記されている。正確にはその後何日たってから最初の調査(Week 0)が実施されたのか(おそらくは学期の開始直後であると思われるが)、またその期間に被験者たちが互いにどのような相互作用をしたのかは記述がないので不明である。われわれの場合、入学式が4月7日(土)に行なわれ、始業式が9日(月)に行なわれたが、その日に第1回のSMTを実施した。生徒はその3ヶ月ほど前に一度登校し、知能検査等を受けたことはあるが、その時の相互作用の様子は知られていない。しかし最初の調査の時点(W-0)では相互作用はまだほとんど行なわれていなかった、と推定できる。したがって、級友の氏名と顔はほとんど一致していないはずであったので、同定の手助けとなるよう写真帳を配布して調査を実施した。しかしその約2週間後

表1 主要な調査の実施期日

SMT・IAS		PPI
W-0	($\frac{4}{9}$)	
W-1	($\frac{4}{13}$)	←.....→ T-1 ($\frac{4}{11}$, $\frac{4}{18}$)
W-2	($\frac{4}{20}$)	
W-3	($\frac{4}{27}$)	←.....→ T-2 ($\frac{4}{25}$, $\frac{5}{2}$)
W-4	($\frac{5}{4}$)	
W-5	($\frac{5}{11}$)	←.....→ T-3 ($\frac{5}{9}$, $\frac{5}{16}$)
W-6	($\frac{5}{18}$)	
W-7	($\frac{5}{28}$)	←.....→ T-4 ($\frac{5}{23}$, $\frac{5}{30}$)
W-8	($\frac{6}{1}$)	
W-9	($\frac{6}{8}$)	←.....→ T-5 ($\frac{6}{15}$)
W-11	($\frac{6}{22}$)	←.....→ T-6 ($\frac{6}{20}$, $\frac{6}{27}$)
W-12	($\frac{6}{29}$)	
W-14	($\frac{7}{13}$)	←.....→ T-7 ($\frac{7}{11}$, $\frac{7}{18}$)
W-15	($\frac{7}{20}$)	

(W-2)あたりからはその必要はほとんどなくなった。

繰り返し実施した主要な調査の実施期日は表1に示すとおりである。第1回は始業式の日(学級編成後に経過した週の数からとって、この時点をもW-0と呼ぶことにする)にSMT-1およびSMT-2を実施した。以後は、定期試験等の学校行事の都合で例外はあるが、SMT-1とSMT-2、それにIASは原則として金曜日の授業後のホーム・ルームの時間の直後に実施した。またPPIは、4尺度ずつを原則として毎週水曜日の午前中の授業時間の一部を割いて実施した。結果の分析で、SMTとPPIの関係をみる必要があるので、2度にまたがって実施された8尺度をセットにして、ナンバーを順次付して、T-1、T-2のように実施点をコードする。6月15日はSMT実施の番の日であったが、この日にはPRIの8尺度を一気に実施したので、これをT-5と呼ぶことにする。

調査の実施にはわれわれのうち4名が当たった。SMTの実施にあたっては、その趣旨や方法を十分に説明し、理解させるように努めた。何度も同一の調査を繰り返し実施したことから、後半にはやや飽和がみられたが、著しく不真面目な態度を示したり、直接的に拒否を表明するような者はなく、おおむね順調に実施できたといえる。

III 結 果

ここではわれわれが収集した資料を分析して得られた主な結果を下記のような5部に分けて提示する。各部とも、先ず問題を簡潔に述べ、次に分析の方法にふれ、続いて結果を記述し、最後に結果についての若干の討論をすることにする。

- A 個人のセンチメント関係
- B パーソナリティ認知
- C 個人の間の相互作用の量
- D 集団の構造
- E 特徴的な諸事例

A 個人のセンチメント関係*

本節では、SMT-1およびSMT-2に対する反応によって示された個々人の間のセンチメント関係の全般的傾向を分析する。上記の両調査は学級内の同性の成員に対してのみ応答させられたので、結果は主として学級×性の4集団ごとに記述する。その各々、すなわちA組男子、A組女子、B組男子、およびB組女子をAM、AF、BM、BFのように表わし、これらを以下の記述においては便宜的に「クラス」と呼ぶことにする。また、

SMT-1とSMT-2は、ほぼ1週間の間隔を置いて都合14回実施されたが、その実施時期は学級編成後経過した週数によって表記することにする。たとえば、W-0とは学級編成の直後、W-6とは学級が編成されてから6週間経過した時(実際には5月18日)であることを意味する(表1参照)。

ここでの主要な従属測度はSMT-1およびSMT-2によって得られた資料から構成される。両調査は0～100の101点尺度であったが、これをそのまま数値化したて用いるほか、必要に応じて変換した上で測度とする。

* 執筆者：平林進

そこで、結果の記述に入る前に、以下の分析で用いられる測度を定義しておこう。

(1) SMT-1 : P→Oのセンチメント関係を0～100の101点尺度上で答えさせた(SMT-1)が、その応答をそのまま数量化したもの。

(2) SMT-2 : P←Oのセンチメント関係(Pの認知したOのPに対するセンチメント関係)を0～100の101点尺度上で答えさせた(SMT-2)が、その応答をそのまま数量化したもの。

(3) 選択地位 : 被験者が他の全成員から受けたSMT-1のスコアの平均値。

(4) SMTA : 被験者が他成員に対して与えたSMT-1のスコアを、次のような方法で++, +, 0, および-の4段階値に変換したもの。

①++の基準

ア) SMT-1のスコアが80点以上であること(必要条件)。

イ) Pによって与えられている得点が最高の成員(1位者)と2位者、2位者と3位者の差が3点以上であれば、1位者または2位者に対してのみこのスコア(++)を考える。

ウ) 1位者が同点で多数いるときには、6人までであればすべてに(++)を与える。

エ) 3位者と4位者のSMT-1得点の差が2点以上であれば、3位者までに(++)を与える。

オ) 3位者と4位者の差が1点の場合には、4位者も(++)とする。

カ) 3位者、4位者、5位者の差がそれぞれ1点で5位者と6位者の差が3点以上であれば、5位者までに(++)を与える。

キ) 3位者、4位者、5位者に与えたSMT-1得点がそれぞれ1点差である場合には、3位者までに(++)を与える。

②+の基準

ア) SMT-1のスコアが60点以上であること(必要条件)。

イ) (+)を与える者の最低SMT-1得点と(++)を与える者のその差は20点以下であること。

ウ) (++)と(+)の合計人数は男子では11名まで、女子では9名までとする。

エ) 下位に同得点者がある場合には、ウ)の人数以下でも切れるところで切る。

③-の基準

ア) SMT-1のスコアが50点以下であること(必要条件)。

イ) このほかの点では①の基準に準ずる。

④0の基準

ア) (++)、(+), (-)以外の者に与える。

要するに、被験者が他の成員に与えたSMT-1の得点の分布はまちまちなので、その絶対水準を加味しながら、相対的に4段階に分けよう、というものである。上記の基準はある程度恣意的なものではあるが、討議の結果、われわれが最適と考えたものである。

このような基準によりSMT-1を変換してSMTA

表A-1 クラス別・時点別にみたSMTAの度数分布

クラス 時点	A M				A F				B M				B F			
	++	+	0	-	++	+	0	-	++	+	0	-	++	+	0	-
W-0	41	112	313	40	34	96	190	22	33	101	292	36	34	79	245	22
W-1	46	118	303	17	48	89	188	17	40	122	266	34	46	80	225	29
W-2	31	95	331	27	36	89	205	12	51	108	269	34	32	83	238	27
W-3	33	87	361	24	38	78	212	14	40	141	248	33	52	80	225	23
W-4	32	141	289	22	38	111	182	11	35	140	249	17	46	81	240	13
W-5	60	143	284	18	32	106	189	15	35	131	271	25	55	75	224	26
W-6	52	140	290	24	36	105	190	11	38	133	270	21	48	80	230	22
W-7	63	115	307	21	36	89	209	8	42	126	272	22	58	71	229	22
W-8	54	119	311	22	38	103	192	9	40	125	270	27	53	72	193	24
W-9	41	137	306	22	44	86	205	7	38	109	289	26	47	74	238	21
W-11	58	110	318	20	48	97	183	14	29	118	285	30	60	77	218	25
W-12	45	106	336	19	48	84	196	14	46	111	257	47	50	92	211	27
W-14	47	98	342	19	45	78	192	9	41	115	276	30	34	80	243	22
W-15	54	110	326	15	48	75	190	11	42	113	266	41	29	105	231	15

の測度を構成したのであるが、各段階の度数分布をクラス別・時点別にみたのが表A-1である。

(5) SMTB : 被験者が他成員に対して与えたSMT-1のスコアを、次に述べるような基準に従って+, 0, -の3段階値に変換したもの。

①+の基準

ア) 80点以上であること(必要条件)。

イ) 上位者3名以内とする。

ウ) 上位者が同点者多者のときには、次の資料を加味して総合的に決定する。

1) SMT-2の得点

2) IASの項目1(休み時間や昼食事や授業後に話したり遊んだりした)、および項目2(学校のいきかえりにいっしょになった)での評定。

3) PPIの「親しみやすい-親みにくい」、および「あたたかい-冷い」の2項目での評定。

②-の基準

ア) 50点以下であること(必要条件)。

イ) このほかの点では①の基準に準ずる。

③0の基準

ア) (+) および (-) 以外の者。

SMTAの場合と同様、SMTBのクラス別の時点別の度数分布を求めたのが表A-2である。これから明らかのように、SMTAよりも(0)の段階の度数が多くなっている。

表A-2 クラス別・時点別にみたSMTBの度数分布

クラス	A M			A F			B M			B F		
	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-
W-0	30	456	20	25	311	6	29	407	26	33	336	11
W-1	29	438	17	30	308	4	35	404	23	35	330	15
W-2	41	420	23	26	310	6	44	401	17	30	331	19
W-3	40	450	16	28	305	9	40	405	17	39	328	13
W-4	34	439	11	26	312	4	42	384	15	37	335	8
W-5	38	454	14	30	306	6	38	406	18	42	321	17
W-6	45	450	11	25	311	6	43	403	16	38	327	15
W-7	46	445	15	28	308	6	36	406	20	39	324	17
W-8	44	445	17	30	310	2	41	400	21	42	287	13
W-9	37	451	18	26	311	5	31	410	21	35	331	14
W-11	45	447	14	35	302	5	33	405	24	34	337	9
W-12	40	452	14	32	305	5	41	401	20	35	328	17
W-14	42	449	15	34	288	2	42	400	20	34	333	13
W-15	40	452	14	29	293	2	39	406	17	39	328	13

(6) SMT C : 被験者が14回のSMT-1で他の成員に与えた全得点の分布から、それをZ得点化したもの。

1 SMT-1の結果

(1) W-0におけるセンチメント関係の分化

SMT-1は、クラス内の各成員に対する好意度を、50をニュートラル・ポイントとして、0(友人として考えるかぎりの最低の好意度)から100(同じく最高の好意度)までの101点尺度上で答えさせたものである。この第1回の調査は、入学式の次の日に行なわれた始業式の日(4月9日)に実施された。調査の実施者の報告によると、被験者は配布された写真帖の助けなしではほとんどの級友を同定できない状態であったという。このような、ほとんど相互に未知な状態におけるSMT-1の反応はどの程度分化していたであろうか。

まず表A-3をみてみよう。これは、クラス別に個人被験者が他成員に与えたSMT-1のスコアの最低点、最高点、および平均値の範囲を示したものである。これ

表A-3 個人が与えたSMT-1のスコアの範囲(W-0)

クラス	最低点	最高点	平均値
AM	11 ~ 80	50 ~ 100	29.5 ~ 83.0
AF	0 ~ 91	64 ~ 100	51.1 ~ 93.9
BM	0 ~ 70	11 ~ 100	9.6 ~ 86.4
BF	0 ~ 80	70 ~ 100	37.4 ~ 90.9

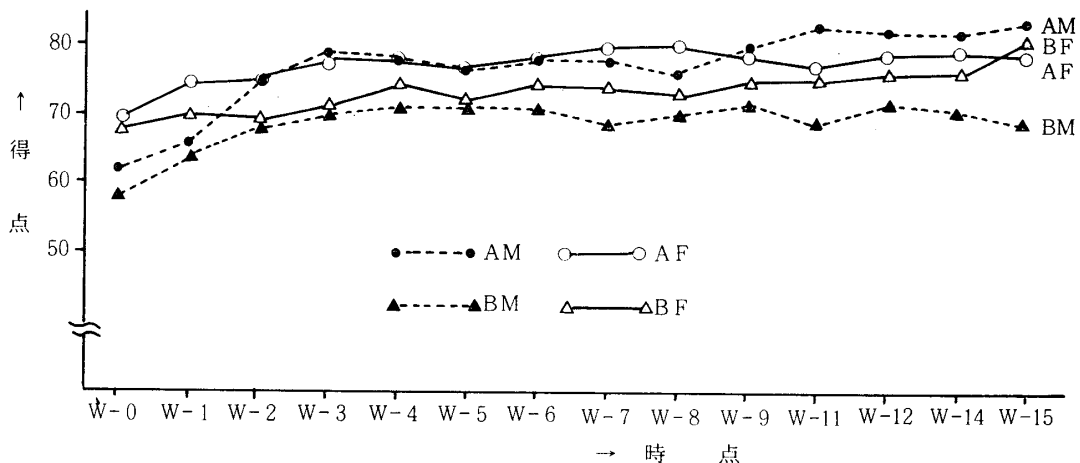
から、少なくともある被験者は、他成員に関する情報が極めて限られていたW-0の時点においてさえ、彼らに対するセンチメント関係をかなり分化させていたことがわかる。

次に、このことをもう少し詳細にみるために、最低点が50点未満であった者の数を調べたところ、AMでは16名(70%)、AFでは7名(37%)、BMでは18名(82%)、そしてBFでは7名(35%)であった。すなわち、W-0の時点においても、平均すると57%の被験者はニュートラル・ポイント以下のSMT-1スコアを少なくとも1名の他成員に対して与えていたのである。同様に、少なくとも1名の他成員に80点以上のスコアを与えていた被験者の数は、AMで22名(96%)、AFで18名(95%)、BMで18名(82%)、BFで18名(90%)、全体では90%の多きに達していた。

これらの結果から、学級編成の直後においてさえ、被験者のクラス内の他成員に対するセンチメント関係はかなり分化していた、と結論づけることができよう。

(2) 他成員に与えた好意度評定の推移

クラス別に、時点ごとのSMT-1のスコアの平均値の推移を表わしたものが図A-1である。これを見ると、



図A-1 SMT-1の平均スコアの推移

まだ名前もほとんど同定できない段階であるW-0におけるSMT-1の平均値は58～69.5となっており、いずれもニュートラル・ポイントよりも有意に高くなっていることが注目される。すなわち、関係のごく初期においてもセンチメント関係はpositivity biasを示すようである。未知の他者のパーソナリティ評定においても寛大性効果（leniency effect）と呼ばれるものがあると言われていることを考え合わせると、この結果はかなり一般的なものであるかもしれない。しかし、一つには、われわれの被験者にとって、他成員はこれから親密な関係を発展させていくべき級友である、という事情もこれと関係しているかもしれない。

次に平均評定値の時系列的推移をみてみよう。クラスにより多少の差があり、また時には落ちこんだりしている場合も散見されるが、全体としては、スムーズな上昇的推移を示している。全被験者についてみると、W-0の時点においてはSMT-1の平均値は約64であったのが、その値は次第に高くなっていき、W-3では75近くとなっている。このように、相互作用の累積とともに相手に対する好意が増大していくことは、これまでの社会心理学的知見と一致した結果であるといえる。ただし、W-3以後はあまり変化はなく、最終段階（W-15）でも約78点にとどまっている。

最後に、図A-1から気づくことは、若干のクラス差があることである。中でも特徴的なのはBMである。このクラスは全時点を通じて平均値が4クラス中最低であり、しかも他の3クラスとの差は時間の進行とともにむしろ拡大していく傾向をみせている。これは、他の3クラスがW-4以降も徐々に平均値を向上させているのに、このクラスだけは、時折の落ち込みやそれからの回復があるほか、平均値は全体として高くはなっていないところに原因が求められる。

（3）評定の安定性

SMT-1では、0、50、および100の3個の係留点を与えたほかは、尺度の使い方等に関してなんの規制も加えられなかった。したがって、被験者はそれぞれの時点において他の各成員に対する評定にさいして、かなり自由に自身の基準を用いることが許された。他の各成員に対するセンチメント関係そのものが時点によって刻々と変化することが考えられる一方、評定値には基準の動揺や変化による誤差分散が含まれている。この両者を分離することは不可能であるが、ここでは被験者が他の各成員に与えた評定値がどの程度安定したものであるかを確かめてみよう。このために、任意の2時点間での同じ個人の同じ他の個人に対するSMT-1のスコアの間の相関係数を求めてみた。表A-4はその全被験者の結果、表A-5はA組の結果、表A-6はB組の結果である。これによると、任意の2時点間の評定値の相関係数はBFのW-0とW-12、W-0とW-14の間を除いてすべて正で、一般に有意な値となっている*。

相関係数が有意な正の値であったことは当然であるとして、問題はその高さがどれほどのものであるかということである。表A-5と表A-6から、その値にはいくらかのクラス差があることがわかる。しかし、全被験者の資料を合わせた結果である表A-4から、評定の安定性がどの程度のものであり、時点の推移にともなってどのように変るかをもう少し詳しくみてみよう。

まず、W-0とW-1の間の相関係数は0.52と、かなりの高さであることが注目されよう。このことから、ほとんど初対面に近い時点でのSMT-1の評定でも相当

* 成員数が最少のAFにおいて、 $|r| > 0.106$ ならば5%水準、 $|r| > 0.139$ ならば1%水準で有意であるといえる。

の安定性をもっている、と結論することができよう。すなわち、その時点での評定の分化は、決してat randomな反応から生じたのではなく、センチメント関係そのものの分化を相当程度まで反映したものであった、といえることができる。しかし、W-0における評定値は、時点の進行とともに次第に変動していく。すなわち、W-0とW-2との間では0.34、W-8との間では0.19、そしてW-11以降との間の相関係数は0.12にまで下がる。これは、おそらく、相互作用の累積とともに、初期には存在しなかった手がかりがセンチメント関係の規定要因と

して働くようになるためであると考えられる。

比較する調査との間隔が増すほど安定性が低くなるという傾向は、W-0における評定値ばかりでなく、それ以後の評定値においても等しくみられる。例えば、W-5での評定値は、W-6との間では0.71という安定性を示しているが、W-9とは0.53、W-15とは0.42となっている。また、W-8での評定値は、W-9との間では0.75であるが、W-15との間になると、安定性は0.57にまで下がる。しかし、同じ間隔をとって比較すると、初期よりも後期の方が安定性はより高いようである。この

表A-4 SMT-1の評定値の安定性-1（全体）

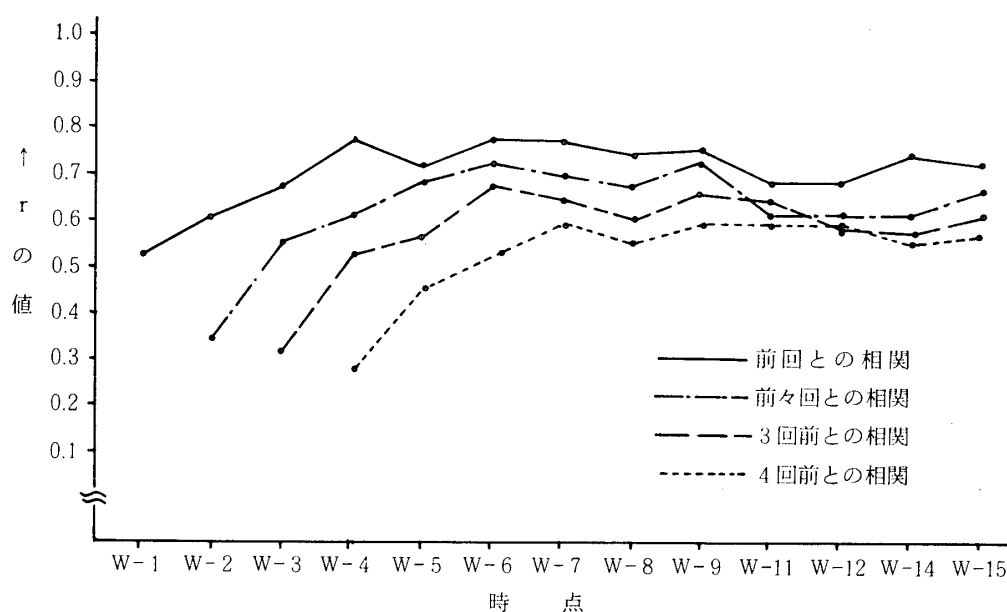
時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
W-0		.52	.34	.31	.27	.23	.20	.16	.19	.14	.13	.12	.12	.12
W-1			.61	.55	.52	.45	.45	.38	.34	.32	.26	.20	.19	.23
W-2				.67	.61	.56	.52	.48	.39	.40	.35	.25	.25	.25
W-3					.77	.68	.67	.59	.52	.49	.44	.37	.35	.39
W-4						.71	.72	.64	.55	.53	.47	.40	.36	.42
W-5							.77	.69	.60	.59	.51	.42	.43	.43
W-6								.77	.67	.66	.59	.51	.51	.52
W-7									.74	.72	.64	.59	.55	.60
W-8										.75	.61	.58	.55	.57
W-9											.68	.61	.57	.57
W-11												.68	.61	.61
W-12													.74	.66
W-14														.72
W-15														

表A-5 SMT-1の評定値の安定性-2（右上=AM, 左下=AF）

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
W-0		.45	.24	.29	.20	.30	.19	.17	.24	.19	.13	.22	.26	.20
W-1			.43	.35	.33	.36	.35	.32	.33	.29	.20	.23	.23	.24
W-2				.45	.45	.50	.38	.37	.20	.26	.23	.10	.07	.13
W-3					.66	.66	.55	.49	.42	.41	.36	.31	.29	.41
W-4						.70	.63	.53	.44	.40	.43	.28	.24	.37
W-5							.68	.62	.52	.44	.48	.36	.31	.40
W-6								.74	.57	.61	.59	.52	.49	.54
W-7									.65	.60	.54	.53	.51	.52
W-8										.64	.46	.53	.50	.52
W-9											.46	.53	.56	.53
W-11												.62	.55	.51
W-12													.71	.57
W-14														.63
W-15														

表A-6 SMT-1の評定値の安定性-3 (右上=BM, 左下=BF)

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
W-0		.52	.38	.31	.31	.25	.24	.25	.22	.19	.10	.12	.12	.10
W-1	.59		.64	.59	.59	.47	.52	.47	.40	.38	.26	.26	.25	.30
W-2	.38	.64		.80	.74	.67	.68	.66	.57	.51	.39	.37	.48	.42
W-3	.42	.65	.66		.80	.68	.75	.71	.64	.58	.47	.41	.50	.48
W-4	.37	.60	.64	.79		.73	.77	.76	.68	.63	.52	.51	.55	.58
W-5	.24	.50	.58	.65	.67		.78	.72	.66	.63	.47	.49	.57	.53
W-6	.29	.49	.52	.62	.65	.77		.82	.77	.74	.59	.56	.61	.62
W-7	.18	.39	.46	.49	.51	.68	.74		.80	.73	.63	.62	.62	.68
W-8	.15	.27	.33	.40	.40	.53	.64	.76		.79	.72	.69	.71	.72
W-9	.14	.26	.37	.37	.42	.58	.63	.81	.77		.70	.65	.67	.68
W-11	.19	.27	.36	.38	.37	.54	.61	.77	.68	.84		.75	.71	.73
W-12	-.05	.02	.13	.17	.19	.32	.38	.55	.47	.62	.67		.76	.78
W-14	-.09	.02	.09	.11	.10	.32	.37	.54	.48	.57	.55	.80		.80
W-15	.04	.14	.19	.26	.27	.41	.44	.65	.54	.66	.66	.58	.64	



図A-2 SMT-1の評定値の安定性 (全体)

傾向を明らかにするために、表A-4から図A-2を作成した。これは、各時点での評定値と前回の評定値、前前回の評定値、3回前の評定値、および4回前の評定値との間の相関係数を縦軸にとってプロットしたものである。これから次のような傾向が読みとれるであろう。

まず、最も値が高いのは、当然のことながら、前回の評定値との相関で、間隔が長いほど低く、4回前（ほぼ4週間間隔）のそれとの相関が最も低い。次に、同じ長さの間隔をおいた2回の評定の安定性は、初期では中期以降よりも低い。例えば、前回との安定性をみてみ

ると、W-1（とW-0の間）では0.52であるが、W-2では0.61、W-3では0.67、W-4では0.77と次第に高くなっている。しかし、W-5の落ち込みは別としても、以後は同じ水準を維持するか、あるいはむしろやや低落の傾向を示している。同じことは、前々回との間、3回前との間、および4回前との間の安定性についても観測されている。しかしながら、一定の間隔をおいた2回の評定の安定性が、中期よりも後期においてむしろ低下の傾向を示している理由は、われわれの得ている資料からは明らかでない。しかし、おそらくは、評定の基準

の動揺や繰り返し実施による動機づけ水準の低下に基づく誤差分散が、後期においてやや増加したことによるものと思われる。

なお図には示していないが、上述の傾向はクラスによって若干相違している。評価が最も早く安定してくるのはBMで、このクラスではW-6の時点ですでに4本の線のレンジが0.1程度にまで縮まっている。反対に、最後まで安定しきらないように見えるのはBFである。こ

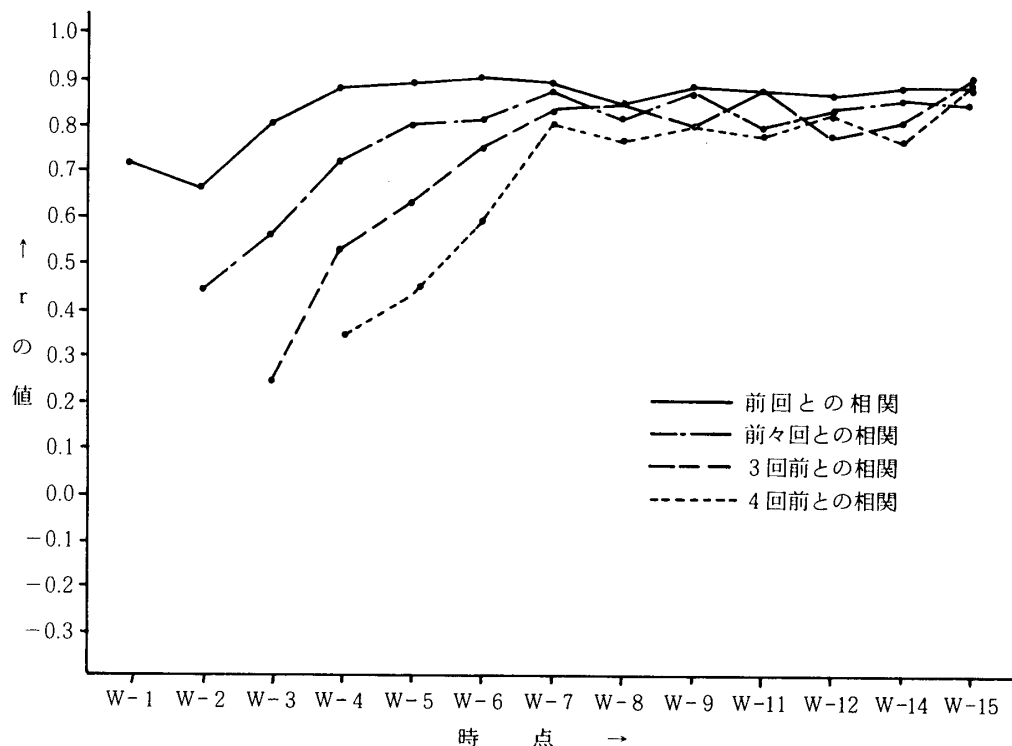
のクラスでは、W-8において、前回の評価との相関は0.76と他クラスと変わらないが、前々回とのそれは0.64、3回前とのそれは0.53、4回前とのそれは0.40と、レンジは0.36に及んでいる。またW-14においても、このレンジは0.32にとどまっている。

(4) 選択地位の安定性

異なった2時点におけるSMT-1によって各成員が得た選択地位の間の相関係数によって、地位の安定性を

表A-7 選択地位の安定性(1) (全体)

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
W-0		.72	.44	.24	.34	.22	.11	.08	.17	.16	.09	-.04	-.10	.02
W-1			.66	.56	.53	.43	.34	.34	.36	.37	.31	.22	.15	.21
W-2				.80	.72	.63	.59	.61	.59	.61	.50	.45	.43	.43
W-3					.88	.80	.75	.80	.73	.69	.62	.58	.61	.64
W-4						.89	.81	.83	.76	.72	.67	.62	.64	.68
W-5							.90	.87	.84	.79	.71	.68	.70	.74
W-6								.89	.81	.79	.77	.68	.72	.75
W-7									.84	.87	.87	.82	.87	.88
W-8										.88	.79	.77	.76	.82
W-9											.87	.83	.80	.88
W-11												.86	.85	.89
W-12													.88	.84
W-14														.88
W-15														



図A-3 選択地位の安定性 (全体)

求めることができる。全被験者(84名)についてそれを求めたのが表A-7である。これによると、学級編成直後であるW-0における地位と、1週間後のW-1におけるその相関係数は0.72とかなり高い数値になっていることがわかる。しかし、W-0とW-2との間のそれは有意に低下して0.44となっている。そして、時日の経過とともに r は次第に低下していき、若干の変動はあるものの、1学期の終り頃の地位との相関は有意でなくなっている。W-1とW-2の間の相関は0.66と、W-0とW-1の間のそれよりむしろ低くなっているが、以後

は、隣接する2時点の間の地位の相関は0.89~0.90と非常に高くなっている。表A-7から作図した図A-3をみると、評定の安定性についての図A-2といくつかの点で類似していることがわかる。すなわち、当然のことながら、間隔が短いほど安定性は高く、また同じ間隔の2時点をとると、初期から中期(W-7ごろ)まで、時期が後になるほど安定性は高くなっている。しかし、評定の安定性とはちがった傾向もいくつか見出すことができる。第1に、相関係数の値そのものが評定の場合より高くなっている。図A-2にプロットされている分

表A-8 選択地位の安定性(2) (右上=AM, 左下=AF)

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
W-0		.56	.32	.28	.32	.24	.06	.18	.15	.05	.12	.06	-.13	.09
W-1	.78		.65	.69	.75	.71	.66	.72	.65	.58	.65	.57	.42	.60
W-2	.29	.77		.63	.69	.63	.48	.62	.51	.52	.48	.44	.45	.54
W-3	-.04	.37	.81		.95	.90	.77	.91	.85	.86	.82	.75	.76	.88
W-4	.14	.43	.74	.88		.92	.76	.88	.88	.85	.85	.78	.74	.87
W-5	-.06	.30	.60	.79	.81		.86	.90	.92	.82	.83	.76	.75	.86
W-6	-.33	.07	.53	.77	.76	.86		.88	.88	.77	.84	.73	.71	.81
W-7	-.20	.20	.60	.77	.74	.79	.88		.91	.90	.91	.85	.85	.91
W-8	.13	.55	.76	.74	.71	.73	.60	.66		.89	.91	.86	.83	.91
W-9	.02	.55	.76	.64	.61	.70	.62	.73	.85		.93	.91	.90	.97
W-11	-.23	.15	.46	.55	.50	.59	.72	.87	.58	.74		.93	.87	.92
W-12	-.03	.38	.68	.71	.71	.76	.76	.87	.74	.86	.86		.87	.89
W-14	-.13	.21	.48	.62	.65	.66	.78	.94	.55	.69	.91	.85		.88
W-15	.18	.22	.46	.55	.53	.66	.75	.88	.61	.77	.91	.85	.94	

表A-9 選択地位の安定性(3) (右上=BM, 左下=BF)

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
W-0		.71	.32	.35	.18	.07	.01	-.27	-.21	-.05	-.28	-.26	-.28	-.34
W-1	.77		.21	.31	-.04	-.18	-.42	-.51	-.44	-.42	-.50	-.48	-.52	-.53
W-2	.72	.83		.86	.61	.49	.32	.30	.26	.13	.05	.12	.23	-.04
W-3	.63	.76	.84		.75	.57	.40	.41	.33	.17	.15	.21	.28	.06
W-4	.65	.75	.81	.88		.84	.64	.72	.57	.47	.41	.42	.57	.42
W-5	.56	.68	.77	.84	.95		.81	.82	.78	.73	.58	.66	.77	.67
W-6	.61	.77	.85	.88	.94	.97		.82	.81	.79	.63	.67	.76	.67
W-7	.55	.71	.81	.88	.91	.92	.95		.85	.77	.77	.86	.91	.85
W-8	.56	.53	.70	.83	.79	.85	.85	.85		.90	.80	.84	.88	.82
W-9	.57	.62	.80	.82	.83	.87	.90	.95	.88		.82	.82	.83	.82
W-11	.65	.71	.82	.75	.77	.76	.84	.88	.75	.91		.89	.86	.89
W-12	.10	.34	.46	.53	.49	.51	.54	.61	.52	.63	.65		.90	.91
W-14	.16	.47	.53	.68	.55	.59	.62	.71	.65	.70	.66	.90		.91
W-15	.48	.47	.66	.75	.73	.72	.76	.86	.83	.85	.82	.61	.70	

だけについてみると、評定の安定性は0.27と0.77の範囲にあるが、図A-3にプロットされている地位の安定性の範囲は0.24と0.90の間となっている。また、91個の相関係数すべてについてその中央値を求めると、評定の場合の0.59に対して、地位の場合には0.71と有意により高いことがわかった。次に、W-7以降では、4本の線の幅は地位の場合により狭くなっていることがわかる。また、評定の場合とちがって、その時点以降では安定性は低下の傾向は示さず、横バイである。

次に、任意の2時点間での安定性（相関係数）をクラス別に求めた結果を表A-8および表A-9に示す。これらの結果によると、クラス差は評定の安定性の場合よりも大きいようである。安定性はAM（91個のrの中央値0.78）で最も高く、BM（同じく0.57）で最も低く、AF（同じく0.72）とBF（0.71）はその中間となっている。ことに特徴的なのはBMである。このクラスでは、W-0と他の時点の間の相関はW-7以降で負となっているばかりでなく、W-1との相関もW-4以降でことごとく負となっている点が注目される。また、W-1とW-2は間隔がわずか1週間であるにもかかわらず、相関は0.21と低い。これらのことから、このクラスでは学級編成後1・2週間の間に編成直後に一応確立していた成員間の地位の序列を大きくゆさぶるような出来事があり、以後数週間にわたって不安定な状態が続いたものと推測される。なお、前述のように、このクラスはSMT-1の評定の安定性の点では4クラス中で最も早く確立しており、評定の信頼性の低さがこの結果に影響しているとは考えられない。

次に特徴のみられるのはAFである。このクラスにお

いては、W-0との相関はW-3以降の11回のうち8回で負となっている。このことは、W-0とW-1との間の相関が4クラスの中で最高（0.78）となっていることと考え合わせると、W-0からW-6あたりまでは不安定な状態があり、その間に多くの成員の地位が徐々に変動し続けた、とみることができそうである。そして、それが安定する兆しを見せ始めるのは、どうやらW-7あたりからのことようである。

2 SMT-1とSMT-2との関係

これまでは、他の資料とは独立に、SMT-1の評定値だけを取り上げ、その全体的傾向をみてきた。ここでは、Pの他の成員全体に対するセンチメント関係や、他の諸成員のPに対するトータルとしての関係ではなく、1人の成員Pと別の成員Oの間のセンチメント関係に焦点を合わせることにしよう。この二者関係の動向を分析するにあたって、われわれはTagiuriら（1953）の用いた方法に依拠することにする。彼らは、次の3測度を算出することによって、二者関係の実態に迫ろうとした。

（1）相互性（mutuality）。PのOに対するセンチメント関係（ $P \rightarrow O$ ）とOのPに対するそれ（ $O \rightarrow P$ ）の一致度。

（2）正確性（accuracy）。PがOから受けたと認知するセンチメント関係（ $P \leftarrow O$ ）と実際にPに対してOが抱いているセンチメント関係（ $O \rightarrow P$ ）の一致度。

（3）相応性（congruency）。PがOから受けたと認知するセンチメント関係（ $P \leftarrow O$ ）とPがOに対して抱くセンチメント関係（ $P \rightarrow O$ ）の一致度。

Tagiuriら（1953）がとったセンチメント関係の資

表A-10 SMTにもとづく3測度の推移（単純相関）

測度	時点 クラス	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
相互性	AM	.29	.41	.18	.17	.23	.38	.28	.21	.35	.26	.29	.27	.15	.23
	AF	.29	.23	.19	.19	.25	.09	.16	.20	.18	.26	.50	.51	.39	.36
	BM	.29	.28	.25	.21	.13	.23	.09	.09	.17	.12	.25	.39	.13	.14
	BF	.18	.37	.30	.27	.30	.40	.45	.60	.44	.52	.53	.62	.59	.35
正確性	AM	.24	.38	.18	.14	.09	.27	.24	.20	.30	.17	.27	.09	.18	.17
	AF	.27	.26	.10	.10	.11	.08	.05	.09	.12	.16	.34	.43	.31	.25
	BM	.26	.25	.17	.16	.11	.19	.11	.11	.17	.13	.19	.30	.14	.20
	BF	.21	.28	.27	.26	.38	.36	.43	.53	.43	.43	.46	.57	.40	.34
相応性	AM	.70	.73	.47	.61	.54	.64	.46	.50	.51	.48	.26	.31	.43	.34
	AF	.66	.78	.75	.79	.67	.71	.72	.67	.72	.76	.72	.78	.73	.56
	BM	.75	.72	.70	.70	.68	.70	.67	.67	.70	.67	.62	.65	.59	.70
	BF	.49	.68	.71	.68	.65	.62	.58	.66	.60	.63	.71	.71	.68	.63

料は2件法（「選択する」と「しない」）によるものであったので、彼らは上記3測度を一致率によって求めた。われわれの集めたSMT-1およびSMT-2の資料は101点尺度上での評定であるので、上記の測度を、一致率ではなくて相関係数で求めることができる。クラス別・時点別にそれを求めたのが表A-10である。

これによると、相応性が他の2測度よりも際立って高い相関を示している。これらはすべて1%水準で有意である。これは、「自分が好意を抱く相手は自分に対しても好意を寄せており、自分が嫌いな相手は自分をも嫌っているだろう」、あるいは「自分は自分に対して好意を寄せているであろう相手を好き、自分を嫌っているであろう相手を嫌いになる」ということを意味する。この相応性が3測度の中で最も強力な傾向であることは、すでにTagiuriら（1953）はじめ多くの研究者が明らかにしているところである。相互性と正確性はこれにくらべるとはるかに低く、有意水準に達していないものも散見される。

ところで、 $P \rightarrow O$ 、 $O \rightarrow P$ 、および $P \rightarrow O$ の3変数はそれぞれ相互に依存しているので、任意の二者の単純相関には第三者の影響が混在していると考えられる。この

ため、二つの変数の間の正味の共変関係を知るためには、第三の変数の効果をpartial outした偏相関を求めた方がより適切であると考えられる。表A-11は、同じくクラス別・時点別にそれを求めたものである。

当然のことながら、単純相関と比べると相関の高さは低くなっている。それでも相応性は相当に高く、各クラスとも、14の時点の結果はすべて有意となっている。クラス別ではBMとAFで高くAMで低いが、大差はないといえる。ただし、AFは全体として相関が低だけでなく、後期（W-11以降）にさらにやや低くなる傾向がみられる。

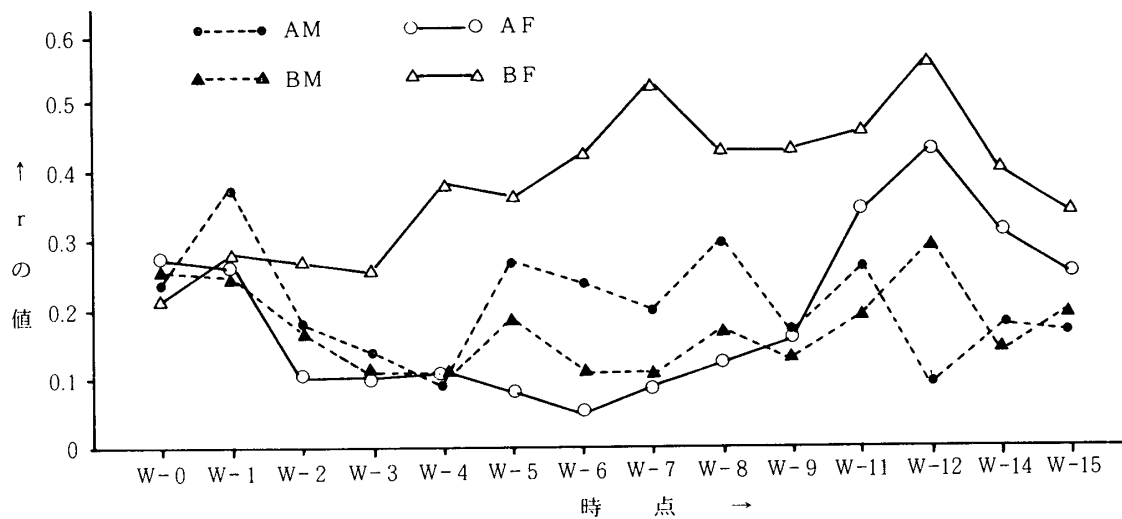
相互性については、BFで他のクラスよりやや高い（14時点の平均で0.26）ほかは、有意水準すれすれ程度である。このように相互性の値が予期されたより低いものとなった理由の一つは、相応性の場合とちがって、相関させられた両変数は別の2人の被験者の反応から得られたSMT-1の反応であることが考えられる。個人によりその基準がまちまちであったことが影響しているかもしれないのである。そこで、各被験者の14時点でのSMT-1の全反応をZ得点により規準化したSMT-Cの測度から相互性を求めてみた結果が表A-12である。全体と

表A-11 SMTにもとづく3測度の推移（偏相関）

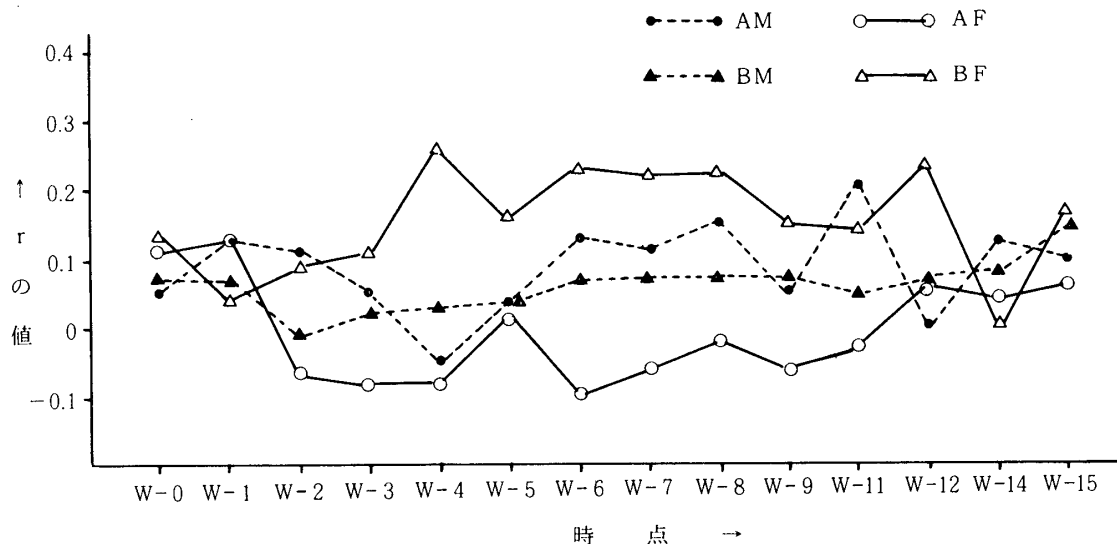
時点 測度 クラス		W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
相互性	AM	.18	.21	.18	.11	.06	.28	.20	.13	.24	.21	.24	.26	.08	.19
	AF	.16	.05	.02	.19	.24	.05	.18	.19	.14	.22	.39	.29	.25	.27
	BM	.15	.02	.19	.14	.08	.14	.02	.02	.07	.05	.17	.27	.06	.00
	BF	.09	.26	.16	.13	.08	.24	.27	.39	.25	.36	.33	.37	.47	.19
正確性	AM	.05	.13	.11	.05	-.05	.04	.13	.11	.15	.05	.21	.00	.12	.10
	AF	.11	.13	-.07	-.08	-.08	.02	-.10	-.06	-.02	-.06	-.03	.06	.04	.06
	BM	.07	.07	-.01	.02	.03	.04	.07	.07	.07	.07	.05	.07	.08	.15
	BF	.14	.04	.09	.11	.26	.16	.23	.22	.23	.15	.14	.24	-.00	.17
相応性	AM	.46	.67	.45	.60	.54	.60	.42	.48	.45	.46	.20	.30	.41	.31
	AF	.63	.77	.46	.79	.67	.64	.72	.67	.71	.75	.68	.69	.69	.52
	BM	.73	.70	.71	.83	.68	.69	.58	.67	.69	.66	.60	.61	.61	.73
	BF	.47	.65	.69	.66	.61	.56	.48	.50	.51	.53	.62	.55	.60	.58

表A-12 SMT-Cによる相互性（単純相関）

時点 クラス		W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
相互性	AM	.28	.38	.18	.15	.12	.25	.17	.09	.23	.22	.09	.18	.07	.10
	AF	.27	.25	.20	.23	.37	.22	.23	.21	.28	.46	.63	.51	.38	.19
	BM	.21	.32	.35	.34	.30	.37	.29	.23	.34	.29	.38	.54	.31	.28
	BF	.20	.23	.18	.20	.18	.25	.24	.50	.40	.50	.51	.55	.50	.33



図A-4 正確性の変動（単純相関）



図A-5 正確性の変動（偏相関）

して表A-10の場合より高いが、ここでもクラス差は大きく、AMは他のクラスより低くなっている。しかし、全体を通してみると、SMT-1による単純相関（表A-10）の場合と同様、W-9からW-12にかけて特に高くなっていることが目につく。

最後に正確性であるが、表A-11から、これは相互性よりもさらに低いことがわかる。時系列的な推移をみるために、表A-10から図A-4、表A-11から図A-5を作図した。これによると、単純相関のAFの場合を除いて、時点の進行とともに相関が高くなるという傾向はみられない。被験者は、SMT-2において、他成員の自己に対するセンチメント関係を認知することを求められた。相互作用のごく初期においては、そのための外在的

手がかりはほとんど入手できないといってもよいであろう。したがって、その段階では、相応性が高い値をもつことは予測されるが、正確性がそれほど高い値となるとは考えにくい。結果はそのことを裏書きしている。W-0においては単純相関で0.21ないし0.27となっており、有意ではあるが決して高くはない。しかし、時日が経過し、相互作用が累積されていくうちに、相手の自己に対するセンチメント関係を認知するための手がかりは次第に増加していくと考えられるから、正確性はそれにとともに向上していくことが期待されるのである。ところが結果はその期待と反している。この理由は現在のところ明らかでない。今後の検討にまたなくてはならないであろう。

3 討 論

(1) 初期におけるセンチメント関係の分化

本研究でわれわれが得た最も重要な知見の一つは、出会いの極めて初期、すなわち級友としてのその存在を意識するかしないかという段階において、他成員に対するセンチメント関係が既にかなり明確に分化していたという事実である。もちろん、それは時日の経過とともに次第に変容していくものであるが、後に安定したものとなってくる対人関係の基礎となるものであると考えることができる。われわれの得たこの結果は、センチメント関係が事実分化していたために生じたというよりは、無理に101点尺度上で評定をすることを求めたために、人為的につくり上げられた分化である、という見方も一方では可能であるかもしれない。しかし、調査の実施に当たった者の報告によると、評定を求められた被験者は、ほとんど困惑することなしに、各成員に対する評定を抵抗なく行なった、ということである。したがって、反応を求められたことが刺激となってより明白に意識化することが促進された、という面がなかったとはいえないにせよ、われわれの得た結果は、やはり初期における対人関係そのものが分化していたことをかなりの程度まで反映している、ということができる。

それでは、センチメント関係は何故にこのような出会いの初期において、ほとんど瞬間的ともいえるような速さで成立するのであろうか。合理的に考えると、相手に対するセンチメントは認知に基いて形成される、ということになろう。すなわち、相手の諸側面が自己の重要な欲求充足に対してどの程度の道具的価値をもっているかが、相手の自分にとっての有用性、換言すればセンチメントを規定する、といえる。しかし、センチメントはそのような合理的基盤の上に成立するとは限らないようである。恋愛などの場合には、まず直観的にセンチメントが形成され、それを合理化するために相手の諸属性の認知が後から成立する、ということが多いことはよく知られているところである。友情の場合でも多少ともこうした非合理的な面が働くと考えられる。西平（1953）は「…動機が全く意識されないにも拘わらず、Bに好ましさを感じる（「虫が好く」）のは、後になって、Bの声が幼児期に世話になった人に似ている……とかに気がつく」ことのあることを指摘している。これは Secord（1958）が、写真による印象形成にさいして人が用いる五つのストラテジーの一つとしてあげている parataxis（彼はこの語を Sullivan に負っている）に当たるメカニズムである。また、われわれには容貌と性格の間に関連性を仮定する強い傾向があることが示されているが（大

橋ほか、1976；大橋ほか、1977）、このことが初期のセンチメント関係の形成に影響しているかもしれない。すなわち、容貌の知覚から相手の性格の認知が成立し、それが相手の likability の認知（すなわちセンチメント）へと連がる、ということは大いに考えられるところであろう。

(2) 好意度の増大

われわれが用いた SMT-1 は理念的には絶対尺度であった。基準のとり方は被験者個人に任せられていたもので、実際には相対尺度のような使い方をした個人もいたかもしれない。しかし、50点がニュートラル・ポイントであることは繰り返し教示したし、被験者はそのことを理解するだけの知的能力を有していたと考えられる。したがって、様々な方法論上の問題はあにせよ、これを一応は絶対尺度として扱うことは許されるであろう。

図A-1によると、W-0からW-4あたりまで、SMT-1の平均評定値は負の加速度をもちながら上昇し、それ以降は微増ないし停滞している。これは、先にわれわれが女子大学生に実施した調査の結果と軌を一にしている（大橋ほか、1978）。しかし、相対尺度ではなくて、絶対尺度を用いた結果であるところに意義があると思う。

時日の経過とともに他成員に対する平均的好意度が増大する理由は、その間の相互作用（接触）の累積という観点から説明することができる。その意味で、この結果は Zajonc（1968）の仮説を支持しているとみることができる。またこれは、先にわれわれが提示したモデル（図A-6）とほぼ一致した結果であることがわかる（大橋

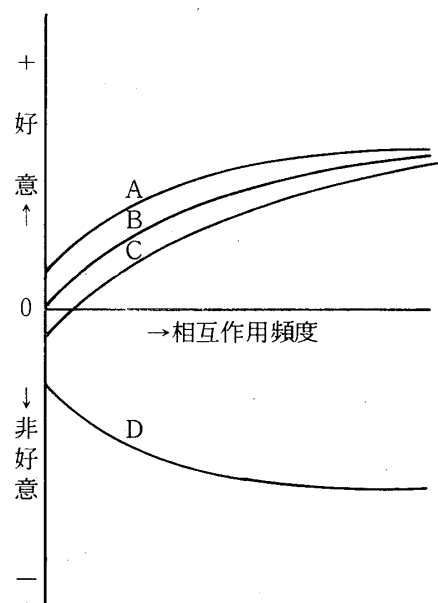


図 A-6 相互作用の頻度と好意度の関係（大橋、1973）

1973)。このモデルは相互作用の頻度の関数としての好意度を表わしたものであるが、われわれの得た結果はこのAのカーブに類似した推移を示している。もちろんこれは平均スコアの推移であるから、特定の個人の特定の他の個人に対するセンチメント関係をみてみるならば、B、C、あるいはDのようなパターンを示すケースもあるであろう。平均がAのようなパターンを示したのは、先にも述べたように、出会いの時期からしてpositivity biasが存在したことと、本研究の結果が学級集団というインパクトの大きい場での対人関係についてのものであるということが関係していると思われる。

具体的なセンチメント関係が、相互作用の頻度ばかりでなく、より大きくはその報酬価の関数であることは言うまでもあるまい。その点に関してはEの結果に譲ることとする。

(3) 相応性・相互性・正確性の結果について

2人の成員間のセンチメント関係を分析した結果の中で最も目立ったのは、相応性の顕著な高さであった。これは、前述のように、主として認知的斉合性(cognitive consistency)への傾向というタームから理解することができる。すなわち、自分の好きな相手から嫌われているとか、嫌いな相手から好かれていると思うことは認知的に不斉合であり、人はそのような状態を避けるように動機づけられる、とみることができる。相応性が極めて高い値を示したのはその結果であるといえよう。

ところで、相応性の時系列的推移をみると、AMにおいて後期にやや低下しているほかは、全体としてはあまり変化していないようである(表A-11)。これは、学級編成後7週間経過した時点(第2回調査)と比べると9週間後の時点(第3回調査)で相応性が大きく上昇し以後あまり変化がなかった、とするわれわれの先の女子大生についての知見と少しちがうようである(大橋ほか, 1978)。しかし、集団形成の直後と3ヶ月あまり経過した時点とでA-B-Xモデルの支持のされ方は基本的には変らない、とするNewcomb(1961)の結果、およ

び大橋(1958)の結果とは一致する。斉合性への傾向は他者との知己の程度とは元来あまり関係ないのかもしれない。

次に、相互性と正確性の値はあまり高くなかったことが注目される。ことに、正確性が学級編成直後から15週間にわたって、ほとんど増大していないという結果はやや意外であった。post hocに解釈すれば、この期間ではクラス内の相互作用はまだ十分でなく、他者の自己に対するセンチメント関係を認知するのに十分な手がかりが入手できなかった、ということになるのであろう。実際にデータはないが、これだけ繰り返し調査を実施したのであるから、被験者の日常会話でも調査のことがかなり話題になったと想像される。したがって、他者の自己に対するセンチメントを認知するための手がかりが余計に得られそうにも思える。あるいは、それだけに、そのような手がかりを与えないように被験者は余計に偽装に心を用いたのであろうか。

(4) 方法上の問題

SMT-1とSMT-2で101点尺度を用いたことは結果の処理の段階でわれわれをいろいろ悩ませた。理念的には絶対尺度とはいえ、被験者によって基準はまちまちであったと考えられるので、同じスコアに同じ意味を与えてよいかどうか、大きな問題である。Newcomb(1961)の方法に従ったわけであるが、他の資料も合わせ収集するなり(Newcombは好意のランキングを併用している)、尺度のポイントの数をもっと減らすべきであった。あるいは、基準の動揺を防ぐために、被験者に他成員への以前の評定結果をフィードバックすることも考えられる。もっともこれは新しいバイアスの源となるおそれがあるが。

次に、問題としてあげるべきことは、あまりにも調査の繰り返しの頻度が多く、かつ間隔が短すぎたということである。そのために被験者の動機づけに若干の影響があったことは否めない。今後は改善するべきであろう。

B パーソナリティ認知*

Iにおいて述べたように、本研究においてわれわれは、人Pの他者Oに対する対人関係を、Oに対するPの対人的態度としてとらえている。こうした枠組に基づいて、以下では対人的態度の認知的成分、とりわけ他者についてのパーソナリティ認知の側面を取り上げる。

他者についてのパーソナリティ認知は、対人関係の成立や発展の過程の各段階で極めて重要な役割を果たすと考えられる。にもかかわらず、従来この問題を、いわば縦断的視点に立って時系列的に分析した研究は、ほとんどなされていない。他者についてのパーソナリティ認知の内容は、社会的相互作用がまだほとんどない段階でどのようなものであり、相互作用の進展につれてどのよう

* 執筆：林 文俊

に変容していくのか。また、一定の期間内でそれらはどれくらい安定したものであるか。あるいは、他者のパーソナリティ認知に際して人が用いる判断の枠組は、対人関係成立の初期とその後とで違いがあるのか等々、今後吟味すべき課題は多い。ことに、対人関係成立の初期には、他者Oに対する限られた情報を手がかりとし、Pのもつ暗黙裡の性格観 (implicit personality theory) に基づく推論を通して形成されたパーソナリティ印象が、その後の社会的相互作用の進展にともなって修正あるいは補強され、ある程度安定したものに体制化されていく機制や過程を、現実の対人関係の場において明らかにする必要がある。

印象形成の過程に関しては、これまで Asch (1946) や Anderson (1962) のものをはじめ多数の実験的研究がなされ、かなりの知見が得られている。これに対して、暗黙裡の性格観に関した研究はそれほど多くない。この領域では、主として人が他者のパーソナリティを認知する際に働かす諸次元の体系やその個人差などの問題が検討されている (Rosenberg & Sedlak, 1972; Schneider, 1973)。

他者のパーソナリティ認知に際して人が用いる次元の内容を分析した研究はいくつかあるが、ここでの大きな問題点の1つとして、抽出された諸次元の内容に関して研究者相互の比較検討が不十分であることを指摘できる。林 (1978) は、このような観点に立った探索的検討を試み、他者のパーソナリティを認知する場合に多くの人がある程度共通して用いる基本次元の内容を、＜個人的親しみやすさ＞、＜社会的望ましさ＞、＜力本性＞の3つに整理している。はじめの2つは、いずれも評価的色彩の濃いものであるが、前者が主に他者についての好感・親和に関する判断に対応しているのに対して、後者は尊敬・信頼に関する判断に対応する。また＜力本性＞とは、活動性の高さや意志の強さを一体として認知する次元である。

ところで、周知のように、態度の3成分の間には、ポジティブあるいはネガティブといった方向や強度において相互に一貫した関係が保たれる傾向がある。したがって、他者についてのパーソナリティや態度の認知は、当該他者に対して抱くセンチメントと密接な関連をもつことになる。

対人場面において、このような点を実証した初期の代表的研究の1つとして、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) の研究がよく知られている。彼らは、一般に人は自分が好意的感情をよせる他者のパーソナリティを、自己のそれに類似させて認知する傾向があることを見だし、これを仮定された類似性 (assumed

similarity) と呼んだ。これは、主としてセンチメントが認知を規定する側面を指摘したものである。俗にいう「あばたもえくぼ」的現象も、こうした点を表わす例である。他方、Newcomb (1953, 1961) の研究は、ある対象に対して2人がもつ態度の類似性 (の認知) が、両者間のポジティブなセンチメント関係の成立に影響を及ぼすという側面を問題にしている。

さて、われわれが先に女子大学生を対象にして行なった、対人認知と対人関係に関する追跡的研究 (大橋ほか, 1978) においては、他者のパーソナリティ認知の時系列的变化についても、いくつかの示唆に富んだ結果が得られた。そのうち主なものを列挙すると、次のようになる。

1) 飯島 (1961) に準じた25尺度による他者のパーソナリティ評定資料を調査時点別に因子分析したところ、因子構造は時点によってほとんど変化せず、その意味で安定したものであった。すなわち、いずれの時点においても、＜活動性＞、＜親近性＞、＜魅力性＞、および＜誠実性＞と命名される主要4因子が抽出された。

2) 上記4因子中、はじめの3因子については、時点の経過にともなって、それぞれの因子に負荷する尺度上での他者評定の平均値が上昇していく傾向が認められた。しかし、＜誠実性＞の因子におけるそれは、逆の傾向にあった。

3) パーソナリティ評定値の時点間相関による分析では、個々人の他者に対するパーソナリティ認知は、時点が後へいくほど安定したものとなっていくことが確認された。ただし、＜活動性＞の次元での判断は、対人関係成立の初期から分化しており、その後もかなり高い安定性を示した。

4) パーソナリティ評定尺度のうちでも＜親近性＞や＜魅力性＞に関した評定値が、ソシオメトリック評定値 (好意度) とある程度高い正の相関をもっていた。しかし、これらの相関は意外に低く、しかも両者の関連性は時点を追うにしたがって次第に低下する傾向が認められた。

ここでの主要な目的は、上述した女子大学生の結果が中学生にもそのまま当てはまるのか、あるいは違いがあるとするれば、それはどのような点かを明らかにすることである。

Ⅱで述べたように、われわれはPPIと称する調査を各時点で実施したが、1回の調査では8尺度のうちの4尺度のみが用いられたので、以下においては、8尺度をセットにして7時点 (T-1～T-7) で実施したものとして資料を分析することにする。なお、ここでの結果は、クラス別ではなくて、性別に分析することにする。

1 パーソナリティ認知の構造とその推移

(1) パーソナリティ認知の次元構造

最初に、被験者が級友のパーソナリティを認知する際の次元の内容について検討する。そのため、8尺度に基づくパーソナリティ評定(7点尺度)資料を1～7点と得点化し、T-1からT-7までの各時点ごとに、主因子法により因子分析した。固有値1.0以上を基準として因子を抽出したところ、いずれの時点においても2因子が抽出された。これをバリマックス回転した結果が表B-1に示してある。ここでは、同じ因子への負荷量が高いものがまとまるように尺度の順序を入れ替え、また負荷量の大きいもの($a_i \geq 0.40$ 、表B-1ではゴシック体で表示)の符号ができるだけ正となるように尺度④と尺度⑧の両極も入れ替えてある。

表B-1を見てまず気づくことは、各時点における因子構造(因子負荷量のパターン)が、相互に非常に類似していることである。すなわち、われわれが用意して与えた8尺度に基づく他者のパーソナリティ認知の因子構造は、時点を越えてほぼ安定しているといえる。このような結果は、先の女子大学生の場合のそれ(大橋ほか、1978)と符合している。

第Ⅰ因子は、「おとなしいー活発な」、「無口なーおしゃべりな」、「意志が弱いー意志が強い」、「消極的なー積極的な」の4尺度の負荷量が高いことから、活動性と意志の強さとが融合した<力本性>の次元を表わすものと解釈できる。他方、第Ⅱ因子は、「冷たいーあたたかい」、「親しみにくいー親しみやすい」、「頭の悪いー頭のよい」、「ふまじめなーまじめな」の4尺度の負荷量が高いことから、明らかに一般的<評価>の次元を表わしている。

なお、第Ⅰ因子への負荷量のパターンを見ると、<力

本性>の高い級友は「ふまじめな」といった方向で評定される傾向があることがわかる。こうした傾向は、女子大学生を対象とした先の研究においても同様であった。

次に、8尺度によるパーソナリティ評定にソシオメトリック評定値(SMT-1)を加えた計9尺度間の相関行列を、被験者の性別(2)×時点別(7)に算出し、これを入力データとして、Carroll & Chang (1970)が考案したINDSCALモデルによる分析を試みた。通常このモデルによる分析の単位(ケース)は、個人ごとに求めた項目間の類似度行列あるいは距離行列であるが、ここでは上記の14個の尺度間相関行列(9×9)のそれぞれを、分析に際してのケースとして扱ったわけである。

3次元解として析出された「共通刺激空間」の構造は表B-2に示されている。Dim 1の意味内容は因子分析結果における第Ⅱ因子に対応しており、<評価>の次元と解釈できる。また、Dim 2は第Ⅰ因子に対応した<力本性>の次元を表わしている。Dim 3は、活動性(④、⑧)の高い級友を親しみやすい(①、⑤、⑨)と認知する内容になっており、<個人的親しみやすさ>の次元と解釈できる。

他方、図B-1は、これら3次元に対して各ケースがもつウェイトの大きさを示したものである。時点による変化はさほど明確ではないが、男子においては、時点を重ねるにしたがって<個人的親しみやすさ>のウェイトが減少し、<評価>次元のそれが増大する傾向が読み取れる。また、Dim 1とDim 3のウェイトの大きさには、顕著な性差が認められる。すなわち、<評価>次元(Dim 1)に対するウェイトは、いずれの時点をとっても男子の方が大きい。逆に、<個人的親しみやすさ>の次元(Dim 3)に対するウェイトは、いずれの時点でも女子の方が大きくなっている。こうした結果は、中学生を対

表B-1 各時点におけるパーソナリティ認知の因子構造

尺 度	因 子 時 点	第Ⅰ因子：力本性							第Ⅱ因子：評価						
		T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
⑧ おとなしいー活 発 な		.70	.75	.83	.78	.75	.79	.81	.31	.15	.11	.20	.25	.27	.16
④ 無 口 なーおしゃべりな		.75	.78	.76	.75	.81	.68	.73	.03	-.05	-.06	-.08	.09	-.12	-.12
⑦ 意志が弱いー意志が強い		.52	.61	.64	.62	.41	.63	.60	.39	.36	.25	.32	.58	.43	.39
③ 消 極 的 なー積 極 的 な		.52	.60	.55	.55	.37	.48	.52	.20	.26	.21	.35	.41	.44	.34
① 冷 た いーあたたかい		.23	.23	.19	.22	.01	.18	.17	.44	.67	.77	.66	.73	.71	.74
⑤ 親しみにくいー親しみやすい		.29	.38	.38	.30	.15	.27	.29	.53	.62	.62	.69	.75	.67	.66
⑥ 頭 の 悪 いー頭 の よ い		.11	.25	.32	.24	.05	.20	.22	.72	.61	.59	.62	.57	.61	.50
② ふまじめなーま じ め な		-.41	-.28	-.25	-.31	-.42	-.31	-.15	.45	.53	.55	.54	.36	.62	.59

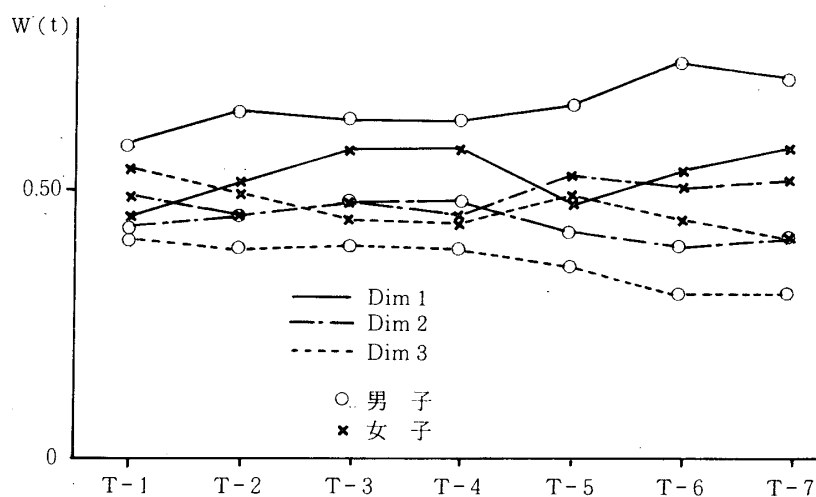
注1). ゴシック体の数値は、.40以上の負荷量を示す。

注2). 尺度④と⑧の両極は、原尺度と向きを入れかえてある。

表B-2 INDSCAL 分析により得られた
「共通刺激空間」の構造

尺 度 \ 次 元	Dim 1	Dim 2	Dim 3
① 冷 た いーあたたかい	.42	-.07	.39
② ふまじめなーまじめな	.46	-.13	-.34
③ 消 極 的 なー積 極 的 な	.21	.45	.17
④ おしゃべりなー無 口 な	.08	-.45	-.42
⑤ 親しみにくいー親しみやすい	.39	.02	.45
⑥ 頭 の 悪 いー頭 の 良 い	.45	.18	.02
⑦ 意志が弱いー意志が強い	.27	.50	.10
⑧ 活 発 なーおとなしい	-.12	-.52	-.29
⑨ <嫌 いー好 き>	.34	-.15	.48

注). ゴシック体の数値は、各次元毎に値の大きいものから上位4つを示す。



図B-1 各次元に対するウェイトの大きさの推移

象としてパーソナリティ認知構造の個人差を分析し、女子は他者のパーソナリティを認知する際に<個人的親しみやすさ>の次元をより重視することなどを明らかにした林(1979)の研究結果と一致している。

(2) パーソナリティ認知の時系列的変化

表B-3は、被験者が各級友のパーソナリティを認知した個々の評定値を分析単位とし、その平均と標準偏差を尺度別および時点別に求めたものである。

女子大学生を対象としたわれわれの先の研究では、このようにして求めた平均評定値は、<個人的親しみやすさ>の下位次元としての<親近性>や<魅力性>を表わす尺度ならびに<活動性>を表わす尺度において、時点を追うにしたがって上昇していく傾向が認められた。こ

れと同様な傾向は、それほど明確ではないが、本研究においても読み取ることができる。すなわち、概して後の時点へいくほど、彼らは級友たちの<活動性>を高く評定し、評価的にもよりポジティブな認知を行なっている。

他方、社会的相互作用が積み重ねられるにつれ、彼らは級友たちを相互に弁別的に認知できるようになるので、判断の分散についても、後の時点ほど大きな値となるかもしれない。表B-3を仔細に検討すると、このような傾向をわずかに認めることができる。ただし、<活動性>を表わす尺度④や⑧においては、初期の時点から分散が比較的大きく、時点による一貫した変化傾向は存在しない。

表B-3 パーソナリティ認知の平均評定値の推移

〔上=男子, 下=女子〕

尺 度	時 点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
① あたたかい	Mean (S D)	4.55 (1.06)	4.79 (1.31)	4.90 (1.24)	4.83 (1.31)	4.81 (1.35)	4.97 (1.45)	4.91 (1.40)
② まじめな	Mean (S D)	4.37 (1.03)	4.22 (1.26)	4.33 (1.28)	4.15 (1.40)	4.18 (1.45)	4.27 (1.44)	4.35 (1.46)
③ 積極的な	Mean (S D)	4.09 (1.07)	4.40 (1.07)	4.44 (1.13)	4.54 (1.27)	4.34 (1.41)	4.68 (1.51)	4.41 (1.52)
④ おしゃべりな	Mean (S D)	4.33 (1.34)	4.74 (1.22)	4.65 (1.30)	4.88 (1.40)	4.82 (1.43)	4.85 (1.50)	4.95 (1.34)
⑤ 親しみやすい	Mean (S D)	4.68 (1.38)	5.14 (1.28)	4.97 (1.39)	5.13 (1.47)	4.90 (1.57)	5.29 (1.42)	5.08 (1.48)
⑥ 頭のよい	Mean (S D)	4.68 (1.06)	4.80 (1.10)	4.90 (1.10)	4.88 (1.25)	4.82 (1.32)	4.93 (1.27)	5.00 (1.40)
⑦ 意志が強い	Mean (S D)	4.45 (1.09)	4.71 (1.16)	4.61 (1.25)	4.77 (1.38)	4.56 (1.40)	4.87 (1.33)	4.95 (1.32)
⑧ 活 発 な	Mean (S D)	4.59 (1.25)	4.84 (1.23)	4.76 (1.32)	4.99 (1.37)	4.89 (1.44)	5.08 (1.30)	5.01 (1.33)
① あたたかい	Mean (S D)	4.76 (1.05)	4.80 (1.18)	4.84 (1.12)	4.97 (1.14)	4.80 (1.32)	4.87 (1.37)	4.95 (1.28)
② まじめな	Mean (S D)	4.55 (1.07)	4.34 (1.21)	4.57 (1.11)	4.62 (1.17)	4.41 (1.31)	4.45 (1.20)	4.66 (1.29)
③ 積極的な	Mean (S D)	4.19 (1.27)	4.55 (1.10)	4.55 (1.19)	4.62 (1.12)	4.56 (1.29)	4.68 (1.28)	4.71 (1.28)
④ おしゃべりな	Mean (S D)	4.39 (1.35)	4.76 (1.32)	4.73 (1.19)	4.80 (1.19)	4.79 (1.28)	4.98 (1.27)	4.99 (1.35)
⑤ 親しみやすい	Mean (S D)	5.03 (1.22)	4.93 (1.37)	4.96 (1.22)	5.32 (1.21)	4.72 (1.47)	5.06 (1.48)	5.14 (1.37)
⑥ 頭のよい	Mean (S D)	4.92 (0.96)	4.86 (1.01)	4.95 (0.97)	5.18 (1.10)	5.07 (1.12)	5.07 (1.14)	5.21 (1.11)
⑦ 意志が強い	Mean (S D)	4.53 (1.11)	4.64 (1.09)	4.66 (1.08)	4.77 (1.12)	4.65 (1.07)	4.85 (1.25)	4.87 (1.21)
⑧ 活 発 な	Mean (S D)	4.60 (1.34)	4.64 (1.38)	4.69 (1.27)	4.92 (1.30)	4.86 (1.35)	4.95 (1.45)	4.92 (1.35)

注) 尺度④と⑧の両極は入れかえてあり、値が大きいほど＜活動性＞を高く評定していることを示す。

(3) パーソナリティ認知の安定性

表B-4は、個々人が各級友のパーソナリティを認知する場合の評定の安定性を吟味するために、尺度ごとに時点間の相関係数を算出したものである。これを見ると、当然のことながら、近接した時点相互の間では相関は高く、間隔が開くにしがって安定性が低下する傾向が認められる。しかし間隔はほぼ同じでも、例えば、T-1とT-3相互の間よりも、T-5とT-7相互の間で相関はより高くなっている。これは、社会的相互作用が重ねられるにつれて、他者のパーソナリティ認知がより安

定した固定的なものになっていくことを示唆している。因みにT-6とT-7の間では、いずれの尺度における相関も0.50以上となっている。とりわけ、両時点間における男子の尺度①（「冷たいーあたたかい」）での評定、女子の尺度④（「おしゃべりなー無口な」）、尺度⑥（「頭の悪いー頭のよい」）、および尺度⑧（「活発なーおとなしい」）での評定の安定性が高い（ $r \geq 0.70$ ）。

ところで、時点間隔が広がるにつれてパーソナリティ認知の安定性が低下する傾向は、ソシオメトリック評定の場合と同じであるが、それほど急激な勾配を示してい

表B-4 パーソナリティ評定の安定性

[対角線の右上半分=男子, 左下半分=女子]

尺度① 「冷たい - あたたかい」

時点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
T-1		.37	.35	.26	.23	.22	.20
T-2	.33		.58	.47	.37	.40	.38
T-3	.30	.53		.61	.50	.46	.51
T-4	.25	.51	.64		.65	.57	.58
T-5	.23	.34	.40	.52		.71	.61
T-6	.13	.33	.44	.51	.63		.71
T-7	.13	.31	.44	.50	.58	.59	

尺度⑤ 「親しみにくい - 親しみやすい」

時点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
T-1		.43	.32	.30	.20	.24	.28
T-2	.51		.55	.53	.37	.41	.39
T-3	.47	.62		.65	.56	.51	.49
T-4	.29	.47	.59		.61	.59	.54
T-5	.32	.40	.42	.55		.66	.58
T-6	.29	.38	.46	.52	.60		.58
T-7	.26	.33	.43	.49	.52	.62	

尺度② 「ふまじめな - まじめな」

時点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
T-1		.36	.34	.26	.23	.20	.24
T-2	.28		.57	.49	.46	.40	.31
T-3	.44	.36		.65	.49	.44	.42
T-4	.35	.38	.66		.47	.44	.41
T-5	.35	.34	.51	.61		.58	.52
T-6	.34	.37	.43	.51	.61		.52
T-7	.38	.32	.53	.55	.52	.54	

尺度⑥ 「頭の悪い - 頭のよい」

時点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
T-1		.57	.43	.40	.38	.36	.26
T-2	.47		.60	.52	.48	.49	.33
T-3	.53	.60		.58	.45	.55	.39
T-4	.46	.59	.71		.59	.61	.38
T-5	.38	.50	.61	.66		.65	.44
T-6	.40	.40	.53	.60	.67		.51
T-7	.31	.41	.52	.61	.62	.70	

尺度③ 「消極的な - 積極的な」

時点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
T-1		.33	.31	.25	.30	.19	.27
T-2	.47		.53	.47	.39	.47	.38
T-3	.32	.44		.54	.38	.45	.39
T-4	.35	.46	.56		.42	.55	.39
T-5	.20	.30	.33	.46		.58	.64
T-6	.25	.39	.44	.52	.46		.58
T-7	.23	.40	.40	.56	.47	.50	

尺度⑦ 「意志が弱い - 意志が強い」

時点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
T-1		.47	.36	.39	.34	.28	.29
T-2	.55		.53	.45	.46	.37	.40
T-3	.51	.55		.58	.52	.51	.43
T-4	.43	.42	.57		.59	.52	.59
T-5	.37	.38	.52	.52		.56	.54
T-6	.37	.46	.44	.42	.57		.58
T-7	.30	.33	.46	.42	.54	.57	

尺度④ 「おしゃべりな - 無口な」

時点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
T-1		.43	.49	.39	.32	.23	.34
T-2	.53		.60	.50	.44	.37	.44
T-3	.49	.66		.62	.53	.44	.50
T-4	.37	.56	.60		.58	.51	.53
T-5	.40	.52	.57	.61		.60	.61
T-6	.38	.48	.60	.60	.71		.60
T-7	.34	.49	.58	.57	.74	.70	

尺度⑧ 「活発な - おとなしい」

時点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
T-1		.52	.49	.41	.33	.29	.30
T-2	.60		.58	.62	.47	.46	.39
T-3	.60	.63		.64	.51	.53	.51
T-4	.54	.57	.69		.55	.55	.50
T-5	.49	.51	.59	.68		.63	.55
T-6	.43	.47	.56	.65	.70		.59
T-7	.43	.43	.51	.55	.65	.70	

ない。このような事実は、各人が暗黙裡の性格観をもっており、初対面の時からそれに照らして他者のパーソナリティをかなり安定的に認知していることを物語る。他者のパーソナリティを認知する際に働かす枠組（認知構造）のみならず、その枠組の中へ個々の級友を位置づける仕方も、対人関係成立の初期から相当安定しているということであろうか。いずれにせよ、互いに知り合ってからわずか10日ぐらいの時点（T-1）で既に、その後3ヶ月を経過した時点（T-7）とある程度類似した認知がなされていることは興味深い。

パーソナリティ認知の安定性を尺度ごとに見てみると、＜活動性＞を表わす尺度④（「おしゃべりな－無口な」）と尺度⑧（「活発な－おとなしい」）において、時点間の相関が他よりも高くなっている。これと同様な結果は女子大生を対象とした大橋ほか（1978）の研究でも得られており、そこでは第1回調査とその後約4ヶ月隔てた第5回調査との間でも、 $r = 0.52$ というかなり高い相関が示されている。こうした結果は、＜活動性＞の次元での他者のパーソナリティの認知は対人関係の早い時点で分化し、かつ安定していることを示唆する。＜活動性＞は外示的な行動に直接的に反映されやすく、そのためほかの次元よりも一層可視的であると考えられる。事実、既に述べたように表B-3においても、パーソナリティ評定の分散は、尺度④と尺度⑧においてT-1の時点から比

較的大きな値を示している。

以上のほか、女子では、T-1における尺度①（「冷たい－あたたかい」）上の評定値と後の時点におけるそれとの相関が、他に比べてやや低いことが目につくが、この点について明確な解釈を下すことは困難である。

2 パーソナリティ認知とセンチメント関係

（1）両者間の共変関係

ここでは、SMT-1の評定結果に基づくセンチメント関係とPPIによるパーソナリティ認知との関連性について分析する。表B-5は、被験者の他の各成員に対するSMT-1の評定値（好意度）とパーソナリティ認知の尺度上での評定値の積率相関係数を、各時点ごとに求めたものである。

まず、パーソナリティ認知の＜評価＞次元との関連について検討する。男女とも、＜個人的親しみやすさ＞に関する尺度①と尺度⑤における評定が、好意度と $r = 0.47 \sim 0.67$ の比較的高い正の相関を示している。これに対して、尺度②（「ふまじめな－まじめな」）における評定は、男子では当該他者に対する好意度とある程度の正の相関をもつが、女子の場合にはほとんど相関がない。また、尺度⑥（「頭の悪い－頭のよい」）においても、好意度との相関は、女子よりも男子の方で概して高くなっている。このように、評価的に相手のパーソナリティを高

表B-5 ソシオメトリック評定とパーソナリティ評定の間の相関
〔上＝男子，下＝女子〕

尺 度 \ 時 点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
① あたたかい	.55	.52	.54	.50	.49	.59	.58
② まじめな	.21	.19	.20	.21	.21	.35	.35
③ 積極的な	.26	.33	.21	.30	.22	.42	.28
④ おしゃべりな	.16	.16	.10	-.02	.01	.02	-.02
⑤ 親しみやすい	.47	.60	.58	.62	.52	.54	.60
⑥ 頭のよい	.39	.32	.41	.43	.37	.42	.30
⑦ 意志が強い	.25	.33	.31	.30	.33	.37	.36
⑧ 活 発 な	.22	.26	.22	.19	.06	.28	.25
① あたたかい	.49	.52	.52	.57	.50	.67	.53
② まじめな	-.01	.09	.06	.05	.07	.13	.13
③ 積極的な	.27	.22	.20	.16	.03	.11	.14
④ おしゃべりな	.29	.26	.24	.30	.16	.13	.11
⑤ 親しみやすい	.54	.67	.59	.59	.54	.59	.47
⑥ 頭のよい	.24	.36	.36	.30	.30	.29	.20
⑦ 意志が強い	.16	.23	.18	.06	.12	.11	.11
⑧ 活 発 な	.25	.16	.25	.22	.16	.22	.19

注）尺度④と⑧の両極は入れかえてある。

表B-6 重回帰分析における標準重みベクトル (上=男子, 下=女子)

		T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
男子	重 相 関 係 数	.54	.54	.54	.62	.56	.58	.64
	<評 価>因子の重み	.54	.46	.49	.62	.55	.58	.64
	<力本性>因子の重み	.03	.24	.23	.02	-.03	-.01	.00
女子	重 相 関 係 数	.45	.61	.55	.43	.52	.58	.43
	<評 価>因子の重み	.37	.56	.47	.35	.53	.60	.43
	<力本性>因子の重み	.20	.22	.20	.23	-.05	-.16	.10

く認知する場合は、好意度も高くなっており、感情と評価の間に一貫性が保たれる傾向 (affective-evaluative consistency) が明確な形であらわれている。しかも、こうした傾向は、女子よりも男子において強く働くようである。

次に、パーソナリティ認知の<力本性>次元を表わす尺度 (③, ④, ⑦, ⑧) との関連について検討する。ここでは、一般に<力本性>が高いと認知された級友の方が好意度も高くなっている。被験者の性別に見ると、尺度③ (「消極的な-積極的な」) ならびに尺度⑦ (「意志が弱い-意志が強い」) と好意度との相関は、概して女子よりも男子の方が高い。これに対して、尺度④ (「無口な-おしゃべりな」) では、おしゃべりな級友に対する好意度が高くなる傾向は女子において強い。しかも、女子のこうした傾向は、交友関係成立の比較的初期 (T-1 ~ T-4) においてより明確な形であらわれている。男子では、T-4 から T-7 の頃になると、尺度④上の評定値は好意度とほとんど相関を示さない。

さらに、ソシオメトリック評定値を基準変量、パーソナリティ評定資料の因子分析 (表B-1) から算出された因子得点を予測変量として、重回帰分析を行なった。その結果得られた重相関係数および各予測変量の標準重みベクトル (偏回帰係数) は、表B-6 に示されている。重相関係数の値は $R = 0.43 \sim 0.64$ の範囲にあり、他者に対するソシオメトリック評定の分散のうちの約18~41%がパーソナリティ認知資料によって説明されることがわかる。また、各因子のもつ重みを見ると、<評価>因子のそれがいずれの時点とも大きくなっている。<力本性>因子の重みは、女子のT-1 ~ T-4 ならびに男子のT-2 ~ T-3 において、ある程度の大きさをもつが、それ以外はほとんど0に近くなっている。

(2) 好意度と仮定された類似性

ここでは、Fiedler ら (1952) のいう仮定された類似性の傾向が、今回の分析でどの程度認められるかを検討

する。そのため、パーソナリティ評定に用いた各尺度における自己評定値と他者評定値の差の絶対値、ならびにこれらの各刺激人物ごとの総和を求め、当該他者に対するソシオメトリック評定値との間の積率相関係数を算出した。表B-7 に見るように、相関は予測どおり概して負となっている。ただし、男子の尺度⑥ (「頭の悪い-頭のよい」) では、いずれの時点をとっても0に近い値となっている。全体として、男子では初期 (T-1 と T-2) においてほとんど相関が認められない。これに対して女子では、むしろ初期において、ある程度の負の相関が得られている。

このように、本研究でもFiedler ら (1952) と同様な結果が追認された。ただし、相関は高くはないので、いわゆる仮定された類似性の傾向はそれほど強いとはいえない。

表B-7 仮定された類似性の推移

(上=男子, 下=女子)

尺 度	時 点	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7
尺 度 全 体		-.05	-.08	-.17	-.15	-.22	-.23	-.14
① あたたかい		-.01	-.01	.00	-.08	-.12	-.17	-.02
② まじめな		-.25	-.26	-.20	-.03	-.04	-.13	-.05
③ 積極的な		-.19	-.24	-.12	-.05	-.16	-.22	-.11
④ おしゃべりな		-.23	-.19	-.22	-.18	-.21	-.23	-.14
⑤ 親しみやすい		-.26	-.14	-.13	-.15	-.27	-.30	-.16
⑥ 頭のよい		.05	.12	.11	-.03	-.05	-.02	-.11
⑦ 意志が強い		-.07	-.07	-.06	-.15	-.21	-.17	-.10
⑧ 活 発 な		-.22	-.05	-.17	-.15	-.11	-.16	-.08
尺 度 全 体		-.28	-.11	-.16	-.15	-.18	-.27	-.17

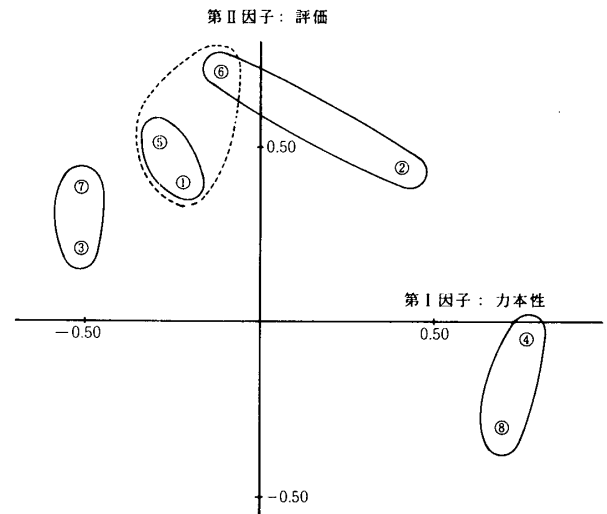
3 討 論

上で、他者のパーソナリティ認知の時系列的変化に関する諸結果の分析と若干の考察を行ってきた。

他者のパーソナリティ認知の次元構造については、すべての時点を通じて一貫して安定した因子構造が抽出された。同様な結果は、女子大学生を対象としたわれわれの先の研究（大橋ほか，1978）でも得られている。このことから、研究者の側であらかじめ用意した一組の尺度上で他者のパーソナリティを評定させるといった方法を用いる限り、因子構造により示される他者認知に際しての判断枠組は、時点を越えてほぼ安定しているといえることができる。これに関して、Passini & Norman (1966) は、認知者が刺激人物を熟知している場合と全く未知の場合とに分けて、パーソナリティ評定資料を別々に因子分析したところ、相互に非常に類似した因子構造が抽出されたことを報告している。また、Mulaik (1964) の研究でも、刺激人物が実在の人物（有名人・家族）、ステレオタイプ的人物（空軍将校・精神病患者・田舎の家庭の主婦など）、さらには特性語と変化しても、各場合に得られる因子構造にはかなりの共通性が見られることが示されている。これらの知見は、他者のパーソナリティ評定は、刺激人物の real な特性構造そのものを反映したものではなく、認知する主体のもつ暗黙裡の性格観によって強く規定されていることを裏付けている。

ところで、われわれは今回用いた8尺度を構成するにあたって、＜一般的評価＞の下位次元として、好感・親和の側面を中核とした＜個人的親しみやすさ＞と尊敬・信頼が中核となった＜社会的望ましさ＞とを区別した。しかし、因子分析の結果（表B-1）では、両者は分離して抽出されず、しかも＜社会的望ましさ＞を表わすものと想定した尺度⑥（「頭の悪いー頭のよい」）は、＜個人的親しみやすさ＞を表わす尺度①および尺度⑤と同じような使われ方がされている（図B-2）。このような結果を生来させた原因としては、尺度の構成の仕方（ことに全体で8尺度という少なさ）によるところが大であると考えられる。われわれの先の研究（林，1979）では、中学生の場合にも、＜個人的親しみやすさ＞の次元と＜社会的望ましさ＞の次元とは明確に区別された形で抽出されており、この点については今後さらに尺度の数を多くして詳細に検討する必要がある。

次に、人Pの他者Oに対するパーソナリティ認知内容の時間的推移について述べる。本研究では、概して後の時点へいくほど、被験者は級友たちの＜活動性＞を高く評定し、評価的にもよりポジティブな認知を行なうようになることが知られた。また、＜活動性＞の次元に関し



図B-2 時点T-1での因子パターン（回転後）にもとづく各変数の相対的位置関係

注1) この図では、尺度の両極の入れかえや因子負荷量の符号反転は行っていない。

注2) T-2からT-7についても、各変数の相対的位置は、上図とほぼ同様である。

ては、初期の時点から他者をかなり弁別的に認知していた。しかし、これらは被験者全体を通して見た場合の傾向であり、特定の二者間の関係を問題にしたものではない。このような分析を行なうためには、次のような視点からのアプローチが考えられる。

すなわち、人が様々な他者のパーソナリティを判断する際に働かす認知構造を、多次元的認知空間としてとらえ、ある個人がある他者のパーソナリティを認知することは、その個人がもつ多次元的認知空間の中へ当該刺激人物を1つの点として位置づけることであると想定しよう。この空間の原点付近は、いずれの次元でも際立った特徴がない場合の他者が位置づけられる領域である。ある他者に関する情報が全くない状況では、この領域に当該人物を位置づけざるを得ない。しかし、その人物と出会うと同時に、何らかの判断がなされ、点は空間内のある方向へと移動することになる。その後、社会的相互作用を重ねるにしたがって、点は空間内を様々な方向に移動し、やがてある位置の付近へと収斂していくことになる。原点からこの点へのベクトルが、その人物に対するある程度固まったパーソナリティ像を表わしている。そして一般に人は、自己のもつ判断枠組の中でのこのようなパーソナリティ像を、相手がもつパーソナリティそのものとする傾向がある。

パーソナリティ認知の時系列的変化を分析する場合、以上のような考え方に基づくアプローチは、1つの有力な方法であろう。しかし、そのためには、まず各人のも

つ多次元の認知空間の構造が明らかにされる必要がある。本研究において収集した資料だけでは、こうした分析は困難であり、この点は今後の検討課題として残しておくことにしたい。

SMT-1に基づくセンチメント関係とPPIによる

表B-8 女子大学生の場合のソシオメトリック評定と
パーソナリティ評定との相関
(大橋正夫ほか, 1978)

	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅	Σ
楽観的な	.25	.13	.17	-.02	.17
静かな	-.09	-.03	.03	.03	-.05
すなおな	.26	.25	.18	.09	.20
親切な	.14	.15	.13	.14	.15
まじめな	.05	.03	.02	.05	.03
無口な	-.15	-.09	-.07	.07	-.09
こまやかな	.06	.09	.05	.02	.06
明るい	.36	.20	.10	.11	.24
魅力のある	.34	.21	.13	.14	.23
健康的な	.23	.06	-.08	-.02	.07
活発な	.23	.10	-.07	-.09	.09
外向的な	.16	.04	-.07	-.08	.05
かわいい	.37	.18	.10	.06	.20
感じのよい	.52	.26	.30	.23	.34
すきな	.54	.41	.36	.31	.42
清潔な	.15	.11	.05	-.02	.08
ユーモアのある	.21	.21	.13	.10	.18
人のよい	.25	.21	.20	.11	.20
ほがらかな	.36	.18	.07	.10	.21
美しい	.29	.08	.06	.01	.13
社交的な	.17	.08	.03	-.03	.09
地味な	.04	.05	.01	.23	.09
暖かい	.32	.28	.21	.15	.26
積極的な	.15	-.02	.04	-.06	.06
たよりない	-.31	-.13	-.06	-.01	-.14

注) ゴシック体の数値は .25 以上の相関係数を示す。

表B-9 女子大学生の場合の重回帰分析における標準
重みベクトル(大橋正夫ほか, 1978)

因子得点 時 点	活動性	親近性	魅力性	誠実性	重 相 関係数
T ₂	.17	.38	.30	.11	.53
T ₃	.03	.31	.14	-.08	.34
T ₄	-.01	.26	.06	-.05	.28
T ₅	-.07	.26	.02	-.09	.27
Σ	.07	.30	.13	-.05	.35

パーソナリティ認知との関連性に関する分析では、女子大学生を対象としたわれわれの先の研究(大橋ほか,1978)とはやや異なった結果が得られた。これら2つの研究には、被験者の発達段階の差異だけでなく、資料収集や分析方法にも違いがあるので、直接的な比較をすることは困難であるが、以下では一応の考察を述べておくことにしたい。

第1に、女子大学生の場合には、表B-8に見るように、ソシオメトリック評定値とパーソナリティ評定値との間の相関は意外に低く、時点ごとの重回帰分析による結果(表B-9)でも、認知されたパーソナリティはソシオメトリック評定における分散の7%(T₅)~28%(T₂)程度しか説明しなかった。これに対して、今回の中学生の結果では、両者の間にかなり密接な関連性が認められ、重回帰分析における重相関係数の値も、女子大学生の場合より概して高くなっている。

このような結果は、他者のパーソナリティを判断する際に各人が働かす認知構造の分化度や複雑性において、中学生と大学生との間に発達の差異がある、という観点から解釈できるかもしれない。すなわち、中学生ではそのようなパーソナリティ認知構造が比較的未分化なため、認知が感情に強く規定されて、結果的に強い affective-evaluative consistency が生ずることになる。それに対して、大学生ともなると、他者に対する好意度を規定するものは、たんに相手のパーソナリティに関する評価だけでなく、自分自身のパーソナリティとの compatibility などが重要な意味をもつであろう。したがって、一応相手に対する好意度とは独立させた形で、他者のパーソナリティを、より分化させて認知できると考えられる。林(1981)は、パーソナリティ認知構造の個人差を、認知者の性および発達段階との関連で分析し、認知構造の分化度や複雑性は、中学生男子<中学生女子<大学生男子<大学生女子の順に高い、という結果を得ている。このような結果は、本研究の男子において、より強い affective-evaluative consistency が認められた点と相まって、上述の観点からの解釈の妥当性を支持するものである。

第2に、パーソナリティ認知の次元内容別に見ると、女子大学生の場合には、他者に対する親しみやすさを表わす<親近性>の次元における認知が好意度と比較的高い正の相関を示していた。この点は、本研究において<個人的親しみやすさ>の次元が好意度と高い相関をもつことと一致している。また、中学生の女子では、「ふまじめな-まじめな」という尺度②における評定が好意度と関連しないことも、女子大学生の結果と同様である。これに対して、<力本性>次元では、中学生の場合には

＜力本性＞が高いと認知した級友に対する好意度が高くなる傾向があるが、女子大学生の場合には、＜力本性＞の下位次元としての＜活動性＞は、好意度とほとんど相関していない。すなわち、中学生では、おとなしくて無口な級友よりも、活発でおしゃべりな級友に対して好意を抱きやすいが、女子大学生の場合にはそのような一義的な関係がない。ここでは、＜活動性＞の高い人物に好意を抱く個人と、その逆の個人とがほぼ同数ずついるために、全体としての相関が0に近づいているものと考えられる。

第3に、女子大学生の場合には、センチメント関係とパーソナリティ認知との共変関係は、対人関係成立の初期において比較的強く、時間が経過し相互によく知り合うようになるにつれ、次第に弱くなっていくという注目すべき結果が得られた。これに対して、今回の中学生の結果では、時点による関連性の変動傾向はそれほど明確でない。中学生の場合の時点による変動としては、＜力本性＞の高い級友に好意を抱く傾向が、初期の時点において比較的強く認められる程度である。なお、女子大学生のT₂時点では、前述した重回帰分析における重相関係数の値（ $R = 0.53$ ）が、中学生女子の場合とほぼ同水準にあることも、興味深い事実である。こうした女子大学生と中学生の結果との間の共通点や相違点については、今後さらに高校生の資料なども収集し、発達の観点から

吟味していくことが必要であろう。

最後に、Fiedler ら（1952）が見いだした仮定された類似性の傾向については、今回のわれわれの研究でも一応これを支持するような結果が得られた。この傾向に関しては現在までに多くの研究があるが、梶田（1967）は、仮定された類似性傾向なるものは、実は理想化傾向（好意を抱く他者を理想自己に類似させて認知する傾向）によってもたらされたアーティファクトにすぎない、と主張している。彼によれば、一般に人は自分自身および好意を抱く他者を理想自己に近づけて認知する傾向をもつために、結果的に好意を抱く他者の概念と現実自己の概念との間に見せかけの類似性が見られるというのである。

今回の分析では、パーソナリティ評定に用いた尺度数が少ないことや理想自己概念の評定を実施していないことなどから、仮定された類似性の傾向の存否について断定的に論ずることは差し控えたい。この問題については今後、Fiedler（1951）のいう不当に仮定された類似性（unwarranted assumed similarity）の測度などに準拠して、詳細な検討を加える必要がある。なお、この際、Peabody（1967）のいう対人認知の評価的側面と記述的側面とを区別し、とくに認知の記述的側面において仮定された類似性の傾向が認められるか否かを分析することも1つの有効なアプローチと考えられる。

C 個人間の相互作用の量*

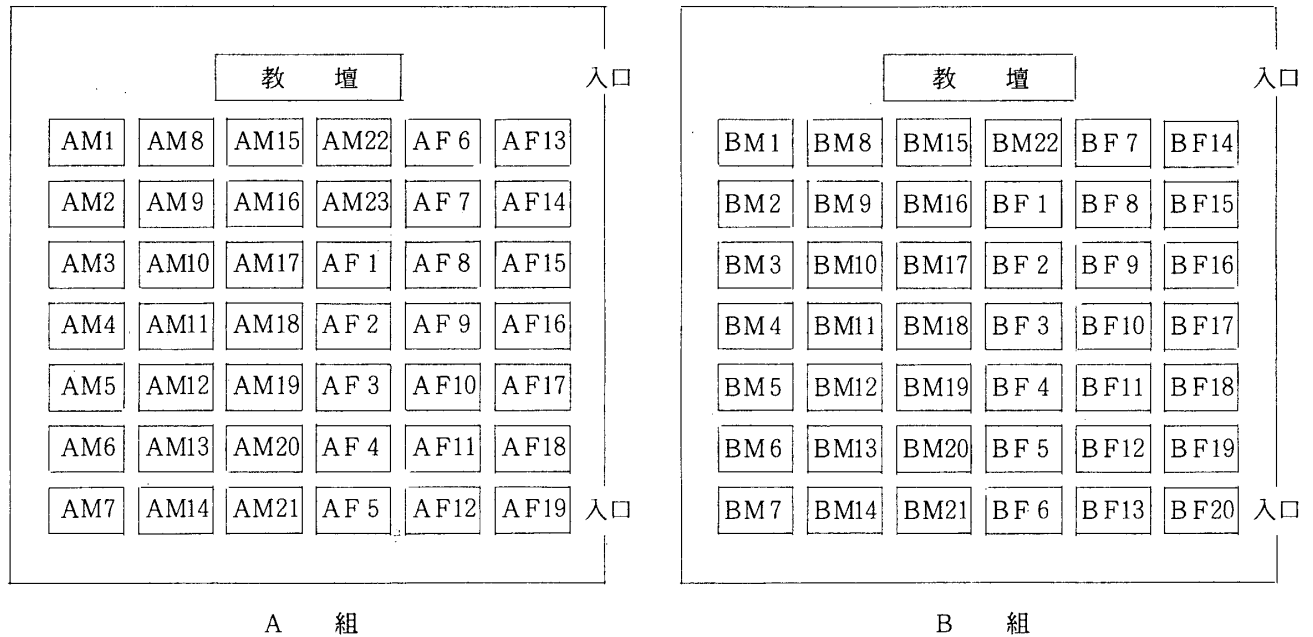
本研究は、当初相互に未知であった者から成る集団（学級）の中での対人関係の成立・発展の様相を縦断的に明らかにすることを目的としている。Iで述べたように、われわれは対人関係を「ある個人Pの他の個人Oに対する対人的態度」と規定した上で研究を進めてきている。Krech, Crutchfield, & Ballachey（1962）が述べているように、態度には認知的成分（cognitive component）、感情的成分（feeling component）、および行動的成分（action tendency component）の3成分がある。そして、これらの成分は方向（positive vs. negative）とその強度に関して斉合性を維持しようとする傾向がある、と仮定されている。であるとすれば、センチメント関係と行動的成分（相互作用の頻度）との間には一定の関連性が存在するはずである。このことを確かめるのが本セクションの直接的目的である。

行動的成分は「態度と結びついたすべての行動的レデ

ィネス」と定義されている（Krech, 1962）。ここではそれをPとOの間で一定期間内にもたれた相互作用（接触）の量、と限定する。そして、それは「IASと名付けられた調査における反応」、と操作的に定義することにする。前述のように、この調査はW-1からW-15まで、SMT-1およびSMT-2が実施されたと同じ時点で都合13回実施された。これは、クラス内の各成員と、前回の調査と今回の調査の間（原則として1週間）に、5つの場面においてどの程度接触したかを、3件法（「非常によくした」、「割合よくした」、および「あまりしなかった」）によって答えさせるものであった。場面（以下「項目」と呼ぶ）は次のとおりである。

- ① 学校の休み時間や昼食時や授業後に話をしたり、遊んだりした。
- ② 学校の行き帰りにいっしょになった。
- ③ クラブ（部）活動にいっしょに参加した。
- ④ 学校から帰ったあとや日曜日に会った。
- ⑤ 家にいて電話で話をした。

* 執筆：坂西友秀・中村雅彦



図C-1 学級編成直後の座席配置

各項目とも「非常によくした」、「割合よくした」および「あまりしなかった」の3件法で答えさせたが、各カテゴリーの基準およびそこへ入れるべき人数については、各被験者に任せられた。以下の分析では、それぞれの反応に2, 1, および0という数量を与え得点化した上で処理することにする。

IASによって表わされる相互作用の頻度とSMT-1によるセンチメント関係が正の関連性をもつと仮説されることは先に述べた。その根拠としてそこでは3成分の間に斉合性に向う傾向があることをあげた。これをより具体的に述べるならば、次のように言えるであろう。相互の接触はその結果が報酬的であるか罰的であるかによって、相手に対するセンチメントをより友好的なものにしたり、反対に非友好的なものにしたりする。しかし一般には接触はそれ自体が報酬であるから、累積接触量が大きいほど相手に対する好意は増大するのが普通である。また反対に、好意を寄せる相手とは接触をより求めるし、非友好的な相手との接触は避ける傾向がみられるはずである。もしそうであるとすれば、IASのスコアとSMT-1の得点の間の関連性は、関係の初期においてより強いと予測される。初期においては、接触の結果がどの程度満足のいくものであるかについて一般にあまり分化していないであろうし、相手についての知識・情報が不十分なため、センチメント関係に対する接触の要因の規定力が相対的に大きい、と考えられるからである。果たしてそのような結果が得られるかどうか、確かめてみたい。

なお、IASは他の各成員とどの程度の接触をしたかについての主観的判断を求めるものである。したがってこれを用いての測定には信頼性と妥当性の問題が当然つきまとう。それも検討課題の一つである。しかしわれわれは接触を規定する生態学的要因についての情報を得ることができた。それは教室での座席配置図である。IASによる主観的判断とは別に、近くの座席を占める者同士は自然と接触の機会に恵まれる。そこで、学級が初めて編成された当時の座席配置図（これは最初の約2週間は固定されていた）を下に掲げておく。そして座席の近さとIASおよびSMT-1のスコアの関係も分析してみることにする。

1 IAS得点の全体的傾向

IASを構成する5項目それぞれに対する評定値の平均を、時間の推移にしたがってまとめたものが表C-1である。これによると、各クラスとも全般的に項目4、項目5での評定値が著しく低くなっている(0.00～0.24)。また、項目3の評定値は、項目4、項目5よりも若干高くなってはいるものの低いことがわかる(0.01～0.27)。

一方、項目1、項目2の評定値は、他の項目に比べて相対的に高くなっている。こうしたことから、各クラス、男女ともこの時期での日常生活における級友との接触は、学校内における相互作用がその大部分を占め、校外での接触はほとんどないことがわかる。

このように、項目によって平均は著しく異なっていたが、次に各項目への反応の間にはどの程度の関連性があ

表C-1 クラス別・時点別にみた I A S 得点の平均

クラス	項目	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
A M	1	0.76	0.97	0.98	0.93	1.01	1.01	0.99	1.02	1.01	0.89	0.98	1.08	1.03
	2	0.13	0.19	0.23	0.19	0.26	0.25	0.31	0.34	0.38	0.37	0.34	0.35	0.41
	3	0.16	0.15	0.14	0.12	0.13	0.11	0.00	0.10	0.08	0.10	0.01	0.07	0.08
	4	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.02	0.01	0.00	0.02	0.01	0.04	0.02
	5	0.00	0.00	0.03	0.04	0.04	0.01	0.02	0.01	0.03	0.02	0.01	0.02	0.04
A F	1	1.03	1.02	0.90	0.80	0.94	0.97	1.04	1.04	1.01	0.91	0.94	0.93	0.98
	2	0.27	0.27	0.27	0.22	0.30	0.29	0.33	0.30	0.31	0.25	0.29	0.26	0.27
	3	0.20	0.17	0.18	0.18	0.20	0.18	0.01	0.20	0.16	0.19	0.06	0.22	0.19
	4	0.00	0.00	0.00	0.06	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.05	0.00
	5	0.00	0.00	0.04	0.07	0.00	0.00	0.02	0.01	0.04	0.04	0.04	0.05	0.05
B M	1	0.58	0.79	0.77	0.79	0.79	0.80	0.69	0.77	0.89	0.84	0.88	0.87	0.86
	2	0.12	0.18	0.23	0.23	0.22	0.26	0.26	0.28	0.27	0.29	0.25	0.30	0.29
	3	0.19	0.24	0.24	0.23	0.23	0.27	0.01	0.21	0.25	0.23	0.11	0.24	0.20
	4	0.00	0.00	0.00	0.10	0.03	0.03	0.02	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.01
	5	0.00	0.00	0.02	0.03	0.01	0.01	0.02	0.02	0.00	0.00	0.00	0.02	0.02
B F	1	0.50	0.62	0.78	0.65	0.67	0.64	0.68	0.67	0.64	0.66	0.64	0.70	0.73
	2	0.11	0.15	0.19	0.14	0.20	0.20	0.23	0.23	0.22	0.20	0.22	0.27	0.26
	3	0.14	0.16	0.17	0.14	0.24	0.16	0.02	0.23	0.11	0.09	0.06	0.07	0.09
	4	0.00	0.03	0.01	0.02	0.00	0.00	0.03	0.04	0.03	0.02	0.02	0.12	0.05
	5	0.02	0.05	0.11	0.09	0.08	0.08	0.10	0.15	0.08	0.09	0.10	0.12	0.11

表C-2 各項目間の連関係数（中央値）

	1	2	3	4	5
1	—	.34*	.20*	.12*	.19*
2		—	.31*	.18*	.22*
3			—	.05	.10*
4				—	.28*
5					—

n = 84 * … p < .05

ったかを見てみよう。このため、任意の2項目の間の連関係数*を、全被験者のデータを合わせて、時点別に求めてみた。係数の高さは、同じ項目の間でも時点によ

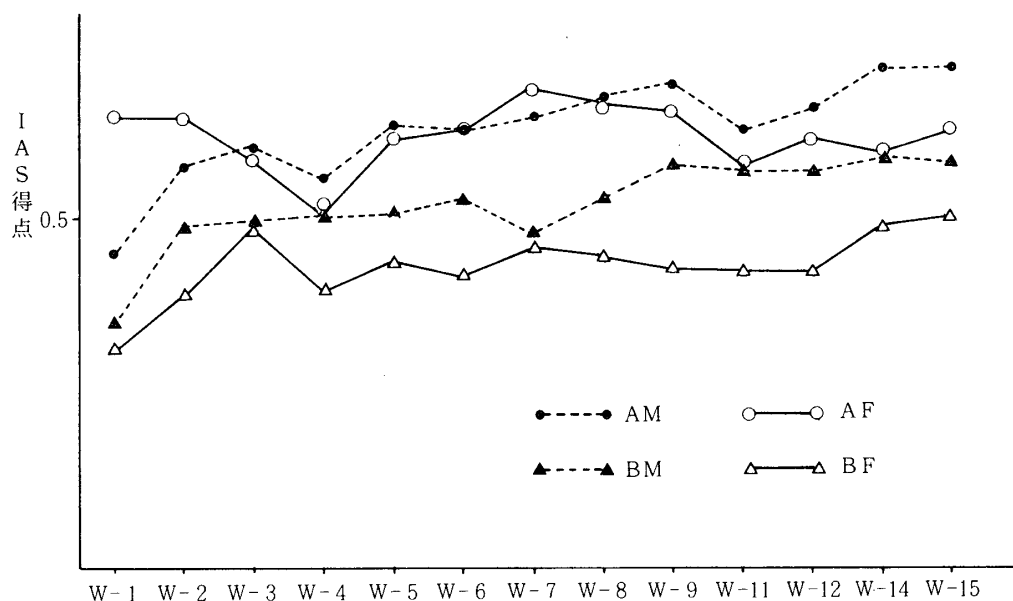
て多少の変動はあったが、その中央値を求めたのが表C-2である。これによると、連関係数はあまり高くなく、0.05と0.34の範囲内にあった。最も高かったのは項目1と項目2の間のそれであった。この両項目は5項目の中では平均値も高かったのも、以下においては、この両項目の得点の合計をI A S得点と呼び、ことわりのないかぎりこれと他の資料との関係等を問題にすることにする。

図C-2は、クラス別・時点別に、全被験者が他成員に与えたI A S得点（項目1と項目2の合計）の平均をプロットしたものである。これによると、学級編成後1週間経過した時点（W-1）における全被験者の平均I A S得点は0.87であった。それが1週間後のW-2では0.94、さらに1週間後のW-3で1.09と着実に増大している。しかしそれ以降の増大はゆるやかで、W-15でも1.21にとどまっている。この傾向は図A-1に示されているSMT-1の平均得点の推移とよく類似しているのは興味深い。

ただし、図C-2からは、クラスによるかなりのバラツキが見られる。例えば、A Fは初期（W-1, W-2）においてすでに高く（1.30, 1.29）、W-3, W-4にお

* 連関係数Cは次の式によって求められる。

$$C = \sqrt{\chi^2 / \{N(r-1)(c-1)\}}$$
 N; 総度数,
 r, c; 各カテゴリー数, 本研究では $r = c$ である。



図C-2 IAS得点の平均値の推移

いて逆に落ち込んでいる。またBFの得点は全時点を通じて4クラス中で最低となっている。総じていうと、B組よりもA組の方が平均が高くなっているのは、学級の雰囲気の違いを反映しているのであろうか。

次に対をなす成員の間での同じ時点における同じ項目での相互に対する評定の一致度がどの程度であるかを調べてみた。IASは過去1週間の接触の量を問うているのであるから、P→Oの評定とO→Pのそれは理想的には一致すべきものである。両者が3件法の同じカテゴリーに相手を入れている比率（一致率）を時点ごとに求めた。項目1では一致率は48.1%と62.5%の間にあり、時点を通じてあまり高くない。また時間の推移にともなう一定の傾向も観測されなかった。しかし、項目2ではこれよりも有意に高く、一致率の範囲は77.5%と90.1%の間であった。この差は項目1と項目2の場面の特性を反映しているものと思われる。すなわち、休み時間や昼食時での接触は一般に教室の中で行なわれ、そこには恐らく何人かの級友がいるであろうから、特に誰とよく話したか同定することはかなり困難であるかもしれない。これに対して、通学路で一緒になるという事実はそれほど多くないだけに、その相手を同定することはより容易であろう。いずれにしても、IASは理想的には客観的事実についての質問であるが、実際には主観的要素が入り込む余地が大きく、それがこのようなあまり高くない一致率を生み出す原因となったのであろう。

2 IAS得点とSMT-1との関連

今、成員Pが他の成員Oに対して好意的態度を示すな

らば、同時に接触頻度も高くなり、好意度が低くければ接触頻度も低くなるというように、IAS得点とSMT-1の得点とは斉合性を保つ傾向を有するであろうか。この点を吟味するために、ある成員が残りの成員全員について行なったIASおよびSMT-1の両評定値間の積率相関係数を算出した。表C-3はクラス別の結果を時点毎に示したものである。尚、IAS得点は、項目1と項目2の得点を合計した得点である。これによると、予想されたようにIASとSMT-1の両得点間の相関は高く、好意度評定で高く評定される成員は、当該成員がより頻繁に接触している成員でもあるとしていることがわかる。

さらに、SMT-1の測度が0～100点の尺度上で評定させるものであったことから、評定時の基準が個々人によって異なる可能性があることを考慮して、この得点を各個人毎に時点を通してZ得点に変換したものがSMTCであるが、これとIAS得点の相関は表C-4に示されている。この場合でも全体的な傾向はSMT-1との関係と変わらず、両者の相関係数は高く、W-9のAMとAFを除いてはすべて $p < .01$ 水準で有意である。このことは、態度の感情的成分と行動的成分がバランスを保とうとする傾向があるという従来の態度研究の知見と一致する傾向にあるといえよう。

また、全体的な傾向としては、好意度（SMT-1）と相互作用量（IAS）との関係は時点の初期において強く、しだいに弱くなっていく傾向が見られる。ただし、すでに述べたように、AMではW-9、AFではW-7、W-8、W-9で他の時点に比べて相関が著しく低くな

表C-3 IASの得点とSMT-1の得点の積率相関係数

時点 クラス	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
AM	.43	.37	.36	.32	.35	.39	.38	.30	.25	.30	.27	.34	.34
AF	.50	.35	.32	.35	.31	.24	.18	.18	.07	.34	.34	.28	.38
BM	.47	.57	.55	.47	.52	.47	.39	.47	.46	.42	.46	.46	.40
BF	.46	.43	.47	.52	.53	.50	.44	.42	.42	.44	.43	.37	.26
全体	.46	.45	.45	.42	.46	.42	.39	.38	.23	.38	.39	.39	.34

表C-4 IASの得点とSMT-Cの得点との積率相関係数

時点 クラス	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
AM	.49	.34	.31	.32	.30	.40	.36	.26	.11	.28	.27	.29	.32
AF	.52	.38	.39	.46	.39	.31	.18	.21	.14	.32	.33	.30	.32
BM	.44	.49	.50	.49	.44	.42	.36	.37	.33	.33	.39	.38	.33
BF	.50	.51	.49	.47	.50	.47	.44	.37	.39	.43	.42	.33	.26
全体	.46	.41	.42	.43	.41	.40	.35	.31	.15	.33	.35	.33	.30

っている。

次に、IASとSMT-1との関係をより詳細に見るために、好意度評定における相互性（例えば、成員Pが成員Oを好意を感じる成員として選択する時に、成員Oも成員Pを好意を感じる成員として感じる場合）とIASにおける相互作用との対応関係を吟味してみよう。すでに触れてきたように、SMT-1は0～100の細かい尺度を用いていること、また個人によって評定基準が異なる可能性があることから、一定の基準を設定し、その基準に基づきSMT-1の得点を「非常に好意的」、「中程度に好意的」、「中性的」、「非好意的」の4カテゴリーに分類した（SMTA）。このSMTAの選択、非選択関係をもとにクラス別にソシオグラムを作成し、次の各要件に最も適合しているペアをクラス毎に1組ずつ、合計16ペア抽出した。

- ① 時点を通して比較的選択関係が一定して見られるペア。
- ② 時点の途中から選択関係が少なくなり、消滅していくペア。
- ③ 時点によって選択関係が現われたり、消失したりする変動型ペア。
- ④ 時点の後半になってしだいに選択関係が現われてくるペア。

これらの各ペアの好意度評定における選択関係に対して、IAS得点がどの程度対応して変化しているかを示したものが表C-5から表C-8である。これを見ると好意度評定で相互に選択関係のある時点では、ペア間の相互作用量も対応して多くなる傾向が認められる。例えば表C-5では各ペアとも時点を通じてSMTAの選択関係とIASの相互作用関係は一致したパターンを示している。また、表C-6でも、SMTAで選択関係のある前半の時点では、IASでも相互の接触関係が対応して見られ、SMTAで選択関係が消失していく後半の時点では、IASの接触関係も対応して減少しているのがわかる。同様に、表C-7、表C-8でもSMTAの選択関係の出現あるいは消失に対応して、IASも相互の接触が強くなったり、弱くなったりしている。

このように、成員間の接触頻度と好意度との関係は、相互に斉合性を保つように作用しているようである。

3 座席間距離とIAS得点との関連

従来から対人関係の発達の初期の段階においては、接触の容易さ、情報入手の容易さ等の理由から、物理的な対人距離が対人的相互作用に大きな影響を及ぼすといわれてきた。Festinger, Schachter & Back (1950) は、われわれが対人関係を結ぶ上で影響を受ける重要な要因

表C-5 相互選択 (SMTA) の強い場合の IAS の得点

クラス	ペア	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
AM	1-3	2→0	3→2	3→2	3→2	4→2	4→1	4→1	3→2	1→1	2→2	2→1	1→1	1→1
BM	2-3	1→0	2→3	2→3	欠→0	1→3	1→3	2→3	2→2	1→3	2→3	3→2	4→3	3→3
AF	8-16	2→2	3→3	4→2	3→3	4→3	4→3	3→3	3→3	4→3	2→2	1→2	2→4	2→4
BF	12-13	2→2	2→2	2→2	4→2	3→2	2→2	3→2	3→2	3→2	2→0	3→2	4→0	3→2

→はSMTAでの選択の方向を示す。

表C-6 相互選択 (SMTA) が途中から消滅する場合の IAS の得点

クラス	ペア	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
AM	5-11	2→3	3→4	3→3	3→2	3→3	3→4	2→2	2→1	1→2	3→2	1→2	2→4	2→2
BM	18-19	3→4	3→4	3→3	3→4	2→2	2→1	2→2	2→0	1→1	2→2	1→2	1→1	2→1
AF	13-19	4→4	4→4	4→4	4→4	3→3	4→3	3→4	3→3	4→4	0→0	2→1	1→1	3→3
BF	15-17	3→2	3→3	4→3	3→3	4→4	2→4	3→3	2→1	3→1	2→1	3→3	3→3	3→3

→はSMTAでの選択の方向を示す。

表C-7 相互選択 (SMTA) が変動する場合の IAS の得点

クラス	ペア	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
AM	2-15	2→4	2→4	4→2	2→1	3→1	4→4	4→1	4→2	4→2	2→1	1→1	1→1	1→1
BM	10-22	2→3	2→4	2→4	3→3	4→4	4→4	4→4	3→4	4→4	3→4	3→4	3→3	4→4
AF	4-7	2→2	2→2	1→2	0→1	1→1	1→1	1→1	1→1	1→欠	2→0	1→1	1→1	1→1
BF	2-17	0→1	3→2	2→3	2→3	4→4	4→4	4→2	4→2	4→3	3→4	4→4	4→3	4→3

→はSMTAでの選択の方向を示す。

表C-8 相互選択 (SMTA) が途中から現われてくる場合の IAS の得点

クラス	ペア	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
AM	21-23	1→3	1→1	1→2	2→2	2→2	4→1	4→2	4→2	4→2	4→2	4→3	4→3	4→2
BM	1-8	1→2	2→2	2→2	0→2	2→4	3→3	4→4	2→3	4→4	4→4	4→3	3→3	4→3
AF	1-19	2→2	2→2	2→2	2→2	2→2	3→3	3→2	3→3	3→3	3→3	2→3	2→2	2→2
BF	18・19	0→0	1→2	1→1	1→1	2→1	1→1	3→2	2→欠	2→2	2→2	2→2	3→2	2→2

→はSMTAでの選択の方向を示す。

には、物理的な距離関係の他に、地域あるいは居住空間のデザイン、構造の違いがあるとして、これを機能的距離と呼んだ。こうした機能的距離の要因は、学校におけ

る対人関係においても成員相互が未知である初期の時点では、お互いを熟知してくる後期の時点より大きな影響を及ぼすと考えられる。そこで、ここではW-0における

表C-9 座席間距離とI A Sの得点との連関係数

時点 クラス	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
A M	.19*	.18*	.12	.14*	.09	.08	.10	.11	.11	.07	.09	.09	.14*
A F	.19*	.17*	.10	.12	.08	.12	.11	.10	.12	.08	.09	.10	.06
B M	.16*	.14*	.13*	.14*	.10	.08	.08	.06	.09	.09	.09	.12	.10
B F	.18*	.14*	.12	.09	.10	.13	.10	.11	.12	.10	.11	.12	.12
全体	.16*	.13*	.09*	.08*	.04	.08*	.05	.04	.05	.05	.05	.06	.07

* … $p < .05$

座席間の距離を、各成員について物理的・機能的両距離を考慮しながら決定し、その距離得点とI A S得点との関連をみることにする。

距離得点は、生徒の座席の配置によって接触のしやすさが異なると考えられることから、当該の生徒から見て前後、左右の席の生徒を得点3とし、はす向いおよび一人おいた前後、左右の席の生徒を得点2とし、その他の生徒の得点を1とした。なお、席順は入学直後のものを用い、教壇から向って教室の右半分に出席番号順に男子が、左半分に女子がすわっている。

各成員の他成員に対する距離とI A S得点との連関係数をもとめたものが表C-9である。それによると、全体的に連関は低くなっているが、W-1、W-2ではその後の時点に比べて高くなっており、集団形成の初期においては、物理的・機能的距離が対人的接触に多少とも影響を及ぼしていることがわかる。この傾向は各クラスに認められ、クラス間に大きな差異は認められない。

4 討 論

全体的にみれば、成員間の接触頻度は時間の経過と共に増大する傾向がみられた。しかし、I A Sを構成する5項目のうちで、比較的高い平均値が得られたのは、「学校の休み時間や昼食時や授業後に話をしたり遊んだりした」、「学校のゆきかえりにいっしょになった」といった学校に直結した接触に限られ、「学校から帰ったあとや日曜日に会った」、「家にいて電話で話をした」といった校外における接触は、かなり後の時点になってもほとんどみられなかった。学校のような公式的な場においては、本人の意志とは無関係にクラスメートと接触することを余儀なくされるということが、ある程度はあり得る。したがって、一步学校の外に出てしまった途端に接触が減ってしまうのは、各成員が自発的、積極的に他者と接していないことを示しているのかもしれない。あるいはも

っと単純に、各成員が互いに地理的に広範囲にわたる地域に住んでいる為、校外で顔を会わせたりする機会をもつことが困難であったのかもしれない。

校内での接触だけに限定してみた場合、成員間の対人関係の初期において重要な役割を果たす要因は、教室内の座席間距離であるかもしれない。座席間距離と接触頻度との連関をみると、全体的には低いものの、初期の時点の方が後の時点に比べて高くなっていることがわかった。この結果は、初期の段階では近接の要因が相互作用の量を規定する傾向があることを示している。ただし、ここで取り上げた距離変数は、学級編成直後の座席配置に基づくものであり、その後何回か行われた席替えによって変化した配置が、接触頻度にどのような効果を及ぼしたかについては検討していない。

対人関係の中では、どのようなパーソナリティ変数が接触頻度と関係しているであろうか。個人の属性とその人の他成員との接触頻度との関連をみるため、両変数の相関係数を算出した。ここでは、Y-G性格検査、自己評価テストによって測られる諸側面との関連を中心に扱う。I A Sの各項目の合計得点と各テスト得点との時点別の積率相関係数を算出した。クラス、男女はこみにし、全体として分析を行った。

その結果、Y-G性格検査との相関はほとんどみられず、わずかにW-5において「のんきさ」とI A S得点との間に有意な相関がみられた($r = .31$, $df = 82$, $p < .05$)。また、自己評価テストとの関係については、「不安のなさ」とI A S得点との間にW-6からW-10で有意な相関が見出された($r = .32$, $df = 82$, $p < .05$; $r = .33$, $df = 82$, $p < .05$; $r = .35$, $df = 82$, $p < .05$; $r = .28$, $df = 82$, $p < .05$; $r = .35$, $df = 82$, $p < .01$)。このことから、不安のない者は、他者との相互作用の量が多くなる傾向があることがわかる。また、「積極性」との関係においても、W-5とW-9からW-12

で有意な相関が得られた ($r = .28$, $df = 82$, $p < .05$; $r = .36$, $df = 82$, $p < .05$; $r = .29$, $df = 82$, $p < .05$; $r = .29$, $df = 82$, $p < .05$; $r = .28$, $df = 82$, $p < .05$)。したがって、積極的な成員ほど他の成員との対人的接触を頻繁に行う傾向があると言える。

好意性と接触頻度の間の関係をみた場合、全体的には各時点を通じて有意な相関が見出された。これは、接触頻度(熟知性)が対人魅力に効果を及ぼすという、従来の実験的研究(e.g., Brockner & Swap, 1976; Zajonc, 1968)の得た知見とも相通じるものであると言える。ただ、本研究においては、これらの要因の因果関係にまで言及することはできない。というのは、他者との接触を数多く重ねるにつれて、他者の中に魅力的な特徴を見出す機会が増大することはあり得ることであり、また逆に、魅力的な他者に対してはより頻繁に接触を求めようとする傾向があると考えられるからである。IASとSMT-1との相関にはまた、時点を追って低下していく傾向もみられる。これは、初期の時点では近接の要因のように相互作用を促進する変数が好意性にことに大きな影響を及ぼしている為であると解釈することができる(e.g., Newcomb, 1956)。

またこの結果は、対人的態度における感情的成分と行動的成分との斉合性という観点からも説明することができよう。ことに、成員間の選択関係と相互作用関係の一致性をみた場合に、好意と接触頻度の変動の仕方が呼応していることから、両成分が斉合的なものであることがわかる。

このようにSMTとIASとの関係は、かなり密接なものであることが明らかになった。IASの時系列的変動は、おおむねSMTのそれに類似したものであったと言える。しかし、IAS得点のクラス間差や、A組でみられたIASとSMTの相関が、ある時点で突如低下するという現象も見過してはならない結果である。しかし、本研究で得られた資料からは、これらをよく説明することはできない。また、成員のパーソナリティーのような個人差変数や座席間距離のような環境の変数が、IASとどのような関係にあるのかという点からも検討を加えたが、限定された結果を見出したにとどまった。

今後の課題としては、IASによる接触頻度の測定法の充実を図る必要がある。評定段階が3段階では、測定のきめが荒く、得点が天井効果を示すきらいがあった。別の測定法を考えるならば、たとえばゲス・フー・テスト形式を用いて、誰と誰がしばしば一緒にいると思うかを質問するなどの工夫が必要である。また、本研究においては、相互作用の量的側面だけに注目してIASを構成した。そのため、その相互作用の内容にまで詳細に検討することができなかった。たとえば、ある成員間の関係が果して表面的なものであるのか、親密なものであるのかという点については言及できなかった。対人的相互作用の中でも、特に言語による情報伝達行動(e.g., 自己開示)は、対人関係の親密度を表わす重要な指標であると考えられる(Altman & Taylor, 1973)。そこで、今後は接触の頻度のみならず、その接触の質的側面に関する資料も得る必要がある。

D 集団の構造*

構造とは、ある複合体がどのような部分(要素)のどのような配列から成り立っているか、を表わすために用いられる概念である。集団の場合、要素として最も基本的なものは成員であるから、その構造は成員間の関係のパターンということになる。集団形成の極めて初期において、成員の範囲が明確に限定されていることはめずらしくないが、成員間の関係は漠然としたものであることが多い。しかし、相互作用が積み重ねられていくにしたがって、成員同士の心理的結合関係(センチメント関係)や勢力関係、あるいはコミュニケーションの通路とか役割や地位などは、次第に分化し、安定したものとなっていくであろう。このことは集団過程が安定的で予測可能なものとなっていくことに貢献すると考えられる。こ

のような安定した集団過程ないし集団機能を説明するために要請される構成概念が集団構造である(大橋, 1968)。対人関係もそうであることは既にIにおいて述べたが、集団の構造には物質的基礎があるわけではないので、それを一義的に記述することはできない。研究者が、集団過程の特徴を説明する根拠として有効だと考えれば、どのような角度からそれを記述してもよい。このため、集団の次元としてはこれまで様々なものが提唱されてきている。しかし、これらの中で最も広く用いられているのがソシオメトリック構造である。ここで取り上げるのもこの次元上での集団の構造である。

集団のソシオメトリック構造とは、成員間のセンチメント関係のパターンからみた構造である。ここでは各クラスのその時系列的特徴を分析する。

これまで、学級集団のソシオメトリック構造の発達の

* 執筆：津村俊充・廣岡秀一

類型論がいくつか提唱されている。田中（1947）は幼稚園児から高校生までに実施した擬ソシオメトリック・テストの結果をもとに、次のような5つの類型を考えている。

- (1) 多数分離型 相互選択関係が見られず、個々の成員が孤立しているような場合。
- (2) 分団分離型 サブグループが閉鎖的で、相互に対立するような場合。
- (3) 一部集中型 選択が一部に集中する場合。
- (4) 分団結合型 サブグループが互いに結合している場合。
- (5) 統一結合型 1人ないし2、3人の成員を中心に結合して、学級全体が統一される場合。

田中は、以上の類型は学級を構成する子どもの発達水準を反映しているとしており、(1)、(2)、(3)は小学校低学年の水準、(4)、(5)は高学年の水準であると述べている。

また園原・広田（1953）も、学級集団構造の発達の特徴として、(1)「孤立（探索）期」、(2)「水平的分化期」、(3)「垂直的分化期」、(4)「部分集団形成期」、(5)「集団統合期」の5つの段階的特徴が見られ、(1)から(5)へと発達すると提唱している。

しかし、これらの研究は横断的資料をもとにした研究からの知見であり、同一集団の構造がそのような筋道にしたがって発達していくかどうかは明らかではない。

一方、縦断的研究として、Iで触れたように、阪本（1949）は小学校1年生の児童を対象に擬ソシオメトリック・テストを行ない、交友関係成立過程に寄与する要因について検討している。その中で、彼は成員が孤立した状態から相互選択が増加することは述べているが、構造の変化については言及していない。

われわれの関心は、ソシオメトリックな構造がどのように変化発展していくのかを、当初未知の成員から成る同一集団を対象として追跡することによって明確にしていくことである。いわゆる個体発生が系統発生を繰り返すと仮定するならば、田中（1947）や園原・広田（1953）らの提唱する発達の・段階的特徴が、同一集団の構造の変化にも同じ順序で出現してくると予測される。しかし、果してそうかどうかを確かめてみたい。

さらに、ソシオメトリックな構造を分析する際のもう一つの問題として、集団構造を記述する方法論的問題がある。集団構造を記述するために、成員間の選択関係をソシオグラムに図示することが従来多くの研究で用いられてきている。この方法は簡便であり、適切に図示されれば、視覚的に容易に集団構造の特徴を表示することができる。しかしながら、この普通のソシオグラムはフレ

キシブルな方法であるだけに、幾つかの問題点を含んでいる。すなわち、ソシオグラムの描き方には一定の規準がないため、研究者の主観によって描かれやすいことがある。そのことは、すなわち、一義的にソシオグラムを描くことができないことであり、同一集団の2時点間のソシオグラムの比較分析を難しくしているのである。もう一つ、選択数が少ない場合は比較的容易に描けるが、選択数が増加したり、拒否の関係をも表現したり、集団の成員数が増えたりすると、ソシオグラムは複雑なものとなり、それから集団構造の特徴を分析することは難しくなる。

このようなソシオグラムのもつ問題点については、従来様々な角度から研究されている（例えば、Chino, 1978; 狩野, 1960など）。しかしながら、現時点では、まだソシオメトリックなデータの解析方法は複数のものが提案されている状態であり、決定的な方法が見いだされているとは言えないであろう。

こうした問題を解決する一つの試みとして、ソシオメトリックなデータを親近性の測度として考え、多次元尺度構成法により分析し、各成員をユークリッド空間内に位置づけて考えることは興味深いことである。そのような方法の一つとして、Torgerson（1952）によって提案され、Gower（1966）によって発展された主座標分析法（principal coordinates analysis）があげられる。この方法は、複数の対象相互の親近性データが与えられたとき、親近性の高いもの同士が近くに、低いもの同士が遠くなるように、全対象を空間内に位置づける、というものである。同じような性質を持つ方法としては、狩野・小窪・楠見（1982）が用いた数量化理論第IV類があげられる。丘本・戸田（1973）は、これらの両手法を表現の忠実性などの観点から比較検討しているが、「総合的に見て主座標分析法は第IV類よりもすぐれている」という結論をえている。

そこで今回われわれは、ソシオグラムを描く方法として、主座標分析法（以下、TG法と略記する）をとりあげ、分析を試みる。収集したすべてのソシオメトリックなデータをこの方法で解析することにより、成員の位置（座標値）が決定され、研究者によって描かれるソシオグラムがマチマチになるといったデメリットを排除することができるであろう。

したがって、ここでのわれわれの目的は、TG法を用いて統一した方法でソシオグラムを描くことにより、集団のソシオメトリックな構造の時系列な特徴を解明していくことである、と要約することができる。

この目的のためには、われわれはまずクラス別・時点別のソシオメトリック・データをインプットしてこれを

表D-1 各時点におけるSMTAの得点の分布，++での相互選択数，及び相互選択率（AM）

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
++の 数	41	46	31	33	32	60	52	63	54	41	58	45	47	54
+ の 数	112	118	95	87	141	143	140	115	119	137	110	106	98	110
0 の 数	313	303	331	361	289	284	290	307	311	306	318	336	342	326
- の 数	40	17	27	24	22	18	24	21	22	22	20	19	19	15
相互選択数	12	7	4	4	4	12	12	13	8	6	13	7	8	8
相互選択数 全選択数 (%)	58.54	30.43	25.81	24.24	25.00	40.00	46.15	41.27	29.63	29.27	44.83	31.11	34.04	29.63

表D-2 各時点におけるSMTAの得点の分布，++での相互選択数，及び相互選択率（AF）

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
++の 数	34	48	36	38	38	32	36	36	38	44	48	48	45	48
+ の 数	96	89	89	78	111	106	105	89	103	86	97	84	78	75
0 の 数	190	188	205	212	182	189	190	209	192	205	183	196	192	190
- の 数	22	17	12	14	11	15	11	8	9	7	14	14	9	11
相互選択数	5	11	12	9	9	8	5	8	7	7	15	10	11	11
相互選択数 全選択数 (%)	29.41	45.83	66.67	47.37	47.37	50.00	27.78	44.44	36.84	31.82	62.50	41.67	48.89	45.83

表D-3 各時点におけるSMTAの得点の分布，++での相互選択数，及び相互選択率（BM）

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
++の 数	33	40	51	40	35	35	38	42	40	38	29	46	41	42
+ の 数	101	122	108	141	140	131	133	126	125	109	118	111	115	113
0 の 数	292	266	269	248	249	271	270	272	270	289	285	257	276	266
- の 数	36	34	34	33	17	25	21	22	27	26	30	47	30	41
相互選択数	7	6	10	7	5	5	5	5	3	6	5	6	6	7
相互選択数 全選択数 (%)	42.42	30.00	39.22	35.00	28.57	28.57	26.32	23.81	15.00	31.58	34.48	26.09	29.27	33.33

表D-4 各時点におけるSMTAの得点の分布，++での相互選択数，及び相互選択率（BF）

時 点	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15
++の 数	34	46	32	52	46	55	48	58	53	47	60	50	34	29
+ の 数	79	80	83	80	81	75	80	71	72	74	77	92	80	105
0 の 数	245	225	238	225	240	224	230	229	193	238	218	211	243	231
- の 数	22	29	27	23	13	26	22	22	24	21	25	27	22	15
相互選択数	8	11	6	13	13	15	9	15	9	7	15	9	8	3
相互選択数 全選択数 (%)	47.06	47.83	37.50	50.00	56.52	54.55	37.50	51.72	33.96	29.79	50.00	36.00	47.06	20.69

TG法で解き，各成員の位置を決定した上で，通常のソシオグラムのように，センチメント関係を適宜矢印のついた線分（P→0）で表示しなければならない。インプット・データとしては，SMT-1，SMTA，SMTB，

およびSMTCが利用できるが，若干の試行錯誤を繰り返した後，SMTAを用いることにした。これはSMT-1を4段階値（++，+，0，および-）に変換したもので，表A-1からわかるように，1人の被験者が他成

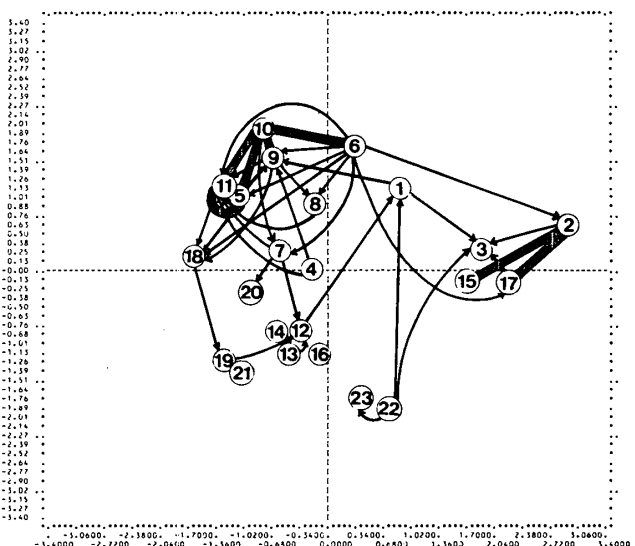
以下、クラスごとに分析結果を記述する。ソシオグラムを中心としながら、時点順に構造の特徴を述べ、最後にまとめとしてそれを要約する。しかしその前に、クラス別・時点別に、被験者が他成員に与えたSMTAの各段階値の頻数と、(++)で相互選択しているペアの数、およびそれが(++)の総数の中で占める割合の一覧表を掲げておく(表D-1~4)。これまで、集団構造化の指標として、全選択数の中で相互選択数の占める比率がしばしば取り上げられてきた。しかし、これで見ることが、相互選択率は時点とは一義的な関係はないようである。

(1) W-0の構造 (図D-1)

(2) W-1 の構造 (図 D-2)

図D-1 AMのソシオグラム (W-0)

一方、 $W=0$ での $1-2-3-6-15-17$ のグループから、**6**は前述のサブグループに入り、**1**は少し離れた位置にあり、残りの $2-3-15-17$ で1つのサブグループを形成している。ただし、このサブグループは、**2**のメンバーとの選択・被選択の関係が強く、大きくは**2**のメンバーとの関係でこのサブグループは成り立っているように見える。



図D-2 AMのソシオグラム (W-1)

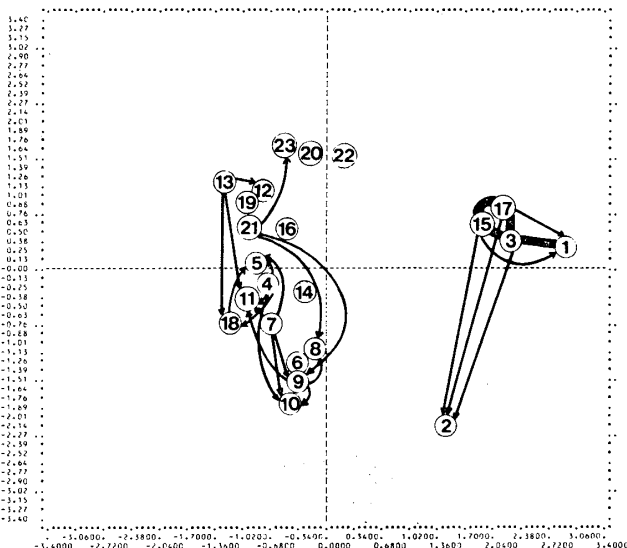
他の成員は、2つのサブグループの周辺に位置し、一方選択で結ばれている。14, 16, 21の3名は孤立した状態である。

(3) W-2 の構造 (図D-3)

構造的には2つのサブグループに分離している。1つのサブグループはW-1からの1-2-3-15-17のサブグループである。そして、2の位置がW-1での記述を顕著に示しており、1-3-15-17が非常に親密な関係にあり、それらのメンバーが2を選択することで、5名が結ばれている。

一方、残りのメンバーの集まりでは相互選択が消失しており、サブグループと呼べるかどうかは不明確である。ただ、各メンバーの位置関係をみると、8-6-9-10が近接しており、それに加えて、W-1でサブグループとして含まれていた11, 5, また多くの選択を受けていた7, 18, それに4が加わり、8-6-9-10-11-5-7-18-4の9名の間に不明確ながらも1つのまとまりとしての選択関係が見られる。13, 21はそのグループメンバーを選択しているが離れた位置にある。

6, 14, 16, 19, 20, 22の6名は孤立した状態である。



図D-3 AMのソシオグラム (W-2)

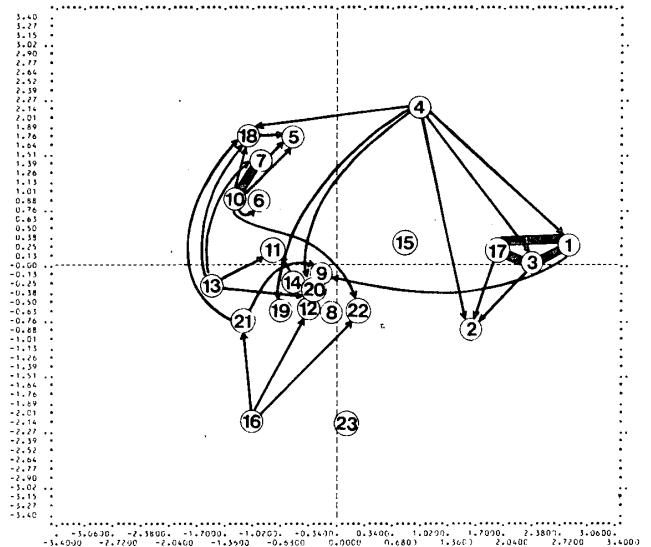
(4) W-3 の構造 (図D-4)

1-3-17の間に相互選択関係が見られ、そのトリオの関係が深まっている。5, 6, 7, 10, 18は比較的近くに位置し、1つのサブグループのように見られるが、選択関係はきわめて弱い。他のメンバーは、それぞれ点在しており、特に、4, 13, 16のような、自分からの選択が多いことから、メンバー相互がつながっているようにみえる。

8, 15, 23は孤立状態である。

(5) W-4 の構造 (図D-5)

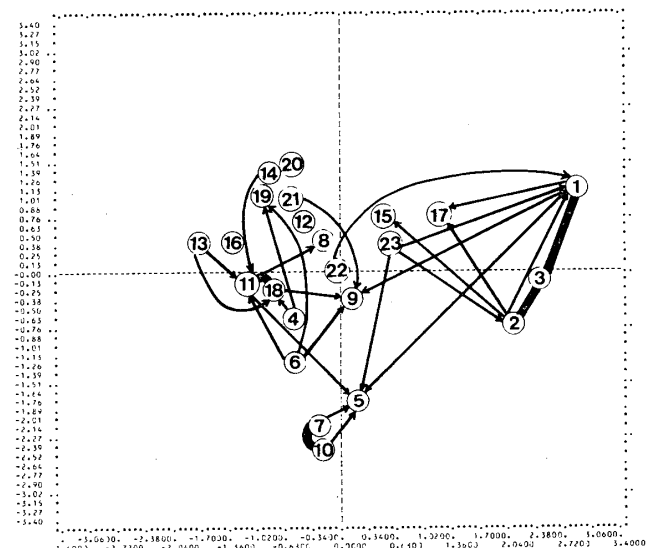
相互選択の割合は、W-3で24%、W-4で25%と増加しておらず、構造的にはW-3からの変化はあまりみ



図D-4 AMのソシオグラム (W-3)

られない。サブグループとしては、1-3-2が相互選択で結ばれ、17を1, 2が選択しており、7-10のペアの相互選択関係も継続し、5とより近い位置にあり、サブグループとしてのトリオを形成しているという程度である。残りのメンバーは11-18の相互選択のペアを中心に集まっているが、それらの関係は一方選択による弱い関係である。1-2-3, 5-7-10のトリオと他のメンバーを結びつける役割として5のメンバーが5名から、また9のメンバーが4名から選択されている。

12, 16, 20が孤立している。



図D-5 AMのソシオグラム (W-4)

(6) W-5 の構造 (図D-6)

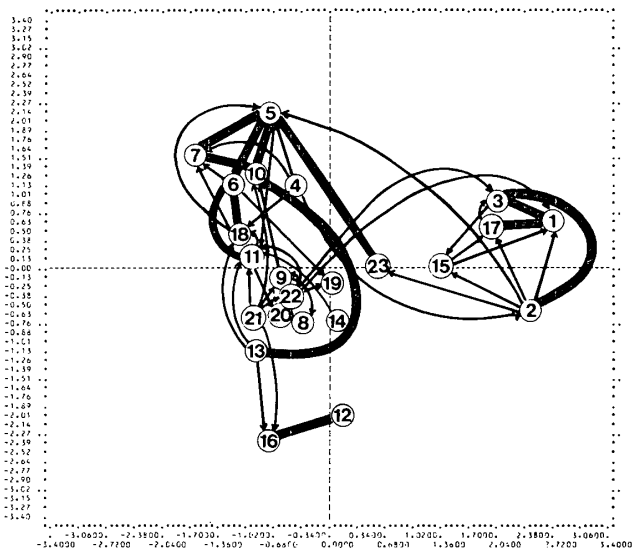
W-5に至って、相互選択の割合が40%と急激に増加している。このことより、サブグループの形成の様子が

明確に観察できる。一つはW-4までのサブグループとしての1, 2, 3, 15, 17の5名からなるサブグループがある。一方、相互選択によって結ばれたメンバーとして5-6-7-10-11-13-18-23のmajorityグループが観察される。4, 9, 21, 22はそのmajorityグループのメンバーを選択していることから、このグループの構成メンバーに含められうるかもしれない。また, 8, 14, 19, 20といったメンバーもこのmajorityグループの近くに位置している。

majorityグループのメンバーである23は、前述の1-2-3-15-17のサブグループとこのmajorityグループの中間的位置にあり、両グループの仲介者として機能しているのかもしれない。

12-16の相互選択のペアはそれらのサブグループから離れ、クラス全体からみると周辺的な位置にある。

この時点においては、孤立児はいなくなっている。



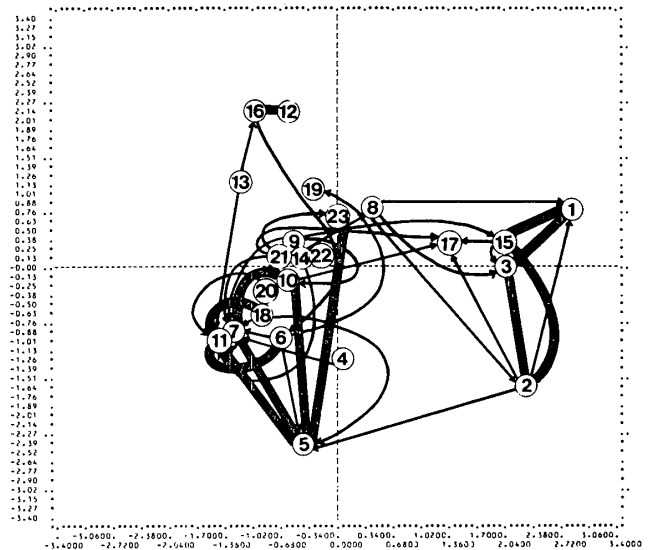
図D-6 AMのソシオグラム (W-5)

(7) W-6の構造 (図D-7)

W-5からの構造の大きな変化は見られない。すなわち、構造全体からみると、majorityグループと小さなサブグループと周辺的な位置にペアが存在しているのである。ただし、majorityグループ内の相互選択関係が若干変化しているようである。W-5では相互選択で結ばれていた5-6-7-10-11-13-18-23のグループから13が離れ、残りのメンバーの相互選択が5, 7, 11のメンバーに集中していることである。そのmajorityグループ周辺にいる4, 9, 14, 21のメンバーも5, 7, 11を選択している。そして、結果的にはそれらのメンバー間の距離はW-5より近づいている。

また、12-16のペアは相互選択で結ばれており、13を

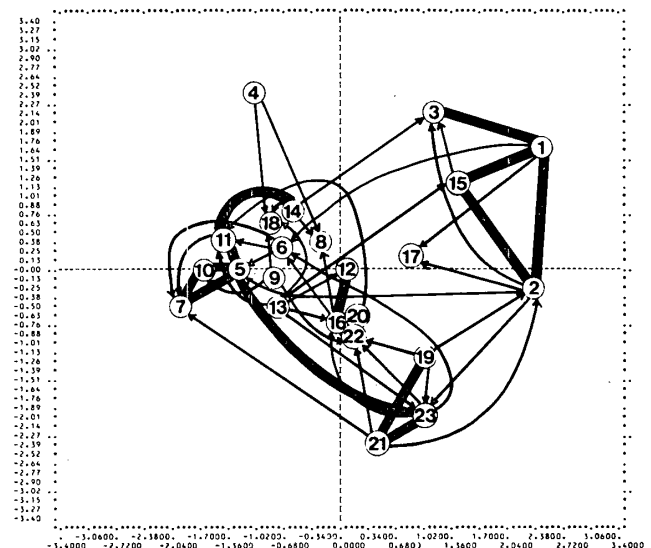
仲介者としてmajorityグループと結びついている。22は孤立している。



図D-7 AMのソシオグラム (W-6)

(8) W-7の構造 (図D-8)

W-6では周辺的な位置にあった12-16のペアがmajorityグループの中に含まれたように位置づけられている。それは、16がmajorityグループのメンバーを選択していることと、majorityグループのメンバー13と23が12及び16を選択していることからわかるが、親密な結合関係にあるわけではない。



図D-8 AMのソシオグラム (W-7)

majorityグループ内の関係として、W-7がW-6よりも相互選択数は増加しているが、各成員間の距離はW-6より遠くなり、W-6程のまとまりはないようで

ある。

4のメンバーが周辺的な位置にいる。

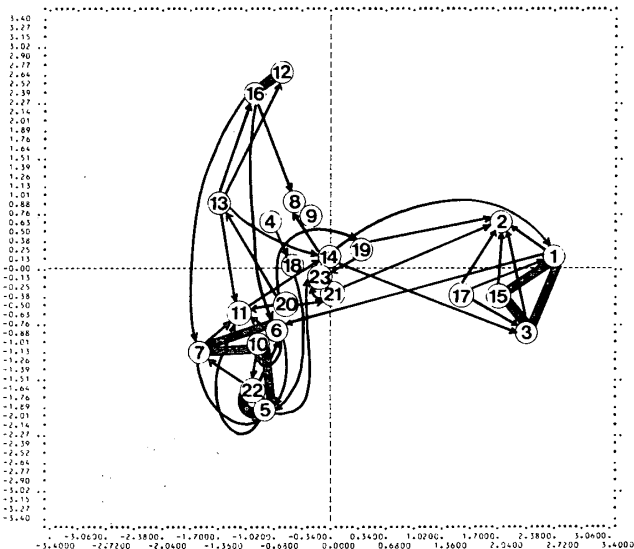
(9) W-8の構造(図D-9)

W-8では相互選択数は減少し、W-5、W-6、W-7のようなmajorityグループの様相が薄れてきているようである。その中であって、5-6-7-10-11-20-22のメンバーが一つのサブグループを構成しているようである。12-16の相互選択のペアは周辺的な位置にもどっており、13はその2つのグループの中間的位置にある。

1-2-3-15-17のサブグループは継続している。ただ、17は、今まで他のメンバーから選択されていたのだが、W-8では自分自身が他のメンバーを選択する関係になっている。

以上の3つのサブグループの残りのメンバーは、3つのサブグループの中間的位置にあり、それらのサブグループを結びつける役割をしている。

9のみ孤立している。



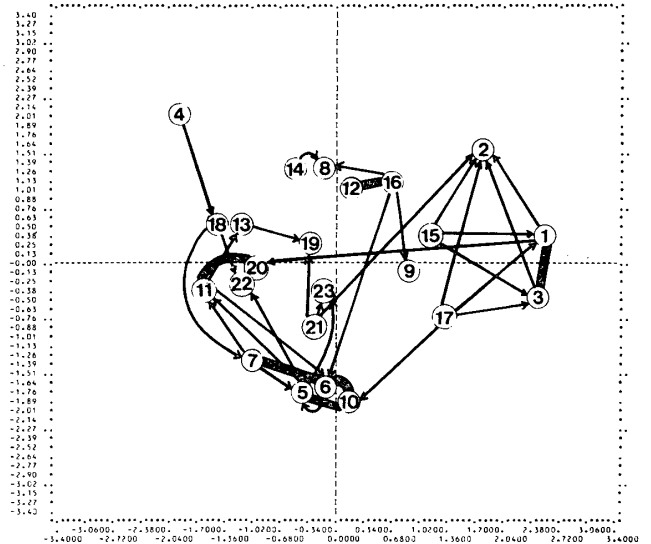
図D-9 AMのソシオグラム(W-8)

(10) W-9の構造(図D-10)

W-8よりさらに相互選択数は6(29%)と減少し、選択関係は単純化している。W-8までサブグループとして存在していた1-2-3-15-17も1-3のみが相互選択となり、選択が2に集中してきている。

W-8でサブグループであった5-6-7-10-11-20-22は、位置的には5-6-7-10と、11-20-22とに2分されているようであるが、5, 6, 7と11とは選択・被選択の関係にある。ただ11, 20, 22は位置的には近いが、22は11と20と選択関係も被選択の関係もなく、5と18のメンバーから選択されているだけである。そし

て、その回りのメンバーは一方的な選択・被選択で結ばれるといった単純な構造である。12-16の相互選択ペアも、16が6を選択することによって、サブグループと結ばれているだけである。

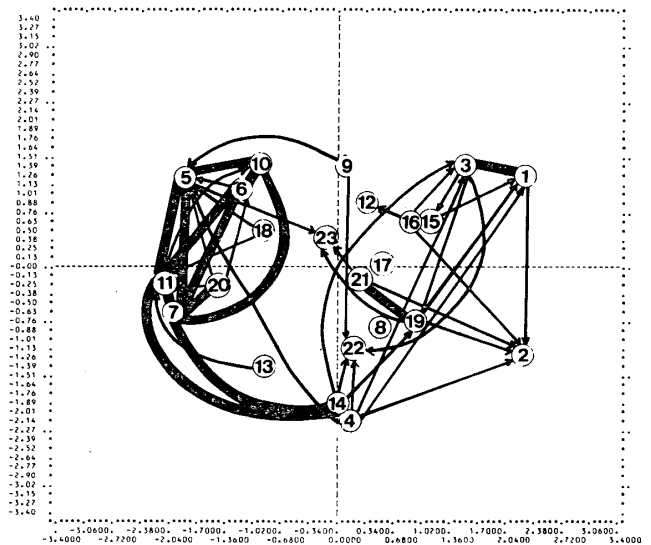


図D-10 AMのソシオグラム(W-9)

(11) W-11の構造(図D-11)

一変して、相互選択数が13(45%)と増加している。

1つのまとまりとして観察されるのは、5-6-7-10-11-18-20である。18を除いた他のメンバーは相互選択で結ばれており、クラスの他のメンバーからの距離も少しあり、強固なサブグループが形成されている。14も7, 11と相互選択で結ばれていることから、このサブグループの構成メンバーに含めることができるであろう。それにもかかわらず、何故14がそのサブグループから離



図D-11 AMのソシオグラム(W-11)

れた位置にあるか考えてみると、14はそのサブグループ以外のメンバーの中から、3、19、22といったメンバーを選択している。そして、3は1と相互選択の関係にあり、15を含めてサブグループを形成しており、19は21と相互選択関係にあり、19は残りのメンバーの中間的な位置関係にあり、4名のメンバーから選択されている。すなわち、14は、5-6-7-10-11-18-20を除いた他のメンバーの、構造的にある意味で重要な位置にあるメンバーを選択していることから、全体の中でのその位置の重さも理解されるであろう。

特徴的なこととして、1、2、3、5、7、11に選択が集中していることがあげられるだろう。特に2は周辺的な位置にありながら、5名から選択を受けている。

17は孤立した状態にある。

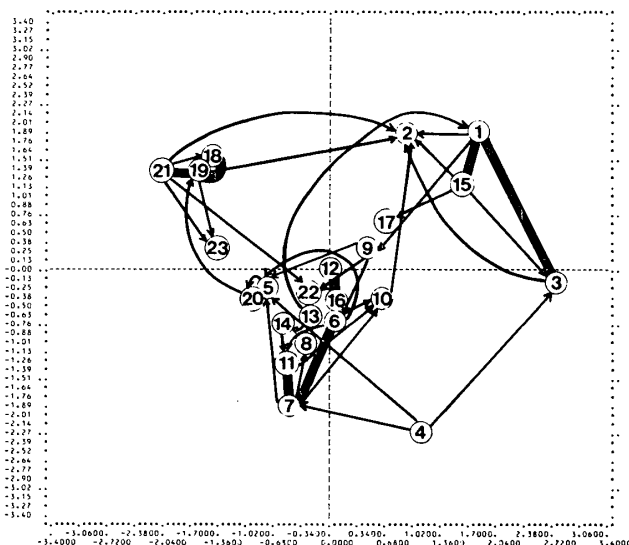
(12) W-12の構造 (図D-12)

構造的には大きく3つのグループが観察される。

1つは今まで比較的継続しているグループで、1-2-3-15-17のサブグループである(17は位置的には離れているが、15によって選択されている)。

一方、W-11で相互選択関係にあった19-21のペアに18が含まれたトリオがある。23のメンバーも位置的には離れているが、19、21から選択されており、このサブグループの構成メンバーに含めることができるかもしれない。

そして、1つのまとまりとして、距離的に近い関係にある5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、16、20、22のメンバーから成る大きなサブグループが観察される。ただし、12-16の相互選択のペアはそれらのメンバーと近い位置にいただけであって、それらのメンバーからは孤立している。12-16のペアを除いた残りのメンバーの



図D-12 AMのソシオグラム (W-12)

関係も相互選択が少ないことから、それ程強固なサブグループとは言えないだろう。

特徴的なことは、2、4のメンバーについてである。両者とも周辺的な位置にいるものの、2は3つのサブグループのメンバー6名から選択を受けているのに対し、4は一方的選択関係で結ばれていることである。

(13) W-14の構造 (図D-13)

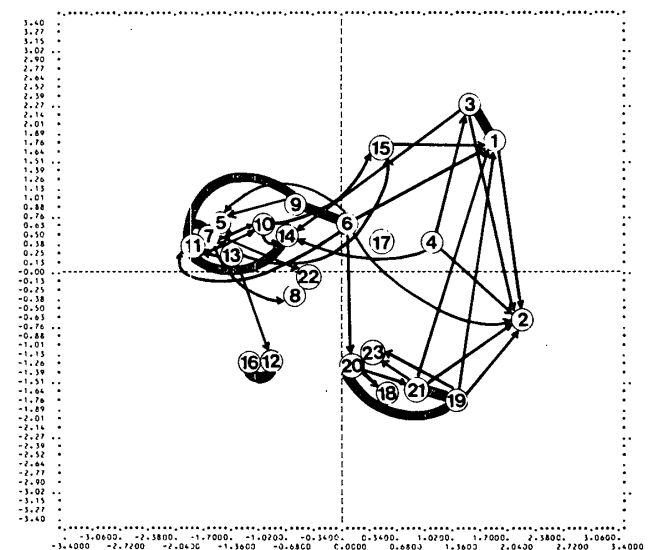
構造的にはW-12からさほど変化していない。1-3の相互選択のペアと、彼らを選択する15を含めた小さなサブグループがある。

また、大きなまとまりとして、W-12で記述したサブグループの中で5-6-7-9-10-11-13-14の関係が近づき、8、22は7によって選択を受け、そのグループの近くに位置している。

W-12で独立していた12-16のペアは、やはりその大きなサブグループから離れた位置にある。もう1つのサブグループは、W-12に大きなサブグループの中にいた20のメンバーが加わり、18-19-20-21-23のサブグループが形成されている。

4、17は、位置的には3つのサブグループの中間にあるが、4はW-12同様自らの一方的選択関係を持ち、17は孤立している。

2はどのサブグループにも属さないような位置にありながら、選択が集中している。その選択についても、どのサブグループのメンバーからも受けている。また、1もサブグループのメンバー以外の3名から同時に選択されている。

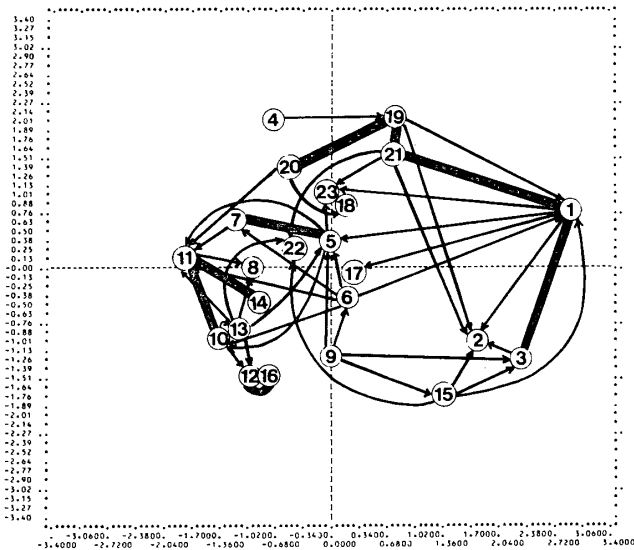


図D-13 AMのソシオグラム (W-14)

(14) W-15の構造 (図D-14)

クラスのメンバーの全体的な位置関係には大きな変化

はないが、W-14での3つのサブグループ同士の関係が深まり、クラスのメンバー全体としてのつながりが生まれてきている。そのように観察できる理由としては、1と21との相互選択に代表されるように、W-14でのサブグループのメンバー間の選択の増加があげられるであろう。そして特に1, 2, 5, 11に見られるように、選択が集中しているメンバーがあり、それらのメンバーがクラス全体が1つのまとまりをなすための重要な位置を占めているようである。



図D-14 AMのソシオグラム (W-15)

(15) まとめ

初対面に近い状態のW-0で、すでに相互選択数が12(59%)と比較的多く、孤立児もいない状態である。ただし、それらの関係は名簿の番号が隣接したもので結ばれている。

W-1では、サブグループ化が始まり、W-2で構造的に2つのグループに分離している。W-2, W-3, W-4までは初期ほど相互選択数は多くなく、孤立児も数名いる状態で、クラス全体は一方的選択で結ばれた弱いネットワーク構造を示している。

W-5で相互選択数が急激に増加し、幾つかのサブグループが形成されていることがわかる。特に、23名中8名から成る majority グループが観察される。W-6では構造的にはあまり変化しないが、W-7ではmajority グループ内よりグループ外のメンバーとの選択関係が増し、majority グループのまとまりが弱くなっている。

W-8, W-9と相互選択数が再度減少し、サブグループ構造が不明瞭になり、特定のメンバーに選択が集中してきている。

W-11では一変して、相互選択数が増加し、W-5で

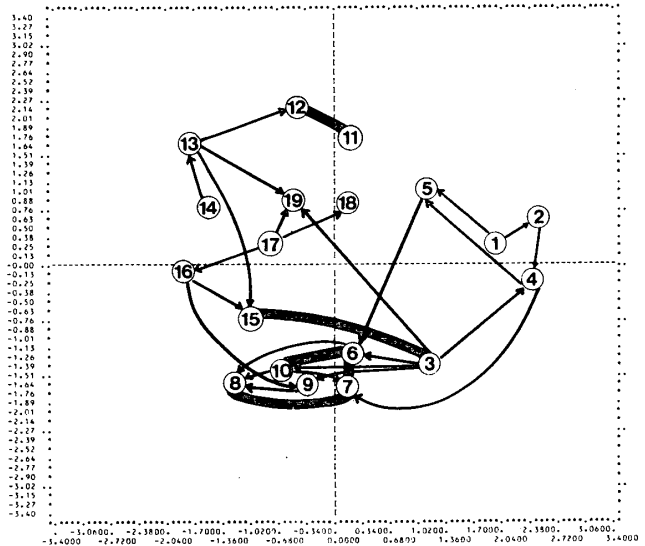
の majority グループのメンバーとは若干異なるメンバーからなる強固な関係のサブグループが形成されている。ただ、W-11では、そのサブグループ外のメンバーとの関係も、以前よりはかなり複雑になっている。

W-12では、大きく3つのグループが観察されるが、それらは相互に関係しており、W-14, W-15と構造的変化は少ない。ただし、W-12, W-14, W-15と時点を追うごとに、サブグループの相互の関係は複雑になっていくが、それは特定のメンバーへの選択の集中によって、そのような様相を強めている。

2 クラスAF

(1) W-0の構造 (図D-15)

6-7-8-9-10の比較的親密なサブグループと、11-12, 3-15の相互選択のペアがある。3は他のメンバーからも多く選択されており、15は13, 16から選択されており、3-15のペアはサブグループと他のメンバーとの橋渡しの役割を担っている。孤立者はないが、全体的には多くのメンバーが個々に一方選択で結ばれているといった低水準のネットワーク構造である。たとえば、1-2-4-5といったメンバーの関係もサブグループと呼ぶにはあまりに弱すぎるようである。

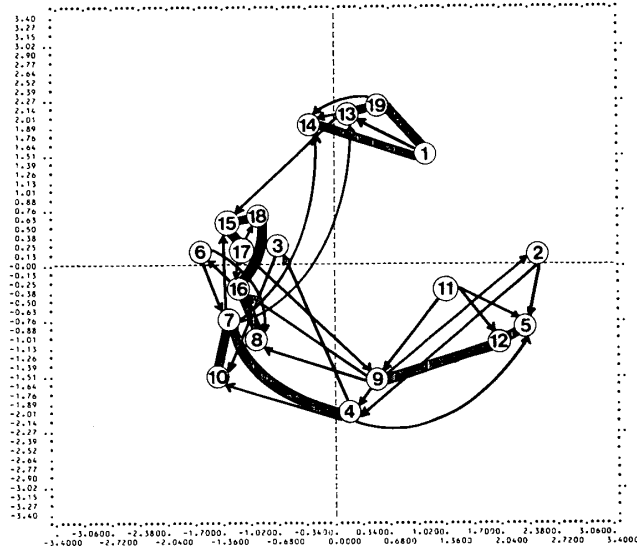


図D-15 AFのソシオグラム (W-0)

(2) W-1の構造 (図D-16)

W-0で一方選択による関係にあった13, 14, 19の中に1が入り、1つのサブグループが構成されている。また、残りのメンバーは、大きく分けると、3-6-7-8-10-15-16-17-18の9名のグループと、2-5-11-12のグループに分けられる。4と9は両グループの中間的位置にある。それらのグループの中で特に3名ぐ

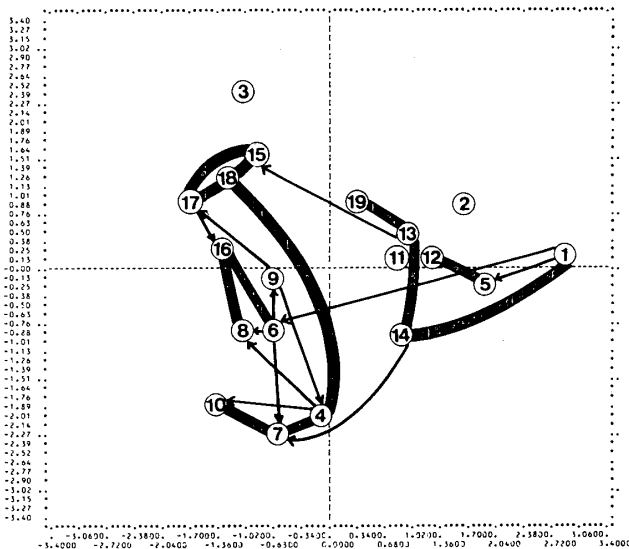
らの関係がより親密な感じであり、それらのグループは、majority グループとかサブグループと呼べるほど親密な関係があるようには見えない。



図D-16 AFのソシオグラム (W-1)

(3) W-2の構造 (図D-17)

相互選択数がW-1よりさらに増加して12 (67%) となっている。そして、前述の大きなグループである3-



図D-17 AFのソシオグラム (W-2)

6-7-8-10-15-16-17-18がかなり明確な形で細分化されている。3は孤立児としてそのグループから離れた位置にあり、残りのメンバーは相互選択により、15-17-18, 6-8-16, 4-7-10の親密な関係のトリオが形成されている。15-17-18のトリオと4-7-10のトリオは、18-4の相互選択により結ばれている。残

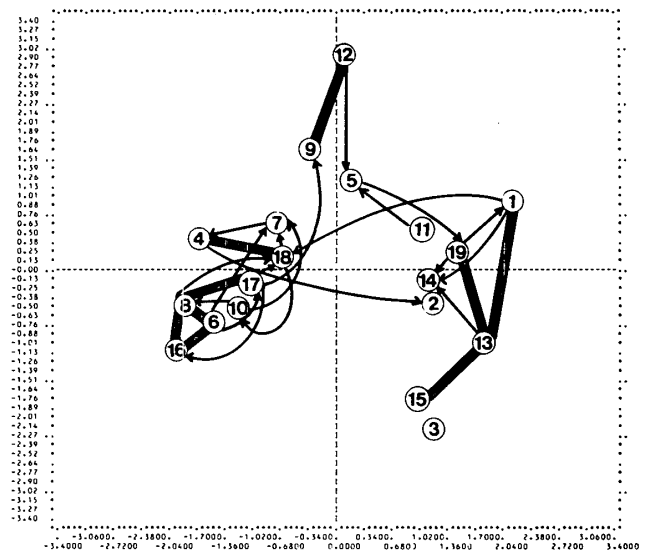
りのメンバーの関係については、W-1で比較的親密なサブグループとして述べた1-13-14-19が依然継続しており、2-5-11-12のグループの中から5-12の相互選択ペアが1によって選択されているという形で、弱い結合状態を示している。

2, 11は孤立した状態である。

(4) W-3の構造 (図D-18)

W-2でトリオの関係にあった15-17-18の中から15が飛び出し、13と相互選択の関係を結ぶことにより、1-13-14-19のサブグループに含まれ始めている。15が出た後の17, 18と、W-2での6-8-16, 4-7-10のトリオのメンバー間で選択が増え、位置的にも近づき4-6-7-8-10-16-17-18のサブグループが形成されてきている。

9-12の相互選択のペアが周辺的な位置にあり、3だけは孤立状態である。

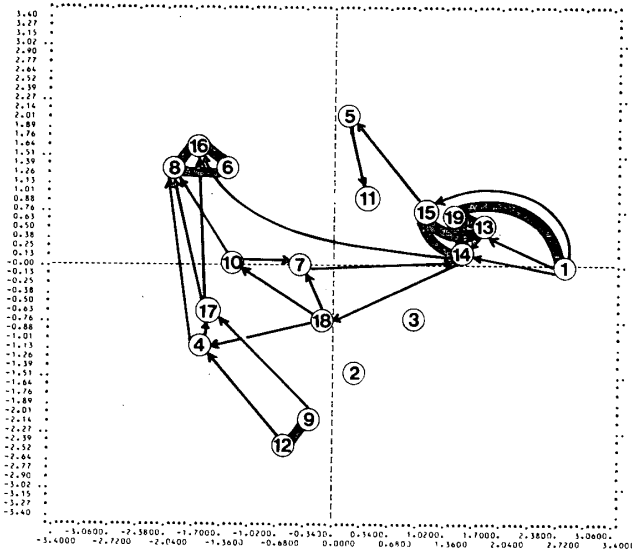


図D-18 AFのソシオグラム (W-3)

(5) W-4の構造 (図D-19)

1-13-14-15-19のサブグループ内の相互選択数は増加し、メンバー間の関係はより親密になってきている。一方、W-3からの4-6-7-8-10-16-17-18のサブグループ内では相互選択が減少し、メンバー間の距離も若干遠くなり、結合関係は弱くなっている。その中において、6-8-16は共に相互選択で結ばれ、強固なトリオグループを形成している。W-3で周辺的な位置にいた9-12の相互選択ペアはそれぞれ17, 4を選択することでこのグループに近づいている。

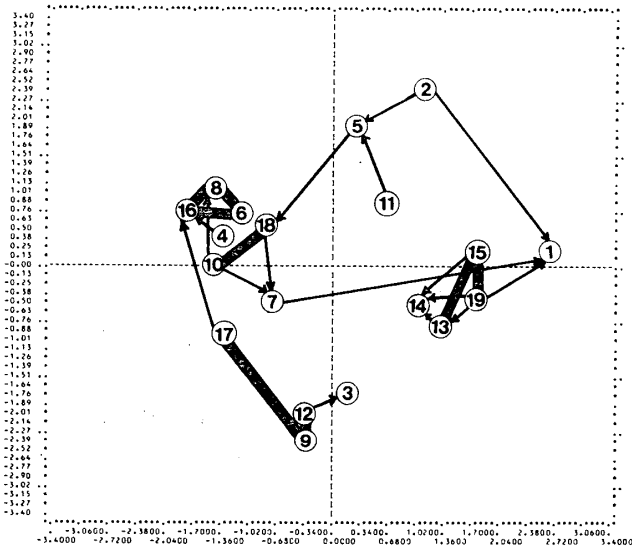
2, 3は孤立した状態にあり、5, 11は一方選択で結ばれ、周辺的な位置にある。



図D-19 AFのソシオグラム (W-4)

(6) W-5の構造 (図D-20)

4-6-7-8-10-16-17-18のサブグループのメンバー間の選択数がさらに減少しているが、個々のメンバーの位置はW-4より近づいている。そして、17はこのサブグループに近づいてきていた9-12の相互選択ペアのうちの9と相互選択の関係にある。1-13-14-15-19のサブグループでは、1が19から選択されているが少し離れた位置にあり、13-14-15-19が1つのサブグループと言えるかもしれない。



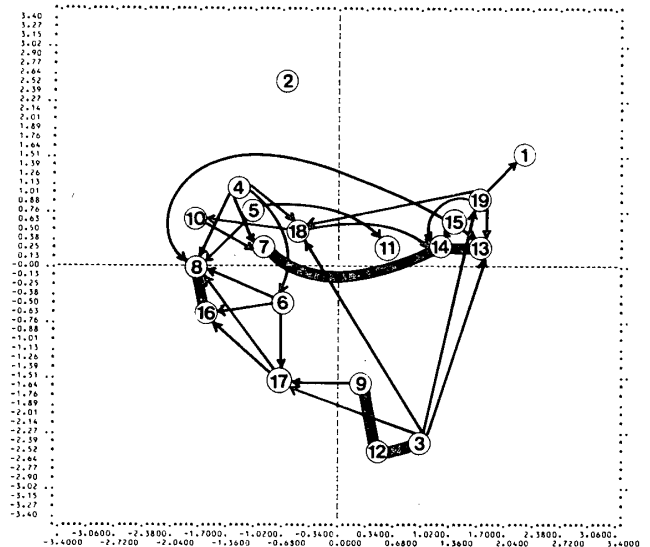
図D-20 AFのソシオグラム (W-5)

孤立した状態のメンバーはいないが、2, 3, 5, 11はそれらサブグループの周辺的な位置にいる。とりわけ、2と11は自らが選択することで他のメンバーと結びついている。

(7) W-6の構造 (図D-21)

サブグループ内のメンバー間の選択関係よりも、サブグループ間のメンバーの選択関係が目立つ時点である。クラスの全体的構造としては、4-5-6-7-8-10-16-17-18の大きなグループと、今までの1-13-14-15-19のサブグループと、相互選択で結ばれた3-9-12のトリオの3つのグループから構成されている。そして、この3つのグループは、17, 7, 18, 14によって相互に結合しており、特に、3-9-12のトリオを除いた2つのグループは、7と14の相互選択で結ばれている。また、3-9-12の3名のグループのうち、3が他の2つのグループの中心的人物を選択することで、クラス全体の関係を深めている。

2は孤立している。

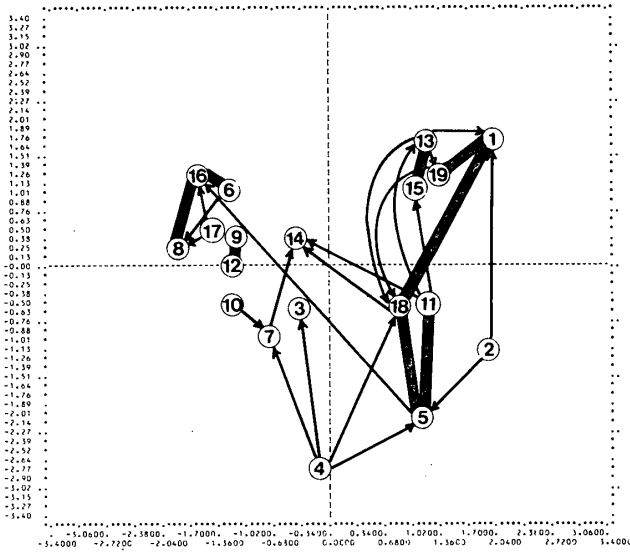


図D-21 AFのソシオグラム (W-6)

(8) W-7の構造 (図D-22)

大きなグループを構成していたメンバー間の選択関係が減少し、17が8, 16を選択し、6-8-16のトリオに17が含まれた小さなグループが残っている。一方、1-13-14-15-19のサブグループから14が離れ、残りのメンバーは近くに位置している。5-11-18と相互選択で結ばれ、トリオを形成していることに加えて、18と1とが相互選択により結ばれ、11は13, 15を選択し、18は13, 19から選択されており、1-13-15-19のサブグループと、5-11-18のトリオとの関係を密にしている。9-12の相互選択のペアは独立している。14は、7, 11, 18から選択されており、小さなサブグループの中間的な位置にある。

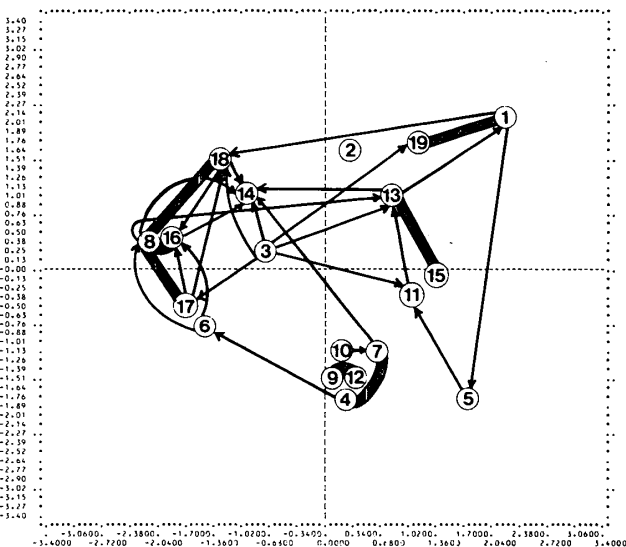
孤立児はいないが、2, 4, 10は周辺的な位置にあり、自らの選択だけで他のメンバーと結ばれている。



図D-22 AFのソシオグラム (W-7)

(9) W-8の構造 (図D-23)

クラス全体が、6-8-14-16-17-18のサブグループと、1-5-11-13-15-19のサブグループとに大きく分けられるが、後者はメンバー間の選択が少なく、サブグループと呼ぶにはあまりふさわしくないかもしれない。この2つのサブグループには比較的选择を多く受けている14と13が存在している。3は両サブグループの中間的な位置にいて、両サブグループのメンバーを3名ずつ選択している。この6つの選択によって2つのサブグループは結ばれている。しかし、それら6つとも一方的選択であり、実際は2つのサブグループともあまり関係なく、分離した状態にあるようにみえる。4, 7, 10, 9, 12は非常に近い位置にあるが、4-7が相互選択により結合し、10が7を選択しているだけで、依然、9-



図D-23 AFのソシオグラム (W-8)

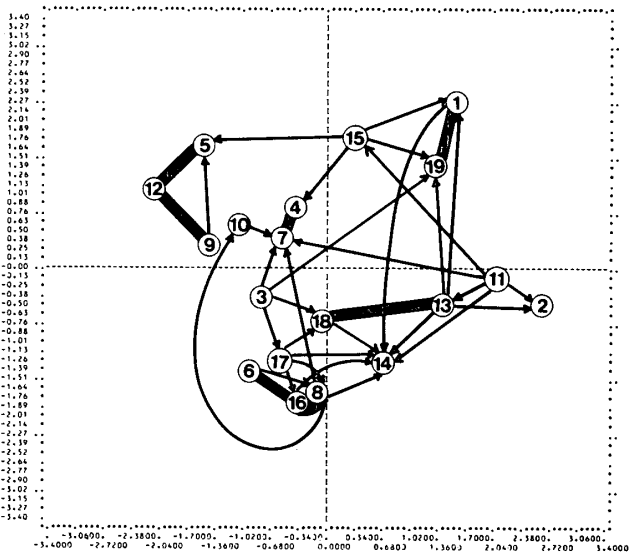
12の相互選択ペアは独立している。

2が孤立した状態にある。

(10) W-9の構造 (図D-24)

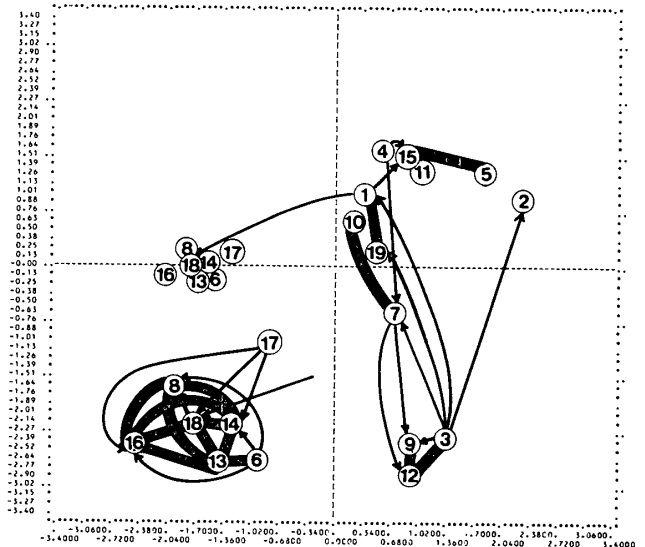
W-8で被選択の多かった13が、6-8-14-16-17-18のサブグループに近づいている。W-8において近い位置にあった4-7-10は依然その関係を保っているが、4, 7, 10のそれぞれのメンバーは、さまざまなメンバーから選択され、クラスの間隔的な存在である。

今まで、独立して存在していた9-12のペアに5が加わり、トリオを構成しているが、やはり周辺的な位置にいる。



図D-24 AFのソシオグラム (W-9)

(11) W-11の構造 (図D-25)



図D-25 AFのソシオグラム (W-11)

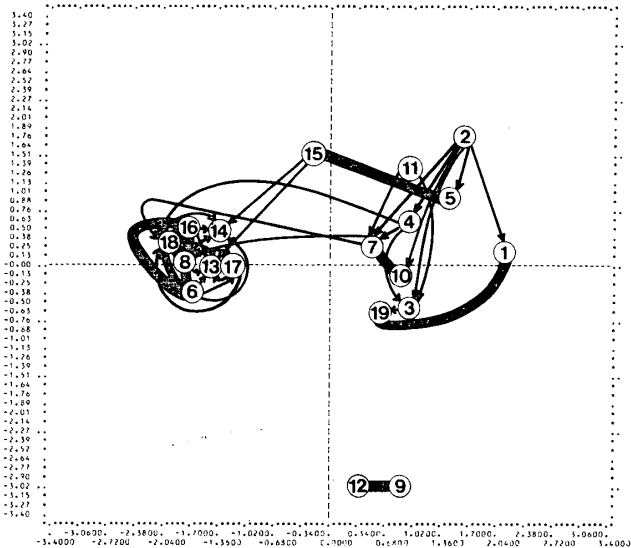
注…左下図は拡大図

この時点に至り、6-8-13-14-16-17-18という majority グループが形成される。特に、6-8-13-14-16-18のメンバーの間にはかなりの相互選択がみられ、この majority グループの親密さがよくわかる。17は、14, 16, 18を選択することによって、majority グループへ参加している。残りのメンバーは、1-19, 5-15, 7-10, 9-12-3のそれぞれのペアないしトリオでの相互選択による関係がみられる。1-19, 5-15は、これ以後、W-15まで相互選択関係が継続される。この1, 19, 5, 15はmajority グループのメンバーの多くが以前つくっていたサブグループのメンバーであり、いわば、majority グループの形成の際、はじき出されたようである。

11は孤立の状態であり、2, 4は周辺的な位置にいる。

(12) W-12の構造 (図D-26)

majority グループの関係は変わらないが、その残りのメンバーの位置が、9-12の相互選択のペアを除いて近くなっている。しかし、周辺的な位置にいる2, 4, 11が多くのメンバーを選択することで選択関係が複雑になっているが、これらの一方的選択を取り除くと、残りのメンバーの関係は、さほど親密であるとは言えないであろう。ただ、それらのメンバーと majority グループと



図D-26 AFのソシオグラム (W-12)

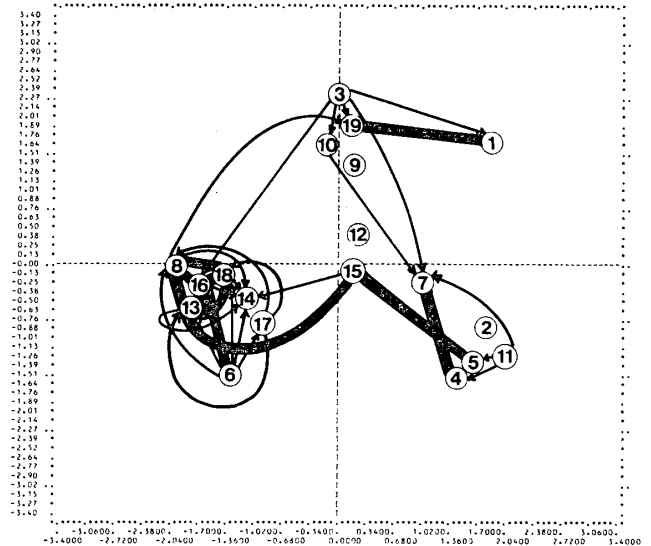
の関係は、15が13と14を、7が8と18を選択することで W-11よりも結びつきが強められている。

(13) W-14の構造 (図D-27)

クラス内には、majority グループのほかに、4-5-7-11と1-3-10-19の2つのサブグループとが存在している。それらのサブグループは、一方選択といった弱い関係ながらも、すべて結合している。15は、ma-

jority グループと4-5-7-11のサブグループとを結びつけるパイプ役を担っている。

なお、9と12は孤立した状態である。

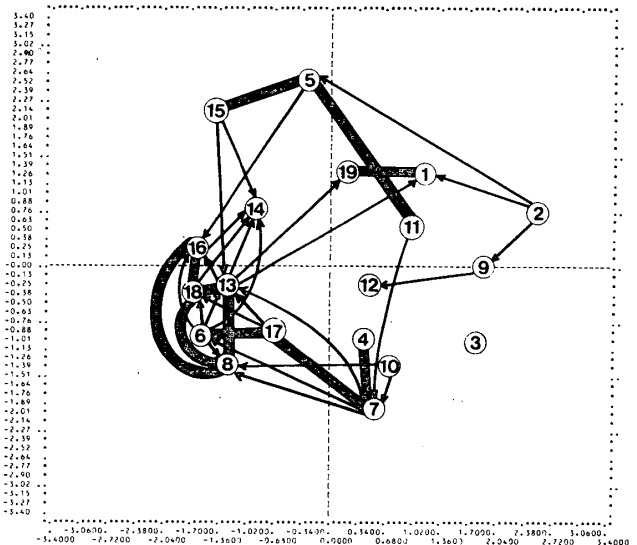


図D-27 AFのソシオグラム (W-14)

(14) W-15の構造 (図D-28)

W-14より、majority グループのメンバーと残りのメンバー同士の選択が増加し、サブグループ間のつながりも増していることから、クラスとしてのまとまりを示し始めている。

ただ、3は孤立した状態であり、12, 9, 2は依然として周辺的な位置にいる。



図D-28 AFのソシオグラム (W-15)

(15) まとめ

W-0では、相互選択により結ばれた2~5名のグルー

ブが存在しているが、全体的に1～2人を選択したり、選択されたりといった低水準のネットワーク構造を示している。

W-1で相互選択数が増加し、W-2でさらにその数は増え、3名ぐらいからなる小さなサブグループ内の関係が親密になってきている。それらのサブグループ間の関係は、一部を除いて弱い状態である。

W-3では、W-2のトリオの関係から仲間が増えはじめ、幾つかのサブグループが形成され、W-4、W-5で、サブグループ内の関係がしだいに親密になってきている。

W-6では、サブグループ内よりもサブグループ間のメンバーで選択関係が目立ち、構造的には、1つの大きなグループと、それと結ばれた形での小さなグループが2つ観察できる。

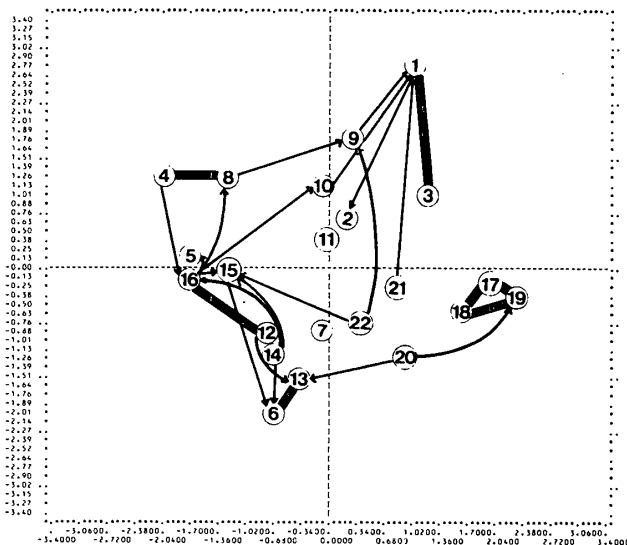
W-7、W-8とメンバー間の選択関係が固定せず、明瞭な形でのサブグループの形成は見られない。W-9では、さらにその傾向は顕著になり、相互選択で結ばれているのは2～3人のメンバーだけであり、クラス全体はメンバー相互に一方的選択で結ばれている状態である。

W-11に至り、majority グループが形成され、構造的には他のメンバーとの対立的関係にあるようである。W-12、W-14、W-15と構造的には大きな変化は見られないが、時点を追うごとに、majority グループと残りのメンバーとの関係が親密になり、複雑なネットワーク構造を示している。

3 クラスBM

(1) W-0の構造 (図D-29)

7組の相互選択があるが、トリオの関係をなしている

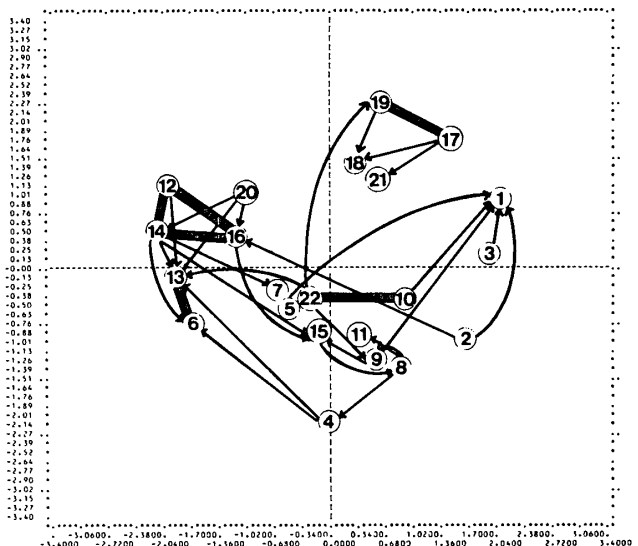


図D-29 BMのソシオグラム (W-0)

のは17-18-19の1個のみで、残りは、1-3, 4-8, 12-16, 6-13のペアである。ペア、及びトリオ間のつながり、またメンバー間のつながりは非常に弱いものである。そして1の被選択数が多くなっており、サブグループは見られない。

(2) W-1の構造 (図D-30)

12-16のペアに14が加わって相互選択によるトリオができています。そして13への選択が増加し、彼を仲介者としてそのトリオと他のメンバーが結びついている。22-10の相互選択ペアもその1つである。一方では、1は5名のメンバーから選択されており、12-14-16のトリオを囲むグループ(6-12-13-14-16-20)とは反対の位置にある。また、W-0における17-18-19の相互選択のトリオに21が近づいて、弱い関係ながら1つのサブグループを構成している。



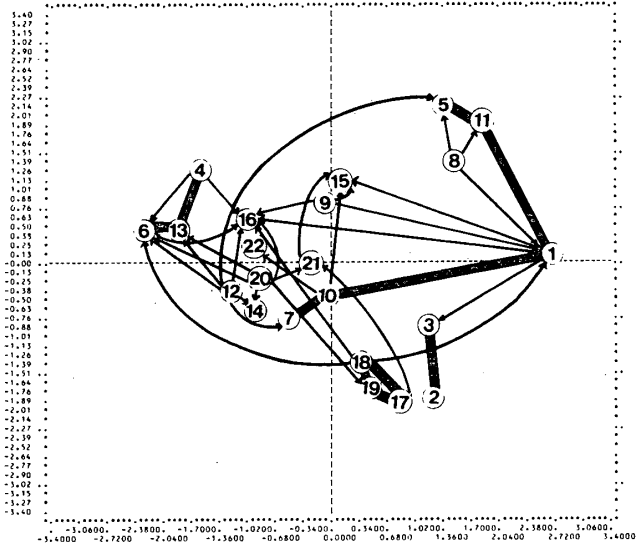
図D-30 BMのソシオグラム (W-1)

(3) W-2の構造 (図D-31)

W-1でのサブグループとは言えないような漠然とした6-12-13-14-16-20のグループから、4-6-13のトリオが近い関係にあり、それと比較的複雑な関係で、16, 20, 12, 14がそのトリオと結合している。被選択数の多いメンバー6, 16, 1が存在し、とりわけ1は、相互選択で結ばれている7-10-1-11-5の中心的位置にある。W-1までの17-18-19も相互選択関係にあり、周辺的位置にあるが、そのトリオが孤立した状態というより、各メンバーが一方選択ながら他のメンバーと結びついているといえよう。ただ、2-3は比較的、周辺の・孤立的位置にある。

(4) W-3の構造 (図D-32)

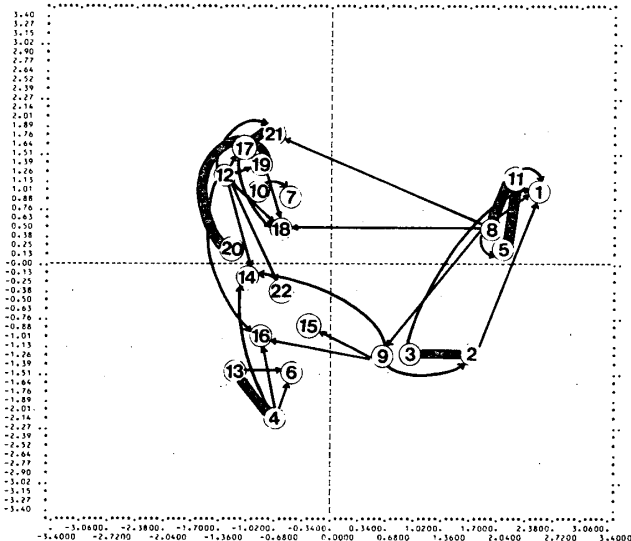
W-3になると、ややサブグループ構造が明確になる



図D-31 BMのソシオグラム (W-2)

ようである。1つのサブグループは、17を中心とした、20, 17, 21, 19, 12, 18から成るものであり、もう1つは1-5-8-11のサブグループである。また、W-2から継続している4-6-13のトリオは、12-17-18-19-20-21のサブグループとは14を仲介者として結ばれている。相互選択の2-3のペアはそれぞれ1を選択したり、2が9から選択されるといった弱い形で他のメンバーと結びついている。

15は周辺的な位置にあり、10-7は他のメンバーとの選択、被選択の関係はなく、孤立している。



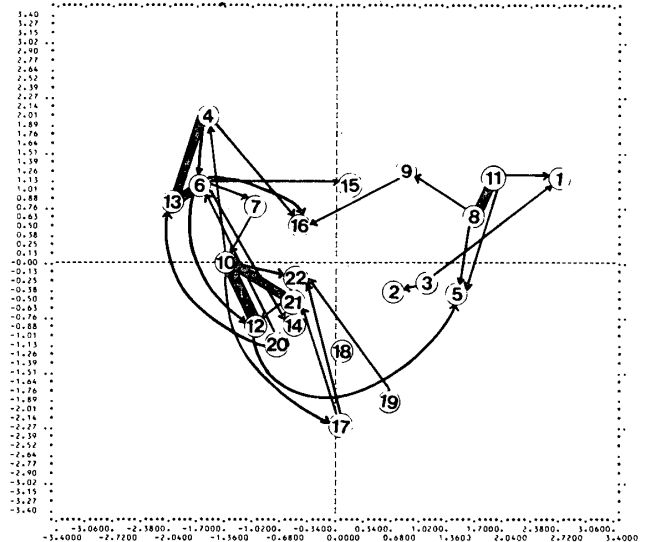
図D-32 BMのソシオグラム (W-3)

(5) W-4の構造 (図D-33)

全体の中で、比較的大きなグループとして、10-12-14-20-21-22のサブグループが観察できる。依然、4

-6-13のトリオがあり、上記のサブグループと親密な関係にある。

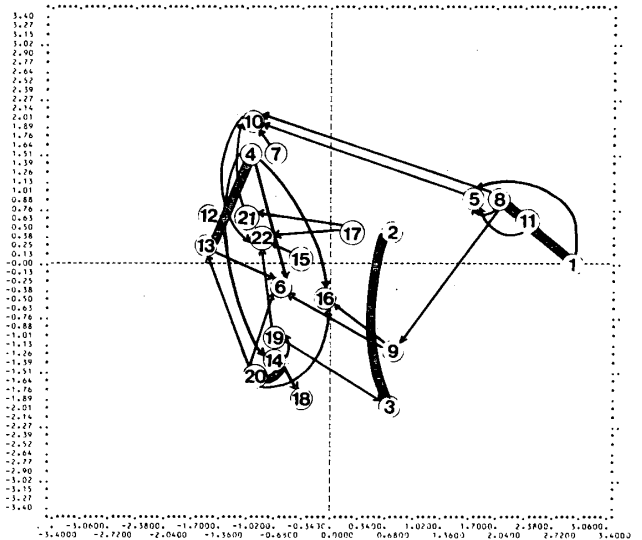
一方、初期のころトリオの関係にあった、17, 18, 19が比較的周辺的位置に移動し、特に18は孤立した位置にある。また、1への選択数も急激に減少している。



図D-33 BMのソシオグラム (W-4)

(6) W-5の構造 (図D-34)

W-4では、明確な形ではないにしろ、2-3のサブグループがみられたが、それらは弱い形で結ばれていた。しかし、W-5にいたっては、1-5-8-11は残りのメンバーと離れた位置にあり、8, 11, 1は相互選択の関係にあり、5は8, 11, 1により選択されていることから、サブグループを構成しているといえるであろう。一方、残りのメンバーは比較的等間隔にあり、不鮮明な



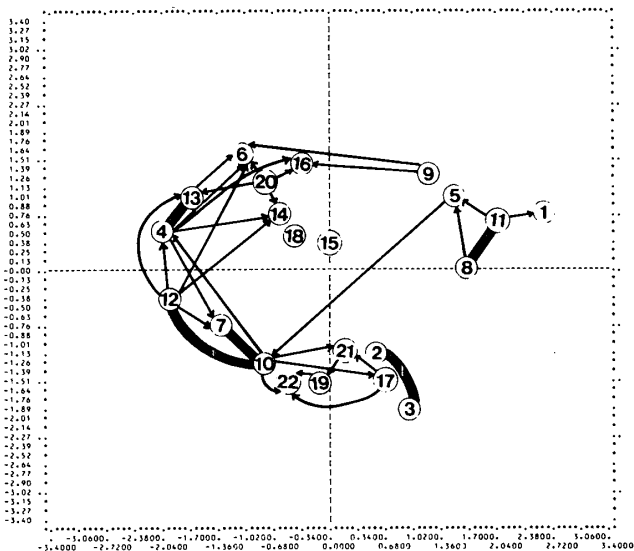
図D-34 BMのソシオグラム (W-5)

がらも大きなサブグループの形成をはじめているように見える。

(7) W-6の構造 (図D-35)

構造的には、W-5からの大きな変化はみられず、1-5-8-11のサブグループと、不明瞭ながら残りのメンバーから成る大きなグループが観察できる。この大きなグループの中には、位置関係から、4-6-13-14-16-20のサブグループと、7-10-12のサブグループ、それに10-17-19-21-22の3つのサブグループに分けられる。そして、3つのサブグループは、4, 12, 10のメンバーを仲介者として結びついている。1-5-8-11のサブグループは、5が10を選択することで、この大きなグループと結びついている。

15, 18は孤立児であり、W-5からの2-3の相互選択のペアも、どこのグループに結合することもなく存在している。



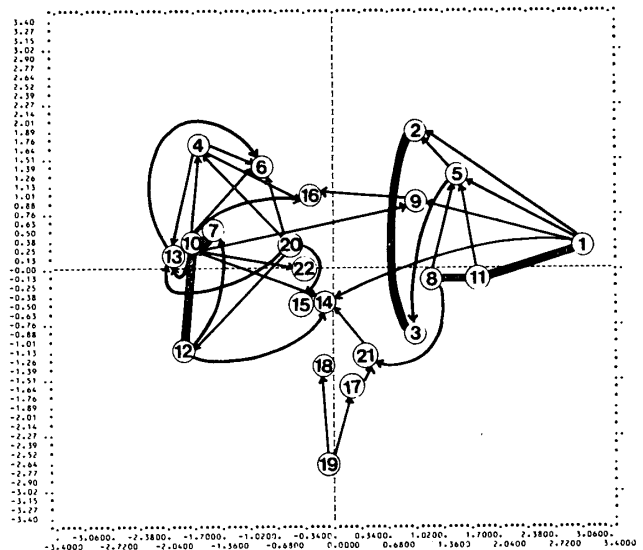
図D-35 BMのソシオグラム (W-6)

(8) W-7の構造 (図D-36)

前週からの1-5-8-11のサブグループに、2-3のペアが近づき、1つのサブグループを形成しているように見える。また、4-6-7-10-12-13-14-15-16-20-22はW-6にくらべるとより近い関係にあり、複雑な選択関係はないが、1つのmajorityグループを構成している。

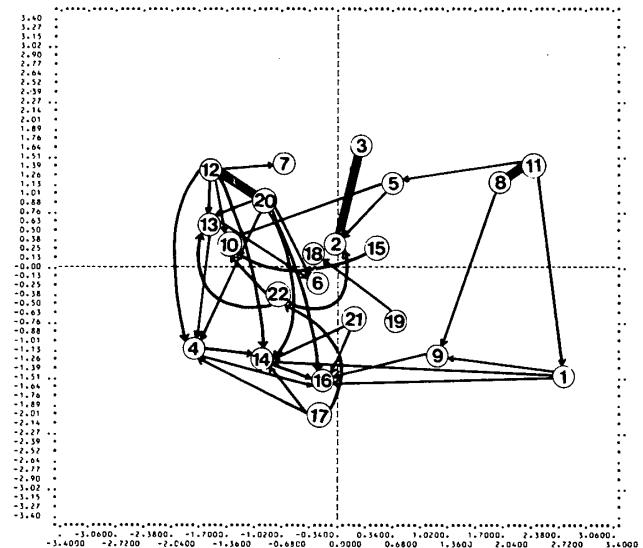
全体的には、21, 17, 18, 19が周辺的な位置にあり、それら2つの大きなサブグループが対称的に位置している。また、1は今までの被選択数の多いスター的な存在から、自らが多くのメンバーを選択するという立場に逆転している。

(9) W-8の構造 (図D-37)



図D-36 BMのソシオグラム (W-7)

W-7での1-11-8-5のサブグループのメンバーは、8-11の相互選択を除いてメンバーの距離は遠くなり、5はmajorityグループに近づいている。2-3のペアもmajorityグループに近い位置にある。これらのことに加え、majorityグループのメンバー間の選択数が増加することにより、W-7よりもmajorityグループ内の関係は複雑になっている。また、14と16に選択が集中していることも特徴的である。



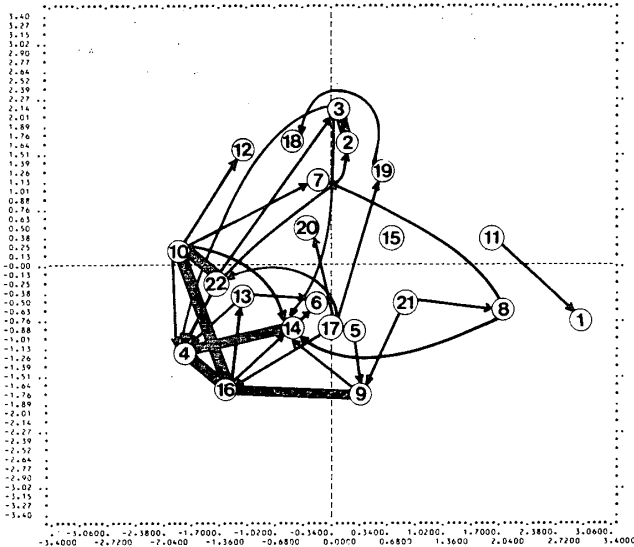
図D-37 BMのソシオグラム (W-8)

(10) W-9の構造 (図D-38)

majorityグループのメンバーの中での相互選択数が増加してきている(10-22, 10-16, 4-16, 4-14, 16-9)。このことより、majorityの中でも4-6-9-10-13-14-16-22の間の関係が親密になってきてい

るようである。これに対して、今までサブグループとしての1-8-11の関係が薄れてきており、8はmajorityグループへの接近が見られる。

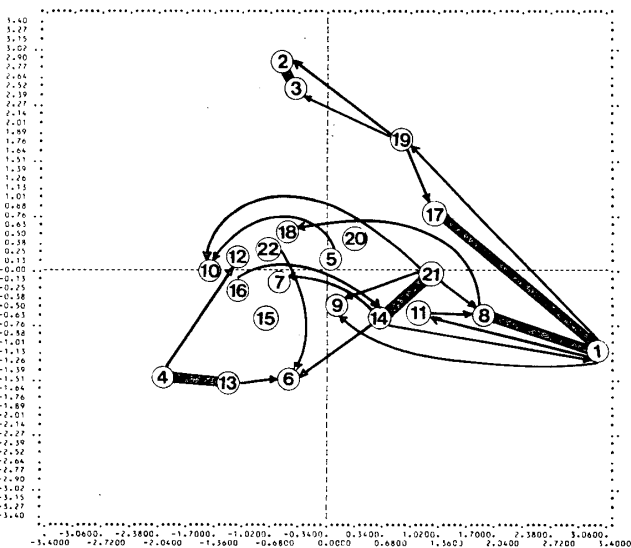
15は孤立児である。



図D-38 BMのソシオグラム (W-9)

(11) W-11の構造 (図D-39)

W-9でのmajorityグループの複雑な選択関係から一変して、majorityグループ内は一方選択による単純な関係になっている。また、11はmajorityグループに近づいているが、以前からの1-8-11のトリオの関係は回復し、さらに17が1と相互選択関係になっていることで、majorityグループとは別の、1-8-11-17の結合がみられる。2-3のペアは特異な存在になっており、19を仲介者として1-8-11-17に関係している。



図D-39 BMのソシオグラム (W-11)

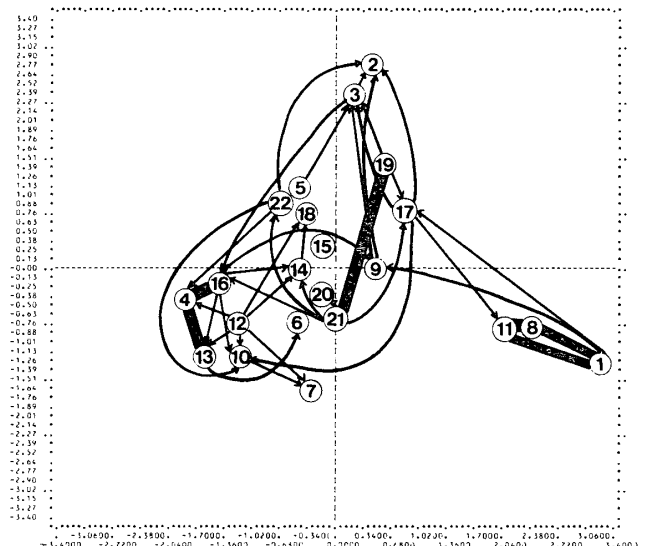
20と15は孤立した状態である。

majorityグループへの統合の過程を、発展・進歩と呼ぶならば、W-9からW-11への変化は退化と言えるかもしれない。

(12) W-12の構造 (図D-40)

この週の構造の特徴はmajorityグループの再統合過程に見ることができるかもしれない。すなわち、majorityグループのメンバーが、2, 3, 17, 19を選択することより、また、majorityグループ内のメンバー同士の選択が増していることより、majorityグループの関係は広がり、深まっていっていると考えられる。さらに、W-11と比べるとメンバー間の距離も縮小されているようである。因果関係は別にして、このmajority形成過程にともなってはじき出されるように、1-8-11のトリオの関係も再度親密になってきている。

15はなお孤立した状態にある。

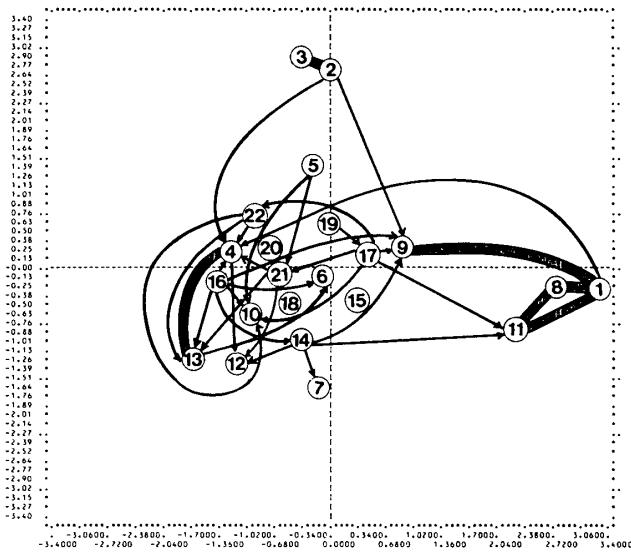


図D-40 BMのソシオグラム (W-12)

(13) W-14の構造 (図D-41)

W-12でのmajorityグループの再統合化の中で、W-11でみられたように、2-3の相互選択ペアはやはりそのグループからは距離をおいて位置している。majorityグループのメンバーは、W-12より複雑に選択し、またメンバー間の距離がさらに小さくなってきている。1-8-11のトリオも依然としてmajorityグループとは離れているが、1がmajorityグループのメンバーである9と相互選択の関係にあることより、また4を選択していることより、そして11は17と14から選択されることにより、W-12よりはmajorityグループとの関係は一層親密になってきている。

15, 18と20が孤立している。

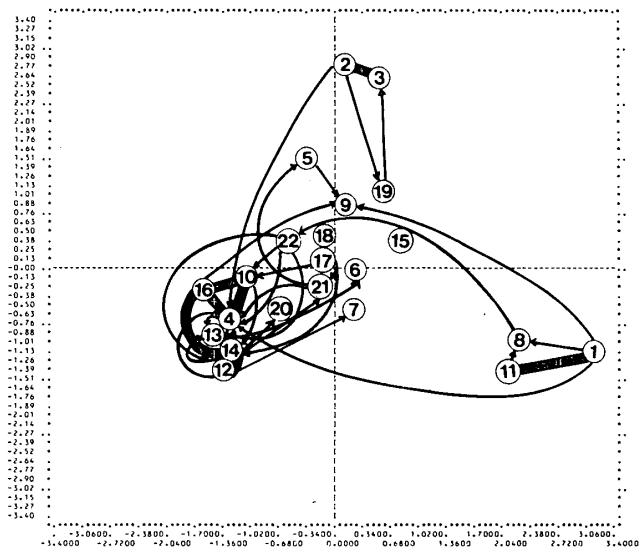


図D-41 BMのソシオグラム (W-14)

(14) W-15の構造 (図D-42)

majority グループのメンバー間、とりわけ12, 13, 14, 4, 16, 10の間の相互選択数は増加し、さらにこれら6名の間の距離は著しく近接してきている。そして、そのメンバーの周辺に、22, 20, 17, 6, 21, 7が位置しており、さらにその回りに、5, 9といったメンバーがいる。1-8-11のトリオは majority グループとは離れた位置にあり、2-3のペアも19とともに majority グループに対し、周辺的なグループとして存在している。

15と18のメンバーは、この時点になっても依然として孤立児である。



図D-42 BMのソシオグラム (W-15)

(15) まとめ

W-0では相互選択がすでに7組(42%)見られるが、それらは2~3人のメンバー間であり、クラスのメンバー全体の関係は一方的選択で結合しており、非常に弱い状態である。

W-1ではW-0よりも距離的には比較的近い位置にあるメンバーが見られ、幾つかのグループが観察されるが、それらはサブグループとしては不明瞭なものである。

W-2では、特定のメンバーに選択が集中している。

W-3になるとサブグループ化が見られはじめ、W-4でサブグループ構造が明確になってきている。W-5において、4名からなる1つのサブグループと、残りのメンバーからなる大きなグループが観察できる。

W-6では、W-5での大きなグループのメンバーが幾つかのサブグループとして分離してくる。W-7では、クラスの構造は majority グループと1つのサブグループと数名の周辺児から成り立っている。

W-8は、majority グループに他のメンバーが吸収され、関係が広がっていく過程であり、W-9では、majority グループ内の相互選択数は増加し、majority グループ内の関係が深まっていくようである。

しかし、W-11では一度 majority グループ内の関係は一方選択による弱いものとなり、W-12において majority グループのメンバーが何人か入れ替わり、W-14に至ってその関係は複雑かつ親密になっているようである。

W-15では、さらに majority グループの関係が親密になり、他のメンバーとの関係も多くなり、majority グループを中心として、クラス全体がまとまっていくようである。ただし、後半では孤立児が固定している。

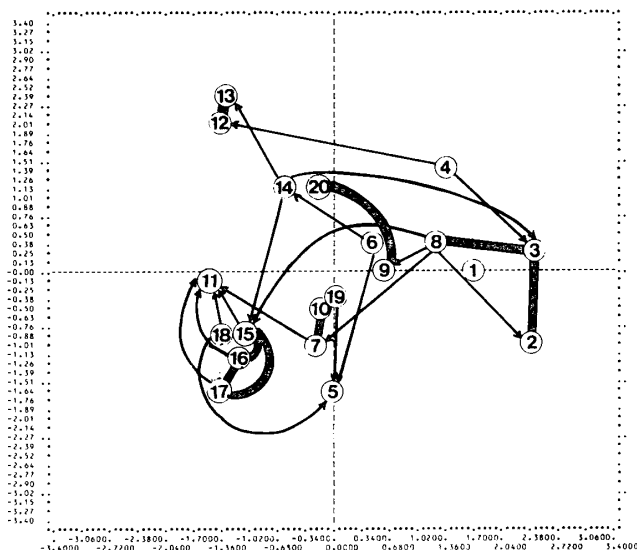
4 クラスBF

(1) W-0の構造 (図D-43)

15-16-17の相互選択で結ばれたトリオが見られ、その他に、2-3-8, 7-10, 9-20, 12-13のトリオ、及びペアが相互選択で結びついている。また、8が7, 9, 15を選択することにより、2-3-8は、9-20, 7-10, 15-16-17と結合している。12-13は、14と4を仲介者としてそれぞれ15-16-17および2-3-8と結ばれている。11, 15, 3は被選択が多く、7-10は11を仲介者として15-16-17と結ばれている。しかし、それらの関係は一方選択によるもので選択数も多くなく、全体的には低レベルのネットワーク構造を示している。

(2) W-1の構造 (図D-44)

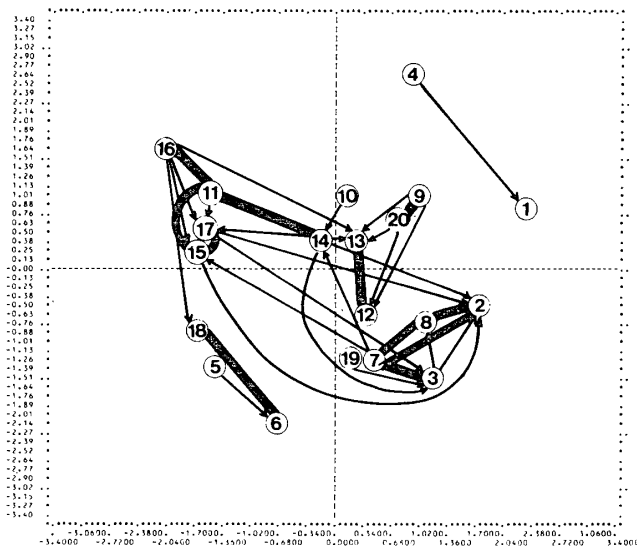
低レベルのネットワーク構造から、幾つかのサブグループの形成が見られる。それらは、2-3-7-8のサブグループと、9-12-13-20のサブグループであり、も



図D-43 BFのソシオグラム (W-0)

う1つは11を中心とした11-14-15-16-17のサブグループである。また、小さなサブグループとして、6-18の相互選択のペアがある。それらのサブグループの結びつきは、14, 16のメンバーが他のサブグループのメンバーを選択することにより、11-14-15-16-17のサブグループが他の3つのサブグループと結合させられている。さらに2, 3と15, 17の選択関係により、11-14-15-16-17のサブグループと2-3-7-8のサブグループは結ばれている。

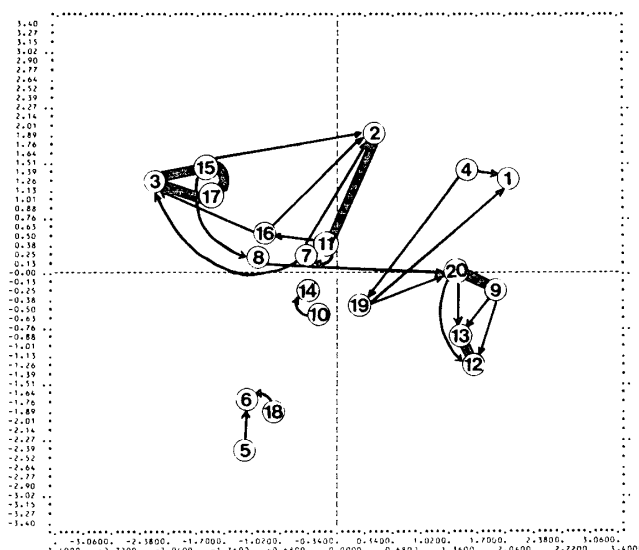
1-4は周辺の存在であり、クラス全体からみると孤立している。残りの5, 10, 19のメンバーは周辺の位置にいるが、サブグループの1人を選択することで結ばれている。



図D-44 BFのソシオグラム (W-1)

(3) W-2の構造 (図D-45)

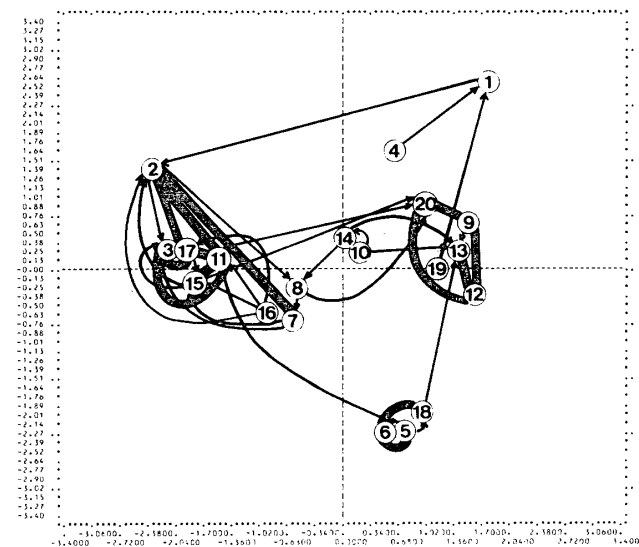
前回のW-1と比較すると、相互選択数がかかなり減少しており、W-1よりも単純な構造を示している。W-1でサブグループ間のパイプ役をつとめていたメンバー同士である3-15-17のトリオと、2-11のペアが相互選択で固く結ばれている。それらのトリオとペアを含めた3-15-17-8-7-16-11-2のグループを、全体の中で比較的大きなサブグループとしてみる事ができる。依然として9-12-13-20のサブグループが存在しており、1-4-19, 10-14, 5-6-18が弱い結びつきで点在している。



図D-45 BFのソシオグラム (W-2)

(4) W-3の構造 (図D-46)

相互選択数が13 (50%)と急増した。特にサブグル



図D-46 BFのソシオグラム (W-3)

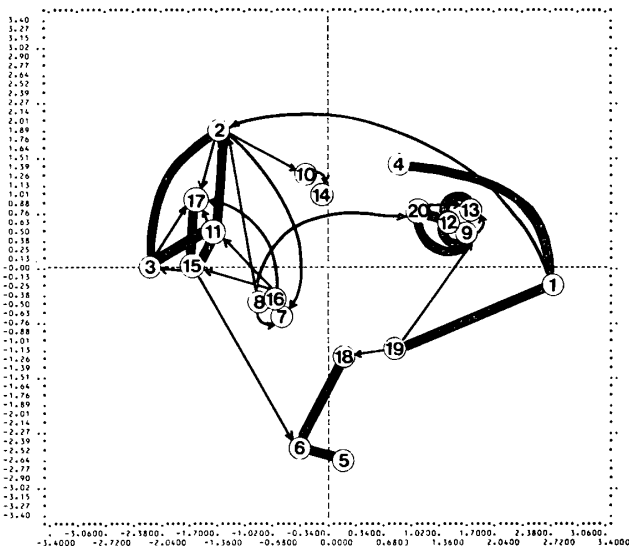
ープ内の相互選択が増えたことにより、2-3-7-8-11-15-16-17、9-12-13-20それに5-6-18の3つの比較的強固な結びつきのサブグループが浮び上ってきた。それら3つのサブグループは、ほぼ等距離の位置にある。そして、比較的選択が集中している11, 20, 13らによって、3つのサブグループは相互に結びついている。

なお、1, 4, 19, 10, 14といったメンバーは、どのサブグループに所属することもなく存在しているようである。

全体的な特徴としては、サブグループ構造が明確になり、それらのサブグループは比較的独立して存在している。

(5) W-4の構造(図D-47)

W-3でのサブグループ5-6-18、および9-12-13-20は依然相互選択で結ばれている。多くのメンバーからなる2-3-7-8-11-15-16-17のサブグループでは、2-3-11-15-17の5名の間が相互選択で結ばれているが、7-8-16は少し距離をへだてた位置にある。W-4では、W-3でのサブグループ化が進み、サブグループ相互のメンバー間の選択も減少し、各サブグループが独立した形で存在している。



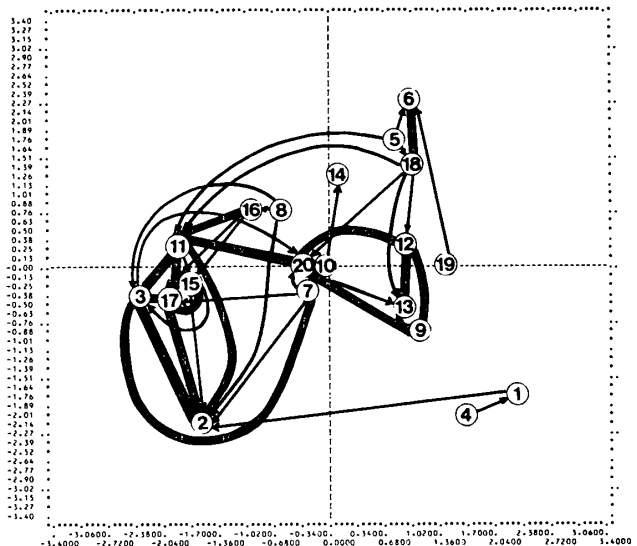
図D-47 BFのソシオグラム(W-4)

(6) W-5の構造(図D-48)

依然として3つのサブグループは明確にあるが、サブグループの独立的な存在から11-20の相互選択により、2-3-7-8-11-15-16-17のサブグループと、9-12-13-20のサブグループとが結合している。なお、5-6-18のサブグループでは、6-18は相互選択で結ばれているが、5は一方的な選択になっている。18が、

11, 20, 13, 12を選択することで、他の2つのサブグループと関係している。

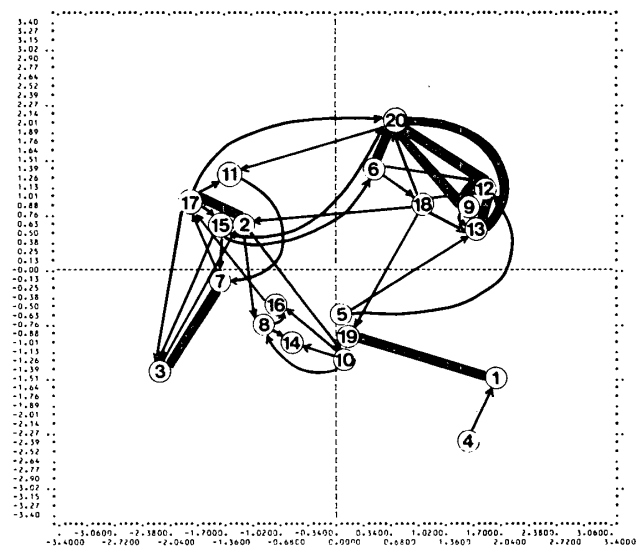
1, 4, 10, 14, 19は依然として、周辺的ないし孤立的である。



図D-48 BFのソシオグラム(W-5)

(7) W-6の構造(図D-49)

W-3, W-4, W-5でのそれを比べると、この週の構造はかなり様相が異なっている。5-6-18のサブグループは、5が12, 13を選択し、また6-18も一方選択であることから、このグループは崩壊している。そして、9-12-13-20のサブグループに、6, 18が所属する形でサブグループが形成されている。W-5で相互選択で固く結ばれていたサブグループのメンバーの中では、3-7のみが相互選択を保持しており、残りは一方的選択によ



図D-49 BFのソシオグラム(W-6)

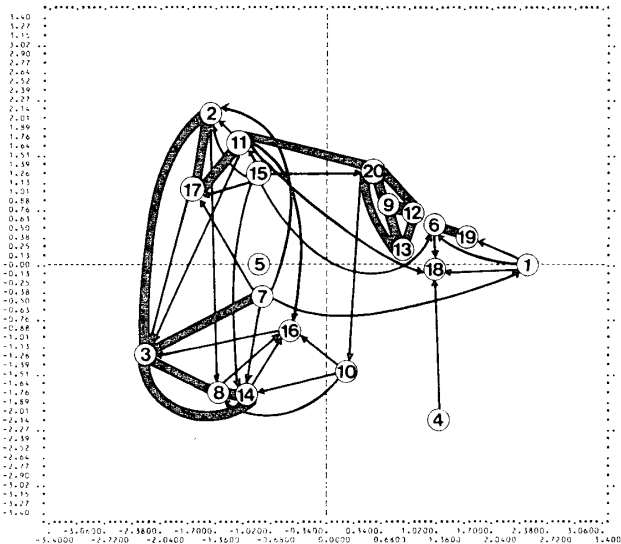
り結ばれている。比較的周辺に位置していた10, 14のメンバーも、このサブグループに近づいている。両サブグループのメンバー間の選択数は少ないが、20のメンバーは他のサブグループのメンバーからも選択されている。

1-19は相互選択で結ばれているが、4も含め、依然として周辺的である。

(8) W-7の構造(図D-50)

相互選択数が15(52%)と増えたが、構造的にはW-6での2つのサブグループがやはり存在している。1つは、6-12-13-9-18-19-20であり、その中でもとりわけ、9-12-13-20の関係は親密になっている。もう1つは、1, 4, 5を除いた大きなサブグループである。そのサブグループのメンバーの位置はかなり広がっているが、2-3-7-8-11-14-17と相互選択で結合している。そして、その大きなサブグループは、20を仲介者として9-12-13-20とつながっている。そのことより、強固なサブグループが幾つか存在する対立的な状態から、クラスのメンバー相互の関係が親密になる状態へと向っていると言えるかもしれない。

ただ、孤立児としての5とか、1や4のように自分の方からの一方的選択でのみ結ばれている周辺的なメンバーもいる。

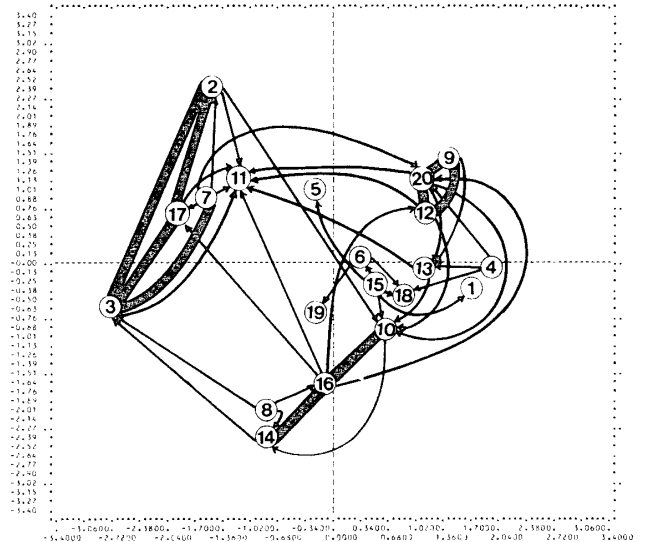


図D-50 BFのソシオグラム(W-7)

(9) W-8の構造(図D-51)

相互選択数が9(34%)と減少し、大きなサブグループのメンバーがW-7と異なって幾つかに分離している。たとえば、相互選択で結合しているグループとして、2-3-7-11-17のサブグループと、10, 16, 8, 14のメンバーからなるサブグループが観察される。また、9-12-20というトリオもみられるが、10, 11, 20を中心

にして、それぞれのサブグループと結びついている。そしてさらに、周辺的であった4は、20, 13, 18といった3名を選択しており、1, 5, 19といったメンバーは他のメンバーから選択されている。

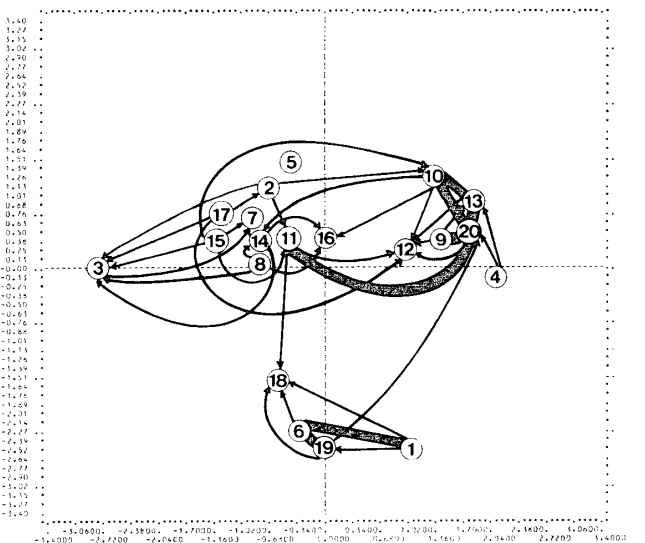


図D-51 BFのソシオグラム(W-8)

(10) W-9の構造(図D-52)

相互選択の数は7(30%)とかなり減少しているが、1, 6, 18, 19以外のメンバーは、なんらかの形でクラスのメンバーを選択することによって結びついており、大きなグループを形成している。また、3, 12, 20らに選択が集中し、12, 20がその大きなグループの中心的な位置にいる。1, 6, 18, 19はそれから離れたところでサブグループを構成している。

5は孤立した状態である。

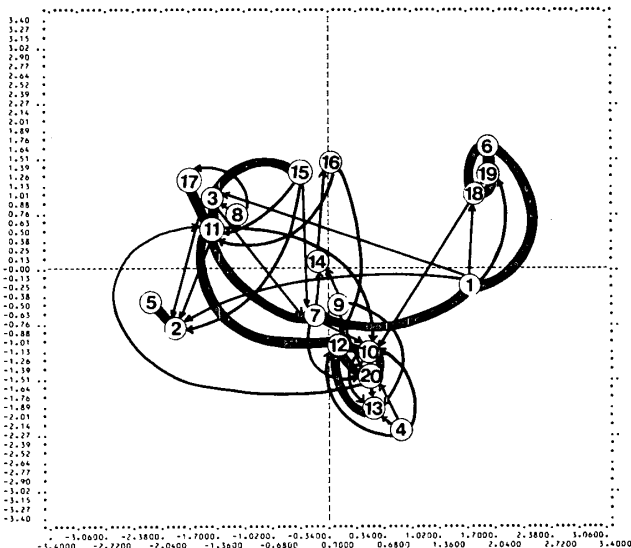


図D-52 BFのソシオグラム(W-9)

(11) W-11の構造 (図D-53)

再度、急激に相互選択数が15 (50%) と増加し、4, 8, 9, 14, 16の5名を除いた15名は、少なくともその中の1人と相互選択の関係にあり、相互選択のメンバーは、2-5のペアを除いて、少なくとも1つの相互選択により他と結合している。その2-5のペアも、2は3, 11, 1, 15といったメンバーから選択されており、相互選択で結ばれたメンバーとも関係がある。また、残りの4, 8, 9, 16のメンバーは、複数のメンバーを選択することにより、そして14は7と9から選択されることにより、クラスのメンバーと結びついている。

W-9までのサブグループの発生、固定化、変容、統合、分離といった過程をとおり、W-11は著しいサブグループ化がみられず、クラスのメンバーの均等な、またより複雑な結びつきをもつ再統合過程といえる。



図D-53 BFのソシオグラム (W-11)

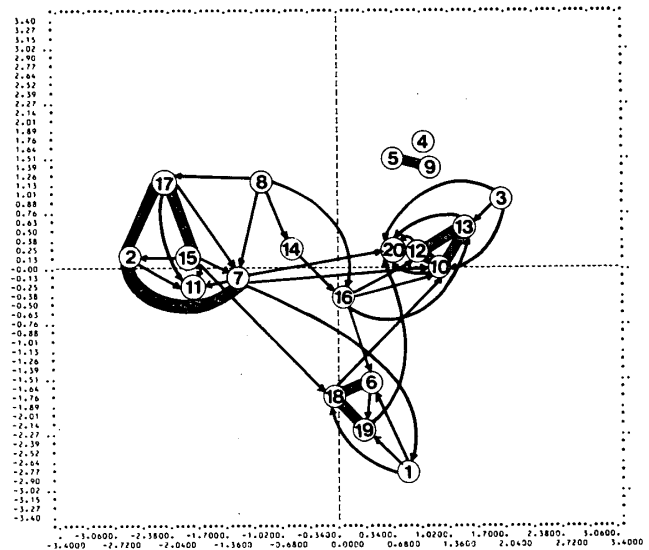
(12) W-12の構造 (図D-54)

相互選択数が9 (36%) と減少し、W-11とは一変して様相が異なっている。再度、サブグループ化が始まったようである。2-7-11-15-17のサブグループ、10-12-13-20を中心として3も含めたサブグループ、それに6-18-19を中心として1も含めたサブグループが形成されている。位置的には、その3グループ間に16がおり、グループ間の仲介役を担っている。

周辺には5-9の相互選択ペアと、4の孤立児がいる。

(13) W-14の構造 (図D-55)

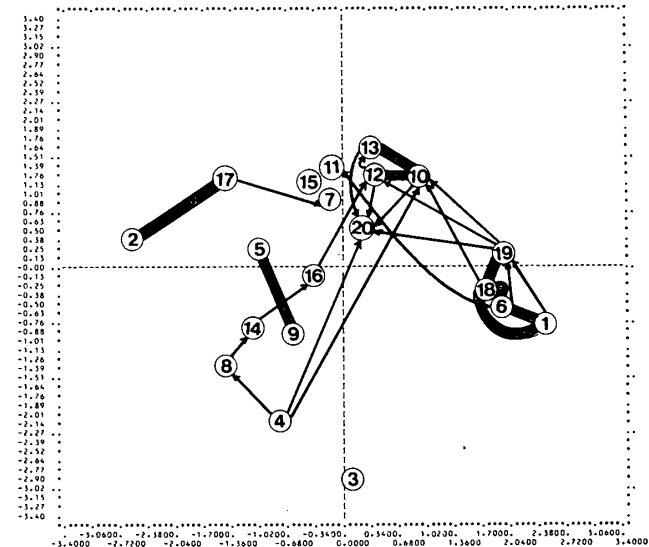
W-12よりさらに選択数が減少し、メンバー間の関係は単純化しているようである。サブグループとしては、1-6-18-19が固まり、10-12-13-20のサブグループが継続している。一方、W-12での2-7-11-15-



図D-54 BFのソシオグラム (W-12)

17のサブグループに関しては、2-17のペアが残存するだけで、選択関係がかなり少なくなっている。全体的には、1-6-18-19のサブグループと、10-12-13-20のサブグループ間のつながりがあるだけで、残りのメンバーは散在している状態である。

3と15が孤立した状態である。



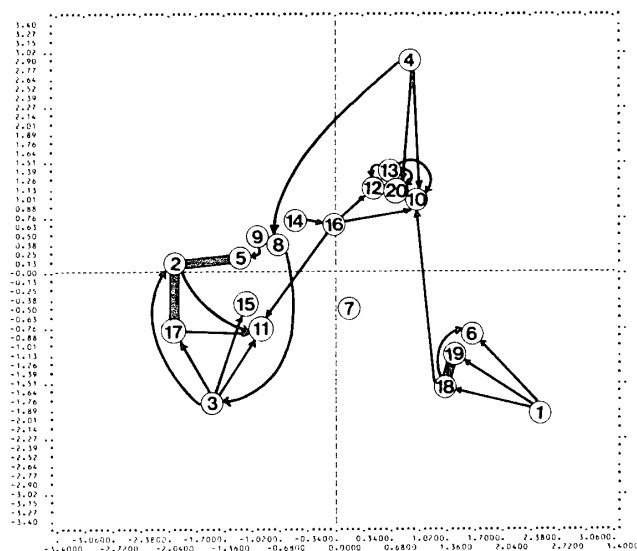
図D-55 BFのソシオグラム (W-14)

(14) W-15の構造 (図D-56)

このクラスでは14時点を通して相互選択数が3 (21%) と最も少ないのがこのW-15である。構造としては大きく3つのサブグループがみられるが、それらは相互選択で結ばれたサブグループではない。1-6-18-19はかなり他のメンバーから離れた位置にあり、W-14からも1つのサブグループとして継続している。またその意味

では相互選択はみられないが、10-12-13-20もサブグループを構成している。W-14の2-17の相互選択ペアに5が加わり、11, 15, 8, 9もその近くに位置しているが、その関係はきわめて弱いものである。加えて、各サブグループ間の関係もかなり弱い状態である。

7のみ孤立している。



図D-56 BFのソシオグラム (W-15)

(15) まとめ

初回 (W-0) で、すでに2~3人の相互選択で結ばれた関係が5組ほどみられるが、全体的には一方選択による低レベルのネットワーク構造を示している。

W-1では相互選択数が増加し、幾つかのサブグループが形成されている。ところがW-2では相互選択数が減少し、W-1より単純な構造が観察される。

W-3では、W-2でのサブグループ内のメンバー間の相互選択が増加し、かなり強固な結びつきの3つのサブグループが形成されている。W-4, W-5とその構造はほとんど変化しない。W-6においては相互選択数が再度減少し、W-5までのサブグループが崩壊していく様子が見られる。W-7では強固な関係で結ばれたサブグループが点在する状態から、クラスの多くのメンバーが相互に選択しあう、複雑な構造を示している。

W-8では、W-7の状態から再度サブグループ化が見られ、W-9では相互選択数は少ないながら、W-8の傾向を継続している。

W-11ではクラスの7割以上である15名のメンバーが相互選択関係にあり、クラス全体がより親密で、複雑な構造を示している。

W-12, W-14, W-15と再びサブグループ構造がみられ、構造が単純になってきている。しかし、このこと

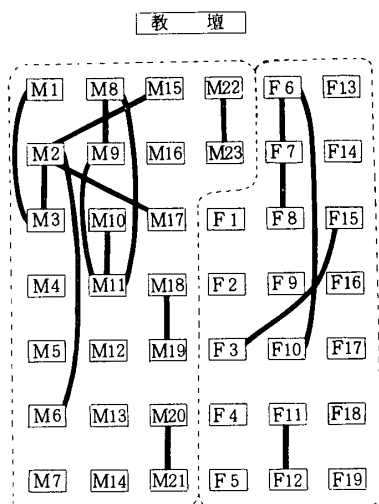
は集団のソシオメトリックな構造が実際に変容していると考えられる一方、もう1つの原因として、W-14とW-15では総選択数が少ないことより、われわれのデータの変換の際におきたアーティファクトによるものかもしれない。

5 討 論

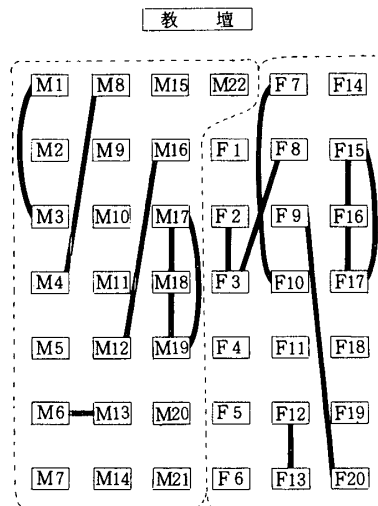
4クラスを通して、共通な特徴がいくつか見いだされた。まず、どのクラスでも、すでにW-0の時点において相互選択の関係にあるペア、トリオ、ないし4~5人からなるグループ (クリーク) が観察された。W-0は入学式の翌日であり、メンバーは相互にまだ名前すらほとんどわからない状態であったことを考え合わせると、この知見は注目に値すると思う。クラス全体を見ると、この時点でソシオメトリックな構造は弱いながらもネットワーク状のそれを示している。結果Aにおいて、ある個人の他のメンバーに対するセンチメント関係がW-0の時点ですでにかなり分化しており、しかもそれはランダムなものではない、と論じた。ここ (D) での結果は、クラスのレベルでもセンチメント関係のパターンはすでに構造の名に値する程度にまで分化していることを示している。田中 (1947) のいわゆる「多数分離型」、あるいは園原・広田 (1953) の「孤立 (探索) 期」はすでにみられなかった。それらの低水準の構造以前ともいべき段階は、存在したとしても出会いのほんの数分ないし十数分の間だけであったのかもしれない。

ところで、初期において親密なセンチメント関係が成立したのは、かなりの場合において、名簿番号の近い者の間においてであった。学級編成にさいして座席は名簿の順に従ってきめられていたので、このことは、座席の近い者同士の間で好意が芽ばえやすいことを示唆している。W-0におけるソシオグラム (ここでは相互選択のみを表示した) を、個人を座席の位置において描いた図D-57~58はこのことを裏づけている。このように、物理的近接が、少なくとも初期における対人関係の成立に影響しているという事実は、Festinger ら (1950) や Newcomb (1961) の知見と一致している。

どのクラスも、W-0における弱いネットワーク構造から、時間の経過とともに明確なサブグループが出現するようになり、やがては高水準のネットワーク構造へと発達していく。しかし、注目すべきは、この変化は決して直線的に進行するのではない、ということである。たとえば、サブグループの形成においても、一度出来たサブグループがより弱いものに戻った上で、次には再度より強固なものが形成される、というようなことがしばしばみられた。またクラス全体の構造が統合されていく過



図D-57 A組の座席と相互選択関係 (W-0)



図D-58 B組の座席と相互選択関係 (W-0)

程においても、同様な退行現象が観察された。すなわち、いくつかの相互に比較的独立したクリークがつくられ、次にはそれらの間に若干の結合関係が現われたかに見えながら、またいくらか構成員を異にしたクリークに分裂し、しかし結局は全体がほぼ一つの構造に結合される、というようなことがみられたのである。田中（1947）の分類による、分団分離型→一部集中型→分団結合型→統一結合型という一定の非可逆的なシーケンスに従って構造化が進行するというわけではないようである。

男子のクラスと女子のクラスを比較すると、女子の方が相互選択の率がやや高いようである。これは結果Aにおいて相互性は女子においてやや高かったこと（表A-10参照）と軌を一にしている。またこれと関連して、女子では比較的サブグループに分かれやすいのに対し、男子では選択が一部のメンバーに集中する傾向がより強かった。

ここで方法論上の問題を若干討論しておきたい。前述のように、ここで報告した結果は専らSMT-1を変換して得られたSMTAという測度に基いている。われわれはいくらかの試行錯誤を繰り返した後、この測度が集団の構造を分析するうえで最適である、という感じを得たのであった。しかしこの変換はやや便宜的なものであり、理論的根拠にとぼしいといわざるを得ない。たとえば、SMT-1で同じ得点を与えていても、その被験者の与えた得点の分布から、異なった時点では異なったSMTAの値に変換されるようなこともあった。構造の発達が直線的ではなかったという知見は、このような変換技術上のアーティファクトによっているという可能性がないではない。相互選択の率が時点と一義的關係をもたなかったこともこれと関係があるのかもしれない。そもそも被験者に101点尺度上での評定を求めることの是非

も含めて、これは検討を要する問題を含んでいる。

次に、TG法を解くことによって個人メンバーのソシオグラム上での位置が一義的に決定はされたが、構造の比較分析においてはこのメリットを十分に生かすことができなかった。旧態依然たる主観的方法で解釈したにとどまった。これについては、任意の2時点間での構造の変化の程度を、例えば、両時点間において個人成員がTG空間内で移動した平均距離を算出することによって、定量的に記述する方法が考えられる。これについては他日を期したい。

なお、ソシオグラムは個々の成員の他成員に対するセンチメント関係を集団全体として集約したものにはすぎないが、われわれは以上の分析において、それがあたかも一様の意味をもって実在しているかのように記述してきた。しかし、それによって表わされる構造が各成員にとってどの程度リアルなものであるかについては困難な問題が横たわっている。例えば、ある集団の初期におけるソシオメトリック構造と、時間がある程度経過してからそれが類似していたとしても、だからといって、集団の過程や個人成員の行動に対してものその意味が類似しているとは言えないであろう。初期ではその構造に対する認識が浅いために、構造上の位置が自分から離れたところにある他成員への働きかけの仕方は、かなり探索的とならざるを得ないであろう。それに対して、相互作用が十分に交換された後では、ソシオグラムの可視性はずっと高くなっており、その知識が個人の行動を相当程度にまで規定するかもしれない。この意味で、ソシオグラムに表わされた構造が伝達できる情報には制約があるといわなくてはなるまい。このことは、対人関係の発達を考える上でも重要な implications をもつような、新しい集団構造の記述法の要請へとつながっている。しかし

これは早急に解決できる問題ではない。

最後に、われわれは中学一年生の被験者に異性の級友に対するセンチメントを答えさせることは抵抗が大きすぎると考え、SMT-1の評定の対象を最初から同性の級友に限った。したがって、結果はAM, AF, BM, BFという同性から成る学級の下位集団（クラス）を単位として分析せざるを得なかった。しかし、表面的には

異性間の対立の激しい年齢であるとはいえ、内面的なセンチメント関係は成立し、分化しているはずである。これが同性同士の関係にもかなりの影響を与えずにはおかなかったであろう。したがって、適当な方法を講ずることにより、学級全体のソシオメトリック構造が扱うことができるようにしないかぎり、得られた知見の一般性には制約を免れぬであろう。

E 特徴的な諸事例*

前掲の集団構造の分析では、主として4クラスの集団構造の時点別の特徴を、全体的視点から論じてきた。したがって、サブグループがなぜ成立してきたのか、各成員をソシオグラムの中心部あるいは周辺部に位置させる規定要因は何なのか、などについては触れられていない。しかしながら、対人関係の成立・発展の過程や集団構造の推移を解明していくためには、このような点についての考察が肝要であると考えられる。そこで本節では、各クラスから特徴的な個人やサブグループを選び出し、繰り返し実施された3種類の調査データおよび単発的に調査されたいくつかの個人属性に関する資料を基に、これら諸事例について記述・考察を進めていきたい。

特徴的な個人の抽出は、SMT-1で受けた評定値と与えた評定値の継時的なパターンを基準に行なわれた。基準は以下の3つである。i) 選択地位が一貫して高い、または低い個人。ii) 同じくそれが、時点の経過に伴って上昇あるいは下降していく個人。iii) 他成員に与える好意度評定の平均が著しく高い、または低い個人。こうして選出された個人のSTM-1での評定値や被評定値の継時的なパターンは、各クラスごとに、それぞれの冒頭部で図示される。

表E-1 対象となった特徴的な諸事例

クラス	対象	個人	サブグループ
A	M	4 11 16	1 - 2 - 3 - 15 - 17 5 - 7 - 10
A	F	4 12 14	6 - 8 - 16 1 - 19
B	M	1 5 13	1 - 8 - 11 2 - 3
B	F	4 10 11	9 - 12 - 13 - 20

* 執筆者：吉田俊和（1, 2および5）・鹿内啓子（3および4）

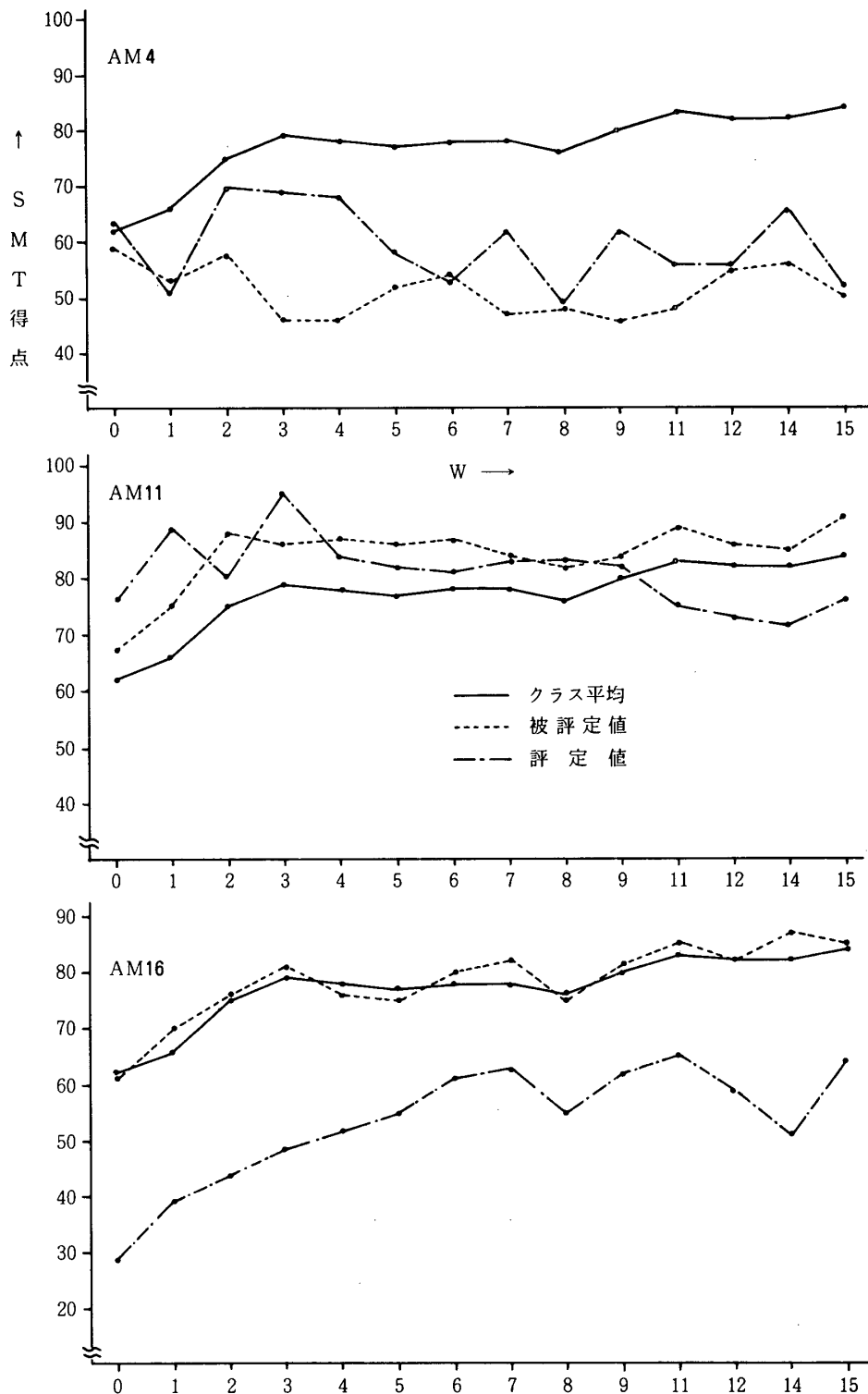
また、特徴的なサブグループの抽出は、SMTBによる各クラスのソシオグラムに基づいて行なわれた。成員の出入りや結合の強さに変化はあるものの、比較的初期の時点から選択関係が形成されているサブグループが選ばれた。こうしたサブグループ内の成員に関する選択関係の継時的な様相は、各クラスごとに順次図示されているので参照されたい。表E-1は、本節で記述・考察の対象となる成員とサブグループをクラス別に示したものである。

1 クラスAM

(1) AM4

SMTBに基づいた各時点における被選択数から被排斥数を減じた値（以下これを被選択数という）は、表E-2に示される*。これをみてわかるように、この成員は14時点とも被選択数は著しいマイナスであり、選択地位は極端に低い。また、他成員との相互作用量を測定しているIAS調査においても、受けた得点は最下位である。被選択は、W-0で3から受けたものが唯一であるが、本人は毎回、他成員に対して選択を行なっている。しかし、特徴的なのはその相手が一貫していないことであり全時点を総合すると、11名に対して26回の選択を行なっている。同様に、排斥の方も一貫性がなく、12名に対して19回行なわれている。当然のことながら、同一成員に対する評定の一貫性も欠いており、14時点の間にこの生徒から選択・排斥の両方を受けている成員が6名存在する。たとえば、18はもっとも多い8回の選択を受けている反面、排斥も3回受けている。選択しても、相手に受け入れられないので排斥するのかということ、必ずしもそうした傾向は見出せない。とにかく、クラス内での対人関係に多くの問題をかかえている生徒といえよう。

* ここでは、「選択」とはSMTBで（+）、「拒否」とは（-）の段階値を与えたことを意味する。また「選択地位」はここでは被選択数を指す。



図E-1 クラスAMで対象となった個人のSMT-1の推移

次に、他成員がこの生徒の性格をどのように認知しているかをみてみよう。図E-2は、クラスAMで対象となった3名の生徒が、PPI調査の8個の性格特性について、級友から受けた評定値の平均と、クラスの平均を示したものである。これをみて明らかなように、＜個人的親しみやすさ＞、＜社会的望ましさ＞を表す4特性で、

平均から大きくネガティブな方向へ偏っていることがわかる。＜活動性＞や＜力本性＞を表す特性でも、おとなしくて意志が弱く、消極的とみられている。要するに、級友からかなり強烈な負のイメージをもたれている生徒といえる。

学業成績や諸調査の結果といった個人の属性は表E-

3に示される。9教科いずれも5以下という低い評価しか受けておらず、主要5教科を合計した成績は下位から2番目である。実技教科にもこれといった得意科目はなく、成績の面でも問題がある。部はどこにも所属していない。興味の方は漫画部だけに強い関心を持ち、その他は野球・サッカーを除くと、まったく興味を示していない。図書委員は、この生徒を含めてクラスに7名いるが、そのうち6名は部活動に所属せず、ソシオグラムでは1つのサブグループを形成している。ところが、4はこれらの成員からも排斥を受け、おそらく図書委員としての役割も遂行していないと考えられる。

Y-G性格検査の結果はA E型である。劣等感、非客観性、非協調性の標準点がいずれも4であり、社会的不適応タイプといえる。また、支配性の標準点が1であることは、対人関係の持ち方のまずさを表すものといえよ

う。self-esteem調査では、男子の平均得点よりやや低く、とくに積極・独立性の尺度で低くなっている。適応性診断検査の結果では、個人適応に比して社会適応が悪く、全体のT値は45となっている。下位特性の中では、自尊感情や統率性がT値34と低いし、学校関係もT値42と良くない。

以上のように、成績面・性格面での問題がそのまま対人関係の問題に繋がっている生徒といえる。容貌的にも、あんこ型の体型に度の強そうなメガネ、そして体育の成績が3であることを考えれば、どうみても動きは鈍そうである。これにY-G性格検査での客観性、協調性の欠如を加味すれば、選択地位の低さはうなずけよう。調査期間中に、2回も他成員との間にケンカ騒ぎを起こした事実も考慮すると、典型的な排斥児像が浮び上がってくる。

表E-2 クラスAMで対象となった成員の選択地位

ケース 番号	時 点	(被 選 択 数 - 被 排 斥 数)													選 択 地 位			
		W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15	前半	後半	全体
AM 1		0	2	2	5	4	4	4	2	4	2	3	5	4	3	3	4	4
AM 2		3	3	2	3	2	2	3	3	6	7	4	5	2	3	4	2	3
AM 3		2	4	0	2	2	1	5	2	4	1	4	2	1	2	6	6	5
AM 4		-3	-6	-6	-9	-9	-8	-5	-8	-7	-10	-9	-6	-5	-7	23	23	23
AM 5		1	1	4	5	4	6	4	4	5	4	6	4	3	3	2	3	2
AM 7		-2	0	1	3	1	3	6	3	2	1	4	2	4	3	9	5	7
AM10		0	1	1	3	2	5	5	3	2	1	3	3	2	1	5	8	5
AM11		1	4	8	4	5	3	7	6	5	3	8	5	5	5	1	1	1
AM15		1	1	2	1	0	-1	2	3	-1	0	0	-1	-3	1	11	21	17
AM16		0	0	-1	-1	1	2	2	3	1	1	1	1	1	1	14	10	13
AM17		-1	0	2	-1	1	-2	-1	0	-3	-1	0	-1	-2	0	21	22	22

表E-3 クラスAMで対象となった成員の諸特徴

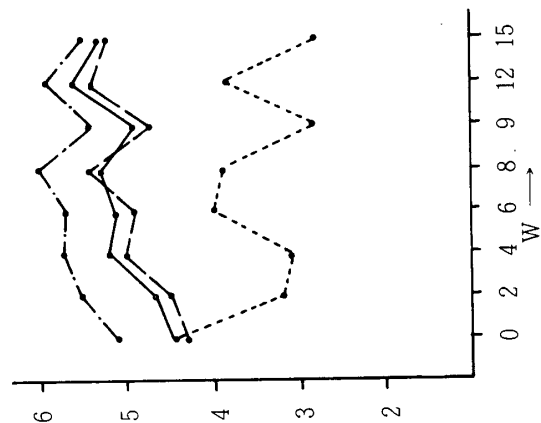
属性	学 業 成 績									Y - G 性 格 検 査						適応性診断検査			self-esteem			
	英語	数学	国語	理科	社会	音楽	美術	保・体	技・家	E系統	C系統	A系統	B系統	D系統	型	個人	社会	全体	自己への高い評価	対人的不安のなさ	積極・独立性	全体
ケース番号																						
AM 1	8	7	7	6	6	6	6	7	6	0	5	4	3	8	D	63	50	55	48	29	26	132
AM 2	5	5	6	8	7	6	5	8	5	6	1	4	7	2	B'	42	34	37	46	21	23	115
AM 3	3	4	6	6	7	5	6	6	5	3	1	8	3	1	A	53	42	47	59	28	25	140
AM 4	4	3	5	5	4	4	3	3	4	5	1	6	3	1	A E	50	37	45	54	27	22	126
AM 5	7	7	7	6	5	7	6	8	6	3	4	6	2	3	A*	58	50	55	45	27	30	125
AM 7	8	8	7	7	8	6	9	8	8	0	6	2	4	10	D	55	55	58	47	22	26	121
AM 10	6	5	5	5	3	6	6	6	5	0	3	5	4	7	D	58	55	58	60	33	34	153
AM 11	8	8	8	8	9	7	6	7	7	0	6	2	4	10	D	55	63	63	60	35	34	163
AM 15	4	3	8	7	5	7	8	8	3	4	1	4	7	4	B'	45	45	45	54	24	22	124
AM 16	8	7	8	9	7	9	10	5	6	3	6	6	0	3	C'	58	47	53	62	27	24	138
AM 17	6	4	5	6	5	8	5	5	6	1	6	2	4	9	D	58	45	53	56	39	34	155

注 1. 学業成績は1学期の成績(10段階評価)である

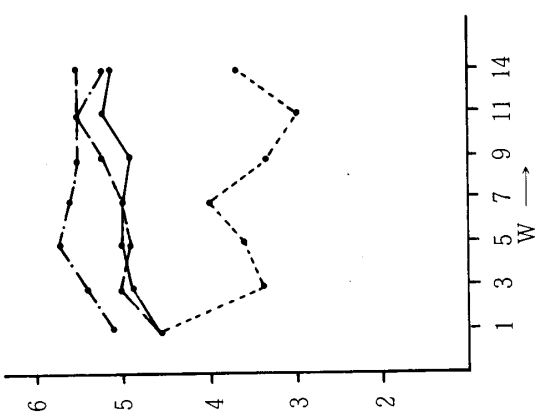
注 2. 適応性診断検査の値はT値である

—— クラス平均 - - - - - AM 4 - - - - - AM 11 ——— AM 16

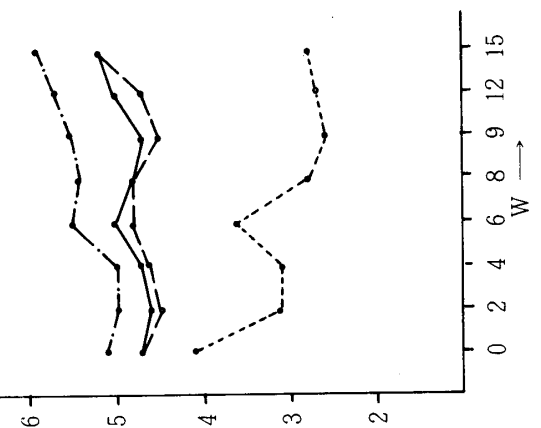
親しみにくい(1)―親しみやすい(7)



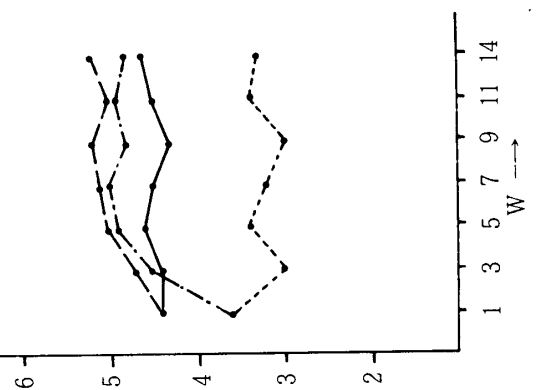
冷たい(1)―あたたかい(7)



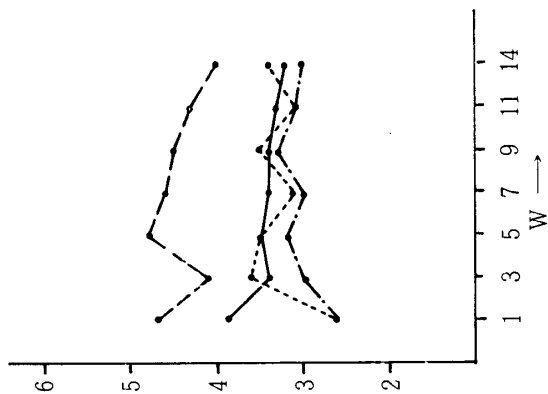
頭の悪い(1)―頭の良い(7)



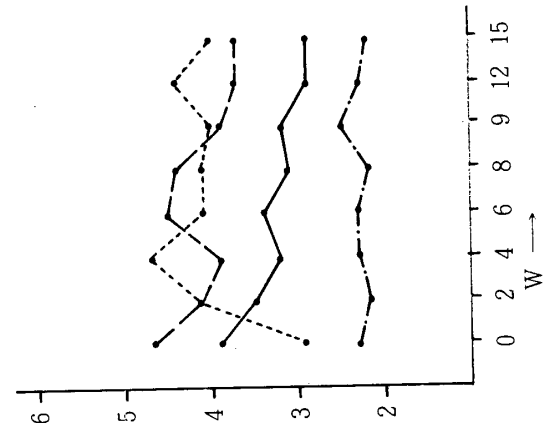
ふまじめな(1)―まじめな(7)



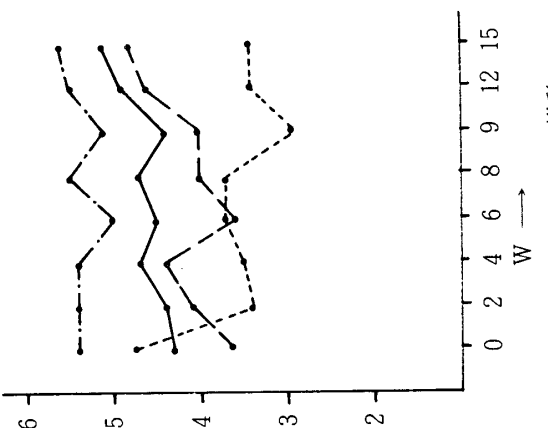
おしゃべりな(1)―無口な(7)



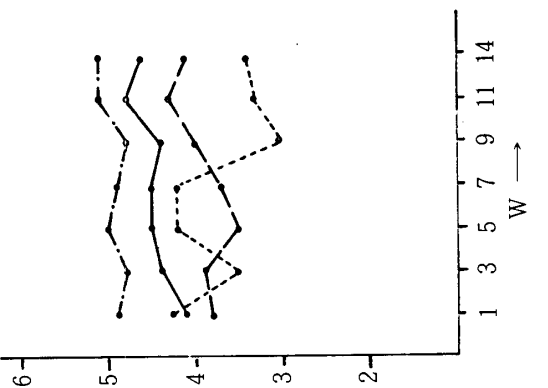
活発な(1)―おとなしい(7)



意志が弱い(1)―意志が強い(7)



消極的な(1)―積極的な(7)



図E-2 クラスAMで対象となった個人のPPIの推移

(2) AM11

この生徒の特徴は、表E-2から明らかなように、その選択地位の高さにある。W-0を除けば、13時点のうち9時点でクラス内での被選択数がもっとも多くなっている。部活動はサッカー部に所属し、同じクラブに所属する他の6名からの選択が多く、部活動への満足度も高い。とくに選択地位の総合順位が2位である5からは、W-1以降W-11まで連続して選択を受け、その間W-1からW-4までは相互選択関係になっている。サッカー部のこの強力コンビは、野球部・テニス部といったスポーツ系クラブに所属するメンバーたちの中心的存在になっていく。ただし、5が野球部の7や10といった特定のメンバーと継続した相互選択関係をもつのに対し、この生徒にはそれがみられず、かえって被選択数が増えているのかもしれない。

図E-2の級友からの性格認知では、おしゃべりな一無口なといった特性が平均値に近い値であることを除けば、いずれも社会的に望ましい方向に認知されている。とりわけ、活発で意志が強いとみられていることは、スポーツマンの魅力を備えているものと思われる。実際に本人も、一対比較による教科興味調査で保健体育を最上位にランクするほどスポーツ好きである。

学業成績は表E-3に示されるが、主要5教科はすべて8以上の評価を受けており優秀である。性格認知でも後半、とくに頭が良いと認知されているのは、こうした事実裏付けされた結果といえよう。

Y-G性格検査の結果では、情緒不安定性を表す4尺度の標準点が1または2であり、思考的外向性や支配性の標準点は4である。また、のんきさの標準点も5で衝動傾向が強い。結局、判定はD型であり、情緒安定・社会適応・積極型である。適応性診断検査でも、個人適応の自尊感情が低いほかはいずれも高く、全体のT値も63で適応の良さを示している。self-esteem調査の下位尺度では、いずれも平均よりかなり高く、全体の得点もクラスで3番目に高い。このほか、他メンバーから受けた相互作用量も5について2位となっている。

以上のことからこの生徒を概括してみると、成績優秀で自己評価が高く、性格面でも情緒安定・適応・積極型である。そして、他メンバーからも好ましい性格とみられている理想的な生徒といえる。この生徒と同じサッカー部に所属する5は典型的なスポーツマンで人気もあるが、成績が中位であること。逆に、この生徒より成績が優秀な9や19はスポーツ系クラブに所属していないこと。この2つを考え合わせると、この生徒がクラスのリーダーになっていくことは必然的といえよう。

(3) AM16

SMT-1で他者に与える評価値の平均が、図E-1に示されるように著しく低い。W-0の29から始まり、W-15でも64と60をわずかに超えるだけである。この生徒の評価尺度の使用法に問題があるかという点必ずしもそうではない。W-0を除いては、80以上の評価値がみられ、毎回数名の他メンバーに対する選択は行なわれている。問題なのは、その排斥数の多さにあるといえよう。平均して、毎回約2名の他メンバーに対して排斥を行っており、排斥総数が選択総数を上回るという特異な傾向をもつ生徒である。では、本人も他メンバーから排斥を受けやすいのかということ、全時点を通じてわずか4回の排斥を受けているだけである。表E-1の選択地位をみると、後半わずかに順位が上昇しており、総合では13位と中位である。ただし、この被選択数の多くは、12からのものであり、それ以外ではW-5からW-8で13、W-7で23からみられるだけである。調査時の欠席がW-4までに3回あるため、12との相互選択はW-5から始まり、W-15まで続いている。12以外の他メンバーとの相互選択はなく、対人関係の広がり(emotional expansiveness)は限定されている。IAS調査での受けた相互作用量も12に次いで下から3番目であり、対人接触の頻度も少ない。

級友からの性格認知は図E-2に示されるように、〈個人的親しみやすさ〉の2特性と頭の良さが平均値に近く、まじめさが後半高くなっている。そして、〈活動性〉や〈力本性〉を表す特性がいずれも平均値をかなり下回っている。すなわち、まじめではあるが、無口で、おとなしく、消極的な生徒とみられているようである。とくに〈活動性〉の点では、12とともに低い値を受けており、対人接触の頻度と密接に関係している。

部活動は、もっとも興味をもっているテニス部に所属し、満足度も高いが、同じクラブの22や23との親しいつき合いはない。学業成績は、美術・音楽・理科といった教科で高い評価を受け、主要5教科の成績も上位である。ただ保健体育や技術家庭といった体を動かす教科は得意ではなく、保健体育への興味もゼロである。

Y-G性格検査の結果は、情緒不安定性や活動性を表す5尺度とのんきさで標準点が2となっているほかは、標準点が3という平均的な得点傾向を示している。系統値によるタイプはC型であり、消極的で内向タイプの生徒といえる。適応性診断検査では、個人適応がT値58と問題がないのに対し、社会適応はT値47と低くなっている。とりわけ社会的技術や統率性といった特性での値が低く、性格面での非活動性や消極性が影響していると考えられる。self-esteem調査の得点は、平均をやや上回る程度であるが、自己に対する高い評価の尺度では非常に高い得点を示している。

以上みてきたように、学業成績の面では優秀であり、自己に対する評価も高く、個人的適応もよい。しかし、性格面では消極内向タイプで、級友からも無口でおとなしい生徒とみられており、友人関係の拡がりがない。唯一の友人は12であり、その12とも級友から類似した性格をもっているとみられている。ソシオグラムでの2人は、W-5あたりから周辺的な位置に孤立して存在している。このような生徒からみると、騒々しくてデリカシーのない級友とは交流をもつ気になれず、むしろ不快な存在と映るのかもしれない。これが排斥数の多さに繋がり、他者評定の低さになって表れているのであろう。

(4) AM, 1-2-3-15-17

このサブグループの各時点における選択関係は図E-3に示される。W-0ですでに萌芽し、W-6からW-8にかけてもっとも強い結合関係がみられる。ただし、W-8以降、15や17に対するグループ成員からの選択はなくなり、とくに17はW-11を境にサブグループから離れ、W-13、W-14では孤立している。グループ内では、1と3の結びつきがもっとも強く、10回の相互選択関係がみられる。2はサブグループ内の成員だけでなく、サブグループ周辺他成員からの選択も多い。したがって、選択地位も高く、総合で3位となっている。1は4位、3は5位であるが、15は17位、17は22位と低い。この理由は、後半にグループ内の成員から選択がなくなったこと、および2人の被排斥数が多いことによる。他の3人がほとんど排斥を受けていないのに15は4名から延べ9回、17は5名から延べ18回排斥を受けている。

部活動へは17だけが参加し、サッカー部に所属している。しかし、同じクラブに所属している他の6名との交流は少なく、わずかにサブグループを離れたW-11で8から選択を受けているが1回限りである。同様に、W-11とW-12で5、7、11を選択しているが返報性はない。

IAS調査では、1、2、3が明確に5名のサブグループを他成員と区別している。1はとくにこの傾向が著しく、W-1からW-7では他の4名にのみ2点を与えている。15と17は、他の3名と比べるとその傾向は弱い。

級友からの性格認知では、＜活動性＞や＜力本性＞の特性で平均ないしは平均以下の評定を受けており、おとなしい消極的な生徒の集まりとみられている。＜個人的な親しみやすさ＞や＜社会的望ましさ＞の特性では、17だけが頭が悪く、冷たく、ふまじめであるとネガティブな方向に認知され、他の4名は平均値に近い。2と15は、いずれの特性も平均値に近い評定を受けており特徴のない生徒である。

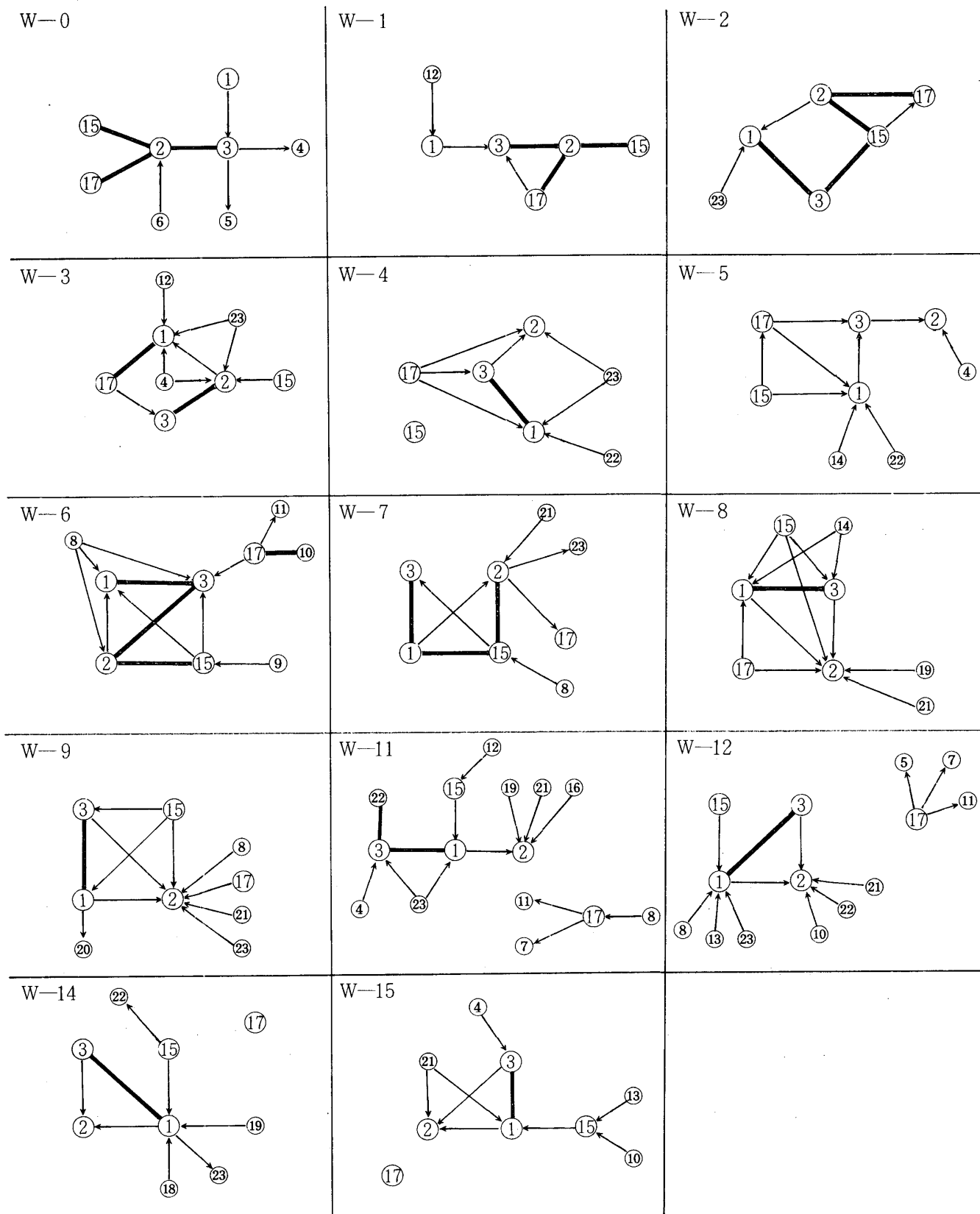
学業成績に関しては、1と2が中位であるのに対し、他の3名はいずれも下位に属する。Y-G性格検査の結果

は、1と17がD型であり、2と15がそれぞれBとB'型、3がA型となっている。級友からの認知と自己認知が合致しているのは3だけであり、他の4名は異なった自己像をもっている。とくに、1、15、17は支配性や社会的外向性の標準点が4になっており、対人的積極性や指導性をもっているかのようにみえるが、他の面も考慮に入れると、それらは仲間うちだけで通用するものであろう。1と17は情緒的に安定し、社会的適応もよいようであるが、2と15はその逆の傾向である。この傾向は適応性診断検査にも表れており、1と17がそれぞれ全体のT値55.53を示すのに対し、2と15はそれぞれT値37、45と低くなっている。3のT値は47である。また、self-esteem調査の得点でも、17は高く、1も普通であるが、2は低いし、15もやや低くなっている。注意すべきことは、適応性診断検査の下位特性である学校関係で5名全員のT値が37から45と低い値を示していることである。早い時期からサブグループを形成し、対人関係も順調で学校への適応はよいと思われるのだが、結果は異なっている。附属中へ来てよかった点として友達を挙げているのも2と17だけである。

結局、5名に共通しているのは、いずれも図書委員（この他にも2名いる）ということである。さらに、クラス内で部活動に所属していない7名のうち4名がこのサブグループに含まれる。5名とも身体が小さく、クラス他成員からは幼くみられていると推察される。ソシオグラムでは、初期から1つの大きなサブグループを形成していてもクラス内の傍流であり、級友からはおとなしい消極的な生徒の集まりとみられている。手短かにいえば、放課後、図書室や教室で漫画を読んだり、わいわい騒いだりしている子供っぽい雰囲気をもったサブグループといえる。

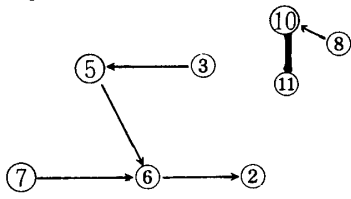
(5) AM, 5-7-10

図E-4は、この3名に関する時点別の選択関係を表したものである。W-3から3者関係が始まり、W-11まで相互選択を含む強い結合がみられる。W-12以降は、10から他の2名に対する選択がなくなっている。一見してわかるように、このサブグループの成員は他成員との交流が活発で、6、11、22、23などと絶えず選択関係をもっている。被選択数による選択地位は、それぞれ2位、7位、および5位と高い。部活動への参加は、5がサッカー部で、他の2名は野球部といった男子の花形クラブに所属している。そして、このサブグループと交流をもつ他成員もほとんどがスポーツ系クラブに属し、元気のいい生徒の集まる核となっている。とくに、選択地位が第1位で成績も優秀な11が、5を媒介としてこのサブグループに加わることによって、はっきりクラスを中心に

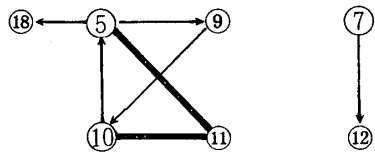


図E-3 クラスAM, 1-2-3-15-17の選択関係

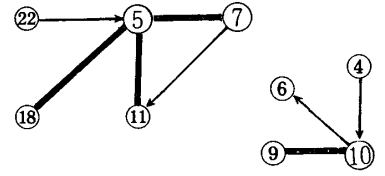
W-0



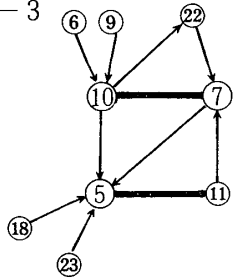
W-1



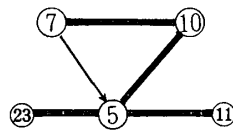
W-2



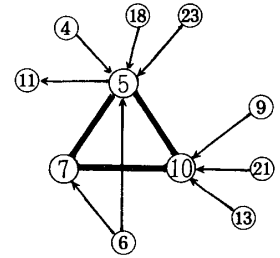
W-3



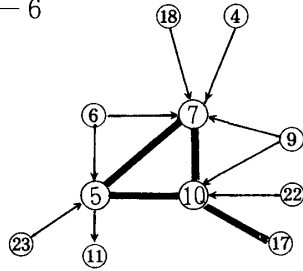
W-4



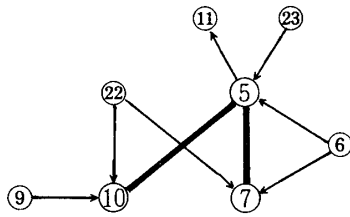
W-5



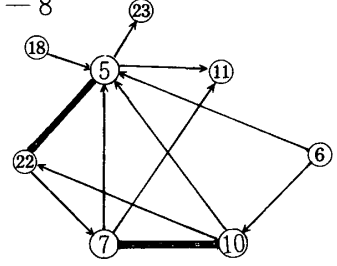
W-6



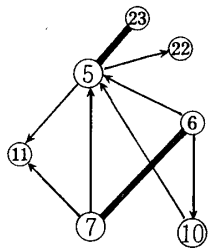
W-7



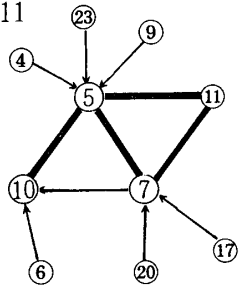
W-8



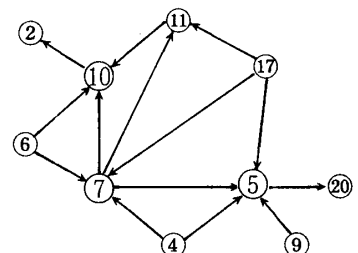
W-9



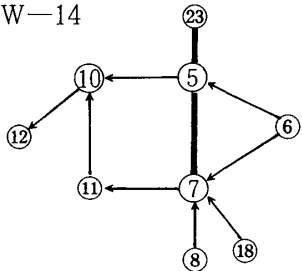
W-11



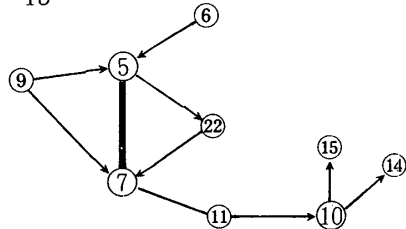
W-12



W-14



W-15



図E-4 クラスAM, 5-7-10の選択関係

なっていく。IAS 調査では、5が多くの成員と活発な相互作用を行ない、自分自身が受けた得点も最大となっているが、7や10はW-7あたりまで、このサブグループを明確に区別している。すなわち、休み時間や授業後に一緒に話したり遊んだりしたという項目で、他のグループ成員や11にだけ2点を与えている。しかし、W-8以降この傾向は弱まっていく。

次に、この3名が級友からどのような生徒と認知されているかについて試みる。まず、＜個人的親しみやすさ＞の2特性では、7と10が平均値をわずかに超える程度であるが、5は親しみやすく、あたたかいと認知されている。＜社会的望ましさ＞では、7が頭が良く、まじめであると認知されているが、5と10はほぼ平均値に近い。＜活動性＞や＜力本性＞に関しては、共通して大きく偏っており、おしゃべりで活発、意志が強く積極的と認知されている。例外的に、7だけはおしゃべりとみられていないし、他の3特性もW-5までは、そのようにみられていない。

表E-3による個人の諸特徴をみると、部活動への興味は、3名ともサッカー部、野球部にもっとも興味をもち、総じて文化系のクラブに対する興味は少ない。学業成績は、7が上位、5が中位、10が下位と3段階に分かれる。3名とも保健体育に興味をもち、個人の成績の中でも相対的によい評価を受けている。とくに5はそうであり、クラスの体育委員でもある。

Y-G性格検査の結果は、5がA型、7がD型、10がD型である。5は、活動性の標準点が2で級友からの認知とずれているが、のんきさの標準点が5であり、この衝動的な性質が他成員からは活発とみられているのであろう。7は、活動性、思考的外向性、支配性、社会的外向性の標準点が4であるのに対し、情緒不安定性や社会的不適応を表す6尺度の標準点が1または2となっており、級友からの認知とも一致する。10は、活動性、支配

性の標準点が5、のんきさや社会的外向性の標準点が4となっている。これらのことから、5は、主観的に物事を割り切っていくところから積極的とみられ、協調性があり攻撃性も低いので他成員からサッパリしていて親しみやすい生徒とみられていると思われる。7は、活動的で成績もよく、まじめで頭が良いとみられている。10は、とにかく活動的で対人的な接触を好んでいるが、知的な面や被排斥数を考え合わせると、元気はいいが“ガサツ”な生徒とみられているようである。

適応性診断検査の結果は、3名とも個人適応・社会適応とも問題ない。ただ、5が選択地位が高いのに、統率性のT値が47と低くなっている。self-esteem調査の得点は、10が高い得点を得ているのに対し、5と7は平均よりやや低い。

全体的にみれば、このサブグループは、野球部員である7と10にサッカー部員である5が加わり、さらに5を媒介にしてサッカー部の11が加わってくることにより強力となる。5のもつ気やすさと、11のもつリーダーシップがうまく噛み合い、スポーツ系クラブに所属する生徒たちが周りに集まり、3名のサブグループを核とした対人ネットワークが形成されたと考えられる。

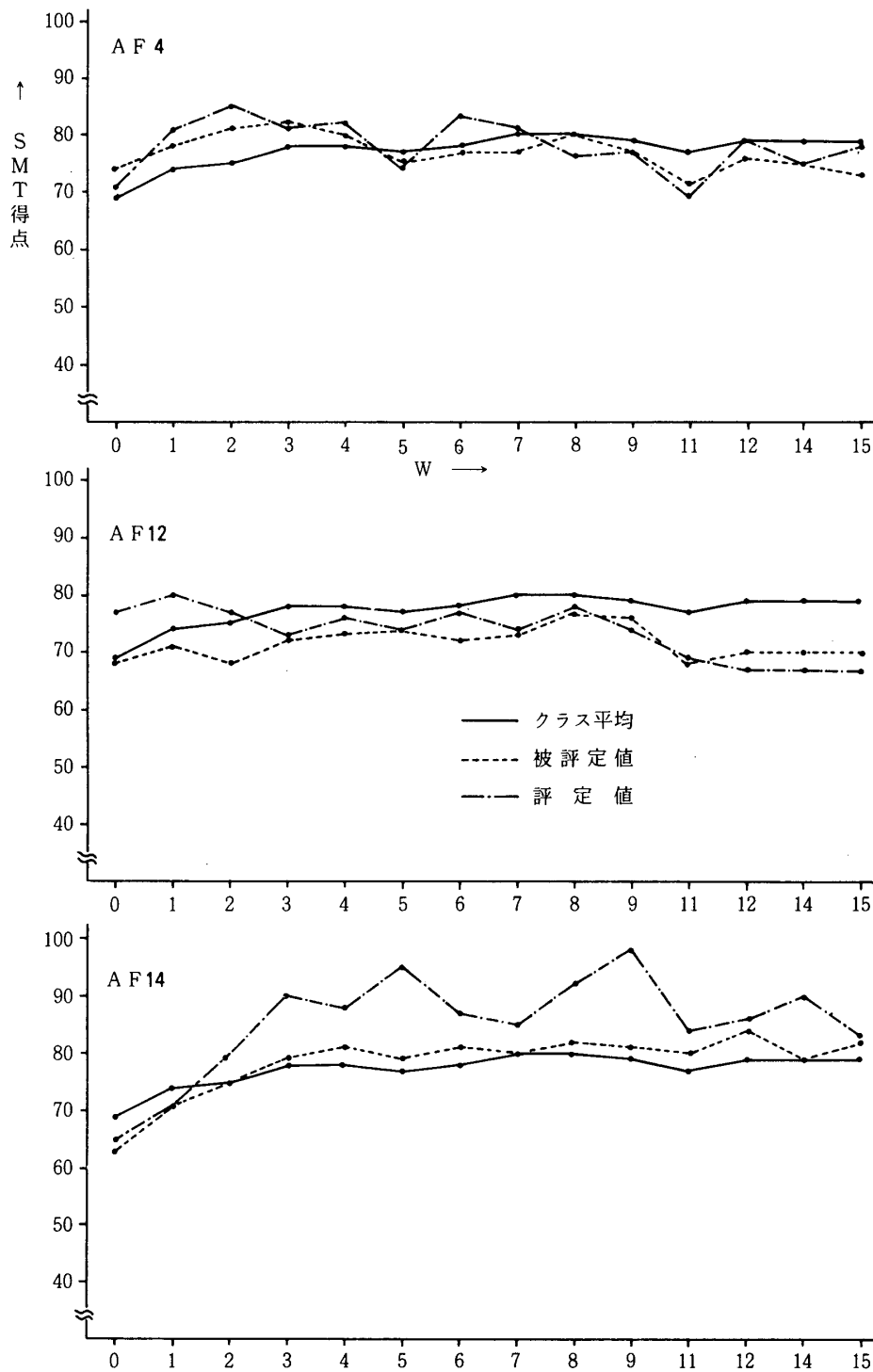
2 クラスAF

(1) AF 4

表E-4による被選択数の推移をみて明らかなように、W-0からW-3といった初期に被選択が多く、その後は被選択がゼロの時点が5回もみられる。この傾向は、図E-5のSMT-1でも同様である。多くの成員が時点の経過につれて受けた評定値の平均がゆるやかな上昇を示すのに対し、この生徒は下降気味である。したがって、選択地位は前半の5位から後半には11位と下降している。他成員からの排斥はW-9で2から受けただけであり、他成員に対する排斥はみられない。選択関係は7

表E-4 クラスAFで対象となった成員の選択地位

ケース 番号	時点	(被 選 択 数 — 被 排 斥 数)														選 択 地 位		
		W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15	前半	後半	全体
AF 1		-1	1	1	2	0	3	1	2	2	0	1	2	2	2	9	8	8
AF 4		2	3	3	2	1	0	0	0	1	1	0	0	2	1	5	11	10
AF 6		4	1	1	-1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	9	17	15
AF 8		2	2	2	1	4	1	4	3	5	2	3	3	4	2	2	2	1
AF 12		1	3	-1	1	0	2	0	-1	1	1	1	0	0	1	12	15	15
AF 14		0	0	1	3	3	3	5	3	4	3	4	4	3	3	3	1	1
AF 16		0	1	2	2	4	3	2	4	3	2	4	0	1	2	3	5	4
AF 19		2	0	1	1	3	1	1	1	2	3	2	2	2	2	7	6	6



図E-5 クラスAMで対象となった個人のSMT-1の推移

との間に多く、10回の選択を行ない、7回の選択を受けているが、このうち6回は相互選択になっている。興味深いのは、W-3からW-6にかけて7に対する選択がなくなり、このあたりから被選択数が減少していることである。おそらく、選択地位の高い7から離れたことによる影響と思われる。W-7以降は、また7に対する選

択を始めるが、被選択数の増加はみられない。

次に、級友による性格の認知についてみてみよう。図E-6は、図E-2と同じく、クラスAFで対象となる3名が、8個の性格特性について他成員から受けた評定値の平均である。この生徒は、頭がよく、まじめで意志が強く、積極的とみられている。しかし、親しみやすさ

表 E-5 クラス A F で対象となった成員の諸特徴

属性 ケース 番号	学 業 成 績									Y - G 性 格 検 査						適応性診断検査			self-esteem			
	英語	数学	国語	理科	社会	音楽	美術	保・体	技・家	E系統	C系統	A系統	B系統	D系統	型	個人	社会	全体	自己への 高い評価	対人的 不安の なさ	積極・ 独立性	全体
A F 1	7	6	6	4	5	10	7	5	6	2	4	8	0	2	A	63	55	58	47	25	21	120
A F 4	9	6	10	10	8	10	8	6	10	2	8	3	1	7	C	73	73	73	58	38	32	162
A F 6	5	4	6	5	4	6	7	7	7	0	3	4	5	8	D	55	58	58	60	28	25	139
A F 8	7	6	8	8	6	8	7	8	6	1	2	6	4	5	AD	58	53	58	45	29	24	124
A F 12	7	3	5	4	5	7	5	7	5	2	6	4	2	6	AC	42	47	42	50	23	21	117
A F 14	9	6	5	3	4	9	7	3	6	5	0	4	8	3	B	42	45	42	42	24	23	113
A F 16	8	7	8	8	8	8	9	5	7	1	4	5	3	6	AD	42	55	47	54	30	29	139
A F 19	6	9	9	8	8	10	8	4	6	0	4	6	2	6	AD	55	50	53	44	26	23	117

注 1. 学業成績は 1 学期の成績 (10 段階評価) である

注 2. 適応性診断検査の値は T 値である

やあたたかさといった特性は、時点の経過につれて平均より下降している。つまり、社会的に望ましい性格特性を備えてはいるが、個人的な親近感をもたれていない生徒といえる。

テニス部に所属しているが、満足度は低い。このことは、同じクラブに所属する 5, 7, 8, 10 を W-7 ぐらいまで選択しているものの、被選択は 7 からだけという返報性の低さに起因するのかもしれない。

学業成績は表 E-5 に示されるように、数学と保健体育が 6 である以外は、きわめて高い評価を受けている。もちろん、クラス内での成績は断然トップである。

Y-G 性格検査の結果は C 型である。情緒不安定性を表す 4 尺度と社会的不適応を表す 3 尺度は、いずれも標準点が 1 または 2 となっている。このほか、のんきさの尺度で標準点が 2、支配性尺度で 4 となっている。これから出てくるイメージは、社会的適応がよく、情緒的にも安定した熟慮型リーダーであるが、それは現実の人氣とは結びついていない。適応性診断検査の結果も、個人適応・社会適応ともずば抜けてよい。self-esteem 調査での得点はクラス内で 2 番目に高い。

要するに、自分自身でかくあらねばならないという自己像を設定し、それに向かって一生懸命努力するタイプと思われる。それ故、教師からみれば申し分のない生徒であるが、級友からみれば優等生すぎておもしろみのない生徒になっている。

(2) AF 12

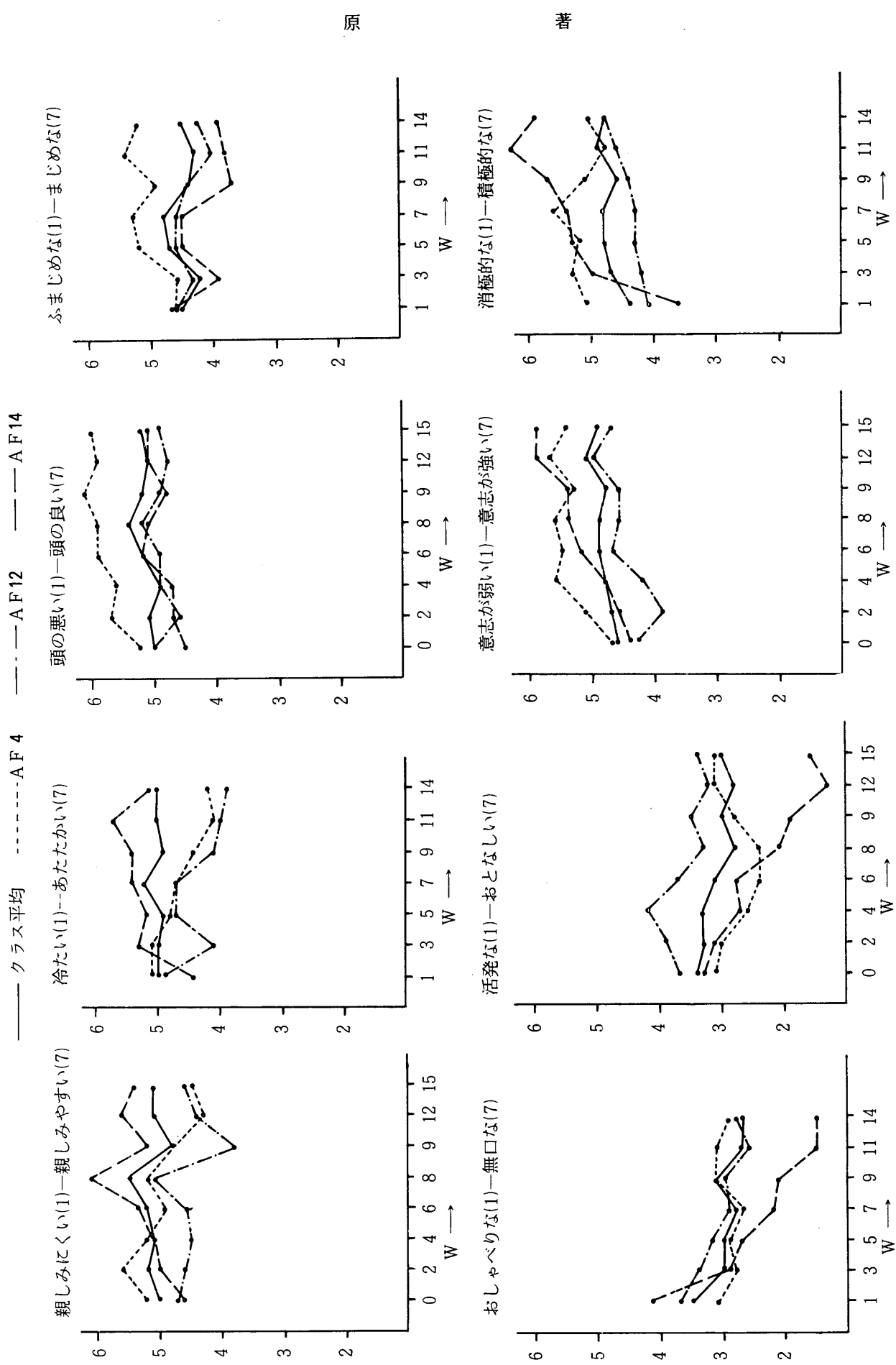
選択地位は、前半が 12 位、後半が 15 位であり、図 E-5 に示される被評定値の上昇もみられない。この生徒の特徴は、かなりの選択も受けてはいるが、被排斥も多いことである。被排斥数は、選択地位が最下位である 3 の 13 に次いで多い 11 である。同じバトミントン部に所属する 9 と強い選択関係で結ばれており、W-14, W-15 の欠席を除くと、12 回のうち 8 回の相互選択関係をもっ

ている。この関係は、IAS 調査においても顕著であり、学校の行き帰りや部活動への参加はいつも一緒である。問題なのは、9 との結びつきがあまりに強く、2 人が閉鎖的なペアになっていることである。このため、同じクラブに所属している 11 からは 5 回もの排斥を受けている。9 も W-1 で 11 から選択を受けていたにもかかわらず、その後 2 回の排斥を受けるようになる。また、W-1, W-2, W-9 で 5 と 3 回の相互選択関係をもつが、この 5 が 9 を排斥し続けるという結果も引き起こしている。

図 E-6 による他成員からの性格認知では、〈個人的な親しみやすさ〉を表す 2 特性と〈活動性〉を表す 1 特性で平均からのずれが大きいことがわかる。〈力本性〉を表す 2 特性も、平均よりやや低くみられている。すなわち、級友からは、おとなしくて消極的、冷たくて親みにくい生徒とみられているようである。事実、IAS 調査による他成員から受けた相互作用量も 15 位と低い。

学業成績は、主要 5 教科で下位から 2 番目と低いが、英語だけは普通である。英語には強い興味をもち、期末テスト終了後に短期間アメリカへも行っている。

Y-G 性格検査の結果は、抑うつ性、劣等感、神経質といった情緒不安定性を表す 3 尺度と非協調性、攻撃性、活動性といった社会的不適応や活動性を表す 3 尺度で標準点が 2 となっている。そして、のんきさや思考的外向性といった衝動傾向を表す 2 尺度の標準点が 4 となっている。これから浮かんでくるのは、もの静かで落ち着いてはいるが、協調性に欠け、あまり物事を深く考えない生徒像である。この思慮のなさが、他成員からの排斥を受ける素因になっているのかもしれない。適応性診断検査の結果は、全体の T 値 42 と低い。個人適応の中では自己統制が T 値 34 と極端に低くなっている。社会適応では学校関係だけが T 値 58 と高く、9 と親しくすることによって学校への適応を保っているようである。本人も附中へ来て一番よかったこととして、「よい友人ができた」



図E-6 クラスAFで対象となった個人のPPIの推移

ことと回答している。self-esteem 得点も平均より低く、とくに積極・独立性の尺度が低くなっている。

全体的には、おとなしい消極的な生徒であるが、性格面での衝動傾向がわざわざいて、級友からは好ましい友人とはみられず被排斥数も多い。また、学業成績の不振も、英語という特別な教科によってなんとか切り抜けているようである。いいかえれば、9と英語がこの生徒の支えであり、これが崩れた場合には問題になりそうな生徒である。

(3) AF14

この生徒は、図E-5をみてわかるように、他成員から受ける評定値も高いが、与える評定値も高く、W-5やW-9では平均値がそれぞれ95、98と100近くに達している八方美人的なところがある。表E-4の被選択数は、W-3から増え始め、総合では8と共に選択地位が第1位となっている。初期には1と相互選択関係をもつが、その後13や15との選択関係へ進み、W-8以降では後述するサブグループの8や16とも選択関係をもつことにより、ソシオグラムの中心部へ位置するようになる。対人関係の拡がりも、8名を選択し、9名から選択を受け、その他成員は共通しているという理想的な様相をみせている。しかも、結びついていて他成員のほとんどは選択地位が中位より上であり、下位の成員との交流はみられない。

級友からの性格認知は、図E-6に示されている。〈活動性〉や〈力本性〉を表す4特性は、W-5、W-6以降平均から大きく偏り始め、非常におしゃべりで活発、意志が強く積極的と認知されている。また、〈個人的親しみやすさ〉を表す2特性も中期以降平均を上回り、親しみやすくあたたかいと認知されている。これに、ふまじめなを加えると、明るく活発でひょうきんな生徒像が浮かんでくる。この点は、調査時にも数回話しかけられた時の印象と一致する。

部活動は、もっとも興味のあるバスケットボール部に所属し、満足度も高い。同じクラブに所属する18からは、W-6以降連続して選択を受けているが、選択はしていない。ただし、これはSMTBの選択基準が3名に限定される結果であり、IAS調査による相互作用は活発である。

学業成績は、教科に対する興味と対応し、英語や音楽では9と高い評価を受けているが、理科や保健体育では3と低い評価を受けている。全体の成績は、選択地位の高さとは対照的に、中位の下である。

Y-G性格検査の結果はB型である。回帰性、劣等感、神経質といった情緒不安定性を表す尺度の標準点が4、非客観性、非協調性といった社会的不適応を表す尺度の

標準点が4と5になっている。衝動性を表すのんきさの標準点は5、支配性、社会的外向性も標準点4となっている。この結果は、ソシオグラムや級友からの性格認知から浮かんでくる生徒像とやや異なっている。すなわち、積極性や対人的外向性に関しては一致しているが、社会的不適応や情緒不安定傾向は意外である。

しかしながら、適応性診断検査の結果をみると、個人適応、社会適応ともT値42、45と悪く、下位特性である学校関係のみがT値63と異常に高いアンバランスな結果をみせているし、self-esteem得点もクラスで2番目に低い。

これらのことを考え合わせると、この生徒は対人関係で一歩つまずくと、一気に不適応を引き起こす危険がありそうである。持ち前の明るさと対人的外向性で高い選択地位を維持しているものの、リーダーになるような生徒ではなく、もっぱら“放送局”的な役割をクラス内で果たしている生徒といえる。

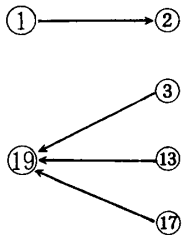
(4) AF, 1-19

各時点におけるこの2名に関する選択関係は図E-7に示される。当初、1は14、19は13と相互選択をもつが、W-3からW-6までは、この4名の間で選択関係が拡がっていく。そして、W-7以降は1と19の相互選択関係が続き、13と14は後述のmajorityグループへ加わっていく。クラス内で部活動に所属していないのは、この2名と3、13である。3はW-4以降、ほとんどの時点で19を選択しているが、19からの選択はみられない。W-7以降は、2名とも他成員に対する選択がみられなくなり、閉鎖的なペアとなっていく。しかし、選択地位はもっとも低い2、3から選択を受けることにより、見かけ上は中位の上となっている。

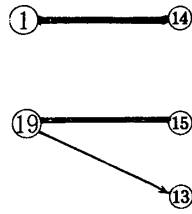
IAS調査による相互作用も強固であり、W-2以降は、休み時間や授業後に話をしたり遊んだりしたの項目で常に2点を両者とも与えている。とくに19は、W-7以降の5時点で1に対してだけ2点を与えている。また、学校から帰ったあとや日曜日に会ったの項目と家において電話で話をしたの項目でも数回ずつ相互作用がみられ、かなり親密なペアといえる。13や14とは選択関係がなくなっても、他成員よりは多くの相互作用を持ち続けているが、選択を受けている2や3に対しては、そうした傾向はみられない。

級友から認知される性格像は、2人とも類似しており、〈活動性〉や〈力本性〉が平均を下回っている。〈個人的親しみやすさ〉では、19が平均よりあたたかいとみられ、〈社会的望ましき〉では、1が非常にまじめであるとみられている。2名とも、おとなしくて消極的な生徒と認知されているようである。

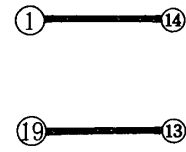
W-0



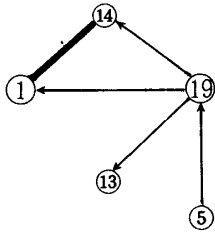
W-1



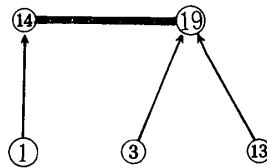
W-2



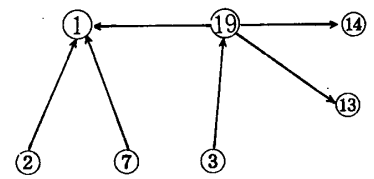
W-3



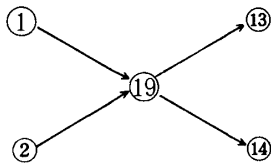
W-4



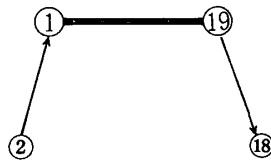
W-5



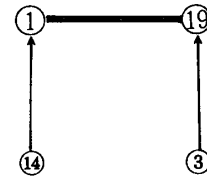
W-6



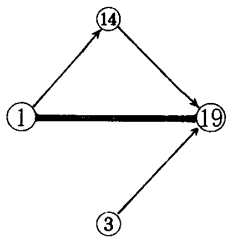
W-7



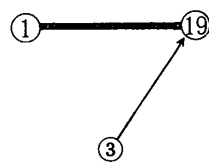
W-8



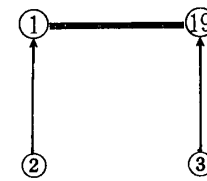
W-9



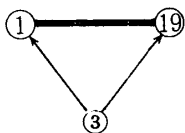
W-11



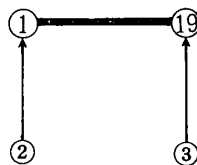
W-12



W-14



W-15



図E-7 クラスAF, 1-19の選択関係

Y-G 性格検査の結果は、1がA型、19がAD型である。2人とも情緒的に安定し、社会適応も普通である。このほか目につく点として、1がのんきさの標準点で1を得ていることと、19が社会的外向性の標準点で4を得ていることが挙げられる。やや強引な解釈をすれば、1の熟慮性、19の社交性といったパーソナリティ特徴が、それぞれまじめ、あたたかいといった見方を級友にさせているのかもしれない。

学業成績は19が上位、1が中位である。2人とも音楽に対する興味が強く、評価も最高点を受けているが、保健体育への興味は弱く、低い評価を受けているという共通点がみられる。適応性診断検査では、2人とも全体のT値が58、53と問題はないが、社会適応の統率性や家庭関係の下位特性がいずれもやや低くなっている。学校関係の適応は非常によく、2人とも附属中に来てよかった点として友人を挙げている。このことは、self-esteem 調査の全体得点が平均よりやや低いのに、対人的不安のなさの因子だけは普通であることとも関連している。

全体的にみれば、部活動にも参加せず、おとなしくて目立たない生徒のペアといえる。途中まで選択関係にあった13、14が、8を中心とした活動性の高いサブグループと繋がって、クラスのmajorityグループへ参入する機会があっても加わらず、自分達の世界を大事にしている生徒である。「趣味は？」と聞くと、「ピアノとレコード鑑賞」といった答が返ってきそうな「お嬢さん」タイプの2人である。

(5) AF, 6-8-16

この3名の14時点における選択関係は、図E-8に示される。W-1からW-5までは対等な選択関係をもっているが、W-6以降は8と16の相互選択関係になり、6は他の2名に対して一方的に選択を行なうだけになる。被選択数による選択地位は8が1位、16が4位と高いが、6は15位と低い。開放的なグループであり、W-8あたりから8と16を媒介し、選択地位の高い18、14、13が加わってくる。図E-7には示されないが、これら3名の選択関係も頻繁であり、両サブグループが合併して、クラスの中心グループを形成していく。6は、W-12やW-14では18を選択したりして、majorityグループ内でフォロアーの位置を維持している。

IAS 調査による相互作用関係でも、W-1からW-6までかなりこのサブグループは明確化している。すなわち、休み時間や放課後に一緒に話したり遊んだりしたの項目で2点を与えているのは、3名の他に17に対してだけである。もっとも関係が密であったW-4、W-5では、家にいて電話で話をしたという出現頻度の少ない項目でも、3名の間で相互作用が行なわれている。W-

7以降は、他成員との相互作用も活発になり、8は受けた相互作用量も総合で第1位となっている。

8は副室長、16はホームルームの代表議員とフォーマルな地位も高く、これに個人の事例で取り上げた“放送局”の14が加われば、クラスの中心となるのは必然といえよう。とくに8は、身体も大きくて男子と対等に渡り合うボスの貫録をも備えている。

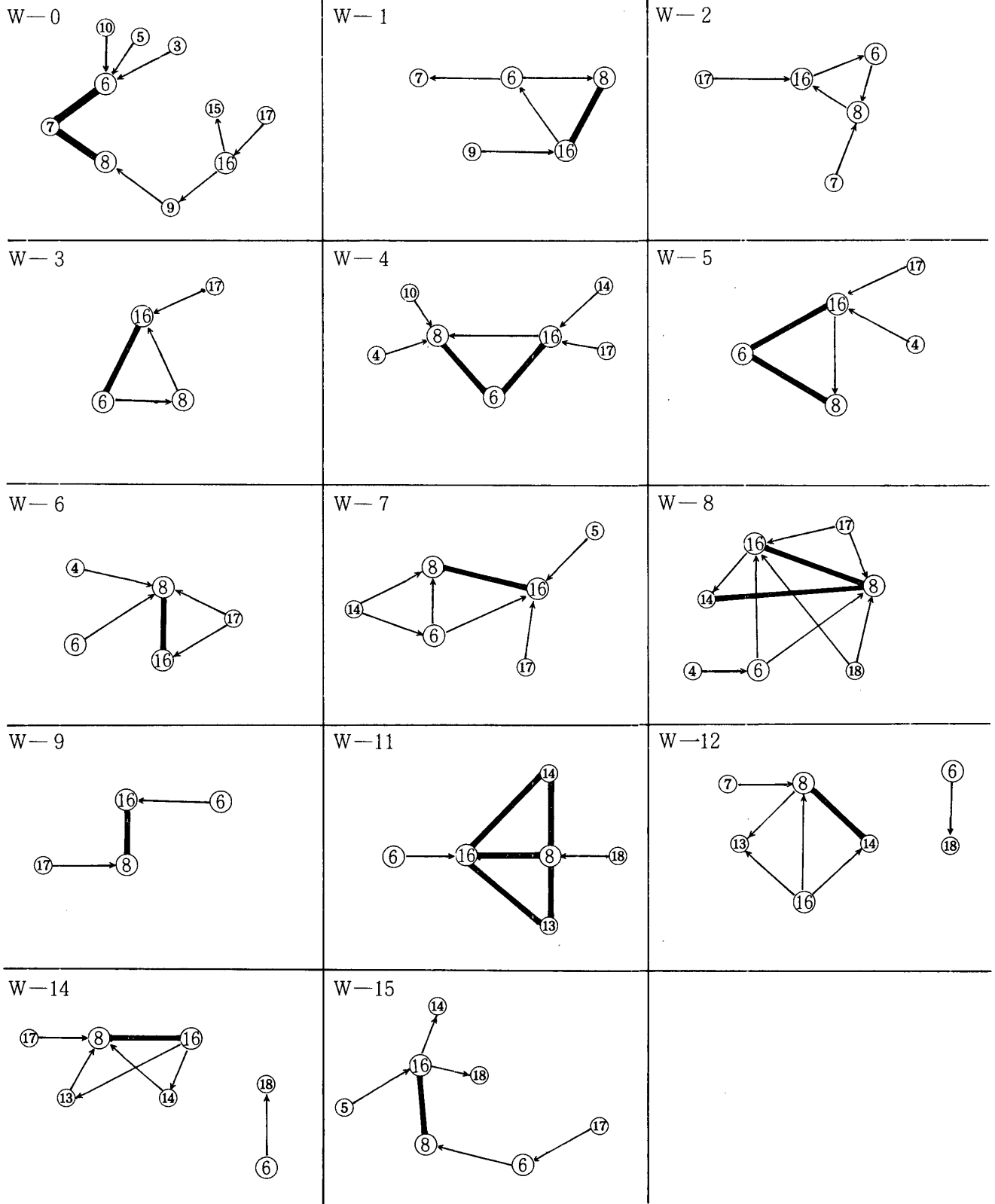
次に、他成員からの性格認知をみると、3名とも平均より、ふまじめ、おしゃべり、活発な、意志が強い、積極的とみられている。とりわけ＜活動性＞に関しては顕著である。しかし、6はW-10以降、この傾向は弱くなっており、サブグループ内での重みの低下とも関連しているであろう。8は、一貫してかなり親しみやすいと認知されているが、6と16は平均値に近い値をとっている。16は後半、頭が良いとみられるようになるが、6は頭が悪いとみられるようになっていく。

学業成績は、16が保健体育を除き全体に高い評価を受け、上位から3番目であるのに対し、6は主要5教科で振わず下位から3番目である。やはり、級友からの知的な側面についての見方は、それなりの妥当性をもっているといえる。8は、教科興味が実技教科に偏っているが、成績はいちおう上位に属する。6が、このサブグループ内で対等な選択関係をもてなくなった主たる原因は、おそらくこの学業成績によると考えられる。

部活動への所属は、6がバレーボール、8がテニス、16がバドミントンと異なるが、いずれもスポーツ系クラブに属している。Y-G性格検査の結果は、6がD型、8と16がAD型である。いずれも、活動性、のんきさ、社会的外向性の標準点が4である。情緒的に安定し、社会的適応も良く、積極的なタイプであり、いわゆる“おてんば娘”の集まりといったにぎやかなサブグループが浮かんでくる。

適応性診断検査では、6と8が、個人適応・社会適応とも良好で全体でもT値58と高い値を示している。16は、個人適応の下位特性で、神経質傾向と自己統制のT値が34、37と低い、社会適応の下位特性で、統率性と学校関係のT値が58、66と高くなっており、学校での適応には問題ないと思われる。self-esteem 調査の得点は、6と16が平均よりやや高く、8が平均よりやや低いという結果になっているが、これといった特徴はみとめられない。

以上みてきたように、このサブグループは、フォーマルな地位も高く、リーダー的な資質も兼ね備えた8に、同じく活発で積極的な6と16が結びつくことによって始まる。その後、W-7あたりから同じようなパーソナリティ特徴をもった14、18、13が加わることによって、ク



図E-8 クラスAF, 6-8-16の選択関係

ラスの majority グループへと発展していく。8と16は一貫して対等な親交関係を持ち続けるが、6は知的な面での低さが影響し、サブグループの拡張に伴い、次第にフォロアー的な位置を占めることになっていく。

3 クラス BM

(1) BM 1

この生徒に特徴的な点は、表 E-6 の各時点での被選択数をみて明らかなように、W-3 までの初期には高い選択地位を得ているが、W-5 からそれが低くなるということである。この地位の下降は極端であり、W-3 までの被選択数の合計はクラス内で最高であるのに、W-5 以降の合計は群を抜いて低くなっている。部活動は卓球部に所属しているが、同じ部に所属している者は他に 8 名いる。これらの内、9 に対しては W-8 から一方選択をし、W-14 では相互選択もみられるなど、比較的良好な関係を保っているようである。しかし、2, 3, 10 とは W-4 ぐらいまでは相互選択や一方選択がみられているのに、W-6 以降ではこれらから排斥を受けるようになっている。13 や 22 からも後半になって排斥されている。卓球部に所属していない級友からも排斥されているが、排斥し始めたのが卓球部員である 10 や 13 であることを考えると、部活動における行動や態度に問題があり、10 や

13 の選択地位が高く、影響力が大であったので、他成員に非好意的感情が広がったのかもしれない。しかし、友だちが皆無というわけではなく、11 と W-2 以降相互選択が多く、8 との結びつきもみられる。この 3 者関係については後に報告する。

図 E-9 は、各時点における他成員に与えた好意度評定の平均値と受けたそれとを示したものである。これをもても、W-4 ぐらいから受けた評定値が次第に下降していくことが明らかである。与えた評定値はそれより遅れて、W-9 ぐらいから急に下降している。相互性または相応性によるものであろう。

では、級友からどのような性格と認知されているだろうか。図 E-10 は、クラス BM で対象となる 3 名の個人が、PPI 調査の 8 個の性格特性について、級友から受けた評定値の平均とクラスの平均を示したものである。これを見ると、好意度と性格の認知とがよく対応していることがわかる。すなわち、W-4 ぐらいまではクラス平均に近く、あるいは＜個人的親しみやすさ＞の 2 特性ではむしろ平均よりも望ましい方向に認知されている。しかしその後は望ましくない方向に変化し、親しみにくく、冷たく、頭が悪く、ふまじめで、意志が弱く、消極的と級友からみられるようになっていく。ただし、W-11 以降は再び評価が高くなる傾向が窺われる。＜活動

表 E-6 クラス BM で対象となった成員の選択地位

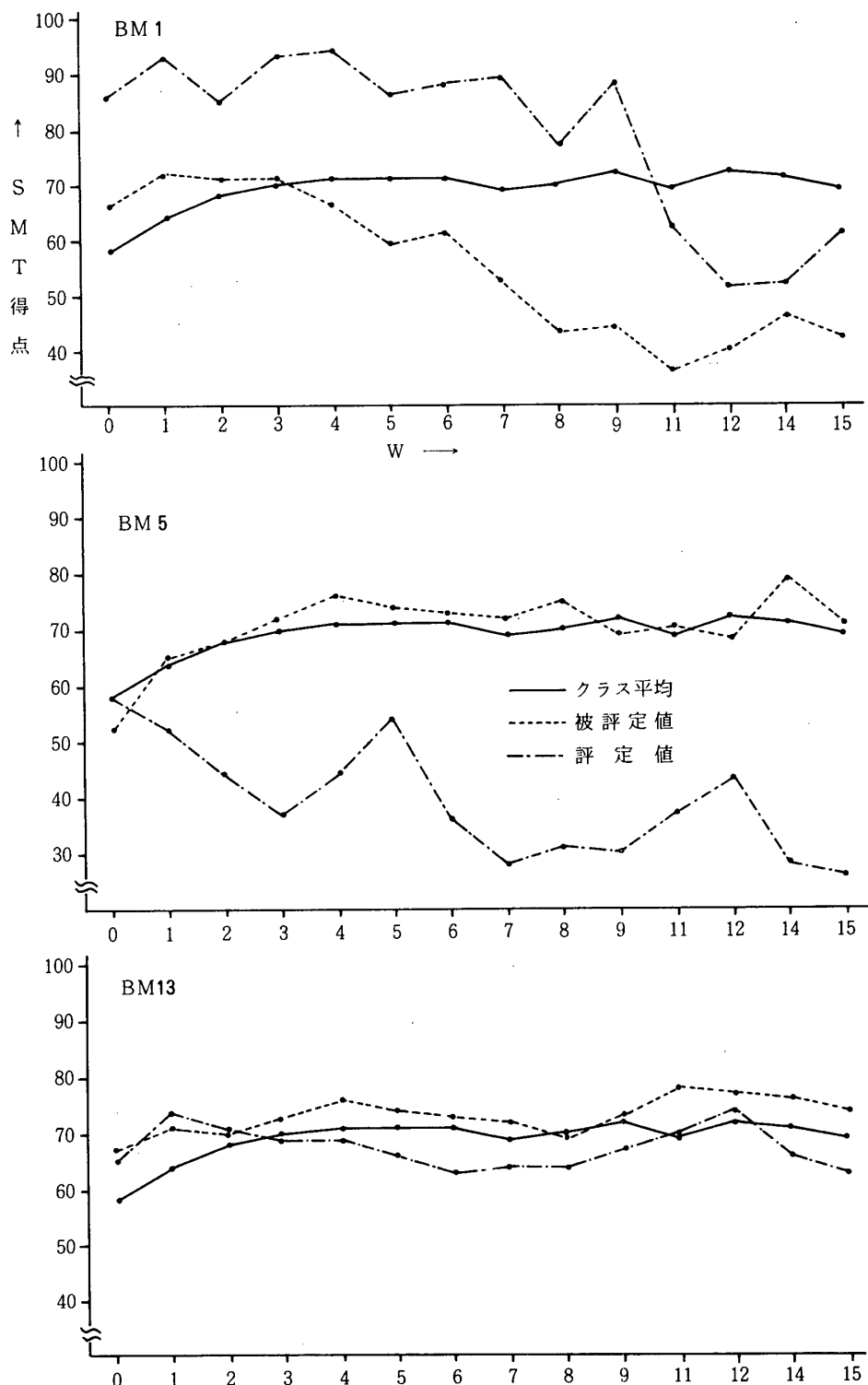
ケース 番号	(被 選 択 数 — 被 排 斥 数)														選 択 地 位		
	W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15	前半	後半	全体
BM 1	4	5	4	3	0	-3	-1	-3	-6	-7	-8	-6	-5	-9	5	22	22
BM 2	0	-1	0	0	1	1	1	3	3	1	2	3	1	1	17	7	8
BM 3	1	1	1	0	1	2	1	2	1	1	1	5	1	2	7	8	7
BM 5	-1	-1	-3	3	2	4	2	3	1	-1	0	-2	0	0	5	15	10
BM 8	0	1	-1	-2	0	-2	-2	-3	-2	-1	1	-1	-2	2	21	20	21
BM 11	-1	-1	2	1	1	0	1	1	0	1	1	3	2	1	16	9	12
BM 13	3	3	3	3	3	2	4	4	2	0	3	1	4	2	1	5	2

表 E-7 クラス BM で対象となった成員の諸特徴

属性 ケース 番号	学 業 成 績									Y - G 性 格 検 査						適応性診断検査			self-esteem			
	英語	数学	国語	理科	社会	音楽	美術	保・体	技・家	E系統	C系統	A系統	B系統	D系統	型	個人	社会	全体	自己への 高い 評 価	対人的 不安の なさ	積極・ 独立性	全体
BM 1	5	6	4	4	6	5	6	4	5	4	0	6	6	2	B'	37	45	42	48	17	22	112
BM 2	4	6	5	5	7	8	9	9	7	7	5	3	4	2	E'	45	45	45	44	29	21	122
BM 3	7	8	5	7	7	8	5	6	6	4	6	4	2	4	C'	37	50	42	42	28	27	121
BM 5	7	9	7	7	5	7	8	9	7	7	1	5	6	0	E'	34	34	34	29	14	25	83
BM 8	5	6	6	4	7	6	6	6	7	3	5	4	3	5	AC	50	42	45	48	27	22	120
BM 11	7	6	5	6	9	8	7	7	10	5	2	6	4	1	AE	47	45	45	56	23	23	129
BM 13	6	9	8	10	8	6	9	10	8	2	0	6	6	4	B'	58	53	55	50	36	28	140

注 1. 学業成績は 1 学期の成績 (10 段階評価) である

注 2. 適応性診断検査の値は T 値である



図E-9 クラスBMで対象となった個人のSMT-1の推移

性>の2特性では相互に矛盾する評定を受けており、おしゃべりであるがおとなしいとみられている。

次に、表E-7によって学業成績やパーソナリティ等についてみてみよう。学業成績は、全教科では中または中の下となっており、教科によるムラはあまりみられない。教科興味は英語や社会で高く、保健体育や理科で

低い。総じて成績との対応関係はないようである。保健体育への興味は低いにもかかわらず、部活動では卓球部に所属し、満足度も高い。

Y-G性格検査による型はAB混合のB型である。帰帰性傾向と神経質とが標準点4であることから、情緒安定性にやや欠ける傾向がみられる。また、主観性、非協

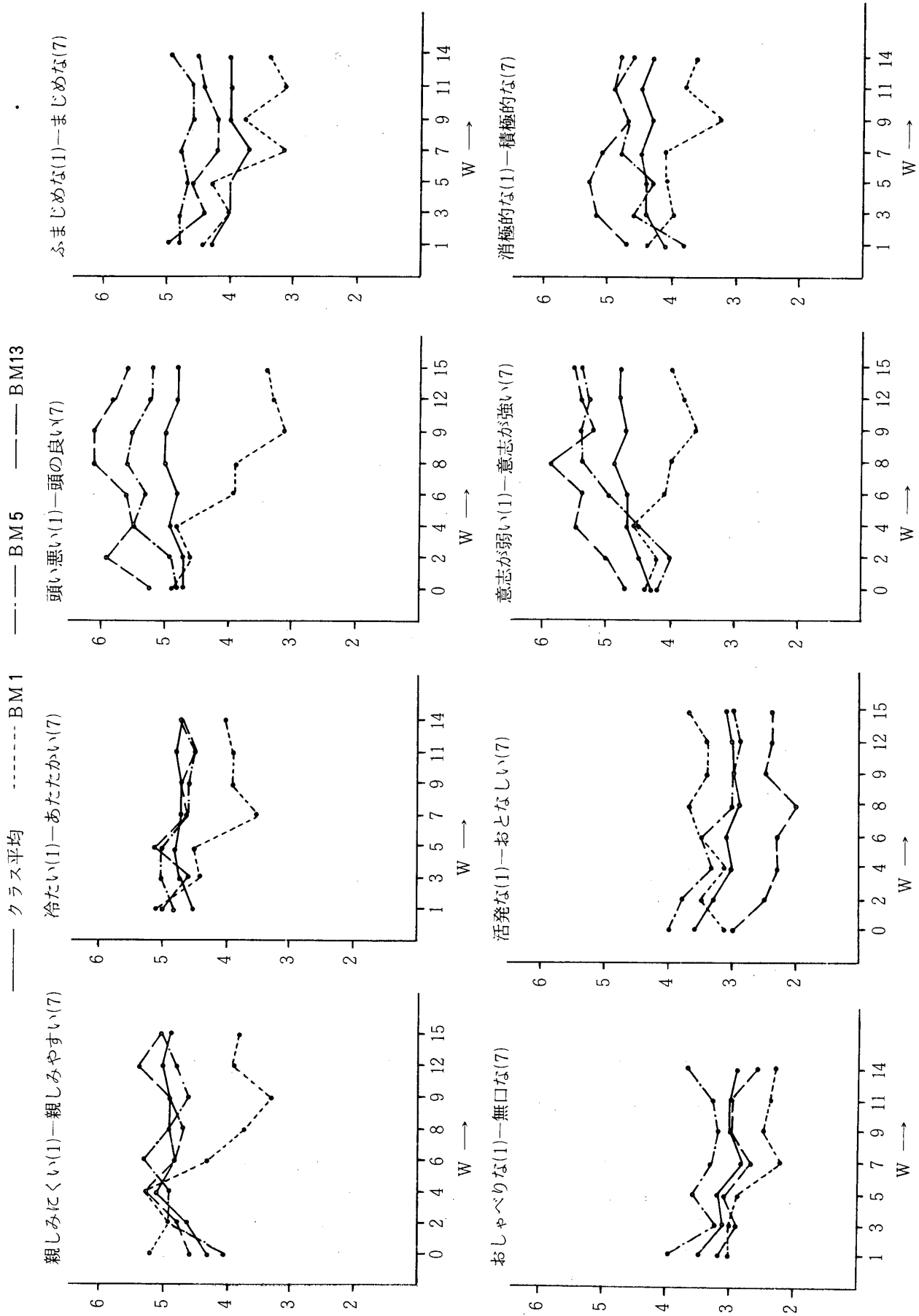


図 E-10 クラス BM で対象となった個人の PPI の推移

調性、攻撃性がいずれも標準点4となっており、社会的不適応の傾向もみられる。攻撃性が情緒不安定性と結びつく、社会的不適応や問題行動を起こしやすい性格になるといわれていることは、このケースによく当てはまっている。また、社会的外向性が標準点5と非常に高くなっている。この社会的外向性が非協調性や攻撃性を伴ったものであることを考えると、他者の感情を慮ったり、他者に受け入れられるような仕方では自己を表現することに欠けながら、他方で他者との接触を求めることが、非好意的感情をもたれている一因ではないだろうか。self-esteem 調査の得点は低く、とくに対人的不安のなさの尺度で低くなっており、対人関係の悪さを反映している。適応性診断検査の結果では、個人適応がかなり悪くなっている。中でも神経質傾向や自尊感情のT値が低い。これらの結果は、Y-G性格検査やself-esteem 調査の結果と一致している。社会適応は全体ではそれほど悪くないが、下位特性の中の学校関係で34という低いT値を得ており、学業や対人関係での実際の状態の悪さをよく反映している。

この生徒が級友から排斥されているのは学業成績によるものではなく、部活動や学級内での行動や態度にその原因があると思われる。協調性に欠け、攻撃性が高いにもかかわらず、他者との接触を求めるという性格にも問題があるであろう。本人も他者からの非好意的感情に気付いており、self-esteem 調査の中の対人的不安が高くなっている。また、多くの生徒は附属中学に入ってから良かった点として友だちを挙げているのに対し、附属中学に入ってから悪かった理由として友だちを挙げているのが特徴的である。しかし、このように排斥を多く受けているものの、1～2名の級友とは友人関係を形成しており、これが極端な不適応を防いでいるのであろう。

(2) BM 5

図E-9をみて明らかなように、W-0では他成員に対して平均的な好意度評定をしているが、その後多少の凹凸はあるものの、それが次第に低くなっていくのである。W-15ではクラスの平均値が69であるのに対し、26とかなり低くなっている。受けた好意度はクラス平均に近い水準を保っていることから、与えた好意度の低さは相互性や相応性によるものではないと考えられる。それでは尺度の使い方が低い方に偏っていたのだろうか。しかし、少数の級友には高い評定値を与えていること、評定値の50以下はきらいであるということを意味すると教示しているにもかかわらず、評定が極端に低いこと、そして時点に伴って評定値が下降する傾向がみられることを考えると、尺度の使い方に原因があるとは考えにくい。むしろ対人関係のあり方に問題があるのであろう。

選択地位は全時点を通しては中位であるが、W-2からW-7まででは高く、それ以外では低くなっている。ソシオグラムをみると、各時点において選択や被選択がみられるが、その相手は一定しておらず、また相互選択も少なく、特定の親しい友だちはいないようである。附属中学に入ってから悪かった点として友だちを挙げていることから、対人関係の悪さが推測される。しかし、受けた相互作用量はやや少な目ではあるものの、休み時間や授業後での相互作用は普通にみられる。したがって孤立しているわけではなく、級友との接触は保たれ、少数ではあるが好意をもったり、もたれたりする級友がいる。

表E-7によってこの生徒の特徴をみてみよう。学業成績は、社会でやや悪いが、その他の教科では比較的良く、中でも数学と保健体育で高い評価を受けている。数学については教科興味も高く、成績との対応がみられるが、保健体育では成績は良いのに、興味は中程度である。部活動では水泳部に所属しているが、これ以外の部活動への興味はすべて低く、興味の幅の狭さを示している。

Y-G性格検査の結果はE型である。情緒不安定の傾向が強く、劣等感で標準点が5、抑うつ性と回帰性傾向では4である。また、主観性と非協調性も標準点が5となっている。活動性や主導性は中程度であるが、思考的内向の傾向がみられる。これらをまとめてみると、情緒的に不安定で、劣等感や悲観的気分をもち、物事を考え込む傾向があり、また対人的不満や不信が強いという人物像が浮かび上がってくる。では、級友からはどのような性格と認知されているであろうか。図E-10によってこの点をみてみよう。Y-G性格検査の結果からは親しみにくい人物が想像されるが、〈個人的親しみやすさ〉の2特性で受けている評定値はほぼ平均に近くなっている。〈活動性〉ではやや低いと評定されているが、〈社会的望ましき〉と〈力本性〉の4特性についてはいずれも社会的に望ましい方向の評定を受け、頭が良く、まじめで、意志が強く、積極的であると認知されている。したがって、本人が劣等感をもったり、対人的な不満を感じているほど低い評価を受けているわけではなく、むしろ望ましい評価をされているのである。

Y-G性格検査で劣等感が強かったことに対応して、self-esteem 得点は非常に低い。中でも自己に対する評価の低さと対人的不安の高さが著しい。また適応性診断検査の結果にもかなりの問題が含まれている。個人適応も社会適応も共に悪い。個人適応の下位特性では、異常、神経質、自尊感情、退避傾向でT値が低くなっており、Y-G性格検査やself-esteem 調査の結果と一致している。また社会適応の下位特性では家庭関係と学校関係が特に悪くなっており、ここにも対人関係の悪さが

表れている。

以上みてきたように、self-esteem が非常に低く、抑うつ的で対人的不安が高いことから、実際はそうでないにもかかわらず、他者に受け容れられていないと感じ、防衛的に他者に対することが好意度を低めていると推測することができる。このような防衛的・自閉的傾向が良好な対人関係をもつことを困難にさせ、これがますます自閉的態度を強めるという悪循環があると思われる。

(3) BM13

表 E-6 に示される被選択数は、後半にやや低い値がみられるものの、W-0 から一貫して高い値を得ている。W-0 から W-6 までの前半の選択地位は 1 位、W-7 から W-15 までの後半のそれは 5 位であり、全時点を総合すると 2 位となっている。前半でとくに地位が高いのは、クラスの代表者である室長をやっているため、このような役割に付与された威信によるのであろう。しかし後半の 3 時点ほどで被選択数が低くなるとはいえ、全般的には高い値を維持していることから、選択地位の高さは単に室長という役割からきているだけでなく、個人の資質による部分も大きいと思われる。

級友からどのような性格であると認知されているかを図 E-10 によってみてみよう。これによると、この生徒は、親しみやすさ、あたたかさ、おしゃべりについては、どの時点でもほぼ平均に近くなっているが、他の 5 特性では一貫した平均からのずれがみられる。すなわち、平均よりも頭が良く、まじめで、活発で意志が強く、積極的と、社会的に望ましい性格をもつものと認知されているのである。このことから、選択地位の高さが単に室長という役割によるものだけでなく、人格的にも認められた上でのものであるということができよう。

学業成績については、国語と音楽が他教科に比べてやや低いものの、全般的に高く、特に理数系と保健体育及び美術で最高の評価を受けている。保健体育については興味も最も強く、また部活動への興味も文化部より運動部に対して全般的に強くなっている。そして、実際にも卓球部に所属しており、部活動への満足度は高い。このように学業成績も良いが、スポーツも好きでかつ得意であり、文武両道に優れているといえよう。

Y-G 性格検査の結果は AB 混合型の B' 型である。標準点は全特性で 3 または 4 であり、1 とか 5 の極端な特性はみられない。情緒安定性はほぼ平均であり、支配性と社会的外向性の標準点が 4 であることから、対人的接触を好み、リーダーシップをとるタイプといえよう。これらの結果から、適度な外向性やリーダーシップをもち、情緒的にもほぼ安定しており、性格上の問題点は見当たらない。self-esteem 調査では、全般的にやや高い得

点を得ている。下位尺度の中では対人的不安のなさの得点が高く、対人関係の良好さを窺わせる。適応性診断検査の結果でも問題となる点はみられない。個人適応の下位特性をみると、退避傾向の T 値 66 が目立つ。社会適応も全体に高いが、中でも学校関係が T 値 63 と高く、学業上及び対人関係上の適応の良さを裏付けている。

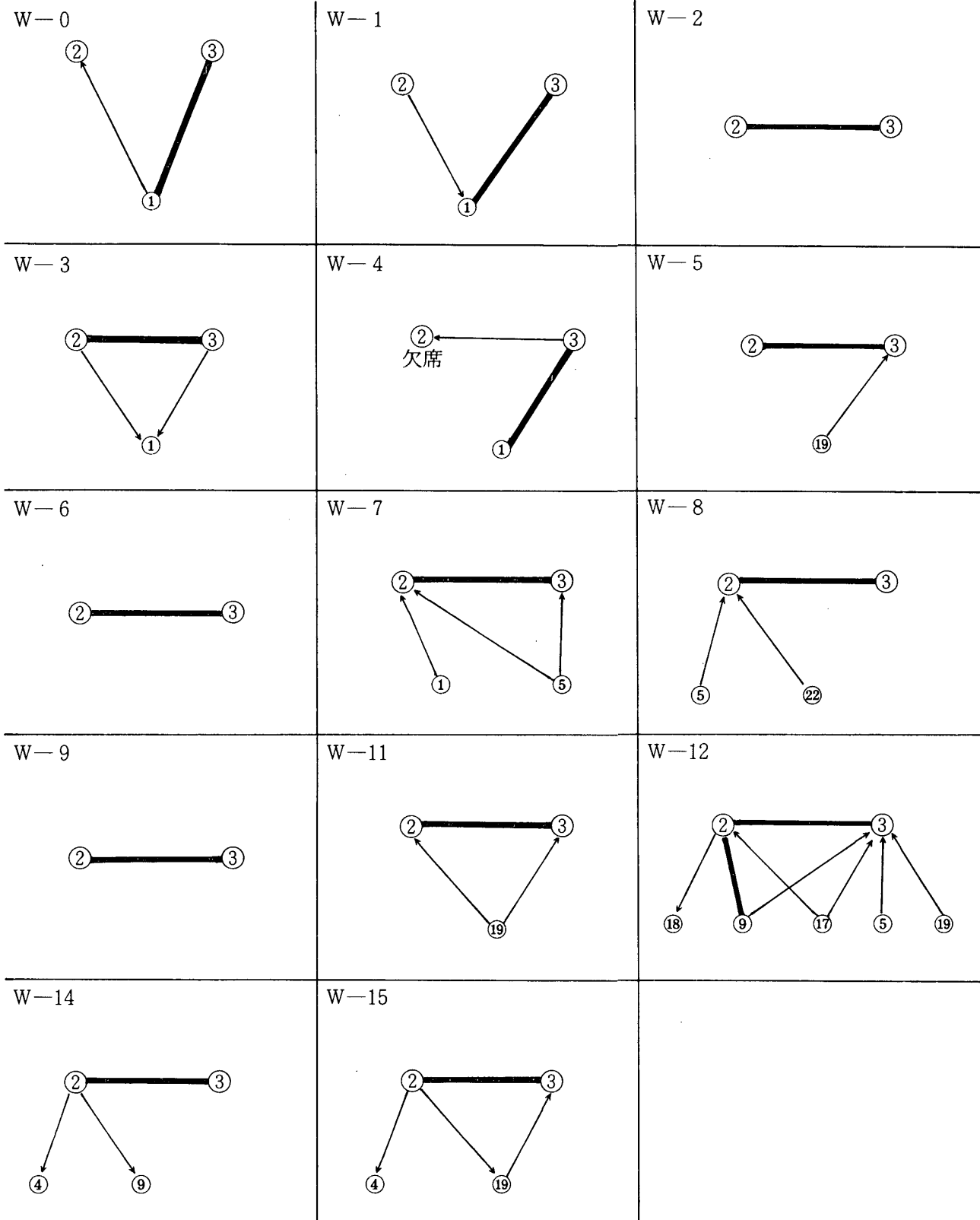
最後に対人関係についてみてみよう。ソシオグラムをみると選択地位が特に後半で高い 4 と親しいと思われる。IAS 調査によって級友との実際の相互作用量をみると、休み時間や登下校時での接触、部活動での相互作用が 4 以外の級友とも多くなっている。そして附属中学に入ってから良かった点として友だちを挙げている。このような点から学校内での対人関係も良い状態にあると判断できる。

以上のように、学業成績の良いスポーツマンで、性格や適応上の問題のない生徒である。調査時にも大きな声で話したり、ふざけたりすることなく、落ち着いた態度を示しており、目立つ生徒ではなかった。しかし、適度な積極性や self-esteem の高さを持ち、リーダーシップもあり、性格的にもまた学業の面でも級友からの信望が厚いと思われる。このような点が高い選択地位をもたらしているのであろう。

(4) BM, 2-3

各時点におけるこの 2 名の選択-被選択関係は図 E-11 のとおりである。初めの 2 時点では共に 1 との関係がみられるが、相互の間では選択関係がみられない。しかし、W-2 以降では、2 が欠席した W-4 を除いた全時点で相互選択がなされている。他成員との関係については、W-12 で比較的多くの被選択を受け、また 2 は 9 と相互に選択し合っているが、その他の時点では限られた少数の級友との関係がみられるだけで、W-2、W-6、W-9 の 3 時点では孤立したペアを形成している。このように結びつきが非常に強く、また他成員からは比較的孤立した 2 者関係となっている。相互作用も頻繁に、また様々な形で行なわれている。IAS 調査によると、学校内で話したり遊んだり、登下校時や部活動と一緒にだけでなく、電話をかけ合ったり、下校後や休日にも会っている。

選択地位は 14 時点を総合すると、2 が 8 位、3 が 7 位となり、共に中の上に位置する。次に学業成績に関しては、2 が主要 5 教科のうち社会では中の上であるが、他の 4 教科では中または中の下であり、全般的にあまり良くない。これに対して 3 は国語で中程度の成績であるが、他の 4 教科では中または中の上の成績を得ており、2 よりも良い成績となっている。部活動は 2 人共卓球部であり、満足度は共に高い。そして他の部活動については 2 人とも運動部への興味が高くなっている。



図E-11 クラスBM, 2-3の選択関係

パーソナリティやその他の面では2人の間にどのような類似性あるいは相補性があるのだろうか。Y-G性格検査による型は、2がE型、3がC型である。共に攻撃性や活動性が弱く、社会的外向性の低い、おとなしい性格であるという点で共通性がみられる。また、級友も2人のパーソナリティをよく似たものと認知している。つまり、親しみやすさ、あたたかさ、頭の良さはほぼ平均的なレベルであり、まじめな、無口な、おとなしい、意志が弱い、消極的とみられているのである。またself-esteem得点についてもよく似た結果を得ている。全体としては平均よりやや低い得点となっており、下位尺度の対人的不安はほぼ平均であるが、自己に対する評価がやや低い。最後に適応性診断検査の結果に関しては、下位特性で2人の間に差異がみられるが、全般的にはやや適応が悪いという点で一致している。個人適応では2はやや悪いという程度であるが、3は神経質や退避傾向がみられ、悪くなっている。逆に社会適応では2の方がやや悪く、社会的技術や統率性が低くなっている。

この2人は出席番号が続いているため、始業式の後数日間は座席が前後していた。しかし、このような状態となっていたW-0とW-1では共に相手を選択していないことを考えると、結びつきの原因は物理的距離の近さではなく、共に卓球部に所属していることが最大の原因であろう。卓球部に所属している成員はクラスBMでは9名と多い。この中で、類似性の要因により、活動性や外向性の低いおとなしい者同士が友人関係を形成したのである。そして共に対人的不安が高く外向性が低いことから対人的拮据りが狭く、孤立した強い結合ができあがったと思われる。

(5) BM, 1-8-11

各時点における3名の選択関係は図E-12のとおりである。初めの2時点では何ら関係がみられないが、W-2から選択関係が生じ、W-15まで持続されている。全般的には1と11との結びつきが強く、8時点で相互選択がみられている。これに対し、8と他の2名との結びつきは相対的に弱く、11とは4時点で、1とは2時点で相互選択がみられているほかは、一方選択だけとなっている。そして8が他の2名から一方的に選択されている場合がその逆よりも多く、8はむしろこの2名以外の級友を選択している。しかし、相互作用については、休み時間や登下校での接触が3名相互の間で頻繁になされている。登下校については、W-6までは1と11の間の相互作用が弱く、8とこれら2人との間のそれが強くなっており、好意関係とは若干のずれがみられる。

個人の事例報告で述べたように、1は初めの4時点では高い選択地位を得ているが、その後多くの排斥を受け

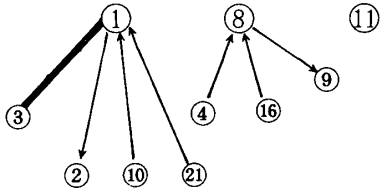
ようになり、最終的には最低の地位となっている。8は多くの時点で被選択数が負になっており、1に次いで低い地位を占めている。これに対して11の地位は前半ではかなり低い、後半では中の上になっている。しかしながら、1と8以外の級友からはほとんど選択されておらず、排斥を受けていないために、被選択数が正になっているにすぎない。

学業成績については、11が3名の中ではもっとも良く、中から中の上位置に位置している。そして1と8は中から中の下成績となっている。級友による認知でも、11は平均的な頭の良さともみられているのに対し、他の2名は頭が悪いとみなされている。次にY-G性格検査の結果をみると、1がB型、8がAC型、11がAE型となっている。1と11は回帰性、神経質、主観性、非協調性といった傾向がやや強いという点で共通性がみられるが、1は社会的外向性が高いのに対し、11はやや低くなっている。8は神経質傾向がややみられるが、回帰性傾向や主観性は弱く、社会的外向性がやや高い。また、級友から認知されたパーソナリティ像は選択地位の高さに対応している。3名の中では11がもっとも望ましい方向に認知され、あたたかさや親しみやすさは中程度であり、まじめで、活動性、積極性は低いとみられている。8はまじめであるが親しみにくく、活動性や積極性に欠け、1は冷たくて親しみにくく、ふまじめで消極的と認知されているのである。8については、社会的外向性に関してY-G性格検査と級友による認知との間にずれがみられるが、他の2名については両者がほぼ一致している。

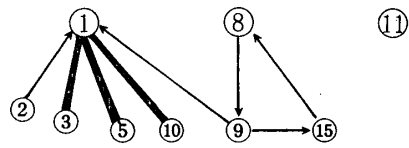
self-esteem調査の得点についてみると、11は対人的不安がやや高く、積極・独立性が若干弱いものの、ほぼ平均的な高さを示している。これに対して1のself-esteem得点は低く、8についても対人的不安の高さは平均的であるが、全体の得点はやや低くなっている。最後に適応性診断検査の結果では、3名共、個人適応も社会適応も悪くなっている。特に自尊感情や学校関係の適応が悪いという点で類似性がみられる。

8と11とが親しい原因の第一は、同じ部に所属していることであろう。水泳部のメンバーはこのクラスにもう1人5がいる。しかし、個人の事例報告で取り上げたように、5は級友に対する好意度が低い。したがってW-8までは5を選択しているが、5からの好意の返報がないためにその後は選択しなくなっている。さらに所属部が同じであるに加えて、〈活動性〉、〈力本性〉が低いという点でパーソナリティの類似性がみられることも結びつきの一因と思われる。2人共学校適応が悪いにもかかわらず、附属中学に入って良かった点として友だちを挙げているのは、このグループの中で安定しているた

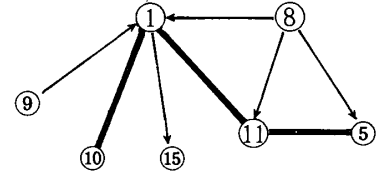
W-0



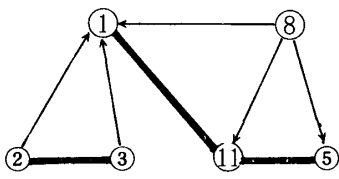
W-1



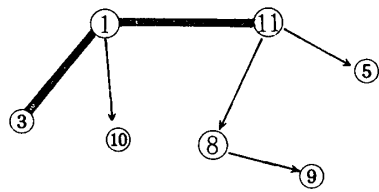
W-2



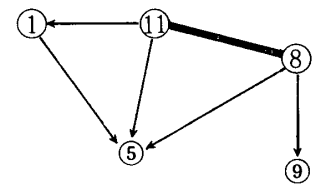
W-3



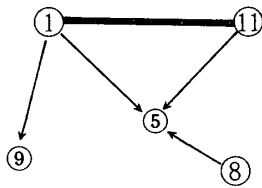
W-4



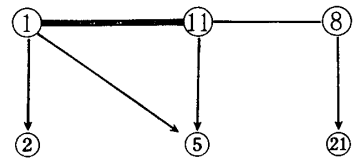
W-5



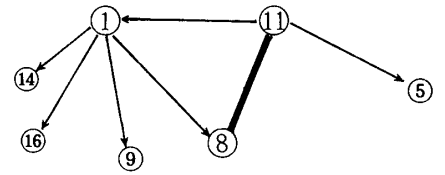
W-6



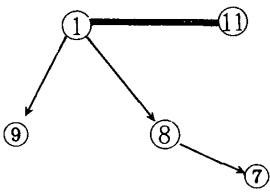
W-7



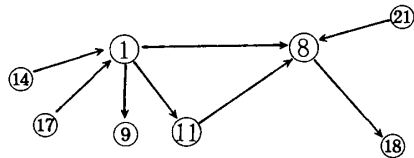
W-8



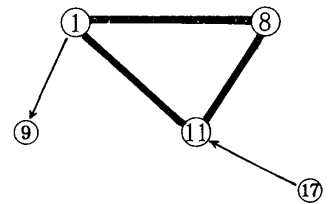
W-9



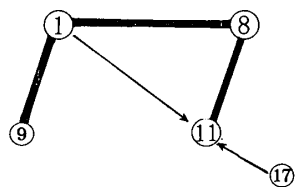
W-11



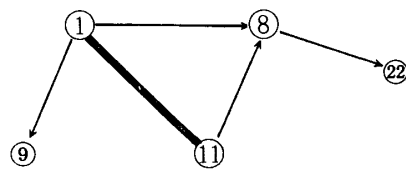
W-12



W-14



W-15



図E-12 クラスBM, 1-8-11の選択関係

めであろう。所属部の異なる1がなぜこの2人、特に11と強い選択関係をもつようになったのかについては、本研究で得られている資料だけから推測することはできない。

4 クラスBF

(1) BF 4

表E-8から明らかなように、被選択数がいずれの時点においても負であり、しかも誰からも選択されていない。入学式の翌日のW-0から既にこのような状態であり、中期に被排斥数が増加し、後期にはやや減少してきている。したがって選択地位は前後期共に、飛び抜けて低くなっている。図E-13に示される級友から受けた好意度の評定値そのものも低い、時点に伴ってU字型の変化を示している。級友に対する感情が相対的に未分化な初期において、他の時点に比較して高い評定を受けているのは当然であるが、後期に再び上昇し、W-15では被評定値の平均が60近くになってきているのはなぜだろうか。後にこの点に触れたい。級友に与えた好意度の評定値は、前半では受けたそれよりもかなり高くなっているが、後半にはほぼ同じ値となり、しかも受けた好意度に対応して上昇傾向を示している。これは相互性や相応性によるものであろう。この生徒が選択している級友は

前半では1、後半では選択地位の高い20、10、13などである。排斥されていることから当然予想されるが、級友との相互作用は非常に少なく、同じ部活動に所属している級友とのそれもほとんどみられない。

級友からのパーソナリティ認知はどうであろうか。図E-14は、他のクラスと同様、8個の性格特性についてクラスBFで対象となる3名が級友から受けた評定値とクラスの平均値を示したものである。これをみると、はじめだけはほぼ平均に近い評定を受けているが、他の7特性では平均からのずれが大きい。すなわち、冷たくて、親しみにくい、頭が悪い、無口で、おとなしい、意志が弱くて、消極的で、いずれの次元についても望ましくないパーソナリティ像をもたれており、受けた好意度の低さに対応している。また時点による変化をみると、好意度ともっとも関連性の深い〈個人的親しみやすさ〉の2特性で、好意度ほど明確ではないが、それと同様のU字型のパターンが示されている。

所属している部活動はブラスバンド部であり、それへの満足度は非常に高い。他の部活動への興味をみると、演劇部、茶道部、ロック&フォーク部といった芸術に関係したものへの興味が強く、運動部に対してはいずれも弱い興味しかもっていない。これは学業成績と密接に関連している。音楽の成績は10という高い評価を受け、興

表E-8 クラスBFで対象となった成員の選択地位

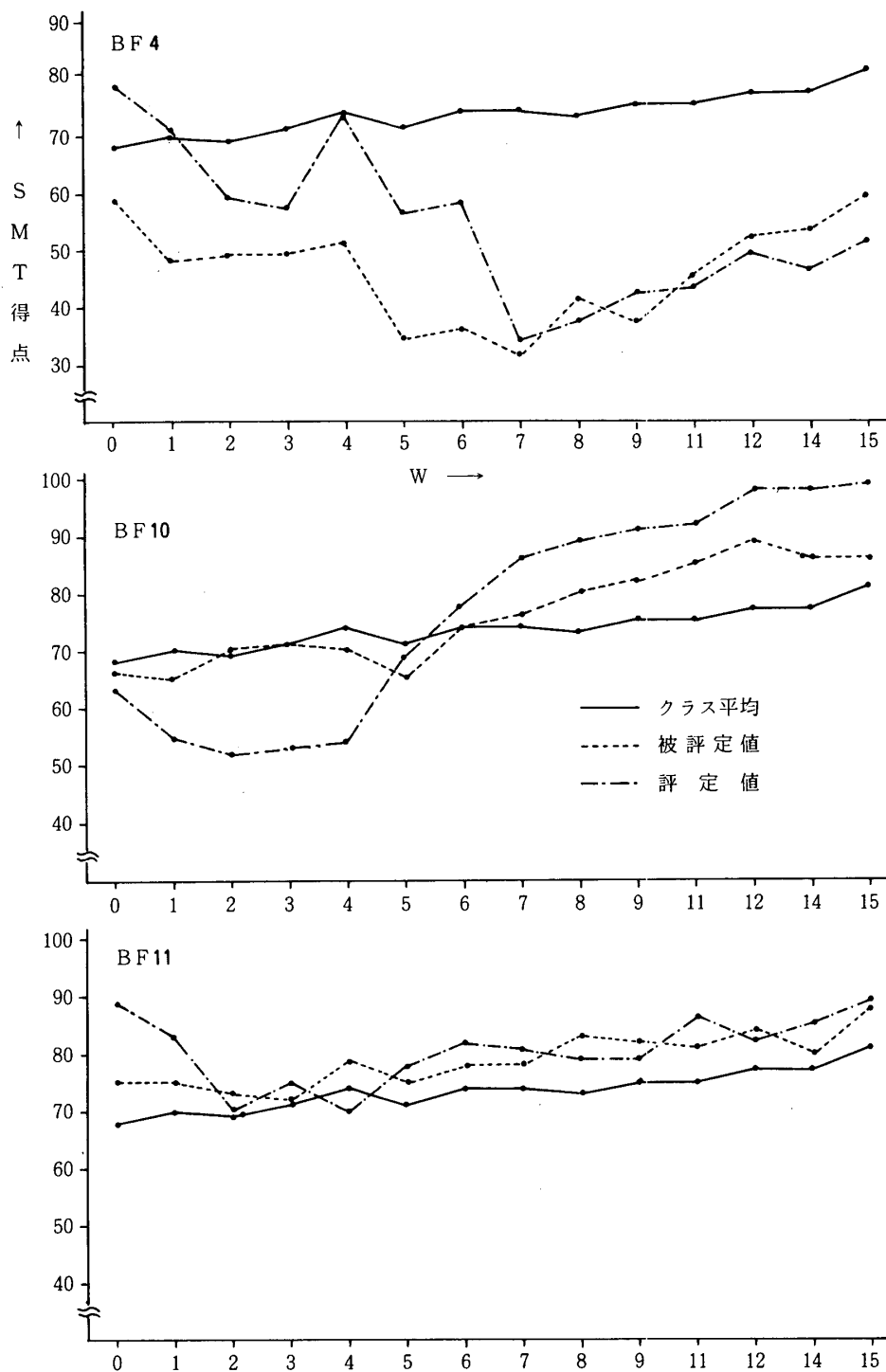
ケース 番号	時 点	(被 選 択 数 — 被 排 斥 数)														選 択 地 位		
		W-0	W-1	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-11	W-12	W-14	W-15	前半	後半	全体
BF 4		-2	-7	-6	-4	-5	-9	-10	-12	-8	-11	-7	-4	-3	-5	20	20	20
BF 9		1	1	0	2	4	2	2	1	1	1	0	0	1	0	9	15	11
BF 10		0	-1	1	0	1	-1	1	1	4	2	3	3	4	3	17	4	9
BF 11		4	1	1	4	3	3	1	3	7	4	3	4	-1	3	5	2	4
BF 12		2	3	3	3	3	4	4	3	3	6	3	2	2	4	3	2	1
BF 13		2	4	3	4	3	4	4	3	2	2	3	2	2	3	2	5	3
BF 20		-1	0	3	2	3	4	2	4	2	5	4	4	5	3	7	1	4

表E-9 クラスBFで対象となった成員の諸特徴

属 性	学 業 成 績										Y - G 性 格 検 査					適応性診断検査			self-esteem			
	英語	数学	国語	理科	社会	音楽	美術	保・体	技・家	E系統	C系統	A系統	B系統	D系統	型	個人	社会	全体	自己への高い評価	対人的不安のなさ	積極・独立性	全体
BF 4	3	2	4	5	1	10	4	4	6	5	2	7	3	0	AE	42	45	42	31	14	19	76
BF 9	5	4	6	6	7	5	6	5	6	3	4	6	2	3	A*	42	45	42	38	10	12	79
BF 10	7	9	8	9	7	10	6	6	7	2	8	1	3	9	D	63	58	66	48	30	30	136
BF 11	9	8	9	10	7	8	5	9	6	7	1	1	10	4	B	42	50	47	52	20	30	132
BF 12	6	7	8	8	8	6	9	10	6	1	2	5	5	6	D'	47	53	50	48	20	23	117
BF 13	6	8	7	7	6	10	8	7	6	3	1	7	4	2	A*	45	47	45	39	18	21	100
BF 20	6	7	7	7	6	9	7	7	9	1	3	5	4	6	D'	50	53	53	54	33	26	147

注1. 学業成績は1学期の成績(10段階評価)である

注2. 適応性診断検査の値はT値である

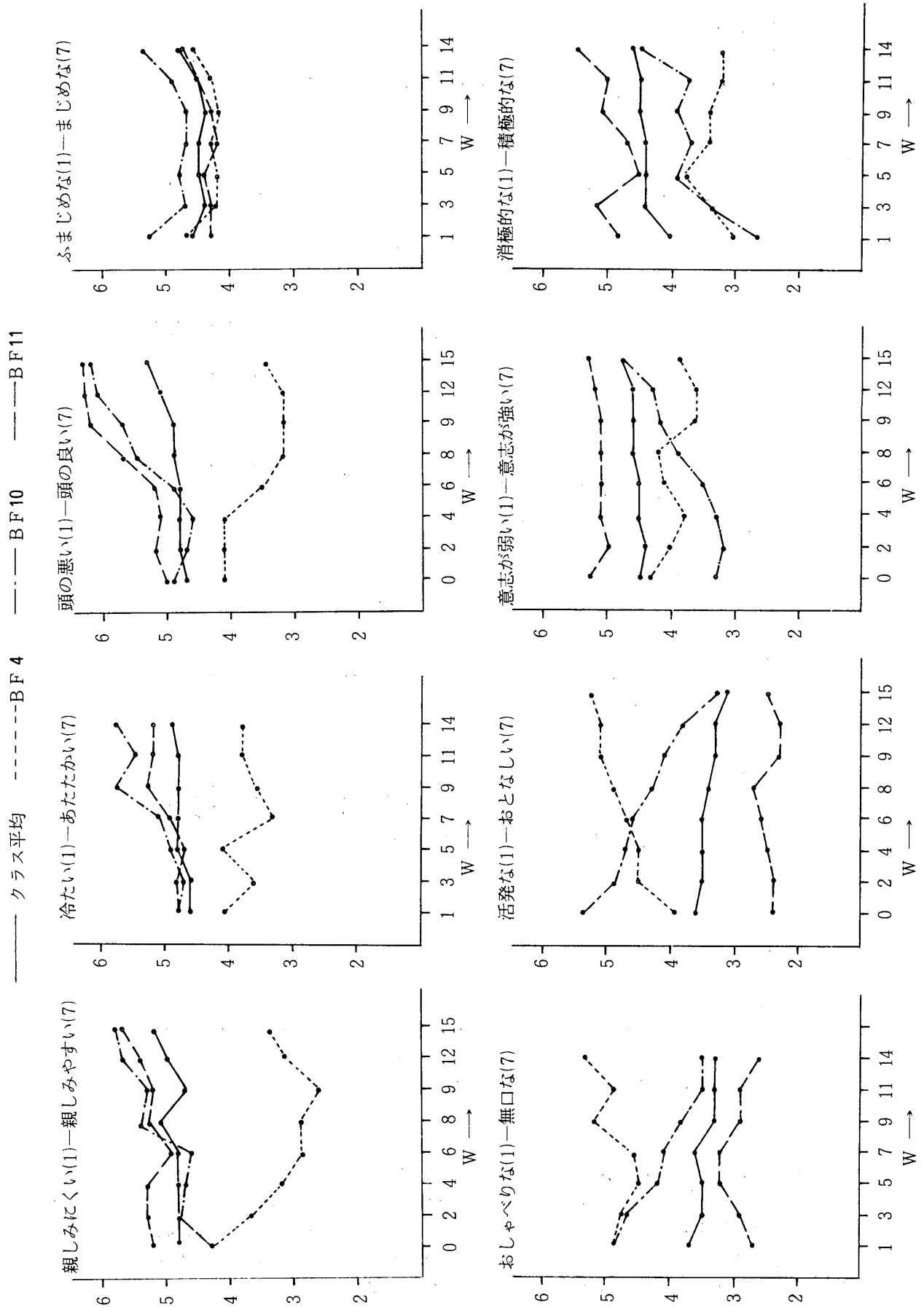


図E-13 クラスBFで対象となった個人のSMT-1の推移

味も最高となっているのに対し、保健体育の成績は良くないし、興味も最低となっているのである。音楽以外の教科の成績は、技術家庭では中程度である他は、いずれも低い。とくに数学と社会が低くなっている。

Y-G性格検査の結果はAE型である。標準点が1または5の極端な片寄りを示している特性はみられない。

劣等感が少し強くなっているが、抑うつ性、回帰性傾向、神経質については中程度であるので、情緒不安定性は強くはない。また客観性のなさや非協調性もみられるが、攻撃性が弱いので、対人関係上の問題を起こすタイプとは思われない。活動性はやや低いが、主導性やのんきさは中程度の強さとなっている。以上のように、劣等感が



図E-14 クラスBFで対象となった個人のPPIの推移

やや強く、対人的な不信や不満もみられるなど多少の問題点はあるが、全般的には中庸が保たれているといえよう。

しかし、適応性診断検査によれば、全体的な適応は悪く、下位特性についてもいくつかの問題がみられる。個人適応の中では自尊感情がT値27と非常に低いのが目立つ。退避傾向も強く、神経質な傾向もいくらかみられる。社会適応もやや悪く、下位特性では学校関係がT値37と低くなっており、学業成績や選択地位から推測される適応の悪さを裏付けている。self-esteem得点も非常に低く、適応性診断検査の自尊感情の低さやY-G性格検査の劣等感の強さと一致している。当然のことながら、下位尺度の得点はいずれも低い。

級友から多くの排斥を受け、また特定の友だちもおらず、対人関係は極めて悪くなっている。パーソナリティについていえば、協調性にやや欠けるものの、おとなしいタイプで、積極的に排斥を受けるような性格の持ち主とは思われない。実際に級友も無口でおとなしいと認知している。また冷たいと認知されているが、これも実際に冷たい態度をとるというよりも、無口で明るさにかかけ取りつきにくいことが原因なのであろう。したがって、選択地位の低さや＜個人的親しみやすさ＞についての低い認知は、学業成績の悪さからくる光背効果によるものと考えられる。そして学力の低さや対人関係の悪さがself-esteemを低め、対人的不安や退避傾向を強くし、それがまた他者との接触を回避させ、パーソナリティを他者に理解させるのを妨げるという悪循環があるのではないだろうか。しかしY-G性格検査の結果が典型的なE型ではなく、かなりの中庸を保っていることや、強い排斥を受けているにもかかわらず自分からは選択を与えている点などは、適応を改善していく上で好ましい材料と思われる。後半の時点で級友からの好意度が上昇してきているのは、学業成績の悪さによる光背効果が弱まり、本人のパーソナリティが見直されてきたためではないだろうか。

(2) BF10

各時点における被選択数を表E-8によってみると、W-7まではゼロの前後であるが、W-8以降は高い値となっている。したがって選択地位は前半では低いが、後半では4位と高くなっているといえる。クラスBFのソシオグラムをみても、W-7まではわずかに14との関係が、多くは10からの一方選択という形でみられるだけである。しかしW-8以降は選択地位の高い12、13、20との選択や被選択の関係がみられ、クラスの中心的グループの一員となっていることがわかる。

他成員による性格認知も、選択地位の上昇とよく対応

した推移を示している。図E-14に明らかなように、親しみやすさ、あたたかさ、頭の良さの3特性では、初期にはクラス平均に近い評定を受けているが、時点を追う毎に親しみやすい、あたたかい、頭が良い、という望ましい方向に変化してきている。また＜活動性＞と＜力本性＞の4特性については、初期の時点では平均よりもかなり低く認知されているが、次第に高い方向に変化し、W-15ではほぼ平均に等しい評定値を得ている。このようにパーソナリティに関しても時点を追って社会的に望ましい方向に認知されるようになってきている。

次に学業成績やパーソナリティの特徴をみてみよう。表E-9に示されているように、学業成績は全般的に良い。主要5教科の中では英語と社会が中の上の成績であるが、数学と理科は優れている。音楽も良い成績となっている。教科興味は成績との対応があまりないようである。部活動はブラスバンド部に所属しており、それへの満足度はかなり高い。他の部活動への興味については、興味の高い部が、文化部にも運動部にも散らばっており、興味の片寄りは見られない。

Y-G性格検査の結果はD型であり、社会的に望ましいタイプとなっている。抑うつ性と回帰性傾向の標準点が1であり、劣等感のそれも2となっており、情緒的に安定している。また非客観性、非協調性、攻撃性の標準点も1または2であり、社会的な適応も良いといえる。さらに物事を考え込む傾向は弱く、リーダーシップもみられる。このように、この検査に表れた限りでは全く問題はみられず、むしろ望ましい性格の持ち主といえよう。適応性診断検査の結果も問題とすべき点を何ら含んでいない。個人適応・社会適応共に高く、したがって全体的適応も良い。下位特性を個々にみても、神経質でT値47となっている他は、すべて適応の良い方向にある。中でも異常性、退避傾向、自尊感情で望ましい結果が得られている。これらはY-G性格検査の結果と一致している。またself-esteem調査の得点も平均よりやや高い。

以上のように、学業成績、性格、個人適応、及び社会適応のいずれをとっても問題はなく、望ましい状態にある。Y-G性格検査では外向的という結果になっているが、級友からはかなり無口でおとなしいと認知されている。したがって初期の時点では、このような目立たない生徒であったため、友人関係が限定され、被選択数も少なかったであろう。時点が進むにつれ、学業成績の良さやパーソナリティの望ましさが級友に認知され、選択地位が高くなったと思われる。

(3) BF11

W-6までの前半での選択地位は5位、後半のそれは2位であり、全時点を通しては4位と高い。ただし、W

ー14では被選択数が負になっており、また特定の他成員から多くの時点で排斥を受けている。同じく地位の高い12や13がほとんど排斥を受けていないのと対照的である。全般的には好意をもたれているが、膚の合わない相手もいるというタイプのようなのである。級友からの性格認知では、〈個人的親しみやすさ〉の2特性とまじめさではほぼ平均的な評定を受けているが、やや親しみやすくふまじめとみられている。他の5特性ではクラス平均とのずれが比較的大きく、頭が良く、おしゃべりで、活発、意志が強く、積極的であると認知されている。これをまとめると、活発で頭の良いしっかり者というイメージが浮かぶ。これは調査時に調査者が受けた印象と一致するものである。

では次に、学業成績や諸調査の結果を表E-9によってみてみよう。部活動はクラスで唯一人バスケットボール部に所属しており、部活動への満足度もかなり高い。とくに女子中学生では友だちと一緒に部に所属する傾向が強いと思われるが、級友のいない部に所属していることから、独立心の強いしっかり者であることが窺われる。他の部活動への興味をみると、文化部については興味のある部とない部とがはっきり分かれている。これに対して運動部については全般的に興味が高く、スポーツ好きのようである。これは教科興味で保健体育への関心が高いことと一致する。また実際の成績も良い。学業成績は全般的に高く、社会を除く主要4教科と保健体育のそれがとくに良くなっている。美術と技術家庭はあまり得意でないらしい。

Y-G性格検査によるタイプはB型である。回帰性傾向と神経質の2尺度については標準点が5であり、抑うつ性と劣等感基準点4を得ていることから、情緒不安定性がかなり強いといえよう。また主観性、非協調性、攻撃性のいずれの特性についても標準点が高く、社会的不適応の傾向も強い。のんきさも高く、気軽で衝動的なタイプであるが、他方、思考的内向性もみられ、物事を考え込む傾向もあるらしい。さらに支配性や社会的外向性も高く、リーダーシップをとるタイプのようなのである。このようにY-G性格検査の結果からは、対人的接触を好み、リーダーシップもあるものの、情緒的に不安定で、物事を考え込み、協調性に欠け攻撃的な面もみられるなど、問題を内在させている可能性が大いに考えられる。

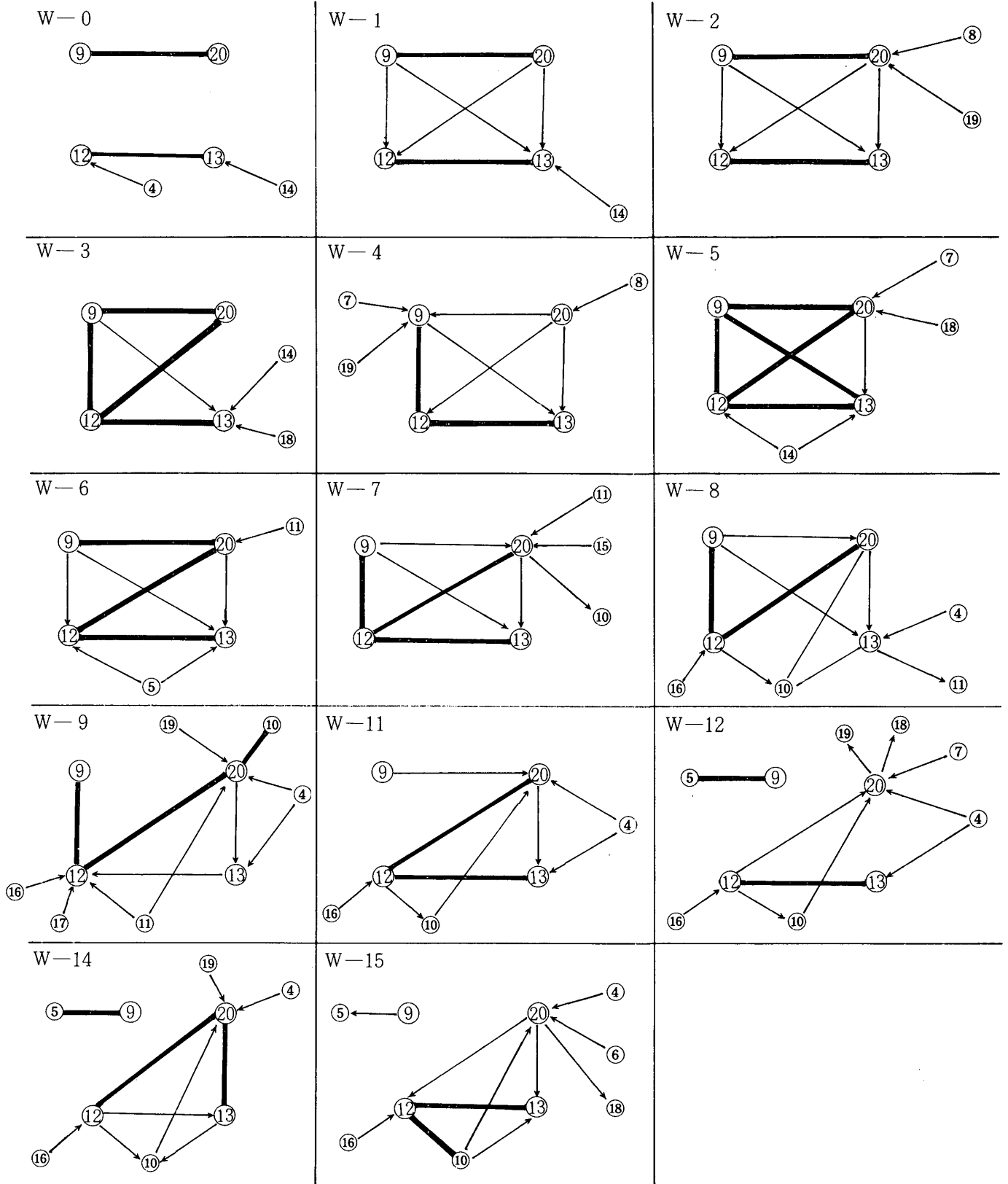
self-esteem調査については、全体では平均よりやや高い得点を得ており、3つの下位尺度の得点もほぼ平均となっているが、対人的不安がやや高く、積極・独立性もやや高くなっている。次に適応性診断検査の結果であるが、個人適応がやや低目であるものの、社会適応や全体ではほぼ平均的な値を得ており、問題はない。し

かし下位特性をみると、個人適応では自己統制が低く、社会適応の中では学校関係がかなり悪くなっている。これに対し統率性はT値73と極端に高く、また社会的技術もやや高く、リーダーシップがあるというY-G性格検査の結果と一致している。

選択地位が高く、級友との相互作用量も多く、ソシオグラムでみる限りでは対人関係も良好と思われる。本人も附属中学に入って良かった理由として友だちを挙げていることから、対人関係上の問題はないと思われる。学業成績も良く、活発でリーダーシップのあるスポーツウーマンである。これらの特徴をみれば、適応上の問題はまったくないという印象を受ける。しかし、Y-G性格検査や適応性診断検査の結果には、情緒的な不安定さや社会的不適応の傾向がかなり強く現れていた。逆にいえば、実際の対人関係の良好さや学業成績の高さが、パーソナリティ上の問題が表面化されるのを抑えているのかもしれない。選択地位が高い割には、級友から受けた〈個人的親しみやすさ〉の評定が高くないことや、特定の級友からは排斥を受けていることは、Y-G性格検査によって示されたような非協調性や攻撃性が原因となっていると考えることができよう。

(4) BF, 9-12-13-20

図E-15に4名の選択関係が示されている。W-0からすでに9と20、12と13とが相互選択をし、W-1からは4者関係が成立している。9と20はW-4を除いてW-6までの初期の6時点で選択し合っている。この2人は共にホームルーム代表議員であり、部活動でもバドミントン部で一緒であることから、初期から強い結びつきが成立したと考えられる。あるいは既に始業式のW-0の時点において相互選択がみられることから、何らかの原因で親しくなったために、一緒に部活動に入ったのかもしれない。相互作用は学校内だけでなく、電話をかけるなど多くなされている。また12と13もW-7までの8時点すべてで選択し合い、その後も3時点で相互選択がみられており、強い結びつきが入学直後から一学期中持続している。この2人もクラスの役割と部活動が同じであり、共に図書委員でバレー部員である。2人間の相互作用は頻繁で、かつ様々な形でなされている。また12は、9とは6時点で、20とは8時点で選択しあっており、この2人とかなり親しい。しかし、13は9及び20から選択されてはいるが自らは選択していない。ただし、休み時間や授業後での相互作用はよくなされている。したがって、役割も所属部も同じである9と20、12と13という2組のペアが12を媒介として結びついたサブグループといえる。このように、成員間の関係に強弱はあるものの、W-9までは4人グループが成立している。しかし、そ



図E-15 クラスBF, 9-12-13-20の選択関係

の後9がサブグループから抜け、W-12からは5との孤立した2者関係を形成している。相互作用もみられなくなり、20と部活動で接触するだけとなる。

このサブグループの特徴は、表E-8にみられるように、9を除いた3名の選択地位がいずれも高いことである。12と13とは前半でも後半でも一貫して上位を占めているが、20のそれは後半で上昇している。これに対し、9は前半では中位であるが、後半でやや下降している。学業成績も9が4名の中でもっとも悪く、他の3名が中位の上から上位といった位置にあるのに対し、9は中位となっている。

次にパーソナリティ等の特徴についてみてみよう。まず20はY-G性格検査の結果、D'型となっており、self-esteem得点も高い。また適応性診断検査の結果も、やや自尊感情が低くなっているものの、学校関係はT値66と高く、全般的には問題はないと思われる。また12はself-esteem得点がやや低く、適応性診断検査の自尊感情も低目である。しかし、全般的には普通程度の適応性を保っている。またY-G性格検査の型はD型で、情緒的に安定し、リーダーシップや外向性もあり、問題はないと思われる。12と20のこのような活発で外向的なパーソナリティが、このサブグループ及びクラス全体の中で中心的位置を占めさせているのであろう。この2人に対し、13は適応性診断検査の自尊感情が低く、全体的な適応もT値45と悪い。またself-esteem得点もかなり低くなっている。Y-G性格検査の結果はA型であり、回帰性、非協調性、社会的外向性といった尺度で標準点が4となっている。選択地位が高いことや、本人も附属中学に入って良かった点として友だちを挙げていることから、対人関係上の問題はないと思われる。しかし、自信の低さが13の対人感情の拡がりを妨げているのかもしれない。最後に、9のY-G性格検査の結果はA型である。情緒的に安定し、非協調性や攻撃性は低く、支配性や社会的外向性は普通程度にあり、この検査結果には問題がみられない。しかし、適応性診断検査の結果によれば、個人適応も社会適応も良くなく、特に異常性、神経質、自尊感情で望ましくない結果となっている。またself-esteem得点が非常に低いのが目立つ。

9がなぜW-11あたりからこのサブグループを離れていったのかは、入手されている資料だけでは不明である。しかし、選択地位の高さや学業成績における他の3名とのずれが、グループ内での居心地を悪くしていたのかもしれない。他の3名がいずれも、良い友だちがいることを附属中学に入って良かった点として挙げているのに、9は友だちを挙げていないことから、一見4人グループが成立しているようにみえても、9がこの中で安

定できていなかったことが示唆される。そして、self-esteemが非常に低いことが他の3名とのずれ、言い換えれば他の3名に比べて自分が劣っていることを強く意識させる要因になっていたと考えられる。

5 まとめ

本節では、4クラスから特徴的な個人やサブグループを選び出し、それらについての記述・考察を進めてきた。ここで最後に、本節で取り上げた諸事例を基に、成員の選択地位の規定要因やサブグループの形成要因について総括的な考察を試みたい。

SMTBによる選択地位を規定している最大の要因は、個人のパーソナリティおよび他成員が認知するパーソナリティ像であろう。すなわち、Y-G性格検査では、客観性、協調性、活動性、支配性、社会的外向性といった下位尺度の標準点が高いD類またはB類に属する成員に地位の高いものが多くなっている。逆に、C類やE類に属する成員で地位の高いものはいない。またPPIによる認知されたパーソナリティ像では、「親しみやすい」、「あたたかい」、「活発な」、「積極的」と認知される成員の地位が高くなっている。このような基準に該当するものは、AM7、AM10、AM11、AF8、AF14、AF16、BM13、BF12、BF20である。これらの成員は、いずれのクラスのソシオグラムにおいても中心部に位置している。反対に、上述のパーソナリティ特徴や認知されたパーソナリティ像と逆方向にある成員は、選択地位が低く、ソシオグラムでは周辺部に位置している。これに該当するものは、AM4、AM16、AF12、BM8、BF4である。

学業成績と選択地位との関係についてみると、成績面での優秀性が高い地位をもたらしというよりも、成績面での劣等性が低い地位に直結する傾向の方が強い。これに該当するのはAM4、AM17、AF6、AF12、BM1、BF4、BF9である。特に、AF6やBF9は、サブグループ内で他成員との成績格差が顕著になるにつれ、被選択が減少し、前半より後半の地位がかなり低くなっていく。教科の中では、保健体育の成績が重要であり、各クラスのリーダーと思われるAM11、AF8、BM13、BF12は、いずれも良い評価を受けている。そして、これらの成員の所属クラブは、すべてスポーツ系である。やはり、クラスの中で高い選択地位を獲得・維持していくには、勉強とスポーツの両面に優れていることが必要なのであろう。

ここで参考までに、4クラス全員についてSMT-1と個人属性の相関を求めた結果を表E-10に示しておく。表中の属性は有意な結果がみられたものだけを記載して

表E-10 SMT-1によるステイタスと個人属性の相関

属性		W	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11	12	14	15	T
学 業 成 績	英 語		-15	-07	10	17	25	26	23	20	*	*	27	27	*	*	26
	数 学		-02	02	08	24	24	20	30	29	**	**	*	*	**	*	32
	国 語		23	17	18	*	*	26	20	20	*	*	28	26	23	27	31
	保 健 体 育		13	14	27	15	27	32	27	29	**	**	**	**	*	**	38
	全 教 科		03	07	14	*	**	*	*	*	**	**	**	**	**	**	39
Y G 性格検査	支 配 性		*	30	13	*	**	*	20	25	24	24	26	22	13	18	32
	社会的外向性		32	**	19	*	26	14	13	14	11	13	16	06	01	07	21
適応性診断検査	統 率 性		34	*	23	27	**	30	17	30	*	26	27	27	17	18	34
	学 校 関 係		16	20	12	25	*	23	26	30	*	*	27	33	25	31	33
self-esteem調査	積極・独立性		27	19	16	*	*	25	20	23	18	15	21	21	14	18	28

註 * $p < .05$, ** $p < .01$

いる。これをみると、学業成績との相関は時点が進むにつれて高くなり、全教科合計の成績はW-3からすべて有意な相関を示している。教科別では保健体育が最も高く、クラス内でのステイタスに大きく影響している。Y-G性格検査の社会的外向性や支配性の下位尺度、self-esteem調査の積極・独立性尺度といった対人的な積極性を示す属性は、初期から中期にかけて相関が高くなっている。このような結果は、本節で考察した諸事例の選択地位を規定する要因と一致する部分が多い。

次に、サブグループの形成要因について考察する。本節では、7つの特徴的サブグループを取り上げているが、その中でクラブの所属が全員異なる事例は、AF, 6-8-16だけである。ただし、AM, 1-2-3-15-17とAF, 1-19は、クラブに所属しない「帰宅部」のサブグループである。したがって、サブグループ形成の核になるの

は、所属クラブとも考えられる。そして、これにパーソナリティの類似性が関係してくる。つまり、同一クラブに所属している成員の中で社会的外向性や活動性の高い成員が結びつくサブグループと低い成員が結びつくサブグループが形成される。前者の典型例はAM, 7-10であり、こうしたサブグループは、類似したパーソナリティをもつ他クラブの成員とも交流をもち、サブグループが拡大されていく。後者の典型例は、BM, 2-3であり、このようなサブグループは閉鎖的になりやすい。学業成績は、サブグループ内の勢力関係と関連するようである。他成員との格差がはっきりしてくると、AF 6のようにフォロアーとしてサブグループにとどまったり、AM17やBF 9のようにサブグループから離脱していく場合がみられる。

IV 総 括*

1 研究の目的と方法

対人関係に関する研究はこれまでいろいろな角度からなされてきた。しかし、初めて出会った2人の間に、どのようにしてセンチメント関係が成立し、時間が経過し相互作用が積み重ねられ相手についてのより多くの情報が得られるについて、それがどのように発展ないし推移

していくかを明らかにするという目的からすれば、追跡的なアプローチが恐らく最も重要であろう。われわれは、Newcomb (1961)の研究に範をとり、われわれ自身の先の研究(大橋ほか, 1978)の経験に学びながら、中学校1年生を対象として、継続的に調査を実施することにした。

Newcomb (1961)が拠り所としたのは、彼のいわゆるA-B-Xモデルであった。われわれはこれとはやや異った視点から研究に着手した。まず人Pの人Oに対す

* 執筆著者：大橋正夫

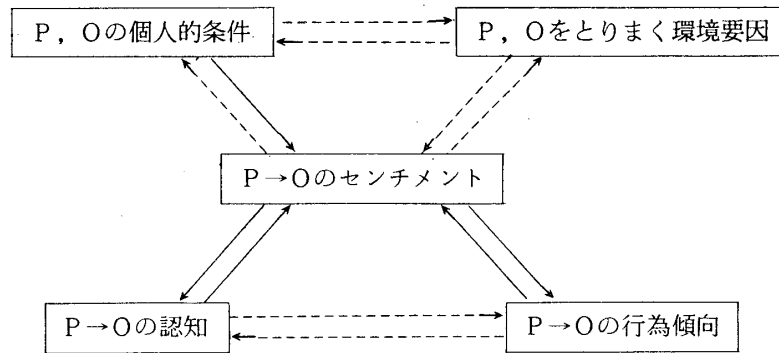


図1 本研究における対人関係のモデル

る対人関係は、PのOに対する対人的態度である、と規定した上で、態度の3成分（認知的成分、感情的成分、および行動的成分）の間には、方向と程度に関して相互に一貫性を維持しようとする傾向がある、という命題を出発点とした。したがって、感情的成分たるセンチメント関係を規定する最も重要な要因群は、認知的成分たるOについてのPの認知と、行動的成分たるPのOに対する接触傾向の2つである、と仮定した。ただし、PとOの関係は真空の中で成立するわけではない。すなわち、それを取り囲む環境（この場合でいえば、学級の生態学的要因やそこでの全体としての人間関係）からの影響を免れるわけにはいかないであろう。また、PとOが出会う以前に生育史的に形成されてきた両者の個人的条件（能力、態度、性格など）や背景的条件（家庭環境など）もこれに影響を与えるであろう。これら諸要因間の相互規程関係をモデル化したものが図1である。本研究ではこのうち実線で表された関係を直接問題にする。すなわち、これら4個の要因群の規定を受けながら、PのOに対するセンチメント関係が、出会いの極めて初期においてはどのような形で成立し、それが時間の推移とともにどのように変容していくか、を明らかにすることが本研究の目的である。

調査の対象は、名古屋大学教育学部附属中学校に昭和54年度に入学した生徒で、A組男子23名女子18名、B組男子22名女子20名、合計84名である。彼らは入学以前にはほとんど完全に相互に未知の状態にあった。

収集した資料を図1のモデルに従いながら簡単に述べておこう。

（1）P→Oのセンチメント

0（嫌い）から100（好き）までの101点尺度上で同性の級友を評定させる調査（SMT-1という）によって測定する。第1回は学級編成の直後（W-0）、以後ほぼ1週間に1回の割合で15週後（W-15）まで合計14回実施した。

（2）P→Oの認知

①PPI：8尺度（7点尺度）上で（自己および）同性級友を評定するもの。1週1回の割合で、1回には4尺度ずつ実施。2回分を合わせて、T-1からT-7までの7時点で実施されたものとして処理した。

②SMT-2：SMT-1の直後に、同じ用紙を用いて、他成員の自己に対する認知された好意度（P→O）を評定させるもの。

（3）P→Oの行為傾向

IASと称する5項目から成る調査。5個の場面で、他の成員と過去1週間の間にどの程度接触したかを3件法で答えさせる。W-0を除き、SMT-1と同じ13時点で実施。

（4）その他の資料

性格、適応、興味、親子関係等を査定するための10種類の調査。15週間の間に各1回ずつ実施した。また1学期末の成績も入手できた。

これらの資料を分析した結果は次の2～6の5セクションに分けて述べられた。

2 個人のセンチメント関係

（1）初期のセンチメント関係の分化

SMT-1は50をニュートラル・ポイントとする101点尺度であった。これによる被験者の他成員の評定の状況を分析してみたところ、W-0の時点、すなわち名前さえほとんどわからない段階においてですら、与えた得点によって表わされる他成員に対するセンチメント関係はすでに相当程度まで分化していることがわかった。すなわち、全体の57%の被験者は少なくとも1名の成員に対してニュートラル・ポイント以下の評定を与え、また90%の者は80点以上のポジティブなセンチメントを1名以上の成員に対して表明していた。

（2）他成員に与えた好意度評定の推移

クラス（学級別×性別による4集団）によって若干の

変動はみられるが、SMT-1の平均評定値はW-0において約64であった。それが、W-1、W-2、と次第に高くなり、W-3では75近くとなっている。しかしその後は向上の勢いはほとんどとまり、W-15においても約78にとどまっている。

(3) 評定と個人の選択地位の安定性

全被験者のデータをとると、SMT-1の評定値のW-0とW-1の間の相関係数は0.52であった。W-0での評定値とそれ以後の評定値の間の相関は次第に低下するが、W-15との間でもなお有意な0.12という値を保っていた。比較する2回の調査の間隔が開くほど一般に評定の安定性は低下するが、この傾向は時点が後になるとゆるやかになり、その意味で評定は次第に安定したものとなっていく、ということができる。

選択地位(受けたSMT-1スコアの平均値)の安定性の傾向もこれと似ている。ただし、これは評定値そのものよりも速やかな安定化の経過をたどるといえる。

(4) SMT-1とSMT-2の関係

これをみるため、Tagiuriら(1953)にならって、相互性、正確性、および相応性の3測度を取り、その時間的推移をみてみた。

3測度のうち、相応性の相関係数が最も高く、その値はW-0からW-15まで、あまり変らなかった。3測度のうち、正確性は最も低い相関を示し、予測に反して、時点が進むとともに向上する兆しは見せなかった。

3 パーソナリティ認知

(1) パーソナリティ認知の構造と推移

7時点で実施されたPPIの資料のうち、他者評定の分を時点ごとに因子分析したところ、いずれも2因子が抽出された。第Ⅰ因子は<力本性>、第Ⅱ因子は<評価>を表すものと解釈された。また各尺度の因子負荷のパターン(構造)は極めて類似しており、対人認知構造は対象の熟知度とは独立である、という従来の知見と一致する結果が得られた。

パーソナリティ認知の安定性については、センチメント評定の場合と同様の結果が得られた。

(2) パーソナリティ認知とセンチメント関係

7時点で実施されたPPIの各尺度とそれに対応する時点でのSMT-1の評定値を相関させたところ、かなり高い相関係数が得られた。ことに、「あたたかい-冷たい」および「親しみやすい-親しみにくい」との相関は時点を通じてほぼ0.5以上という高さであった。

SMT-1の評定値を基準変量、PPIの評定資料の因子分析により得られた因子得点を予測変量として、各回ごとに男女別に重回帰分析を行なった。得られた相関

係数の値は0.43~0.64の範囲にあり、男子においては時点が進むにつれて高くなる傾向が認められた。もちろん因果関係の方向については断定できないが、センチメント関係の相当部分が相手の認知されたパーソナリティによって説明しうることは明らかである。この時点別傾向は、先の女子大生の結果で、時点が進むにつれて重相関係数が低下する傾向を示したのとは対照的である。

4 個人間の相互作用の量

PのOに対する対人関係(対人的態度)の行動的成分を捉えるために、われわれはIASという調査を13時点で実施した。これは5項目から成るが、他の3項目の評定値の平均は極めて低かったので、(1)「学校の休み時間や昼食時や授業後に話をしたり遊んだりした」および(2)「学校のゆきかえりにいっしょになった」の2項目への反応をもって個人間の過去1週間における相互作用の量と定義し、これをP→Oの態度の行動的成分と解することにする。

(1) IAS得点の全体的傾向

2項目の合計得点は0~4となるが、個人被験者が与えた(得た)その平均値を求めると、W-1で0.87、W-2で0.94、W-3で1.09と着実に増加した。ただし、それ以後の増大はゆるやかで、W-15でも1.21にとどまっている。この傾向はSMT-1の平均評定値のそれと類似しているといえる。ただ、クラス差はやや大きかった。

(2) IAS得点とSMT-1との関連

全資料を合わせたものについてこれをみると、W-1では $r = 0.46$ であった。この値はW-5ごろまではほぼ横ばいであったが、以後わずかに低下の傾向を示し、W-15では0.34となった。この相関は認知されたパーソナリティとのそれよりは低い、いずれにしても、センチメント関係の20パーセント程度が相手との接触の量によって説明される、という知見は興味深い。

(3) 座席間距離とIAS得点の関連

教室での座席はW-0からW-2ころまで固定されていたが、それによる2人の距離を3段階に分け、それとIAS得点との連関係数を求めたところ、全体ではW-1では0.16と有意であった。しかし時間の経過とともにこの値は次第に低くなり、W-7以降では有意でなくなった。

5 集団の構造

SMT-1のスコアの範囲は0~100であったが、それを絶対値を中心に、個人被験者がその時点で他成員に与えているその分布を加味して、++, +, 0, および

ーのという4段階値に変換した(SMTA)。これをインプットしてTG法と呼ばれる方法(2次元解)で解くと、各成員の座標値が与えられ、それによってそのユークリッド空間内での位置が確定する。PがOに++のSMTA値を与えている場合を「選択」と呼び、そのことをPからOに向う有向線で表わすならば、ソシオグラムが描かれる。この方法によると、任意の成員は他成員に対するSMTA値が類似しているほど近くに位置することになり、通常のソシオグラムより多くの情報がそこに表示されることになる。クラスごと、時点別にこうしたソシオグラムを描き、クラスの集団構造の時系列的变化を分析した。これから明らかにされた主な点は次のとおりである。

①4クラスを通して共通な特徴がいくつか見いだされた。まず最も注目すべきことは、どのクラスでも、W-0の時点においてすでに構造らしきものが存在する、という事実であった。すなわち、相互選択もかなりみられるし、時には4~5名からなるクリークも観察された。また、この最初期におけるセンチメント関係のパターンは、座席配置によってある程度規定されていることが明らかであった。

②どのクラスも、W-0における低次のネットワーク構造から、時間の経過に従い、次第に高水準のネットワーク構造へと発達していく。しかし、この変化は決して直線的なものではなく、ある程度ジグザグ的なものであった。このことから、従来提唱されてきた「学級集団の構造類型」なるものは縦断的資料には必ずしも当てはまらないことが明らかとなった。

③以上のごとき共通点にもかかわらず、どのクラスも極めて個性的であり、それらの間の変異はかなり大きいと言わざるをえない。われわれの得たものが $n=4$ の時系列データであったことを思い起こせば、これはむしろ当然であるかもしれない。

6 特徴的な諸事例

2~4の結果は、いわば法則定立的視点からの分析結果であった。これに対して、前節の集団構造の分析は、どちらかといえば個性記述的とならざるをえなかった。集団構造は、被験者の年齢と集団のサイズをパラメーターとして、編成後経過した時間のみの関数として記述されるには余りにも複雑であった。それと同じことは個々のケース(個人およびサブグループ)にも当てはまる。PのOに対するセンチメント関係は、これまで考察してきたような認知的成分ならびに行動的成分のほか、PとOの様々な個人的条件や、PならびにOをとりまく環境的諸要因による複雑な規定を受けて、すぐれて個性的な

様相を示すはずである。

そこで、SMT-1で他成員から受けた評定値や与えた評定値の時系列的パターンから、特徴的な個人およびサブグループを各クラスから採り上げ、そこでのセンチメント関係の実態を詳細に記述するとともに、われわれが入手し得た情報と照合することにより、対人関係の成立・発展のダイナミックスの一端に迫ろうとした。これら諸事例の分析結果から早急な一般化をすることはつしまなくてはならないが、それから示唆されたいいくつかの点についてまとめておこう。

①個人成員の選択地位を規定する最大の要因は、Y-G性格検査などで測定される当人のパーソナリティ、およびPPIにより他成員から認知されたパーソナリティである。学業成績と地位の相関はW-3以降有意となってくるが、教科の中では保健体育が最も重要である。ただし、成績が良いと地位が高くなるというよりは、悪い成績が低い地位と結びつきやすい、という形での影響である。

②サブグループ形成にはクラブへの所属が大きな効果をもつようである。またパーソナリティの類似性も関連するらしい。典型的な例としては、同一クラブに属する者のうち、社会的外向性や活動性の高い者が1つのサブグループをつくり、それらが低い者がもう1つのサブグループをつくらせて、それぞれ他のクラブに属する性格の類似した者へと結合関係を広げていく、というものがあつた。

7 結 論

以上見てきたところから、すでに出会ひの極めて早い段階から、被験者は他成員に対してかなり分化したセンチメントを形成していること、またPのOに対するセンチメント関係がPによるOのパーソナリティ認知およびPとOとの接触頻度と強い共変関係にあることが確認された。

しかしこのような結果は、関係が成立したのが学級という被験者にとって極めて重要な場においてであった、という事情と無関係ではあるまい。図IV-1における「P、Oをとりまく環境要因」と「P→Oのセンチメント」の間の相互規定関係を本研究では直接的に扱うことができなかった。これは残された問題といえる。また、「P、Oの個人的条件」のための資料としては10種類あまりの情報を入手できたが、これだけでは個々の具体的対人関係の成立・発展を十分説明することはできなかった。今後はさらに多面的な情報を活用できるようにする必要があるが、その1つとしては、対人関係に対する個人のオリエンテーションの特質が含まれている。また、IASに

よってPとOとの接触頻度に関する情報を得たが、相互作用の中味ないし結果についてはなんら知ることができなかった。また、対人関係に影響を及ぼすような学級の内外での大きな出来事についてもほとんどフォローできていない。さらには、集団構造の時系列的変化を分析する方法の開発もさることながら、集団構造が個々の成員間

のセンチメント関係にどのようなインパクトを与えたかを知ることが重要であろう。

以上述べたように、本研究にはいくつかの問題が残されている。しかし、われわれの得た資料は貴重であり、その結果がこれからの対人関係研究の前進に貢献しうるものである、考えている。

V 文 献

- Altman, I., & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. N. Y.: Rinehart, & Winston.
- Anderson, N. H. 1962 Application of an additive model to impression formation. *Science*, 138, 817-818.
- Aronson, E., & Linder, D. 1965 Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 156-171.
- Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Backman, C. W., & Secord, P. F. 1959 The effect of perceived liking on interpersonal attraction. *Human Relations*, 12, 379-384.
- Borgatta, E. F., Cottrell, L. S., Jr., & Mann, J. M. 1958 The spectrum of individual interaction characteristics: An interdimensional analysis. *Psychological Reports*, 4, 279-319.
- Brockner, J., & Swap, W. C. 1976 Effects of repeated exposure and attitudinal similarity on self-disclosure and interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 531-540.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. N. Y.: Academic Press.
- Carroll, J. D., & Chang, J. J. 1970 Analysis of individual differences in multidimensional scaling via an N-way generalization of "Eckart-Young" decomposition. *Psychometrika*, 35, 283-319.
- Carter, L. F. 1974 Evaluating the performance of individuals as members of small groups. *Personnel Psychology*, 7, 477-484.
- Cartwright, D. (ed.) 1958 *Studies in social power*. Ann Arbor: University of Michigan Press. (千輪浩
- 監訳「社会的勢力の研究」 1962 誠信書房)
- Chino, N. 1978 Some applications of AQUADS to sociometric data (1). *Bulletin of the Faculty of Humanities of Aichigakuin University*, 8, 22-43.
- Festinger, L., Schachter, S., & Back, K. 1950 *Social pressures in informal groups: a study of human factors in housing*. N.Y.: Harper & Row.
- Fiedler, F. E. 1951 A method of objective quantification of certain countertransference attitudes. *Journal of Clinical Psychology*, 7, 101-107.
- Fiedler, F. E., Warrington, W. G., & Blaisdell, F. J. 1952 Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 790-796.
- Foa, U. F. 1961 Convergences in the analysis of the structure of interpersonal behavior. *Psychological Review*, 68, 341-353.
- Gower, J. C. 1966 Some distance properties of latent root vector method used in multivariate analysis. *Biometrika*, 53, 325-338.
- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) 25, 233-247.
- 林 文俊 1979 対人認知構造における個人差の測定(4) - INDSCAL モデルによる多次元的アプローチ - 心理学研究, 50, 211-218.
- 林 文俊 1981 対人認知構造における個人差の測定(6) - 認知者の性および年齢差についての検討 - 心理学研究, 52, 244-247.
- Heider, F. 1946 Attitude and cognitive organization. *Journal of Psychology*, 21, 107-112.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. N.Y.: Wiley. (大橋正夫訳「対人関係の心理学」1978 誠信書房)
- 飯島婦佐子 1961 対人認知の構造についての因子分析的研究 日本心理学会第25回大会発表論文集, 445.

- Jennings, H. H. 1950 *Leadership and isolation: A study of personality in interpersonal relations.* (2nd Ed.) N.Y.: Longman, Green.
- 梶田毅一 1967 他者についての概念化と対人感情 心理学研究, 38, 284 — 289.
- 兼子 宙・尾島磧心・宮 孝一 1931 児童の学級内に作る友人関係について — 学級形態の研究 第一報 心理学研究, 6, 223 — 247.
- 狩野素朗 1960 集団の構造強度測定理論 教育社会心理学研究, 1, 57 — 65.
- 狩野素朗・小窪輝吉・楠見幸子 1982 数量化理論による集団構造の解析 日本心理学会第46回大会発表論文集, 430.
- Levinger, G., & Snoek, J. D. 1972 *Attraction in relationship: A new look at interpersonal attraction.* Morristown, N. J.: General Learning Press.
- Lindzey, G., & Byrne, D. 1969 Measurement of social choice and interpersonal attraction. In G. Lindzey & E. Aronson (eds.), *The handbook of social psychology*, (2nd Ed.), vol. 2. Reading, Massachusetts: Addison-Wesley.
- Moreno, J. L. 1934 *Who shall survive?* N.Y.: Beacon House.
- Moreno, J. L. 1947 Changes in sex groupings of school children. In T. M. Newcomb & F. L. Hartley (eds.), *Readings in social psychology.* N.Y.: Holt.
- Mulaik, S. A. 1964 Are personality factors raters' conceptual factors? *Journal of Consulting Psychology*, 28, 506-511.
- 永田良昭 1969 学級集団における社会化 桂広介・園原太郎・波多野完治・山下俊郎・依田新(監) 社会生活とマスコミュニケーション (児童心理学講座 9) 金子書房
- Newcomb, T. M. 1953 An approach to communicative acts. *Psychological Review*, 60, 393-404.
- Newcomb, T. M. 1956 The prediction of interpersonal attraction. *American Journal of Psychology*, 11, 575-586.
- Newcomb, T. M. 1961 *The acquaintance process.* N.Y.: Holt, Rinehart & Sinston.
- 西平直喜 1953 青年心理学における対人関係の分析, 教育心理学研究, 1, 48 — 54.
- 大橋正夫 1958 選択行動と対人知覚の研究 (Ⅲ) — 関係知覚における集団構造化の要因 心理学研究, 29, 235 — 245.
- Ohashi, M. 1964 Sociometric choice behavior and interpersonal perception in triad. *Japanese Psychological Research*, 6, 72-87.
- 大橋正夫 1968 集団の構造と機能 近藤貞次(監) 社会心理学概論 朝倉書店
- 大橋正夫 1973 対人関係の理解 豊原恒男・本明寛・藤田忠・三隅二不二(編) 人間関係の心理学(講座経営行動の心理学6) ダイアモンド社
- 大橋正夫・長戸啓子・平林 進・吉田俊和・林 文俊・津村俊充・小川 浩 1976 相貌と性格の仮定された関連性(1) — 対をなす刺激人物の評定値の比較による検討 — 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 23, 11 — 25.
- 大橋正夫・吉田俊和・鹿内啓子・平林 進・林 文俊・津村俊充・小川 浩 1977 相貌と性格の仮定された関連性(2) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 24, 23 — 33.
- 大橋正夫・平林 進・小川 浩・鹿内啓子・林 文俊・吉田俊和・津村俊充 1978 女子大生における対人認知と対人関係に関する追跡的研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 57 — 78.
- 丘本 正・戸田 準 1973 数量化理論第Ⅳ類と主座標分析 日本統計学会誌, 3, 41 — 53.
- Passini, R. T., & Norman, W. T. 1966 A universal conception of personality structure? *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 44-49.
- Peabody, D. 1967 Trait inferences: Evaluative and descriptive aspects. *Journal of Personality and Social Psychology*, Monograph Supplement 7 (Whole No. 644).
- Priest, R. T., & Sawyer, J. 1967 Proximity and peership: Bases of balance in interpersonal attraction. *American Journal of Sociology*, 72, 633-649.
- Rosenberg, S., & Sedlak, A. 1972 Structural representations of implicit personality theory. In L. Berkowitz (ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, vol. 6, N.Y.: Academic Press.
- Sagert, S., Swap, W. C., & Zajonc, R. B. 1973 Exposure, context, and interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 234-242.
- 阪本一郎 1949 交友関係の成立過程 児童心理, 3, 331 — 338.
- Schaefer, E. S. 1959 A circumplex model for maternal

- behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 226-235.
- Schneider, D. J. 1973 Implicit personality theory: A review. *Psychological Bulletin*, 79, 294-309.
- Secord, P. F. 1958 Facial features and inference process in interpersonal perception. In R. Tagiuri & L. Petrullo (eds.), *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford: Stanford University Press.
- 塩田芳久 1952 ソシオメトリの信頼度について 児童心理, 1952, 6, 491 - 498.
- 園原太郎・広田君美 1953 学級社会の成立 阪本一郎・中野佐三・波多野完治・依田新(編) 学級社会の心理(教育心理学講座3) 金子書房
- Tagiuri, R., Blake, R. R., & Bruner, J. S. 1953 Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 585-592.
- 玉岡 忍 1948 学級集団の構造 児童心理, 2, 85 - 91.
- 田中熊次郎 1947 学級社会における結合と分離 児童心理, 1(6), 23 - 29.
- Torgerson, W. S. 1952 Multidimensional scaling: Theory and method. *Psychometrika*, 17, 401-419.
- 依田 新・大橋正夫・島田四郎 1954 学級構造の研究—入学時より3年間の友人関係の調査— 教育心理学研究, 2, 1 - 9.
- Zajonc, R. 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 1-27.

(1982年7月31日 受稿)

A FOLLOW-UP STUDY ON THE INTERPERSONAL RELATIONS AMONG JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS

Masao OHASHI, Keiko SHIKANAI, Toshikazu YOSHIDA, Fumitoshi HAYASHI,
Toshimitsu TSUMURA, Susumu HIRABAYASHI, Tomohide BANZAI,
Hidekazu HIROOKA, and Masahiko NAKAMURA

In the present investigation, we tried to examine longitudinally a process in which interpersonal relations were formed and developed in classrooms among like-sexed students who had been perfectly strange one another previously. In our opinion, interpersonal relation is two-sided composed of sentiment relation and power relation. Here we are concerned solely with the former, and employ P's relation toward O, instead of that between P and O, as a unit of analysis. We defined the sentiment relation as P's attitude toward O, composed of three components - cognitive, feeling, and action tendency. Our principal aim is to make clear how the relation would be formed at the very early stage of the encounter, and how it would be developed along with amount of interactions between P and O increased. Data on the feeling component, on which our attention is focused, will be compared with those on cognitive and action tendency components.

Participants of the investigation were eighty-four students who had entered the University Junior High School in April, 1979. They were assigned into two classrooms. In describing findings in the following, however, we treat a sub-class composed of students of either sex as a group. The following "tests" were administered:

- (1) *SMT-1*, in which the participants were asked to rate each of their like-sexed classmates on a 101-point-scale according to their favorableness.
- (2) *SMT-2*, in which they were asked to infer each classmate's rating him/her on *SMT-1*.
- (3) *PPI*, in which they were asked to rate personality of each of their classmates on eight seven-point-scales.
- (4) *IAS*, in which they reported the extent to which they contacted personally with each of the classmates during the past one week in five situations on a three-point-scale.
- (5) Ten other tests of personality, interests, and adjustments, etc.

Tests (1), (2), and (4) were administered about once a week, totally fourteen or thirteen times through the period covering fifteen weeks from the entrance. Test (3) was repeated every two weeks, totally seven times, while the remaining ten tests were given just once through the period. Major findings obtained are as follows:

1. The sentiment relations were found to be differentiated to a considerable degree even at the very early stage. Average rating scores of *SMT-I* increased remarkably at the earlier stages. From about Week-5 on, however, they remained at nearly constant levels. Stability in individual rating scores and in choice statuses, which was derived from average rating score individuals received, tended to become higher as the stage progressed. Accuracy in perceiving score given him/herself by each of classmates showed no improvements through the various stages, on the contrary to our anticipation.
2. Two factors were extracted by factoring data on perceiving the classmates' personality: "dynamism" and "evaluation." The rating scores on *PPI* were relatively stable throughout the whole stages. Considerable correlations were found between *PPI* and *SMT-I*.
3. Increase in the amount of interactions among individuals measured by *IAS* was notable during the earlier stages. Correlations between *IAS* and *SMT-I*, were found to be the higher, the earlier the stages.
4. Even at the very early stage, patterns of sociometric relation in the four groups were structured to a marked extent. Generally speaking, network structure of low level was prevalent at the earlier stages, while that of high level was common at the later stages. The developing process was, however, neither monotonous nor irreversible. Depending on various idiosyncratic factors, the actual process of structuring of each of the four groups was really individual.